福　岡　市

有田・小田部

第5集

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第110集

1984

福岡市教育委員会

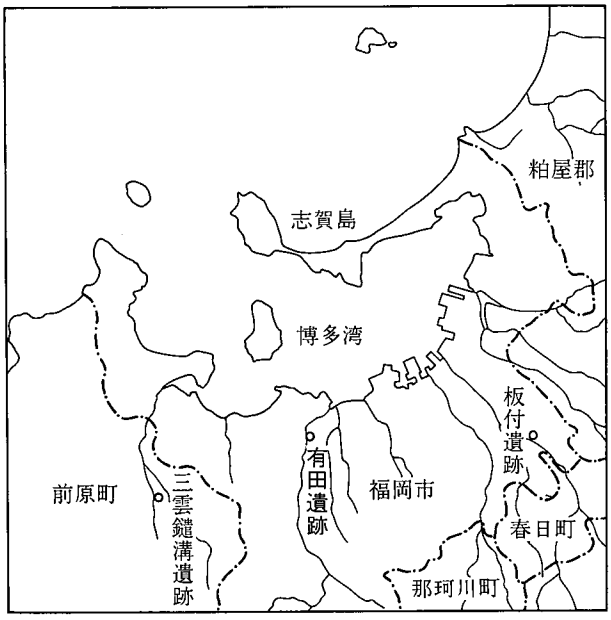
有田・小田部第５集正誤表（その１）

頁	行	誤	正
例　言	2	(1)・・・昭和５７年度	昭和５８年度
本文目次	１５	2.第44次調査 小結･･･p49	小結･･･p51
本文目次	１９	9.第75次調査 小結･･･p137	小結･･･p139
挿団目次	２１	Ｆig.65･･･p103	Ｆig.65･･･p104
挿団目次	３３	Ｆig.77･･･p123	Ｆig.77･･･p124
本文１	１０	３月３１日	１月３１日
１	１１	昭和５７年度	昭和５８年度
３	１４	約６．８１８㎡	約６，８１８㎡
７	１７	第１７次	＊１（欄外）
７	１９	第１９次	＊４（欄外）
７	２６	第２６次･･･　～９月10日	～９月１１日
７	３３	第３３次	＊２（欄外）
７	３６	第36次･･･小田部5丁目145	小田部5丁目143
８	３	第４３次　＊４（欄外）	未報告
８	８	第４８次　４５８㎡	６００㎡
９	１	西区小田部	早良区小田部
１３	１５	１４ｍ	１４㎝
１７	９	梁間	梁行
１７	１７	５．８ｍ	５．８尺
１７	２５	６．２ｍ	６．２尺
２９		Ｆig. １号住居跡出土遺物	Ｆig.18 1.2号住居跡
７０	１	柱痕径	柱根径
９４	１１	柱間	梁間
９４	２１	東西北向	東西方向
１０５	１５	１号土壙（･･･PL.39-1)	１号土壙(･･･PL.41-1)
１０５	１８	２号土壙（･･･PL.40-2)	２号土壙(･･･PL.41-2)
１０７	１１	２．３号溝（･･･PL39-1,2)	(･･･PL.40-1,2)
１０７	２１	Ｐｉｔ１，２（PL.40-3)	（ＰＬ．４１－３）
１１５	１９	２号土壙（･･･PL.45-1)	(･･･ＰＬ.４５－２)

有田・小田部

〈福岡市早良区有田，小田部における遺跡群の発掘調査報告〉

第 5 集



昭和59年 3 月

福 岡 市 教 育 委 員 会

序　　文

福岡は古代より，大陸に対する文化の窓口としてわが国を代表する貴重な文化財を埋蔵しているところとして，広く周知されています。早良平野の有田・小田部地区も又，原始・古代・中世にわたる密度の濃い埋蔵文化財の宝庫として学界の注目するところです。

昭和41年から昭和43年までの九州大学考古学研究室の調査から本年度で第90次の調査を数えます。これもひとえに，地元のみなさまの御協力，御理解の賜と感謝申し上げる次第です。昨年度発行した第61次までの調査報告は幸いにも学会から高い評価を受けていますが，今回の報告書は第75次までの調査成果を内容とし，主に弥生・古墳時代の集落跡，律令時代の官衙跡の結果を報告しています。

本報告が学会の資料，学校・社会教育の教材として御活用頂くことを念じますと共に今後一層の御協力，御鞭撻をいただきますようお願い申し上げます。

昭和59年３月31日

福岡市教育委員会

教育長　西　津　茂　美

例　　言

(1)　本書は福岡市早良区有田，小田部地域内における住宅開発に伴い，福岡市教育委員会が昭和57年度の国庫補助を得て実施した緊急発掘調査報告書である。

(2)　本書には昭和54年度事業の第30次調査，昭和56年度事業の第44次，第46～49次，第55次調査の６ヶ所，昭和57年度事業の第64次，第76次調査の２ヶ所，計９ヶ所の調査報告を収録するものである。

(3)　本書では有田，小田部台地上の遺跡を一連のものと見做し，広義の有田遺跡と呼称する。

(4)　本書に収録した発掘調査は，昭和54～56年度分を井沢洋一，山崎龍雄が担当し，昭和57年度分は井沢洋一，松村道博が担当した。

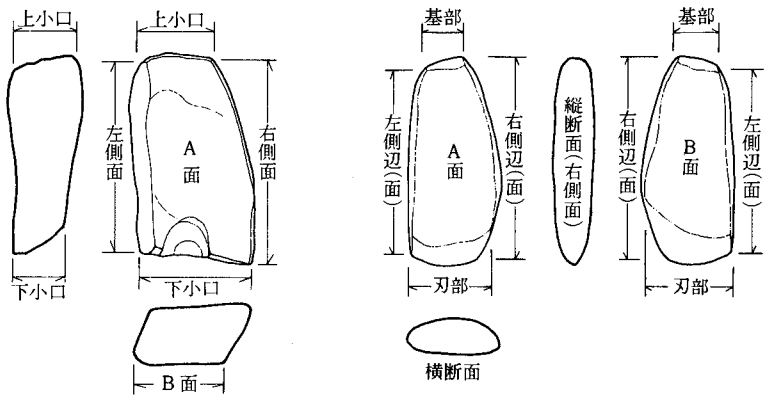
(5)　本書掲載の遺構写真の撮影は井沢，山崎，松村が行ない，遺物写真の撮影は山崎，松村，宮嶋成昭氏が行なった。

(6)　本書掲載の遺構の実測は，昭和54～56年度分を井沢，山崎，児玉健一郎，松尾正直，渡辺武子，清原百合子が行ない，昭和57年度分は井沢，松村，辻哲也，落合弥生，渡辺武子，清原百合子が行なった。遺物の実測は第30次―井沢・児玉，第44次・第46次―松尾・山崎，第47次―井沢・辻哲也，第48次―井沢，第49次―井沢・松尾正直，第75次―井沢，第55次―山崎・谷沢仁が行なった。製図は遺構を原秋代，池田洋子，井沢が行ない，遺物の製図は井沢，山崎，松村が行なった。又，拓本は青柳米子，花田早苗が担当した。

(7)　本書の執筆は以下の通りである。第Ⅰ，Ⅱ章，第Ⅲ章第30次，第44次・46次の小結，第48次，第55次，第63次，第75次―井沢，第Ⅲ章第44～47次，第49次―山崎。

(8)　本文中で使用する石器の部分名称は下図のようにする。

(9)　本書の編集は井沢，山崎，松村が行なった。



本 文 目 次

本文頁

第Ⅰ章　はじめに……1
1．調査に至る経過……1
2．発掘調査の組織……2
第Ⅱ章　遺跡の立地と概要……3
第Ⅲ章　調査経過……9
1．第30次調査……9
調査の概要……9
検出遺構……9
出土遺物……28
小　　結……38
2．第44次調査……41
調査の概要……41
検出遺構……41
出土遺物……44
小　　結……49
3．第46次調査……53
調査の概要……53
検出遺構……53
出土遺物……58
小　　結……65
4．第47次調査……67
調査の概要……67
検出遺構……68
出土遺物……74
小　　結……80
5．第48次調査……82
調査の概要……82
検出遺構……82
出土遺物……94
小　　結……101
6．第49次調査……105

調査の概要…… 105
検出遺構…… 105
出土遺物…… 107
小　　結…… 109
7．第55次調査…… 111
調査の概要…… 111
検出遺構…… 111
出土遺物…… 119
小　　結…… 125
8．第63次調査…… 129
調査の概要…… 129
検出遺構…… 130
出土遺物…… 132
小　　結…… 132
9．第75次調査…… 134
調査の概要…… 134
検出遺構…… 135
出土遺物…… 136
小　　結…… 137

挿図目次

Fig. 1　有田・小田部周辺の遺跡……（1/25.000）……X
Fig. 2　有田・小田部台地と発掘調査地点…（1/5000）……折込
Fig. 3　有田・小田部地区の旧地形図……（1/5000）……折込
Fig. 4　第30次調査遺構配置図……（1/200）……10
Fig. 5　1号住居跡……（1/60）……11
Fig. 6　2号住居跡……（1/60）……12
Fig. 7　1号，2号土壙……（1/30，1/40）……13
Fig. 8　3号土壙，火葬墓……（1/30）……14
Fig. 9　溝土層断面図……（1/30）……15
Fig. 10　掘立柱建物配置図……（1/300）……16
Fig. 11　1～5号掘立柱建物……（1/100）……18

Fig. 12 6～10号掘立柱建物……(1/100)……19
Fig. 13 11～15号掘立柱建物……(1/100)……21
Fig. 14 16～19号掘立柱建物……(1/100)……22
Fig. 15 20，21号掘立柱建物……(1/100)……23
Fig. 16 22～26号掘立柱建物……(1/100)……24
Fig. 17 27～30号掘立柱建物……(1/100)……26
Fig. 18 1号住居跡出土遺物……(1/3)……29
Fig. 19 1号，3号土壙出土遺物……(1/3，1/1)……31
Fig. 20 溝出土遺物……(1/3)……32
Fig. 21 Pit出土遺物……(1/4)……34
Fig. 22 Pit出土遺物……(1/3)……35
Fig. 23 Pit出土遺物……(1/3，1/1)……36
Fig. 24 掘立柱建物変遷図……(1/500)……40
Fig. 25 現況図……(1/800)……41
Fig. 26 第44次調査遺構配置図……(1/150)……42
Fig. 27 集石遺構……(1/20)……43
Fig. 28 井戸実測図……(1/40)……44
Fig. 29 出土遺物……(1/3)……45
Fig. 30 出土遺物……(1/4，1/3)……47
Fig. 31 出土遺物……(1/3)……50
Fig. 32 第36，46次調査遺構配置図……(1/200)……54
Fig. 33 1号土壙……(1/30)……55
Fig. 34 井戸跡実測図……(1/40)……56
Fig. 35 1～3号掘立柱建物……(1/100)……57
Fig. 36 1号溝断面図……(1/40)……58
Fig. 37 井戸出土遺物……(1/3)……59
Fig. 38 井戸出土遺物……(1/3，1/4)……62
Fig. 39 井戸出土遺物……(1/4)……63
Fig. 40 1号溝，及びPit出土遺物……(1/3)……64
Fig. 41 第36，47，86次調査遺構配置図……(1/300)……66
Fig. 42 第47次調査遺構配置図……(1/200)……67
Fig. 43 1号，2号土壙……(1/40)……68
Fig. 44 1～3号掘立柱建物……(1/100)……69

Fig. 45　4号，7号，8号掘立柱建物……（1/100）……71
Fig. 46　1～3号溝，2号土壙土層図……（1/80，1/30，1/40）……73
Fig. 47　2号土壙出土遺物……（1/3，1/4）……75
Fig. 48　2号土壙出土遺物……（1/4，1/3）……76
Fig. 49　1号溝出土遺物……（1/3，1/4）……78
Fig. 50　2号溝，及び表土出土遺物……（1/3）……79
Fig. 51　第48次調査遺構配置図……（1/250）……83
Fig. 52　1号，2号住居跡……（1/60）……84
Fig. 53　3号～5号住居跡……（1/60）……86
Fig. 54　8号住居跡……（1/60）……87
Fig. 55　6号，7号，9号，10号住居跡……（1/60）……88
Fig. 56　11号住居跡……（1/60）……89
Fig. 57　1号，2号甕棺墓実測図……（1/30）……90
Fig. 58　井戸跡，3号，4号土壙……（1/30）……92
Fig. 59　1号，2号掘立柱建物……（1/100）……93
Fig. 60　3号掘立柱建物……（1/100）……94
Fig. 61　1号住居跡出土遺物……（1/3）……96
Fig. 62　住居跡，及び表土出土遺物……（1/3，1/2）……97
Fig. 63　3号住居跡出土遺物……（1/4）……98
Fig. 64　1号，2号甕棺……（1/10）……100
Fig. 65　有田，小田部の弥生～古墳時代遺跡（1/10,000）……103
Fig. 66　第49次調査遺構配置図……（1/200）……106
Fig. 67　1～3号土壙……（1/30）……107
Fig. 68　出土遺物……（1/3）……108
Fig. 69　第29，55次調査遺構配置図……（1/200）……112
Fig. 70　1号住居跡……（1/60）……113
Fig. 71　2号住居跡，2号土壙……（1/60，1/20）……114
Fig. 72　1号，3号土壙……（1/30）……115
Fig. 73　3号，4号掘立柱建物……（1/100）……117
Fig. 74　1号～3号溝土層図……（1/60）……118
Fig. 75　出土遺物……（1/3）……120
Fig. 76　1号溝出土遺物……（1/3）……122
Fig. 77　1～3号溝出土遺物……（1/3）……123

Fig. 78 第29，32，55，56次調査掘立柱建物配置図（1/400）…… 128
Fig. 79 第63，79次調査遺構配置図……（1/200）…… 129
Fig. 80 1～5号掘立柱建物……（1/100）…… 131
Fig. 81 掘立柱建物配置図……（1/200）…… 133
Fig. 82 第75次調査遺構配置図……（1/200）…… 134
Fig. 83 溝断面土層図……（1/40）…… 136
Fig. 84 出土遺物……（1/3）…… 137
Fig. 85 有田台地中央部分の各調査地点……（1/1000）…… 140

図版目次

図版扉写真　第48次調査作業風景（昭和56年7月）
PL. 1 有田・小田部周辺航空写真（昭和50年撮影）
PL. 2 有田・小田部周辺航空写真（昭和21年米軍撮影）
PL. 3 (1)第30次調査北半部分(西から)　(2)調査区南半部分（東から）
PL. 4 (1)1号住居跡（南から）　(2)遺物出土状態　(3)(2)に同じ
PL. 5 (1)2号住居跡（北から）　(2)2号土壙（北から）
PL. 6 (1)1号土壙（北から）　(2)3号土壙（東から）
(3)火葬墓（東から）　(4)火葬墓底部（東から）
PL. 7 (1)1号掘立柱建物（西から）　(2)2号掘立柱建物（西から）
(3)3号掘立柱建物（南から）　(4)3号・10号掘立柱建物（南から）
PL. 8 (1)4号掘立柱建物（南から）　(2)5号掘立柱建物（南から）
(3)6号掘立柱建物（南から）　(4)7号掘立柱建物（南から）
PL. 9 (1)8号掘立柱建物（東から）　(2)9号掘立柱建物（南から）
(3)10号掘立柱建物（西から）　(4)11号掘立柱建物（南から）
PL. 10 (1)15号，16号掘立柱建物（南から）　(2)17号掘立柱建物（南から）
(3)溝状遺構（東から）　(4)Pit内の甕出土状態（北から）
PL. 11 出土遺物
PL. 12 出土遺物
PL. 13 (1)第44次調査東半部分（西から）　(2)調査区西半部分（南から）
PL. 14 (1)井戸跡（東から）　(2)同石積み状態（東から）
PL. 15 (1)1号溝（西から）　(2)1号集石遺構　(3)2号集石遺構
PL. 16 出土遺物

PL. 17 (1)第46次調査北半部分（北西から） (2)調査区南半部分（南から）
PL. 18 (1)井戸上面の礫群（南から） (2)井戸跡の状態（北から）
(3)井戸の石組状態 (4)石組内臼の出土状態（西から）
PL. 19 (1)土壙（東から） (2)1号溝（北から） (3)2号溝（西から）
PL. 20 出土遺物
PL. 21 出土遺物
PL. 22 (1)第47次調査北半部分（東から） (2)調査区南半部分（東から）
PL. 23 (1)1号土壙（南から） (2)2号土壙（北から）
PL. 24 (1)2号溝北半部分（南から） (2)2号溝南半部分（北から）
(3)1号溝（東から） (4)3号溝（東から）
PL. 25 出土遺物
PL. 26 出土遺物
PL. 27 (1)第48次調査西半部分（東から） (2)調査区東半部分（西から）
PL. 28 (1)東側調査区拡張部分（西から） (2)西側調査区拡張部分（北から）
PL. 29 (1)1号住居跡（西から） (2)2～5号住居跡（西から）
PL. 30 (1)2号住居跡（南から） (2)5号住居跡（西から）
PL. 31 (1)6号住居跡（南から） (2)7号住居跡（北から）
PL. 32 (1)8号住居跡（南から） (2)9号住居跡（東から）
PL. 33 (1)10号住居跡（北から） (2)11号住居跡（北から）
PL. 34 (1)1号甕棺墓出土状態 (2)2号甕棺墓出土状態
PL. 35 (1)1号掘立柱建物（西から） (2)井戸跡（西から）
PL. 36 (1)1号土壙（西から） (2)2号土壙（東から）
(3)3号土壙（北から） (4)4号土壙（北から）
PL. 37 出土遺物
PL. 38 出土遺物
PL. 39 (1)第49次調査南半部分（西から） (2)調査区北半部分（東から）
PL. 40 (1)2号溝（東から） (2)3号溝（西から）
(3)3号土壙（西から） (4)白磁碗出土状態
PL. 41 (1)1号土壙 (2)2号土壙 (3)Pit内遺物出土状態 (4)出土遺物
PL. 42 (1)第55次調査全景（南から） (2)1号,2号掘立柱建物（南から）
PL. 43 (1)1号住居跡（西から） (2)2号住居跡（北から）
PL. 44 (1)1号住居跡内鉄鎌出土状態 (2)2号住居跡遺物出土状態
(3)2号掘立柱建物柱穴掘方断面 (4)(3)に同じ

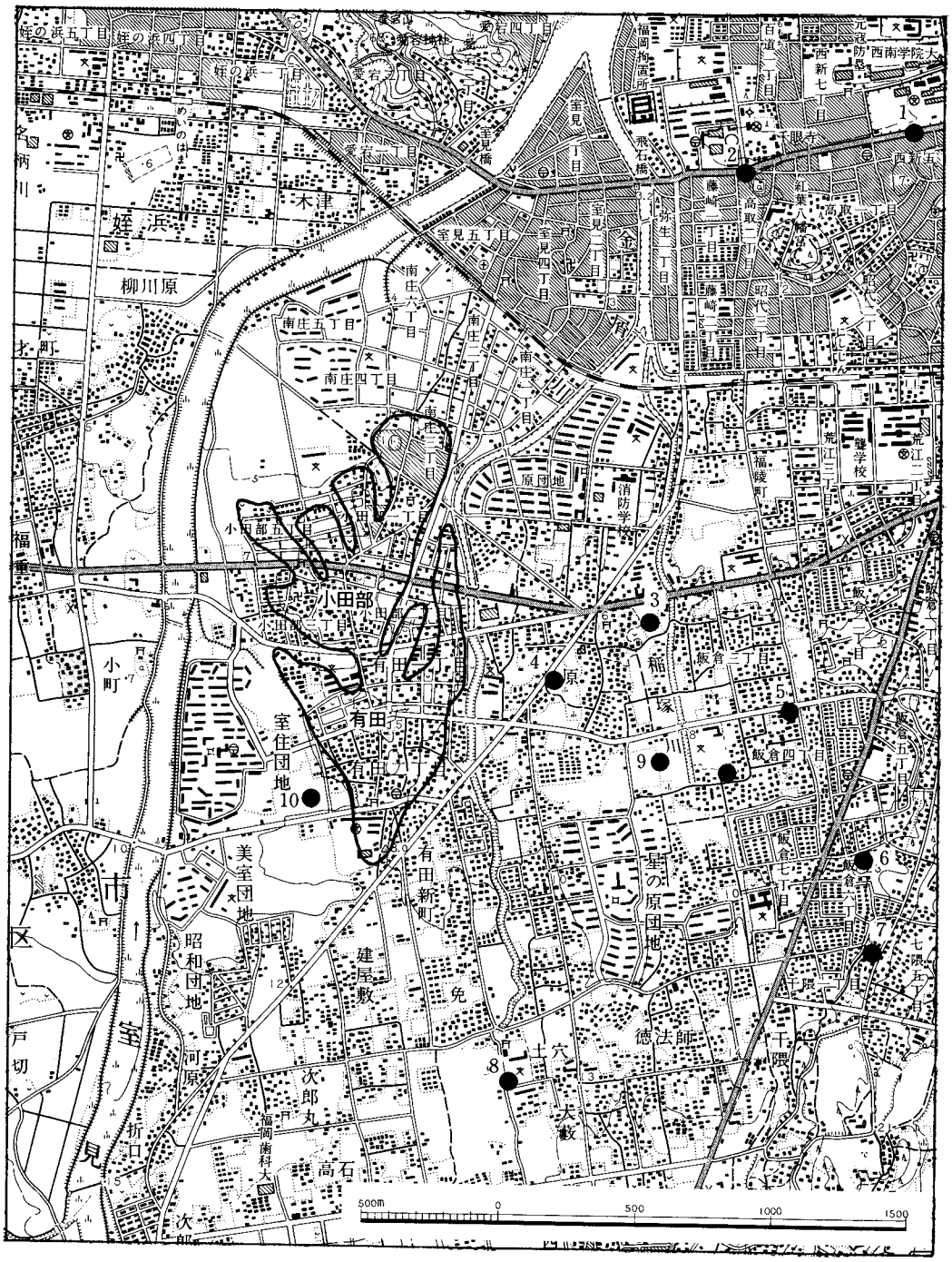
PL. 45 (1)1号土壙（南から）　(2)2号土壙（南から）
(3)3号土壙（北から）　(4)1号溝（東から）
PL. 46 (1)3号溝（北から）　(2)2号溝（東から）
(3)3号溝断面の状態（南から）　(4)3号溝遺物出土状態
PL. 47 出土遺物
PL. 48 出土遺物
PL. 49 (1)第63次調査西半部分（北から）　(2)調査区東半部分（北から）
PL. 50 (1)1号掘立柱建物　(2)4号掘立柱建物　(3)3号掘立柱建物柱穴掘方断面
(4)(3)に同じ
PL. 51 (1)第75次調査全景（南西から）　(2)溝の状態（北西から）
PL. 52 (1)柵列の状態（西から）　(2)溝断面の状態（南から）
PL. 53 出土遺物

表　目　次

tab. 1 有田・小田部発掘調査一覧表……7・8
tab. 2 第30次調査掘立柱建物計測表……27
tab. 3 第30次調査出土玉類計測表……38
tab. 4 第46次調査掘立柱建物計測表……57
tab. 5 第47次調査掘立柱建物計測表……69
tab. 6 第48次調査掘立柱建物計測表……93
tab. 7 第55次調査掘立柱建物計測表……117
tab. 8 第63次調査掘立柱建物計測表……130

付　　図

付図. 1 第55次調査1号，2号掘立柱建物……（1/80）……
〃 2 第30次，第53次，第75次調査遺構配置図……（1/200）……
〃 3 有田地区台地中央部分の各調査地点図……（1/300）……



1．西新町遺跡　2．藤崎遺跡　3．原遺跡　4．原談儀遺跡　5．飯倉遺跡
6．飯倉原遺跡　7．干隈遺跡　8．鶴町遺跡　9．原深町遺跡　10．有田七田前遺跡

Fig. 1　有田・小田部周辺の遺跡（1／25,000）

第Ⅰ章　はじめに

1．調査に至る経過

有田遺跡の位置する福岡市早良区有田・小田部の台地は，近年，著しい住宅化のため農村地帯の面影を失ないつつある。特にこの地域は小田部ダイコンの生産地として有名であったが，住宅化に追われ，畑地は減少の一途を辿っている。又，近年の開発は農地の転用とは限らず，改築等によって大型の共同住宅化，或いは店舗へと変化しており，昭和50年の発掘調査体制発足時に比べると専用住宅化による発掘調査は減少化のきざしがみられる。

昭和41～43年に九州大学考古学研究室が区画整理に伴って発掘調査を実施しており，以後の調査計画に重要な資料を残している。福岡市教育委員会は昭和50年度から国庫補助を得て，有田遺跡の記録保存に努めている。昭和57年度の申請件数は35件，試掘調査件数26件，要発掘調査件数12件となっている。前年度からの繰り越し分は15件である。昭和57年度の発掘調査は13件である。又，昭和59年３月31日現在迄の発掘調査の総件数は90ヶ所である。

昭和57年度も前年度に引き続き専用住宅や大型共同住宅，店舗等の開発地について緊急性の高いものから順次，福岡市教育委員会が国庫補助を得て発掘調査を実施した。尚，大型住宅や宅地造成の場合は調査費の一部を原因者負担としている。報告書については昭和54年度事業の第30次，昭和56年度事業の第44次，第46～49次，第55次，昭和57年度事業の第63次，第75次の計９ヶ所を報告する。

昭和54年度発掘調査地（頭の数字は調査順位を示す）

1．第30次	福岡市早良区小田部３丁目288	面積586m²	申請者	毛利　保人

昭和56年度発掘調査地

3．第44次	福岡市早良区有田２丁目14－9	面積1,028m²	申請者	坂口　英治
5．第46次	福岡市早良区小田部５丁目143－1	面積264m²	申請者	安恒　秀生
6．第47次	福岡市早良区有田１丁目28番7･8	面積372m²	申請者	坂口　武登
7．第48次	福岡市早良区小田部２丁目140	面積600m²	申請者	毛利　清海
8．第49次	福岡市早良区小田部４丁目20－21	面積655m²	申請者	門司採石㈱
14．第55次	福岡市早良区有田１丁目33－3外	面積317m²	申請者	大賀　清美

昭和57年度発掘調査地

1．第63次	福岡市早良区小田部１丁目224	面積115m²	申請者	本山　繁雄
2．第64次	福岡市早良区小田部５丁目151～153	面積1,800m²	申請者	金子　亮司

3．第65次	福岡市早良区有田２丁目7－10	面積251m²	申請者	高田　潔
4．第66次	福岡市早良区有田１丁目20－1	面積503m²	申請者	古賀　龍雄
5．第67次	福岡市早良区小田部１丁目171･172－1	面積802m²	申請者	伊佐　英喜
6．第68次	福岡市早良区有田２丁目17－42	面積146m²	申請者	岡村　五男
7．第69次	福岡市早良区有田１丁目13－10	面積649m²	申請者	中山　憲喜
8．第70次	福岡市早良区有田１丁目17－1･2	面積191m²	申請者	永野　亨
9．第71次	福岡市早良区有田１丁目22－4･7	面積383m²	申請者	野村　礼子
10．第72次	福岡市早良区有田１丁目26－3	面積394m²	申請者	坂口　悦乃
11．第73次	福岡市早良区小田部１丁目189	面積144m²	申請者	林　一郎
12．第74次	福岡市早良区有田２丁目7－80	面積1,156m²	申請者	濱本　洋子
13．第75次	福岡市早良区有田１丁目27－11	面積284m²	申請者	松島平五郎

２．発掘調査の組織

〈第30次調査〉―「有田・小田部　第１集」参照―

〈第44次，第46～49次，第55次〉―「有田・小田部　第４集」参照―

昭和57年度発掘調査

〈第63次～75次〉

調査主体　福岡市教育委員会

調査担当　福岡市教育委員会文化部文化課埋蔵文化財第２係

調査責任　埋蔵文化財第２係長　折尾　学

庶務担当　岡嶋洋一

調査担当　井沢洋一，松村道博

調査補助員　山口勝巳，池野尚昭，谷沢　仁，辻　哲也（別府大学生）

調査協力者　松尾和雄，岩城庄助，山下敏，結城茂巳，高浜謙一，渡辺武子，松井フユ子，佐藤テル子，金子由理子，清原ユリ子，真子昌子，西尾たつよ，松尾玲子，柴田幸子，土斐崎初栄，庄野崎ヒデ子，庄野崎チタカ，末松信子，砥綿チエ子，掘川ヒロ子，中村千里，伊庭秀子，坂田まさ子，平井和子，後藤ミサヲ，柴田勝子，柴田春代，緒方マサヨ，山田悦子

安部宏，堺裕明，前田次郎，安岡洋二，明野隆，西島健一，前田乱，松江宏文，萩原陽一郎，北川智穂美（以上西南大学生）

資料整理　山崎龍雄（文化課），宮嶋成昭，児玉健一郎，松尾正直，辻哲也，原秋代，青柳米子，石橋千恵，内尾トミ子，仲前智江子，永井和子，落合弥生，久保順子，池田洋子，山下仁美，当房純子，深掘博子

第II章　遺跡の立地と概要

立　地　福岡市早良区有田・小田部の位置する台地は，室見川の開析によって形成された早良平野のほぼ真中に位置し，長軸を南北方向に向けた標高15m前後を示す独立中位段丘である。台地の形成は洪積世に位置づけられ，八女粘土，鳥栖，新期ロームの層位をなしている。旧地形は有田１～２丁目を最高所にて標高15mを測り，周辺の水田面との比高差は10m前後を測る。現在の比高差は５～７mで，沖積化の著しさを示している。この丘陵は南北の長さ約１km，最大幅約0.7kmを測り，北へ緩やかに傾斜している。台地の東側には金屑川が，台地の西には室見川が流下しているところから，台地の縁辺は浸蝕を受け，小断崖を形成している。また，台地内に深く切り込んだ比較的浅く，緩やかな谷も幾つか存在し，これらの谷が北方向から切り込むことによって，台地は八ツ手状に分岐する。有田・小田部両地区共に昭和40年代の初めに区画整理事業によって著しい現状変更が行なわれている。

概　要　昭和57年度は前年度に引きつづき専用住宅等の新・改築や大型共同住宅，宅地造成に伴う緊急調査，及び試掘調査を実施した。発掘調査対象件数は前年度，及び前々年度の繰り越し分15件を含めて計27件で，この内，緊急を要する13件について発掘調査を実施した。対象面積は約 6.818m²である。昭和57年度の発掘調査申請件数35件，試掘調査件数26件，要発掘調査件数12件，その内，発掘調査を終了したのは７件である。

発掘調査は昭和57年４月２日～12月31日迄実施した。調査対象地は前年度に比べて面積が広く，専用住宅の目的以外に第64次調査の大型共同住宅や第67次，第74次調査のような分譲宅地造成の例がある。こうした開発については国庫補助以外に調査費の負担を原因者に協力要請を行なっている。現在，台地上の専用住宅はほぼ飽和状態に近く，今後こうした大型の共同住宅等が増加する可能性が大きく，調査費，調査期間，及び体制について充分な配慮が必要となろう。

今年度事業で検出した遺構は弥生時代前期から江戸初期に至る時期で，甕棺墓，土壙墓，住居跡，掘立柱建物，濠跡，柵列等を検出している。

第63次調査地は小田部１丁目の台地上に位置し，周辺では第25～26次，第37次調査が実施されている。遺構は掘立柱建物７棟以上検出された。いずれも主軸は北方向を示している。内２棟は２間×３間の建物で，柱穴掘方は径50cmを測る。遺物が少なく，時期は不明であるが埋土から古墳時代～律令時代が考えられる。

第64次調査地は小田部地区の西側台地先端部に位置している。検出した遺構は弥生時代前期末～後期前半の甕棺墓33基，弥生時代～奈良時代の土壙25基，古墳時代住居跡19軒，奈良～平安時代の掘立柱建物３棟（総柱で３間×４間の建物―２棟，２間×３間の建物―１棟），14～16世紀の溝２条と濠１条である。甕棺墓は西側の第46次調査でも確認され，その範囲は東西約70m，南北約40mと推定できる。住居跡は東側の第35調査地迄連続し，４世紀から６世紀に至る時期で

あるが，重複が著しく長期に亘って集落が営まれた事が理解される。総柱の建物２棟はいずれも同一方向で１列に並ぶ。柱間は約1.5～1.6m，柱穴掘方径0.8～1.0mを測る。N22°30′Wの主軸方位は第46次調査で中世と報告した柵列の方向と略同一であるため，同一時期の施設の可能性がある。柵列の時代について再検討しなければならない。1号，3号溝はいずれも南北方向から東西方向に矩形に曲る溝で，中世居館の周囲を巡るものと思われる。「下中園屋敷」跡に関連する溝であろう。[註1]

第65次調査地は有田地区の東側台地裾部分に位置する。申請地は小田辺城の東側に存在したと云われる「鬼丸ホゲ」(濠)の延長線上にあるため濠の幅，深さを確認できるものと考えた。地表面から約２mの深さでシルト層[註2]の地山が検出できる。遺構はこの地山面にて土壙３基を検出するにとどまった。２号土壙からは庄内式土器併行期の甕とドングリの実が出土した。

第66次調査地は有田地区の台地中央部に位置するが東側，南側，北側の3方を道路により削平を受けている。昭和43年に九州大学によって部分的に発掘調査が行なわれ，袋状貯蔵穴，溝等が検出されている。遺構は４世紀前半の住居跡２軒，溝４条，律令時代の井戸[註3]跡1基，同じく掘立柱建物３棟，同じく柵列１条，古墳時代～中世の掘立柱建物10棟，土壙１基，柵列１条を検出した。律令時代の建物は２間×６間，２間×５間？，２間？×？間の規模である。いずれも70cm～100cmを測る柱穴掘方を有し，柱間は1号，2号建物が桁間261cm，梁間216cm，3号棟が桁間195cmを測る。1号，2号建物は切合関係にあり，建て替えられたものである。1号，2号建物と3号建物の間には井戸を設置しており，官衙に類する建物と考えて良いであろう。この地点から西側約150mの位置では約100m四方の周溝に囲まれた大規模建物群が存在する。郡衙，又は郡司層の建物なのか，更に，第66次調査の建物群との間に空間が存在し，主軸方位がわずかに相違することなど時期の検討についても今後の調査経過を待たねばならない。柵列は主柱と副柱2本の3本で構成され，東西方向に延びて，第6次調査で検出した南北方向の柵列に直交すると思われる。この柵列は2号建物に切られており，1～3号建物より古い時期である。1号，2号建物を切る土壙は内部に底を抜いた甕形土器を直立して据え，内底部に須恵器の高台付埦を模した土師器を置いていた。内部から炭化物混じりの土が入っており，埦と甕壁の間は炭化物が層をなしていた。昭和58年度の第85次調査では倒置した甕の内底に須恵器の埦を据え，その甕の内部は骨片で充塡されていたことなどの例[註4]から蔵骨器の可能性がある。

第67次調査地は八ツ手状に広がる小田部台地の中央部に位置する。南半部分は削平を受けている。遺構は住居跡1軒，掘立柱建物4棟，長方形土壙3，不整形土壙1基がある。住居跡は近世の方形地割り溝のため削平を受けている。形状は方形を呈し，4本柱である。かまどを有した形態で周溝内には径10cm前後を測る小柱穴が等間隔に認められた。住居壁を形成する柱穴と思われる。1号掘立柱建物は南北方向に主軸をおき２間×４間の規模で，柱穴掘方は一辺80cmを測り，方形を呈する。土壙はいずれも幅約70cm，長さ約120cm，深さ100cmを測り，床面中央には径20cmの小Pit

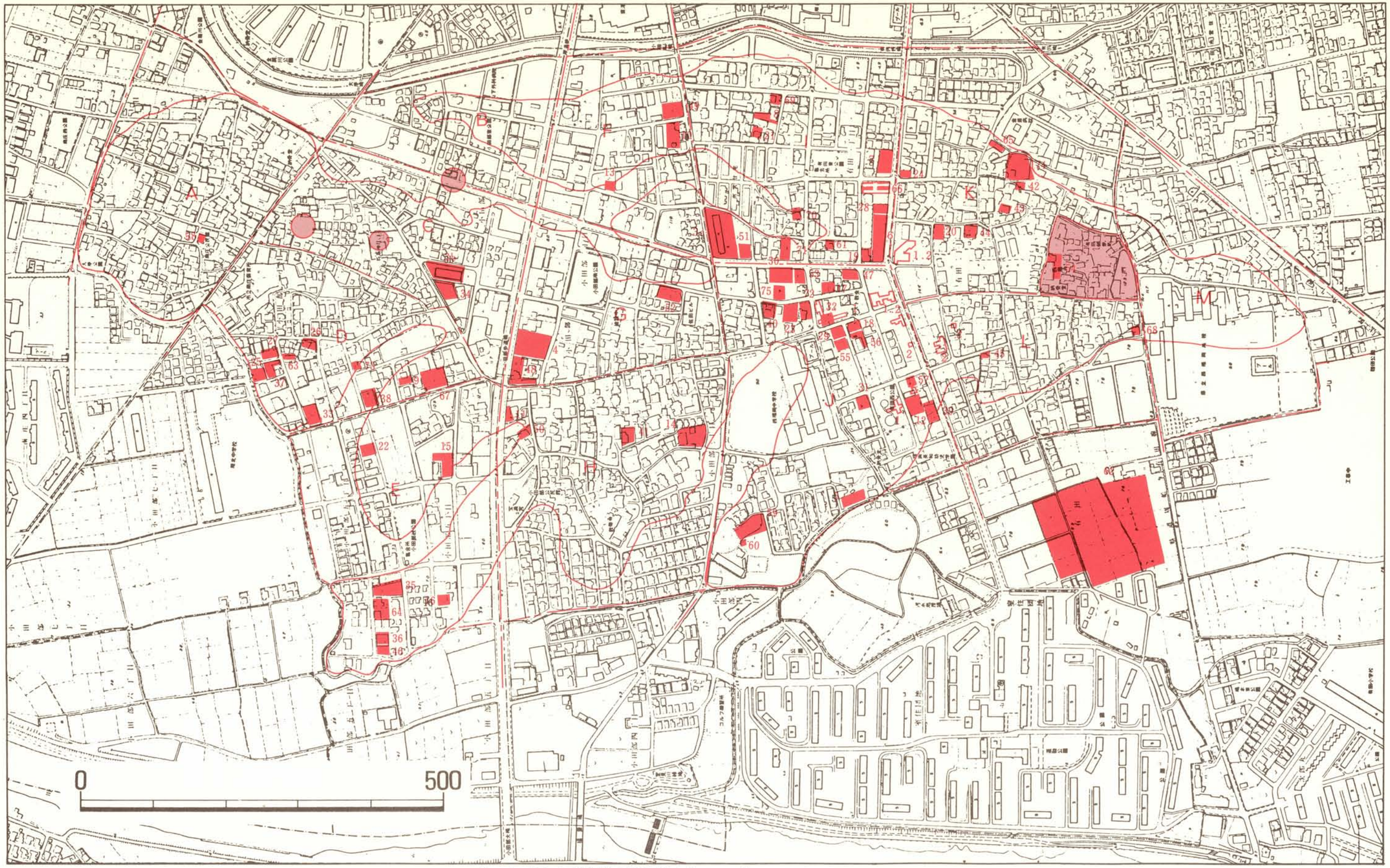


Fig. 2 有田・小田部台地と発掘調査地点 (1/5,000) ※数字は調査次数を表わす。

Fig. 3 有田・小田部台地の旧地形図(1/5,000) ※赤塗りは調査地点を表わす。

を有している。同様例は第50次調査でも1基検出している。4号土壙は不整形の浅いレンズ状を呈し，内部から鉄滓が多く検出された。時期は奈良時代である。

第68次調査地は有田地区の台地西側裾部に位置し，小田辺城の西側濠，通称「ホカヤネ」に相当している。[註2] 遺構面はシルト層で，深さ1mを測る。遺構は土壙4基，小溝1条，濠を検出した。濠は調査区東側にわずかに検出したのみで深さ，幅は不明である。覆土は真黒色を呈していた。

第69次調査地は有田地区の台地東側傾斜地に位置する。遺構面は上，下の2層が存在する。上面では中世の掘立柱建物1棟及び柱穴群と溝状遺構を，下面では古墳時代から奈良時代の土壙，井戸跡，3間×4間の掘立柱建物1棟を検出した。上面の整地層には弥生時代～奈良時代の遺物を含んでいる。溝状遺構からは白磁片，青磁片，鉄滓を検出した。

第70次調査地は第69次調査の西側，台地中央寄りに位置する。この地点の北側には浅い谷が存在しており，遺構の存在が不明確な場所であった。遺構面は削平を受けているが南北方向から東西方向へ曲がる濠を2条検出した。断面V字形を呈する濠は幅3m，深さ1.5mを測る。第53次調査や第71次調査検出の濠に接続するもので，第53次調査地迄の延長は90cmを測る。16世紀代の遺構で，雑器，青磁等を検出した。

第71次調査地は第70次調査の更に西側，台地中央に在って，西側には第30次，第53次，第75次調査地が在る。調査地の東側は暗茶褐色土の中世の整地面が存在する。遺構はローム層上に検出され，古墳時代住居跡1棟，2間×2間の総柱の掘立柱建物1棟，平安時代から中世の井戸3基，中世濠2条を検出した。住居跡は長方形の痕跡を残すところから4世紀の時期が考えられる。第30次調査では竪穴住居跡に伴う掘立柱建物も検出されており，この一帯に集落を形成していたのであろう。2号濠は第53次，第70次調査に接続するもので幅5m，深さ2mを測る。律令時代の井戸跡からは墨書土器，木製の櫛や容器として利用されたヒョウタンが出土している。

第72次調査地は有田地区の標高12mを測る平坦地に位置する。当該地の南側に第32次，北側に第23次調査が実施されている。遺構面は家屋の基礎等のため攪乱が著しい。遺構は中世の溝2条，濠1条，土壙1基，掘立柱建物3棟を検出した。濠は南北方向から東西方向に曲がる矩形を呈している。幅は4～5m，深さ1.5～2.0mを測り，底の一部に水溜め状の大きな土壙を形成する。この濠は第32次調査の1号溝に接続し，東側は第53次調査の濠(1号溝)に流れ込む3号溝に接続するものと思われる。2間×3間の2棟の掘立柱建物は濠を巡らした城郭の内側に存在するものである。濠の底や覆土からは馬歯や陶磁器を多く検出した。

第73次調査地は小田部地区の東側台地の標高7m前後を測る西側斜面に位置している。谷地に接するため湧水が著しい。約30cmの表土下には深さ40cmを測る黒褐色土の包含層が存在する。遺構は掘立柱建物を2棟検出した。時期は古墳時代～律令時代を考えられる。

第74次調査地は有田地区台地の南端部に存在する小田辺城伝承地の北東側緩斜面に位置する。

標高6.5mを測るが当該地の東側は一段高く比高差約2.5mを測る。小田辺城は16世紀後半に荒平山に居城していた小田部氏の支城と云われる。この小田辺城の東側には「鬼丸ホゲ」と称した濠跡が近年迄存在したと云われる。調査地の東側台地縁辺部は矩形に形成されており[註2]，出隅を形成する。この台地を巡るように現在も水路が残っている。遺構はローム，シルト質の地山面に形成される。遺構は弥生時代後期から17世紀代に及ぶもので，弥生時代後期の井戸跡1基，住居跡1軒，弥生時代～古墳時代の掘立柱建物10数棟，古墳時代土壙1基，同住居跡1軒，奈良時代製鉄遺構2，中世末の溝2条，同井戸跡2基，同土壙1基，近世井戸跡1基，同溝2条を検出した。製鉄遺構からは多量の鉄滓が出土したが，土壙底部には鉄滓，焼土のつまった小Pitが存在した。ホド穴の可能性がある。中世の井戸跡からは木製の臼・杵が埋置した状態で出土した。こうした例は初見であり，中世末から近世の民間習俗，及び民具を知る上で重要な発見であった。又，近世の井戸からは手樋，木槌が出土している。

第75次調査地は有田地区の標高12m前後を測る平坦地に位置している。東側に第30次，第53次調査地が，西側に第72次調査地が存在する。遺構面は攪乱が著しいが，東西方向の柵列1条と掘立柱建物2棟を検出した。いずれも第30次調査の柵列，及び建物に接続するものである。

以上，昭和57年度の各調査地点の成果を概括したが整理の不手際から今回の報告はわずかに第63次，第75次調査の2ヶ所の報告にとどまった。来年度の報告書に於いて資料の充分な検討を加えて報告したい。

註1　飯盛神社文書「飯盛宮行事屋敷小田部村郷地頭名注文」に早良郡小田部村中園名，下中園屋敷とある。
〃2　山口津著「有田郷土誌」1973
〃3　福岡市教育委員会「有田遺跡」　1968
〃4　昭和58年度調査　現在整理報告中である。
〃5　福岡県早良郡役所「早良郡誌」　1973　復刻版

tab. 1　有田・小田部発掘調査一覧表

調査次数	地点名	調査地域（地番）	調査面積	調査期間	備考	
第1次		8ヶ所	500m²	42年2月20日～3月11日	弥生時代前期V字溝1，古墳時代前期住居跡2，後期住居跡1，奈良時代住居跡1	※
〃2〃		7ヶ所	900m²	43年2月20日～3月11日	弥生時代前期V字溝1，後期V字溝1，古墳時代前期住居跡4，古墳時代前期溝2，奈良時代炉跡3，掘立柱建物1，平安時代溝1，中世溝1	※
〃3a〃	C－d－1	早良区小田部1丁目427 439－1，499－2	1,082m²	50年12月8日～2月10日		
〃3b〃	I－a－1	早良区有田1丁目23－1	1,836m²	51年2月16日～6月16日	弥生時代前期貯蔵穴2，中期住居跡4，井戸2，後期住居跡1 古墳時代住居跡8，掘立柱建物1，平安時代溝1	
〃4〃	G－a－1	〃　小田部2丁目139	1,691m²	52年6月9日～8月19日	奈良時代以降の掘立柱建物40棟・製鉄炉跡	
〃5〃	J－c－1	〃　〃　〃　704	900m²	〃　6月20日～11月23日	縄文時代中期～後期貯蔵穴群	
〃6〃	I－u－1	〃　有田1丁目20－3	1,289m²	〃　8月18日～10月20日	前期V字溝2，古墳時代住居跡2，陶質土器出土，中世溝2，奈良時代柵列跡	
〃7〃	I－v－1	〃　〃　〃　8－10	573m²	53年3月8日～4月20日	弥生時代前期溝1，中世掘立柱建物1，溝2，墓跡1	※2
〃8〃	I－d－1	〃　〃　〃　13－12	191m²	〃　3月17日～5月15日	掘立柱建物1，古墳時代住居跡3	※2
〃9〃	D－i－1	〃　小田部1丁目174－2	211m²	〃　5月29日～6月9日 6月15日～6月30日	古墳時代住居跡2，土壙1	
〃10〃	F－g－1	〃　〃　2丁目57	436m²	〃　5月30日～6月14日	白磁	
〃11〃	H－d－1	〃　〃　〃　168－3－4	186m²	〃　5月27日～6月2日	磨製石鏃1	
〃12〃	J－q－1	〃　有田1丁目37－11	360m²	〃　6月6日～6月29日	第1・2次調査13街区同位置，古墳時代前期住居跡2，奈良時代炉跡3，掘立柱建物2	
〃13〃	F－d－1	〃　小田部2丁目73－2	152m²	〃　7月17日～7月21日		
〃14〃	H－j－1	〃　〃　3丁目281－2	539m²	〃　8月2日～8月21日	近世井戸跡3	
〃15〃	E－p－1	〃　〃　5丁目54－11	275m²	〃　8月29日～10月2日	古墳時代住居跡5，掘立柱建物	
〃16〃	I－n－1	〃　〃　3丁目312	107m²		弥生時代末～古墳時代初頭住居跡1 弥生時代前期貯蔵穴	
〃17〃	J－p－1	〃　有田1丁目20－9	136m²	54年3月9日～3月20日	中世溝1	
〃18〃	J－n－1	〃　〃　〃　32－1	248m²	〃　4月16日～21日，27日	夜臼式土器を伴う弥生時代前期溝	
〃19〃	I－u－2	〃　〃　〃　24－4	250m²	〃　6月16日～7月8日	古墳時代初頭住居跡1，中世溝2 弥生時代前期溝1，井戸跡1	
〃20〃	K－c－1	〃　〃　2丁目14－20	250m²	〃　6月3日	溝1，掘立柱建物1	
〃21〃	I－d－2	〃　〃　〃　13－16	442m²	〃　7月13日～7月18日	古墳時代初頭住居跡1，掘立柱建物1	※1
〃22〃	E－j－1	〃　小田部5丁目25	385m²	〃　7月13日～7月26日	掘立柱建物12	※1
〃23〃	J－g－1	〃　有田1丁目27－2	485m²	〃　7月27日～8月23日	中世溝2	※1
〃24〃	K－e－1	〃　〃　2丁目10－7	143m²	〃　8月3日～9月10日	中世濠状遺構1，井戸跡2	※1
〃25〃	D－a－1	〃　小田部5丁目237－1	298m²	〃　8月8日～8月11日	中世掘立柱建物4	※1
〃26〃	D－c－1	〃　〃　〃　219	245m²	〃　8月23日～9月10日	掘立柱建物2，平安時代土壙墓1	※1
〃27〃	D－a－2	〃　〃　〃　241	244m²	〃　9月10日～9月17日	弥生時代中期住居跡1	※1
〃28〃	I－u－3	〃　有田1丁目20－2	179m²	〃　9月14日～10月2日	弥生時代前期V字溝1，中世溝1，道路跡1	※2
〃29〃	J－e－1	〃　〃　〃　33－2	280m²	〃　10月5日～11月12日	古墳時代住居跡3，奈良時代掘立柱建物1	※2
〃30〃	J－k－1	〃　小田部3丁目288	586m²	〃　10月16日～12月3日	弥生時代～中世掘立柱建物10数棟 古墳時代住居跡2，火葬墓1	※5
〃31〃	J－h－1	〃　有田1丁目34－2	580m²	〃　11月12日～12月1日	古墳時代住居跡1，掘立柱建物2	※2
〃32〃	J－o－1	〃　〃　〃　29－9	237m²	〃　12月14日～2月10日 55年2月25日～3月17日	古墳時代初頭住居跡1，掘立柱建物1 中世溝2，中世井戸1	※4
〃33〃	D－c－2	〃　小田部1丁目230－231	491m²	〃　5月20日～6月7日	古墳時代住居跡2，掘立柱建物2，製鉄炉跡3	
〃34〃	C－d－2	〃　〃　〃　157	612m²	〃　6月9日～6月19日	古墳時代住居跡1，掘立柱建物4	※2
〃35〃	E－h－1	〃　〃　5丁目150	843m²	〃　6月19日～11月7日	古墳時代初期～後期住居跡10，弥生時代前期貯蔵穴1，中世井戸1，中世溝3，掘立柱建物1，土壙4	
〃36〃	E－h－2	〃　〃　〃　145	247m²	〃　6月23日～7月23日	弥生時代中期後半～末甕棺墓2，中世柵列跡 中世溝1	※4
〃37〃	D－a－3	〃　〃　1丁目237－3	347m²	〃　7月24日～8月20日	掘立柱建物	※4
〃38〃	D－h－1	〃　〃　〃　198	430m²	〃　8月5日～8月19日	中近世溝2	※4
〃39〃	J－q－2	〃　有田1丁目37－7	527m²	〃　9月26日～10月29日	古墳時代～中世掘立柱建物10数棟，土壙墓2	
〃40〃	J－g－2	〃　〃　〃　26－2	376m²	〃　10月2日～10月31日	中世溝2，掘立柱建物・土壙墓2	※4

tab. 1 —②

調査次数	地点名	調査地域（地番）	調査面積	調査期間	備考	
第41次	H－k－1	早良区小田部３丁目307	325m²	55年11月４日～11月19日	中世溝３，中世井戸１	※４
〃42〃	K－m－1	〃 有田２丁目85	150m²	56年４月10日～４月25日	弥生時代～古墳時代掘立柱建物１，平安時代の土壙１，中世掘立柱建物２，溝２	※４
〃43〃	K－m－2	〃 〃 〃 7－88	403m²	〃 ４月10日～４月17日	近世雨落溝１	※４
〃44〃	K－c－2	〃 〃 〃 14－9	1,028m²	〃 ４月17日～４月30日	中世溝状遺構３ 中世末～近世初頭井戸１，土壙２	※５
〃45〃	L－d－1	〃 〃 〃 22－15	111m²	〃 ４月23日～４月28日	弥生時代前期溝１，中世溝１ 古墳時代井戸１	※４
〃46〃	E－h－3	〃 小田部５丁目143－1	264m²	〃 ５月６日～５月28日	中世柵状遺構１，溝２，中世井戸１ 中世土壙１	※５
〃47〃	J－p－2	〃 有田１丁目28－7/28－8	372m²	〃 ５月８日～５月26日	中世土壙２，溝１，濠状遺構１	※５
〃48〃	G－a－2	〃 小田部２丁目140	458m²	〃 ５月18日～６月10日	弥生時代前期甕棺２，同中期住居跡２，掘立柱建物１，弥生～古墳時代土壙７，古墳時代住居跡３，中世掘立柱建物２，溝１，井戸１	※５
〃49〃	F－h－1	〃 〃 1丁目20－21	655m²	〃 ６月９日～６月11日	古墳時代溝１，土壙２，中世土壙墓１	※５
〃50〃	H－d－2	〃 〃 3丁目6－2/11－2	182m²	〃 ６月10日～６月17日	中世溝２，井戸１　その他土壙１	
〃51〃	I－a－2	〃 有田１丁目23－6	314m²	〃 ６月15日～７月17日	弥生時代中期住居跡２，弥生時代～古墳時代掘立柱建物３，古墳時代住居跡１	
〃52〃	G－i－1	〃 小田部２丁目110－2	561m²	〃 ６月24日～８月５日	古墳時代住居跡４，土壙３，奈良時代土壙１，中世溝１，近世溝４条，その他土壙１，掘方柱建物１	
〃53〃	J－k－2	〃 有田１丁目28－3/28－4	417m²	〃 ７月21日～８月７日	古墳時代～平安時代溝１，掘立柱建物１，古墳時代住居跡１，中世溝１，土壙２	
〃54〃	K－n－1	〃 〃 2丁目16－1	1,224m²	〃 ７月22日～７月29日	縄文時代溝１，弥生時代前期溝１，中世溝１ 近世溝１	
〃55〃	J－e－2	〃 〃 1丁目33－3	317m²	〃 ８月７日～９月29日	古墳時代土壙１，古墳時代住居跡２，律令時代溝１，掘立柱建物２，中世溝１，その他土壙１	※５
〃56〃	J－n－2	〃 〃 〃 32－9	513m²	〃 ８月25日～10月28日	縄文晩期溝１，律令時代掘立柱建物２ 中世土壙墓１	
〃57〃	J－q－3	〃 千道原１丁目241－2	275m²	〃 10月１日～10月14日	古墳時代住居跡１，中世溝１	
〃58〃	A－o－1	〃 南庄３丁目185・186	333m²	〃 10月２日～10月20日	弥生時代住居跡２，中世～近世土壙４	
〃59〃	J－a－1	〃 小田部３丁目177	938m²	〃 10月６日～11月21日	弥生時代中期住居跡２，前期甕棺墓１，中世溝２，掘立柱建物10，弥生～中世土壙41	※３
〃60〃	J－a－2	〃 〃 〃 178－2	26m²	〃 11月21日～11月24日	中世溝１，近世地割り溝１	
〃61〃	I－m－1	〃 有田２丁目21－2	187m²	〃 11月21日～12月13日	中世溝１	
〃62〃		〃 有田地区小	1,260m²	57年８月16日～９月23日	縄文時代終末，夜臼式土器 包含層及び川状遺構	
〃63〃		〃 小田部１丁目224	115m²	〃 ４月２日～４月12日	古墳時代～中世の掘立柱建物７棟，柵列１条	※５
〃64〃		〃 〃 5丁目144－1・145/146・151－153	1,800m²	〃 ４月12日～５月10日 ６月25日～８月６日	弥生時代甕棺墓33基，古墳時代住居跡19軒，古墳時代～律令時代の掘立柱建物２棟，中世の溝３条	
〃65〃		〃 有田２丁目7－10	251m²	〃 ４月23日～４月26日	縄文時代～古墳時代の土壙３基	
〃66〃		〃 〃 1丁目20－1	503m²	〃 ５月７日～６月10日	古墳時代住居跡２軒，溝４条，奈良時代井戸１基，土壙１基，掘立柱建物４棟，柵列１条，古墳時代中世の掘立柱建物10棟，柵列１条	
〃67〃		〃 小田部１丁目171/172－1	802m²	〃 ５月25日～６月18日	古墳時代住居跡１軒，古墳～律令時代掘立柱建物４棟，時期不明土壙３基，中世土壙１基	
〃68〃		〃 有田２丁目17－42	146m²	〃 ６月８日～６月15日	中世末濠１条，時期不明土壙３基	
〃69〃		〃 〃 1丁目13－10	649m²	〃 ６月16日～７月31日	古墳～律令時代掘立柱建物１棟，土壙２基，中世溝状遺構２条	
〃70〃		〃 〃 〃 17－1・2	191m²	〃 ６月17日～６月30日	中世濠２条	
〃71〃		〃 〃 〃 22－4・7	192/191m²	〃 ８月30日～10月４日	古墳時代住居跡１軒，掘立柱建物１棟，奈良時代井戸１基，中世井戸２基，濠２条，土壙１基	
〃72〃		〃 〃 〃 26－3	394m²	〃 ９月22日～10月21日	中世土壙１，濠１条，溝１条，掘立柱建物3棟	
〃73〃		〃 小田部１丁目189	144m²	〃 ９月28日～10月８日	古墳～律令時代の掘立柱建物３棟	
〃74〃		〃 有田２丁目7－80	1,156m²	〃 10月12日～12月31日	弥生時代井戸１基，中近世井戸３基，溝１条，土壙１，弥生～古墳時代住居跡２軒，溝１条，掘立柱建物２棟，奈良時代製鉄遺構２基，時期不明掘立柱建物10棟	
〃75〃		〃 〃 1丁目27－11	284m²	〃 10月20日～11月４日	律令時代柵列１条，時期不明掘立柱建物３棟	※５

※１—第１集，※２—第２集，※３—第３集　※４—第４集，※５—第５集にて報告済みである。無印は未報告である。

第Ⅲ章　調 査 経 過

1．第30次調査

調査の概要

調査対象地は福岡市西区小田部３丁目288番地に所在し，対象面積は586m²である。有田地区の最高所は標高15mを測り，平坦部を形成する。これより北側は東方向，北西方向から谷が深く切り込むことによって，幅約150mで，標高12m前後を測る狭長なくびれ部を形成している。この地域では昭和50年度に第３次調査が，昭和54年度に第23次調査が実施されており，弥生時代～中世に至る遺構が検出されている。当該地も同様な遺跡の存在が予想されるところであった。昭和54年に建築確認が申請されたので，埋蔵文化財の確認調査を行なったところ多数の柱穴を検出した。掘立柱建物等の遺構存在が予想された為，発掘調査を実施した。

発掘調査は昭和54年10月16日～12月３日迄実施した。調査は排土処理の関係上２区に分けて行なった。表土は耕作土で約20cmである。遺構は標高12m前後を測るローム層上に形成されるが，昭和43年の区画整理による削平が著しく，南側半分ではほとんど遺構が検出できなかった。遺構は北側に集中している。本来の地形は北側が一段低く，そのため削平を免れたものと考えられる。遺構は弥生時代～中世の掘立柱建物30棟，古墳時代住居跡２軒，古墳時代土壙３，中世火葬墓１基，溝状遺構１条を検出した。

検 出 遺 構

住居跡

削平破損の為，検出できたのは２棟である。他に弥生時代の住居跡状の遺構もある。

１号住居跡（Fig. 5，PL. 4）

遺構は既に削平を受け，壁は0.5cm程度しか残存していない。北東の隅角は道路で削平されているが，ほぼ隅丸長方形を呈するプランである。長さ約4.9m，幅4.4mを測る。北辺の壁に接して焼土が検出されたが，良く焼けており，かまどの痕跡であろう。周溝は南，西壁部分に認められ，最大幅24cm，深さ15cmを測る。柱穴は多数検出されたが，主柱と考えられるのはP1～P4の四本である。径は35cm前後を，深さは50～70cm前後を測る。遺物は細片しか検出できなかった。住居跡の時期については，かまどの設置，主柱が四本であること，或いは，住居跡の平面形が長方形を呈することなどから，５世紀後半代から６世紀代初頭が考えられる。

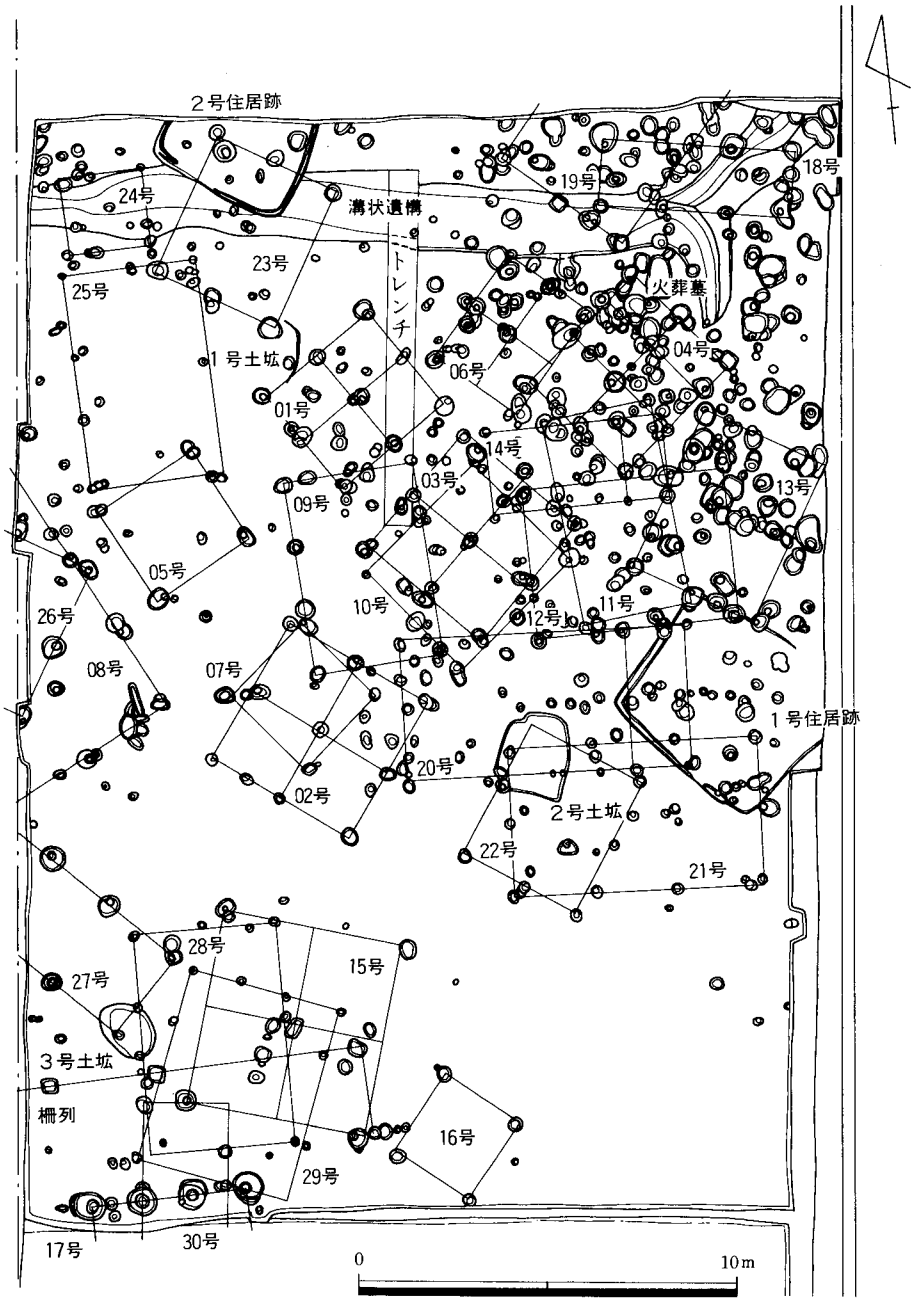


Fig. 4　第30次調査遺構配置図（1/200）

2号住居跡（Fig 6，PL 5－1）

北側の境界地に検出された為，規模は不明である。南側を1号溝に切られる。幅3.9m，長さは23.6m＋α，深さ25cmを測る。南壁下の一部を除いて，幅8cm，深さ5cmの周溝が廻る。東壁側に沿って，6cmの厚さで焼土炭化物が堆積していた。床は叩き締められている。主柱は

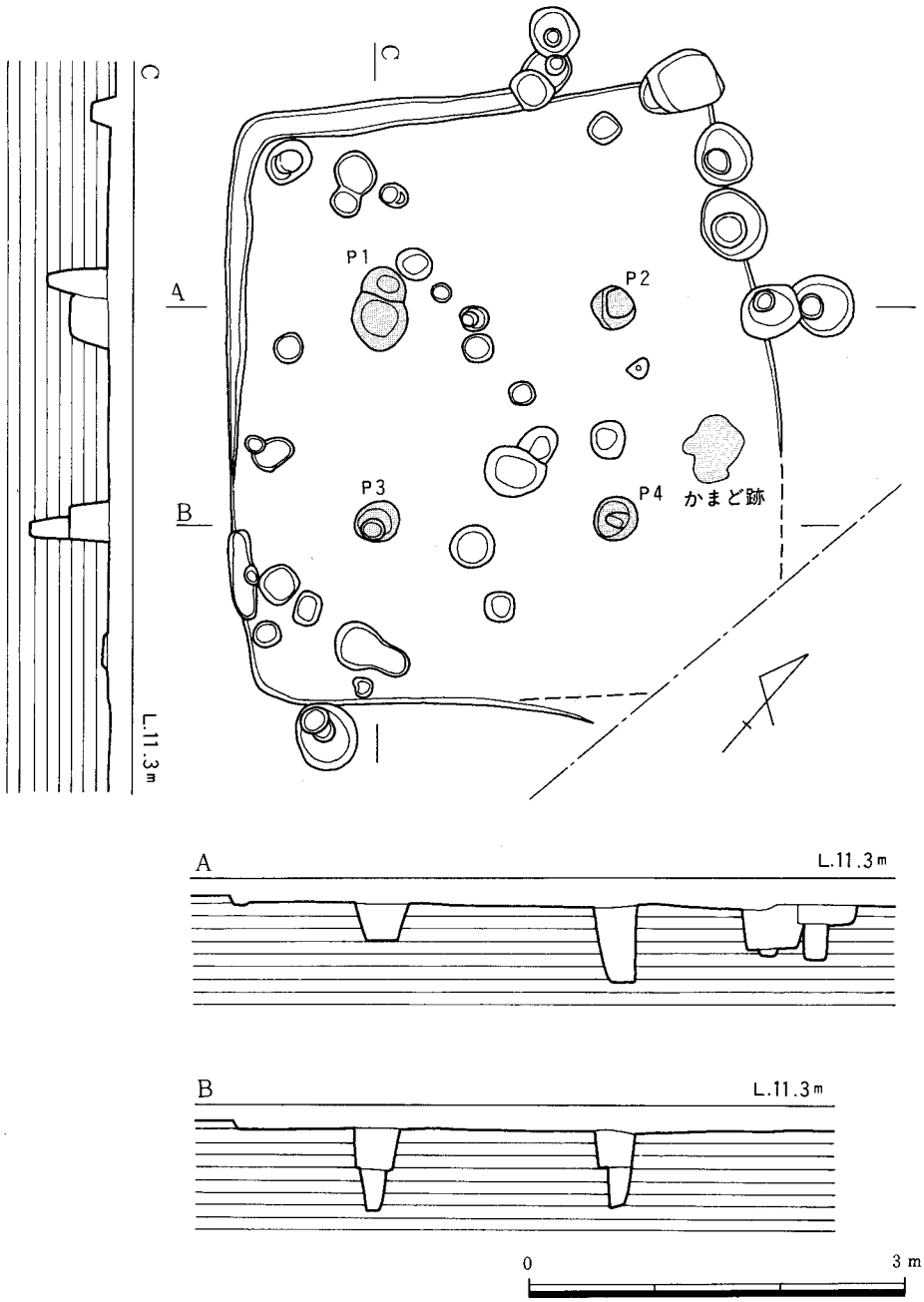


Fig. 5　1号住居跡（1/60）

P1～P3が考えられたが，出土遺物が古墳時代初頭を示していることから，P1，P2を含めた4本柱の住居跡は考えがたい。主柱はP3を考えた方が良いだろう。住居跡は1辺にベットを付設する長方形プランであろう。出土遺物は古墳時代の甕形土器，壺形土器，高坏形土器，鉢形

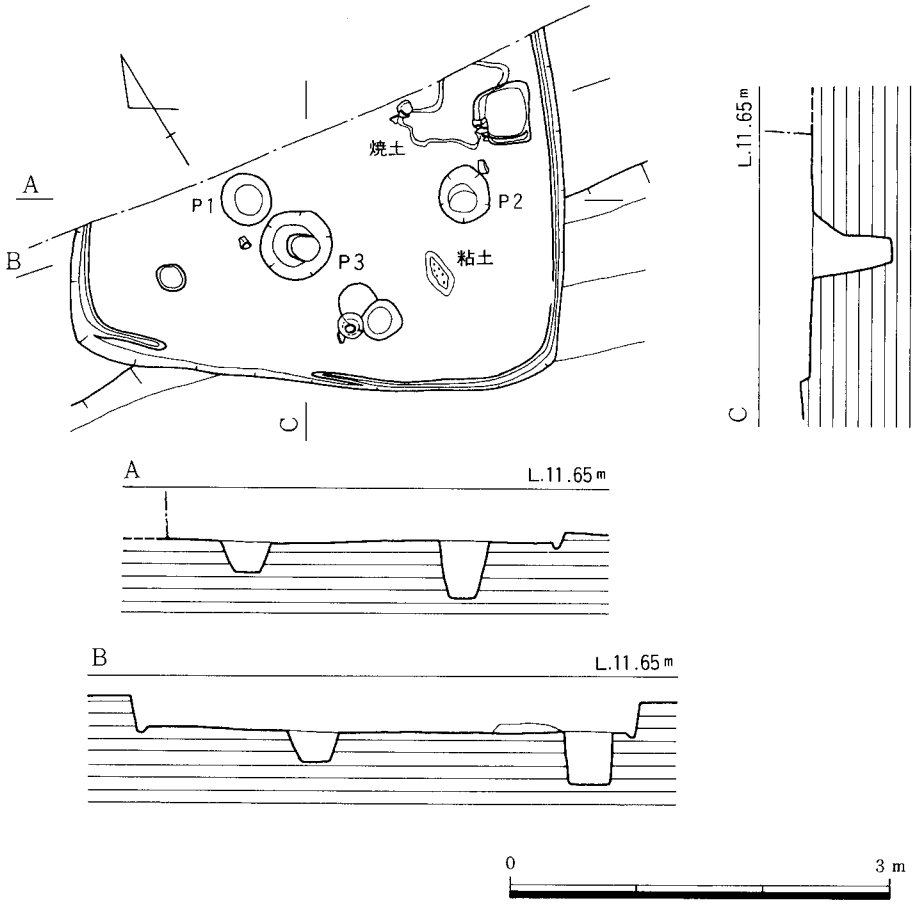


Fig. 6　2号住居跡（1/60）

土器，弥生時代の扁平石斧，土器片などが出土している。

土　壙

いずれも不定形を呈し，内には2号土壙のように住居跡の残存状態を示すものも含んでいる。

1号土壙（Fig 7，PL 6－1）

削平を受けている為，形状は不明。覆土は黒褐色粘質土を充塡している。現存長164cmを測り，東側の一辺が弧形を呈していることから円形，又は楕円形のプランが考えられる。壙内には，P1，P2の柱穴が検出されるが，P1は1号土壙よりも後出のものである。P2は径60cm，深さ50cmを測り，覆土は1号土壙同様に黒褐色粘質土を呈している。上層には須恵器杯身の1個体が半分に分離した状態で出土した。この土器と1号土壙出土の土器は同一器形である。こ

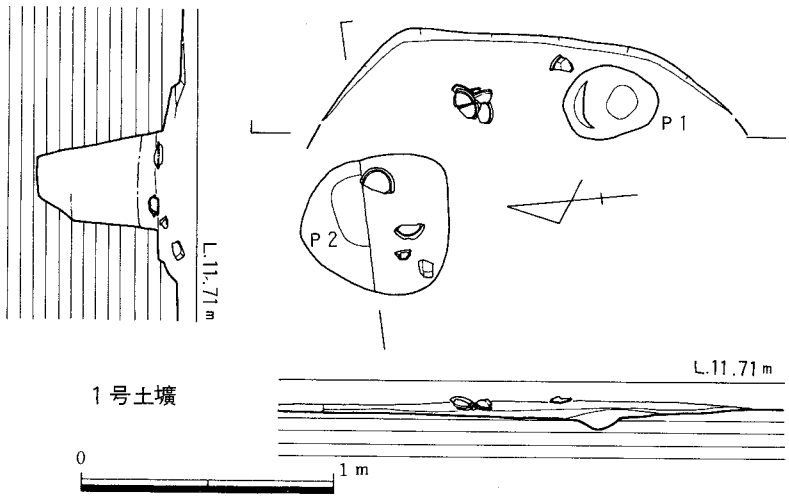
のPitが1号土壙に伴うことが充分に考えられる。壙内からはP2出土も含めて，須恵器杯蓋2個，杯身2個，土師器杯1個が出土した。いずれも接合可能で，本来，完全な形で存在したものだろう。P1は1号掘立柱建物を構成している。

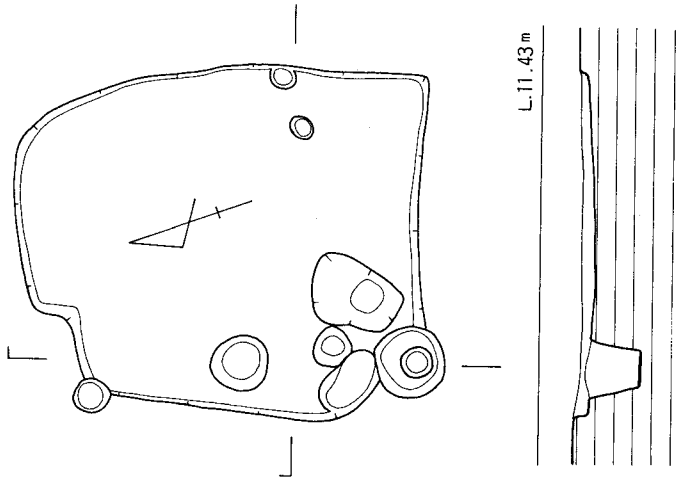
2号土壙（Fig7, PL5）

この土壙も削平を受けて，遺存状態は悪い。覆土は暗褐色粘質土と黒褐色粘質土がブロック状に混合した土で締っていた。有田・小田部地区の住居跡の調査では床貼付のベットの状態に多く認められる土層である。長さ1.1m，幅0.94m，現存高14mを測る不整長方形を呈する。壙底は一定でなく皿状，もしくは凹凸を呈している。出土遺物は全て細片であった。柱穴は多く検出されたが，いずれも後出のものと考えられる。住居跡の床の一部が残存したものと考えられる。

3号土壙（Fig8, PL6）

削平を受けている。長さ165cm，幅125cmを測り，不整楕円形を呈する。底部は若干の凹凸があるが断面皿状を呈している。覆土は黒褐色粘質土であ





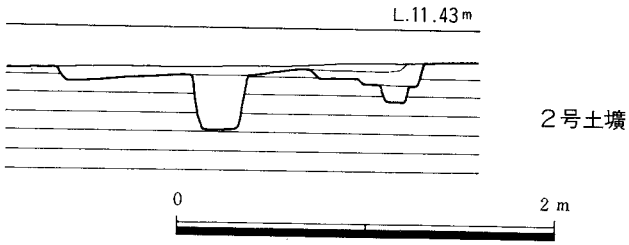


Fig. 7　1号・2号土壙（1/30，1/40）

る。出土遺物は古墳時代の甕形土器，高坏形土器である。

火葬墓（Fig.8, PL.6）

調査区の北東隅で検出した。壁は削平を受けている。現存長1.1m，最大幅62cm，深さ18cmを測り，隅丸長方形プランを呈している。底部は断面皿状を呈する。壙内には径10～20cmの礫，板石が２～３重に積み込まれており，いずれも火を受けて黒変している。用いられた石材は花崗岩の礫が一番多く，板石は粘板岩，玄武岩である。覆土は第Ⅰ層―暗茶褐色粘質土，第Ⅱ層―黒茶褐色粘質土（焼土塊，炭化物を多量に含む）である。第Ⅱ層の焼土の混入は著しく，この層内より木炭，骨粉を検出した。木炭は残りが良く，径２～３cmの枝木を利用したものである。周壁は２～３cmの厚さで真赤に焼けている。東壁，西壁の一部には焼土が拡がっており，加熱の強さを思わせる。火葬墓に共伴する遺物の出土は無いが，礫として利用されたものに甕棺の口縁部片がある。

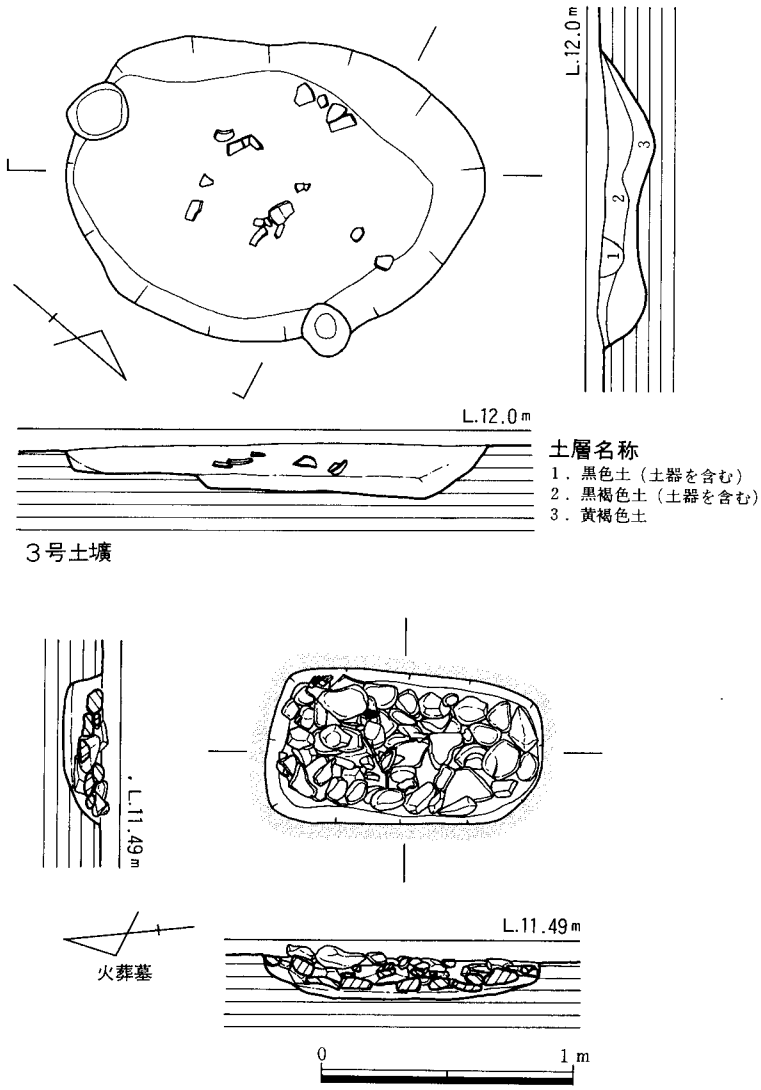


Fig.8　3号土壙・火葬墓（1/30）

溝状遺構

Ⅰ号溝（Fig.9，PL.10－3）

調査地の北側，境界地に検出したもので，東西方向に設けられる。幅は1～2mと一定ではなく，現存長は約20mを測る。深さは20cm以上を測り，断面はレンズ状を呈するが，底部は起伏があり，一定ではない。底は西側から東側へ傾斜し，約16mの地点で北側へ曲る。この地点では，南側から浅く傾斜する溝状遺構が接続し，溝が南北の2つに分岐した状態を示している。この溝状遺構は中世にみられるような地割を行なった可能性が高く，溝底の起状からして自然排水をも兼ねていたものと考えられる。覆土は暗茶褐色粘質土である。遺物は古墳時代の高坏や白磁碗，須恵質土器，瓦質土器，備前焼，滑石製品片，土錘などが出土している。

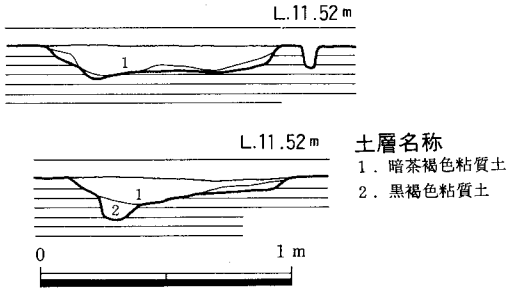


Fig.9　溝土層断面図（1/30）

掘立柱建物（Fig.10）

調査地の北半部分では数多くの柱穴が検出され，これらが掘立柱建物，或いは住居跡等の主柱となることが予想された為，建物の検出に努めた。南半分は柱穴が非常に少なく，又，柱穴の深さも北半に比べて浅いことから，本来北半分に比べて一段高い整地面に立地していた為に，後世の削平によって柱穴が消失したものと推定される。検出した掘立柱建物は北半部分で24棟，南半部分で6棟の計30棟である。

1号掘立柱建物（Fig.11，PL.7－1）

梁行2間×桁行2間の総柱の掘立柱建物である。主軸方位はN57°Eに置き，柱間平均は梁間6尺，桁間平均5.5尺を測る。柱穴掘方径は40～60cmを，柱根径は15～20cmを測る。柱列が直線的に通るのは桁行だけで，梁行は歪である。

2号掘立柱建物（Fig.11，PL.7－2）

梁行2間×桁行2間の総柱の掘立柱建物である。主軸方位はN61°Wに置き，柱間の平均は梁間7尺，桁間7尺を測る。掘方径は30～40cmで，柱根径は15cm前後を測る。

3号掘立柱建物（Fig.11，PL.7－3）

梁行2間×桁行2間の総柱の掘立柱建物である。主軸方位はN46°Wに置き，柱間の平均は梁間6.5尺，桁間7尺を測る。掘方径は35～50cmを，柱根径は15～25cmを測る。

4号掘立柱建物（Fig.11，PL.8－1）

梁行2間×桁行2間の総柱の掘立柱建物で，北側梁行には束柱が存在し，庇が付設される。主軸方位をN49°Eに置き，柱間平均は梁間6尺，桁間5尺，庇の間隔は3尺である。掘方径は40～50cmを，柱根径は20cm前後を測る。

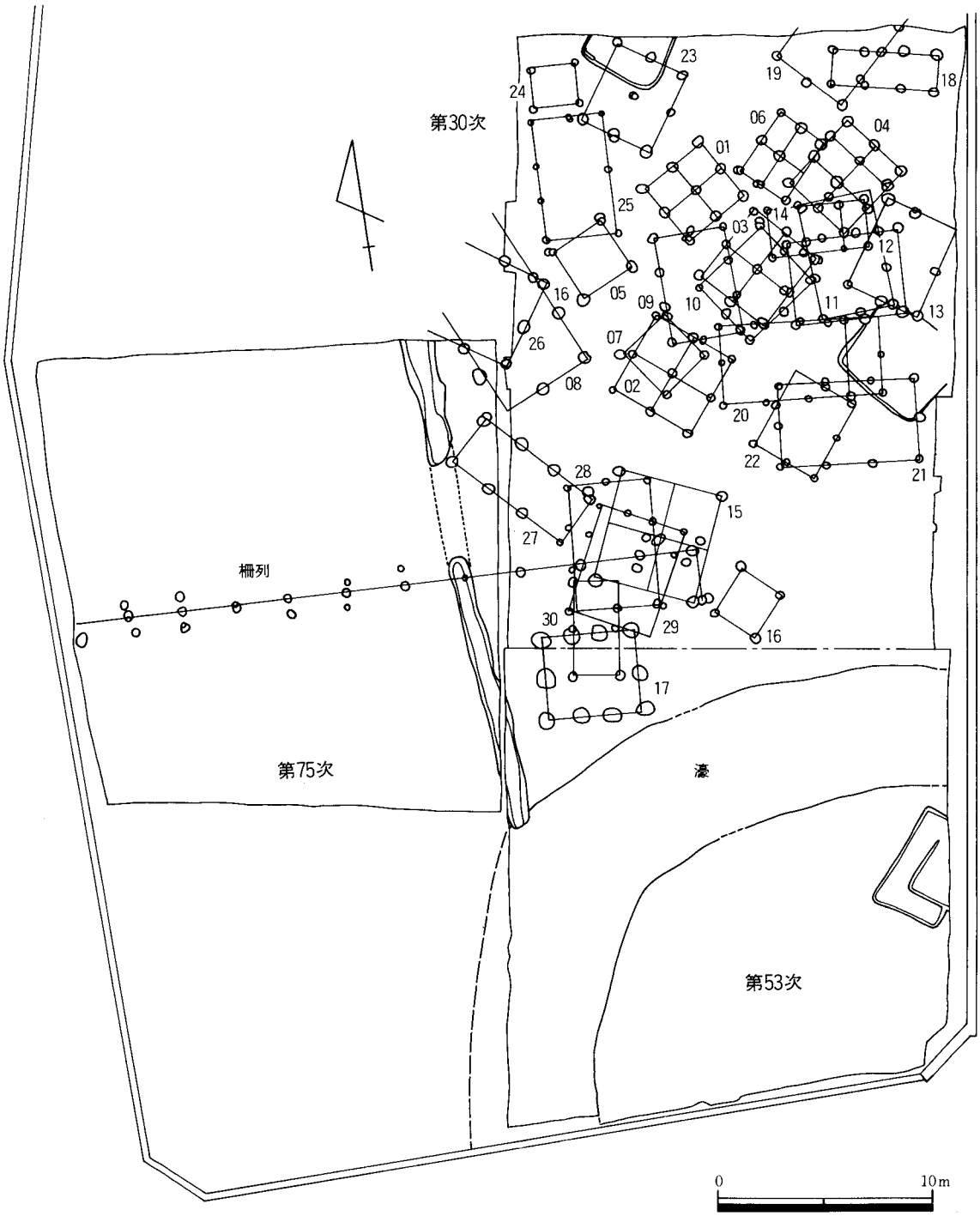


Fig.10　第30次掘立柱建物配置図（1/300）

5号掘立柱建物（Fig.11, PL.8－2）

梁行1間×桁行1間の掘立柱建物である。主軸方位をN27°Wに置き，柱間の平均は梁間9尺，桁間9尺を測る。掘方径は40～50cmを，柱根径は20cm前後を測る。

6号掘立柱建物（Fig.12, PL.8－3）

梁行2間×桁行2間の掘立柱建物である。総柱の掘立柱建物と考えられる。東側側柱の中間の柱穴を確認することができなかった。主軸方位はN47°30′Eに置き，梁間平均4.3尺，桁間平均5.6尺を測る。掘方径は30～40cmを，柱根径は15～20cmを測る。

7号掘立柱建物（Fig.12, PL.8－4）

梁間1間×桁行1間の掘立柱建物である。主軸方位はN41°Wに置き，柱間は梁間9尺，桁間9尺を測る。掘方径は30～50cmを測る。

8号掘立柱建物（Fig.12, PL.9－1）

調査地西側の境界地に於いて検出されたもので第75次調査にまたがる。梁行2間×桁行2間＋αの規模の掘立柱建物である。主軸方位をN64°30′Eに置き，梁間平均6.3尺，桁間平均6.5尺を測る。柱穴掘方径は50cm前後を，柱根径は約20cmを測る。

9号掘立柱建物（Fig.12, PL.9－2）

梁行2間×桁行3間の規模で，側柱だけの掘立柱建物である。主軸方位をN2°Wに置き，梁間平均5.5尺，桁間平均5.8mを測る。柱穴径は35～50cmを，柱根径は10～15cmを測る。11号掘立柱穴掘方径は50cm前後を，柱根径は約20cmを測る。

10号掘立柱建物（Fig.12, PL.9－3）

梁行2間×桁行2間の規模で，側柱だけの掘立柱建物である。主軸方位をN52°Eに置き，梁間平均6尺，桁間平均7尺を測る。総柱の建物の可能性もあったが，束柱を検出し得なかった。柱穴径は40～50cmを，柱根径は15～20cmを測る。11号掘立柱建物とほとんど重複している。

11号掘立柱建物（Fig.13, PL.9－4）

梁行2間×桁行3間の規模で，側柱だけの掘立柱建物である。主軸方位をN4°30′Wに置き，柱間は梁間6尺，桁間6.2mを測る。梁行の間柱は南側へ寄っている。掘方径は35～50cm，深さ38～56cm，柱根径16～20cmを測る。

12号掘立柱建物（Fig.13）

梁行2間×桁行3間の掘立柱建物である。主軸方位を磁北方向に置き，梁間平均5.5尺，桁間平均6尺を測る。掘方径は40～50cm，深さ35～45cm，柱根径15～20cmを測る。東側の梁行の間柱は検出できなかった。

13号掘立柱建物（Fig.13）

東側の道路によって一部を削平されている。梁行2間×桁行2間の規模で，総柱の掘立柱建物である。主軸方位をN31°Eに置き，柱間は梁間平均6尺，桁間平均7.5尺を測る。西側桁行は6尺，

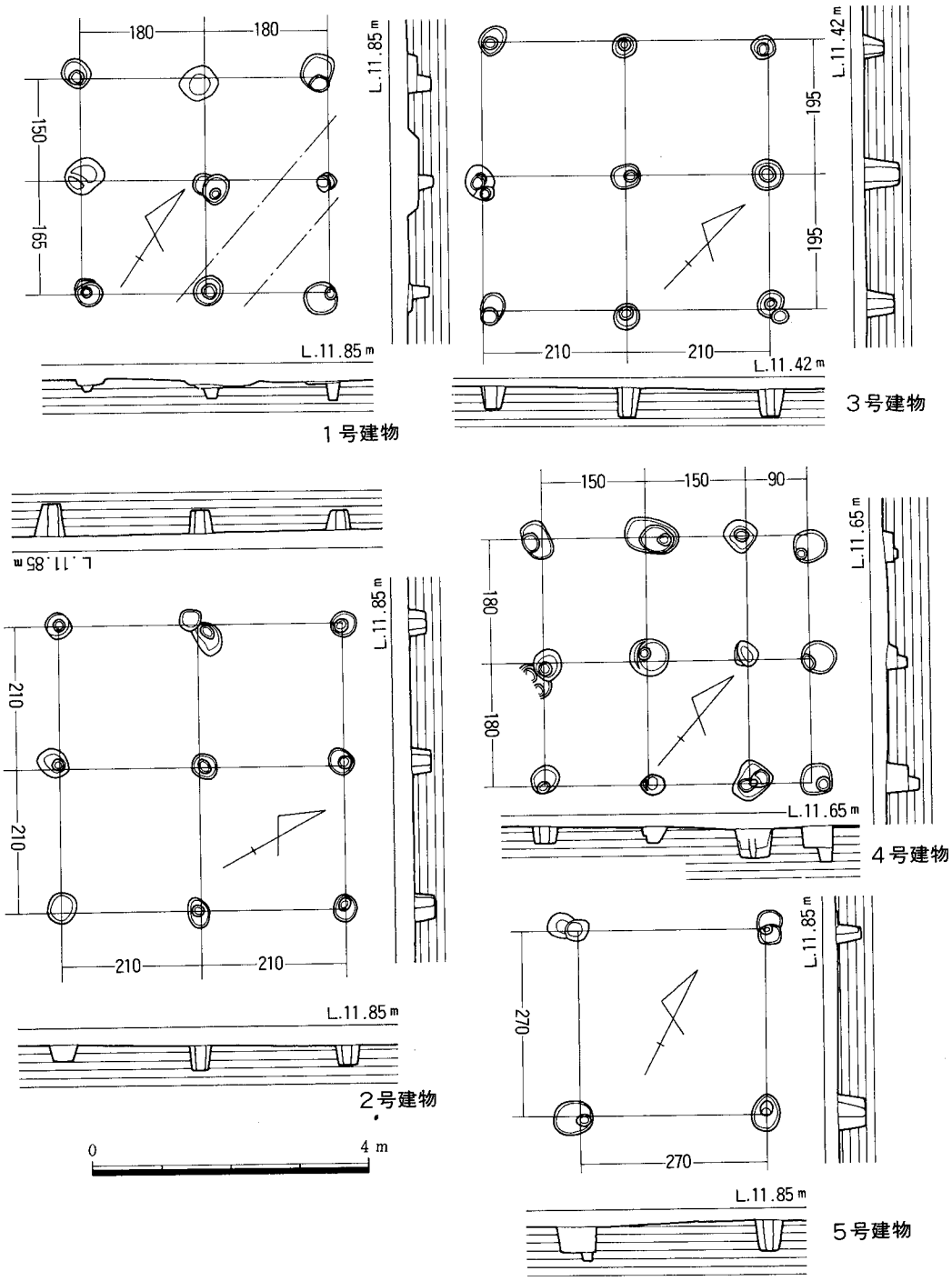


Fig.11　1～5号掘立柱建物（1/100）

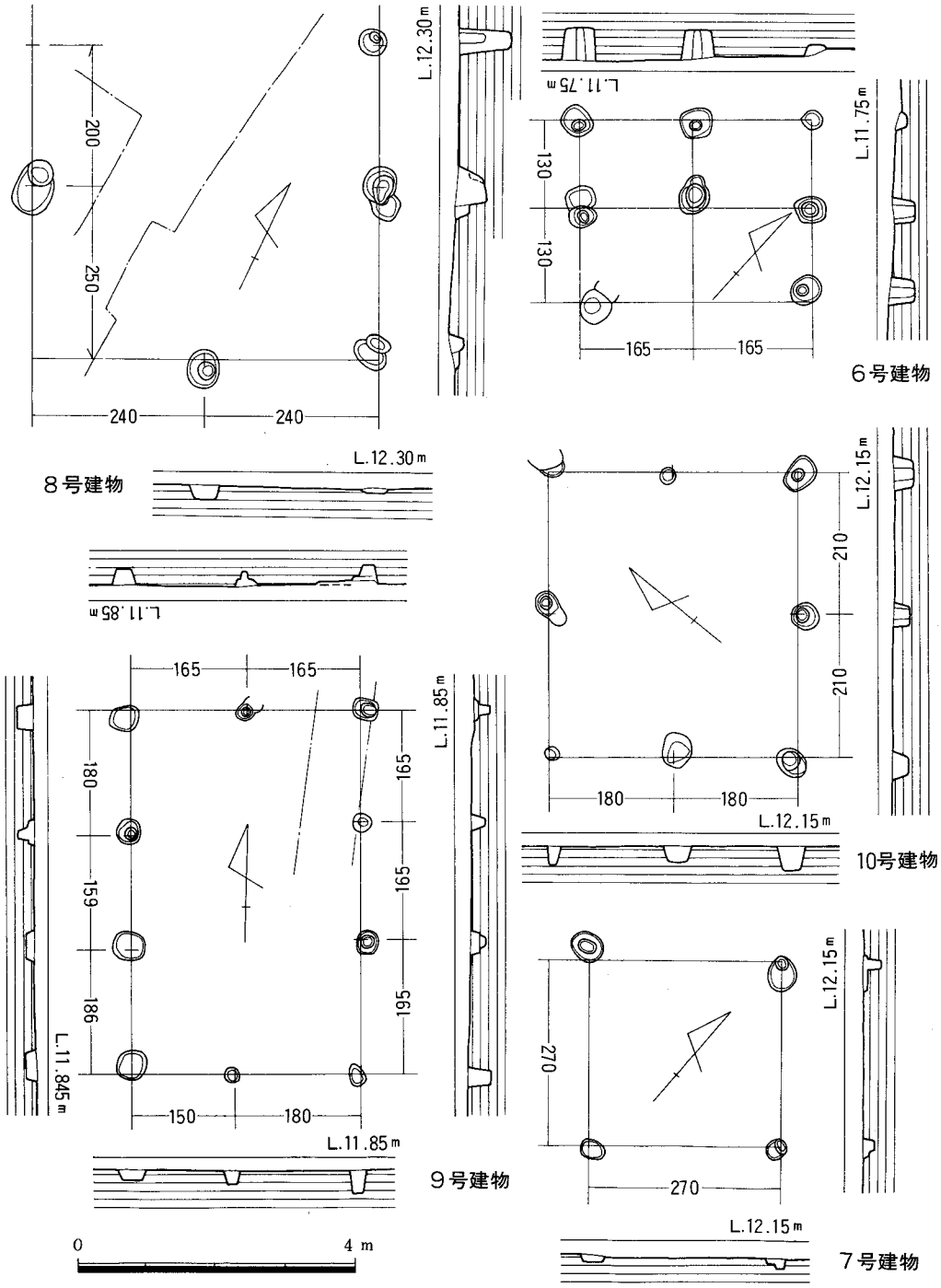


Fig.12　6～10号掘立柱建物（1/100）

9尺の間隔で，間柱が北側へ寄っている。掘方径は40～55cm，深さ18～60cm，柱根径18～20cmを測る。

14号掘立柱建物（Fig.13）

梁行1間×桁行3間の規模で，側柱だけの掘立柱建物である。主軸方位を真東に置き，柱間は梁間平均7.6尺，桁間平均5.2尺を測る。桁行の東側1間分の間隔は4尺を測り，他の柱間に比べ狭いところから，この部分に庇が存在したことが考えられる。掘方径24～50cm，深さ16～40cm，柱根径16～20cmを測る。

15号掘立柱建物（Fig.13，PL.10－1）

主軸方位をN19°10′Eに置いた梁行1間×桁行1間の掘立柱建物である。梁間16尺，桁間17尺を測る。柱穴径は45～50cm，深さ10～18cm，柱根径は15～20cmを測る。柱間が広いが中間柱が削平されてしまい，隅柱だけが残存した結果と考えられる。柱間の計測値から梁行2間×桁行2間の規模で，総柱の掘立柱建物が考えられよう。

16号掘立柱建物（Fig.14，PL.10－1）

梁行1間×桁行1間の掘立柱建物である。主軸方位をN50°30′Wに置き，柱間は梁間8尺,桁間8尺を測る。柱穴径は30～40cm，深さ40～50cmを測る。柱列は梁行，桁行共にほぼ通っている。

17号掘立柱建物（Fig.14，PL.10－2）

主軸を磁北方向に置いた梁行2間×桁行3間の規模で，側柱だけの掘立柱建物である。柱間は梁間平均5尺，桁間平均4尺を測る。掘方径は70～90cmを測る不整形，もしくは不整隅丸長方形を呈する。柱根径は30～35cm，深さ10～20cmを測る。覆土は黒褐色粘質土である。方位や建物規模は第29次，第55次調査で検出した掘立柱建物に近似している。

18号掘立柱建物（Fig.14）

梁行1間×桁行3間の規模で，側柱だけの掘立柱建物である。主軸方位をN81°30′Wに置き，梁間5.5尺，桁間平均5.5尺を測る。掘方径は35～70cm，深さ20～66cm，柱根径18～20cmを測る。

19号掘立柱建物（Fig. 14）

北側の境界地に位置し，梁行2間×桁行3間の規模を測る掘立柱建物である。主軸方位は掘方径38～40cm，深さ25～45cm，柱根径25cmを測る。覆土は黒褐色である。

20号掘立柱建物（Fig.15）

2号住居跡，2号土壙を切っている。東側に束柱をもっており，梁行2間，桁行3間，庇1間を測る。主軸方位をN87°Wに置き，柱間は梁間6尺，桁間平均6.6尺，庇間は5尺を測る。掘方径は26～36cm，深さ8～20cm，柱根径18cmを測る。庇は西側梁行部分に付設する。

21号掘立柱建物（Fig.15）

梁行2間×桁行3間の規模を測る掘立柱建物である。主軸方位をN86°Wに置き，柱間は梁間6.5尺，桁間7尺を測る。掘方径20～35cm，深さ35～55cmを測る。20号掘立柱建物と切合うが

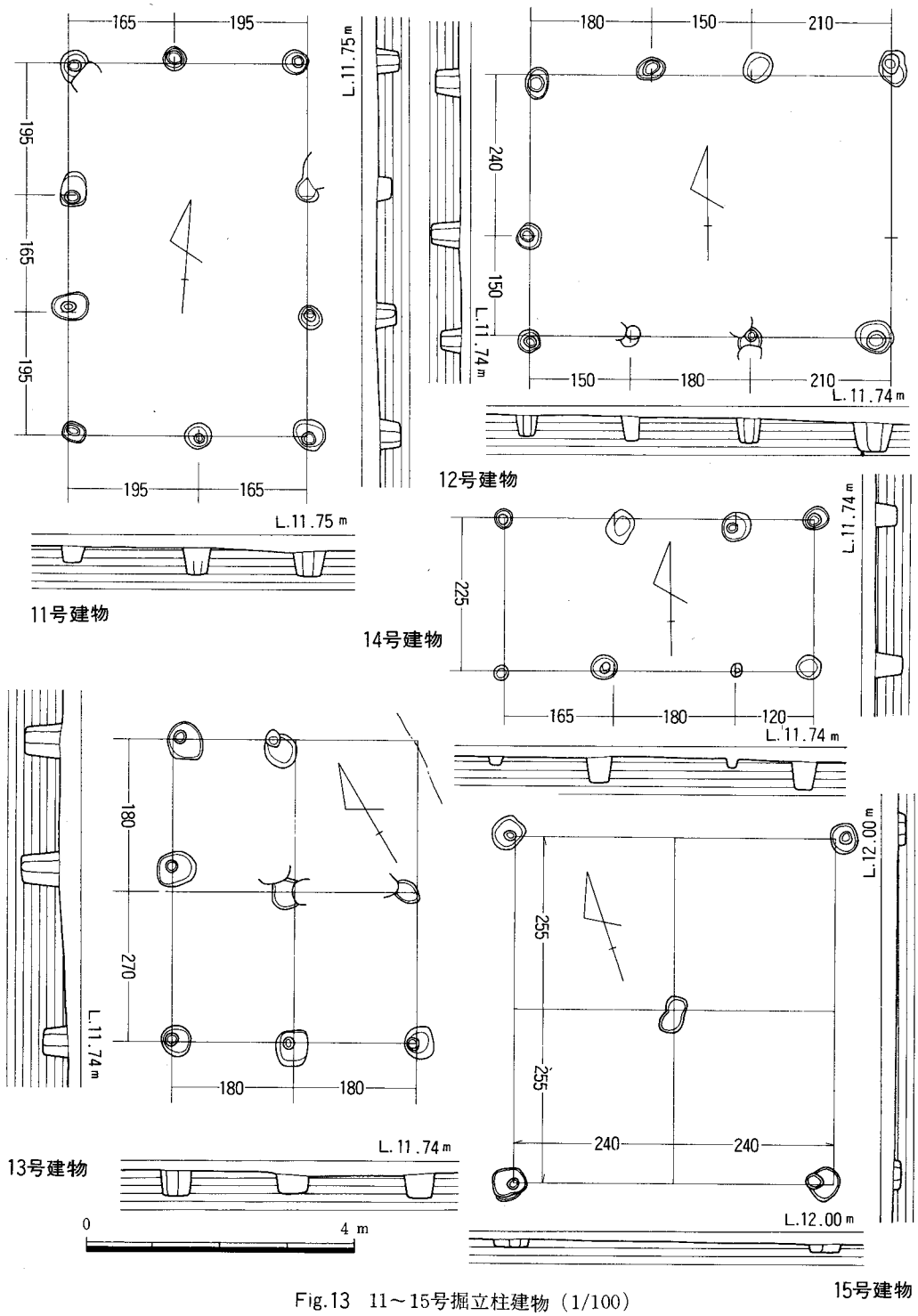


Fig.13　11～15号掘立柱建物（1/100）

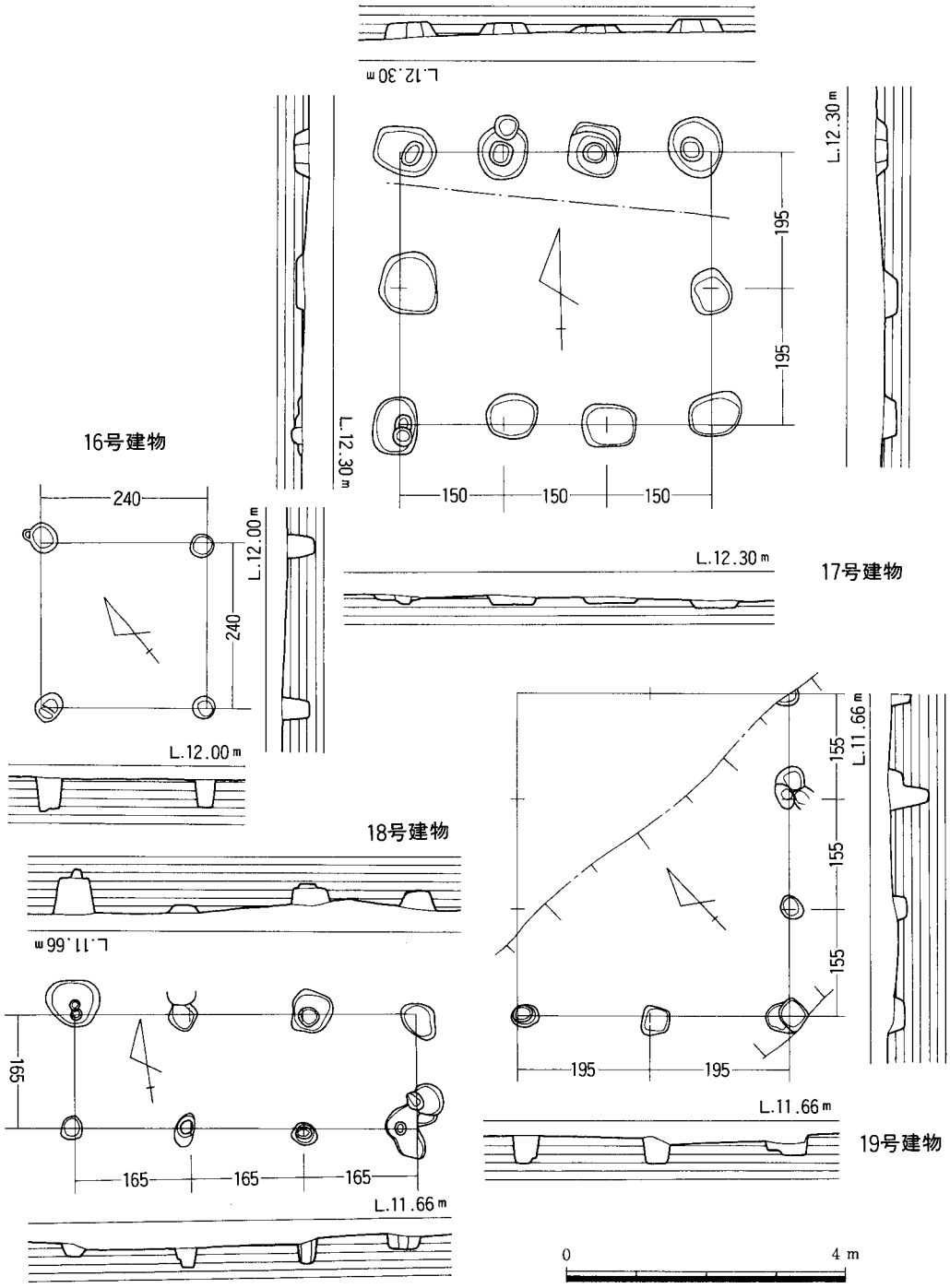


Fig.14　16～19号掘立柱建物（1/100）

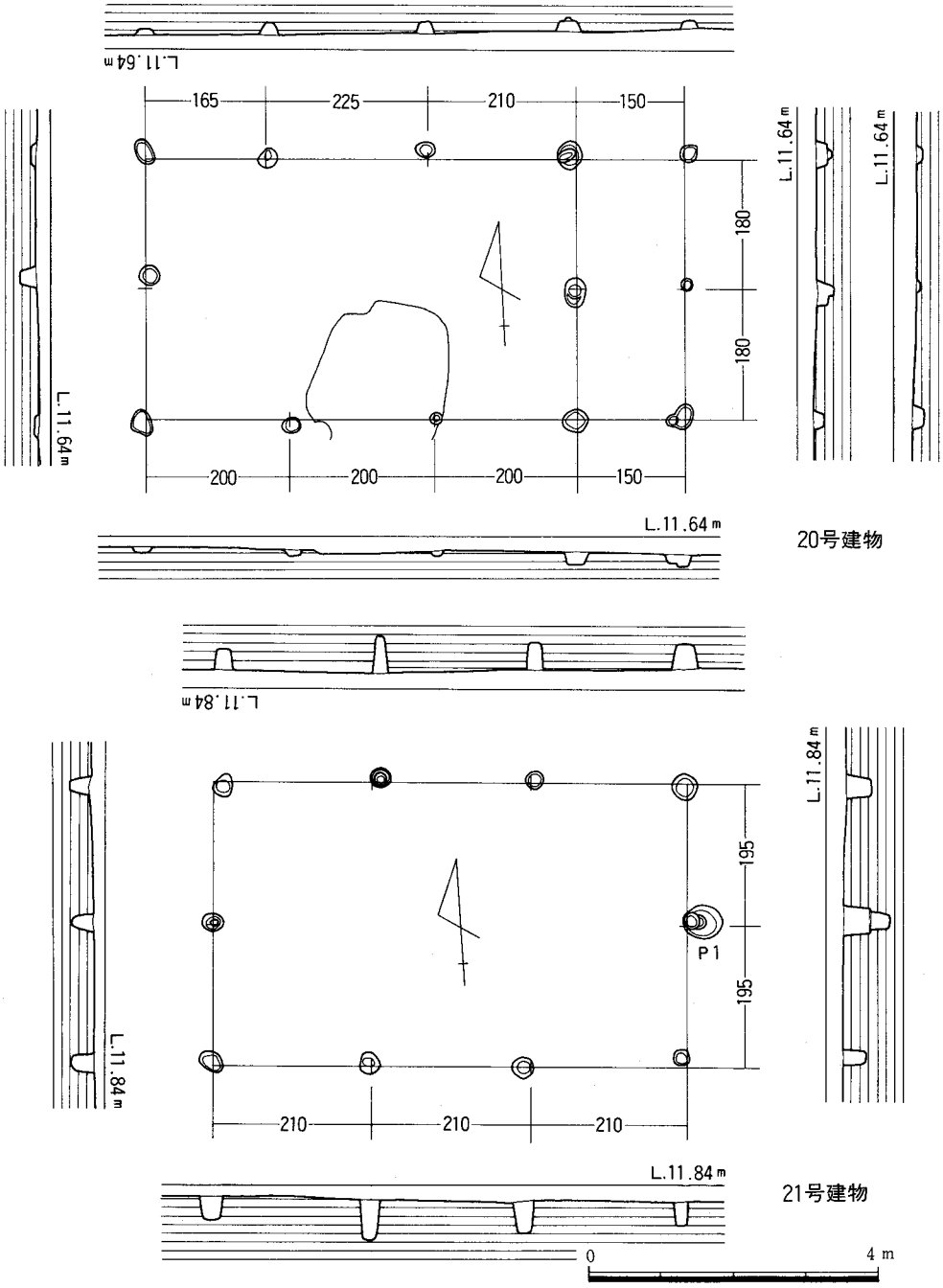


Fig.15　20，21号掘立柱建物（1/100）

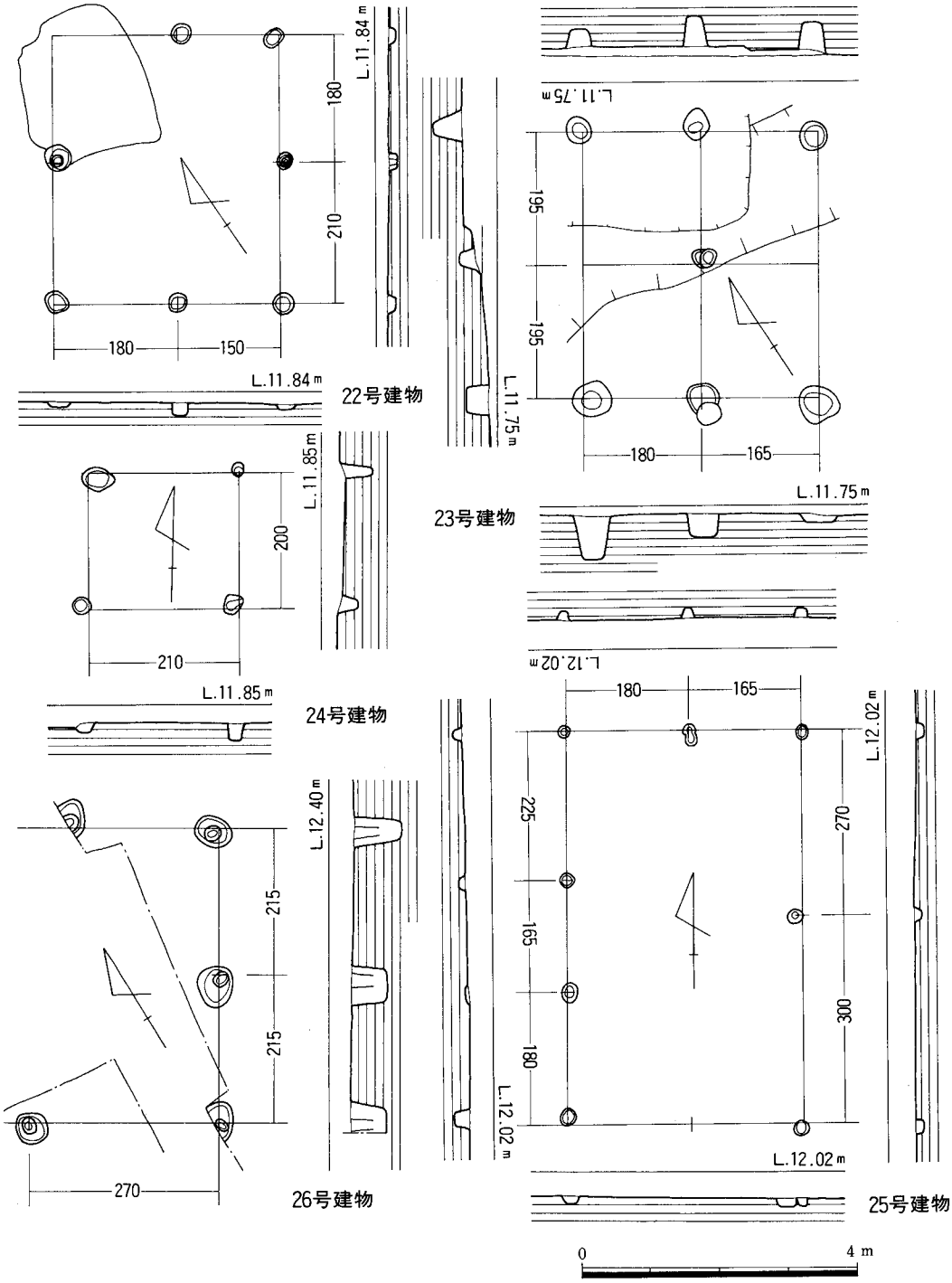


Fig.16　22～26号掘立柱建物（1/100）

主軸方位が一致しており建て替えによるものと思われる。P1からは糸切り底の土師皿が出土している。

22号掘立柱建物（Fig.16）

梁行２間×桁行２間の規模で，側柱だけの掘立柱建物である。主軸方位をN35°Eに置き，柱間は梁間5.5尺，桁間6.5尺を測る。掘方径28～40cm，深さ８～20cm，柱根径18cmを測る。梁行の間柱は東側に，桁行の間柱は北側に寄っている。

23号掘立柱建物（Fig.16）

１号住居跡より後出で，１号土壙と切合う。中央に束柱が存在するので，梁行２間，桁行２間の規模をもった総柱の掘立柱建物が考えられる。主軸方位をN33°Eに置き，柱間は梁間5.5尺，桁間6.5尺を測る。掘方径45～55cm，深さ26～70cmを測る。切合い関係から時期は４世紀後半～６世紀の間が考えられる。

24号掘立柱建物（Fig.16）

梁行１間×桁行１間の規模を測る掘立柱建物である。主軸方位はN88°Eに置き，柱間は梁間6.5尺，桁間７尺を測る。掘方径は28～38cm，深さ12～46cmを測る。25号掘立柱建物と同一方向に並置している。

25号掘立柱建物（Fig.16）

24号掘立柱建物の南方方向に並置しており，主軸方位をN1°Wに置く。梁行２間，桁行は東側２間，西側が３間を測る掘立柱建物である。柱間は梁間平均5.5尺，桁間は西側が6.3尺，東側が9.5尺を測る。掘方径18～30cm，深さ６～24cmを測る。

26号掘立柱建物（Fig.16）

第75次調査地との境界地に在る。梁行２間，桁行１間以上の規模を測る掘立柱建物と思われる。2間×2間の総柱の建物の可能性もある。主軸方位をN33°Eに置き，柱間は梁間7.2尺，桁間平均8.3尺を測る。掘方径38～50cm，深さ20～58cm，柱根径15～18cmを測る。

27号掘立柱建物（Fig.17）

第75次調査地との境界地に位置し，第75次調査にて全体の規模を確認し得た。梁行１間，桁行３間の掘立柱建物である。主軸方位をN45°Wに置き，柱間は梁間6.5尺，桁間6.2尺を測る。掘方径は40～50cm，深さ10～32cm，柱根径18～20cmを測る。東南の隅柱は３号土壙を切っている。

28号掘立柱建物（Fig.17）

梁行２間，桁行は東側で２間，西側で３間の規模をもち，側柱だけの掘立柱建物である。25号掘立柱建物と構造的に類似する。主軸方位をN2°Eに置き，柱間は梁間平均6.3尺，桁間平均は東側で9.8尺，西側で6.5尺を測る。掘方径は22～30cm，深さ８～35cmを測る。

29号掘立柱建物（Fig.17）

梁行３間×桁行３間の規模で，側柱だけの掘立柱建物である。主軸方向はN23°30′Eに置き，柱

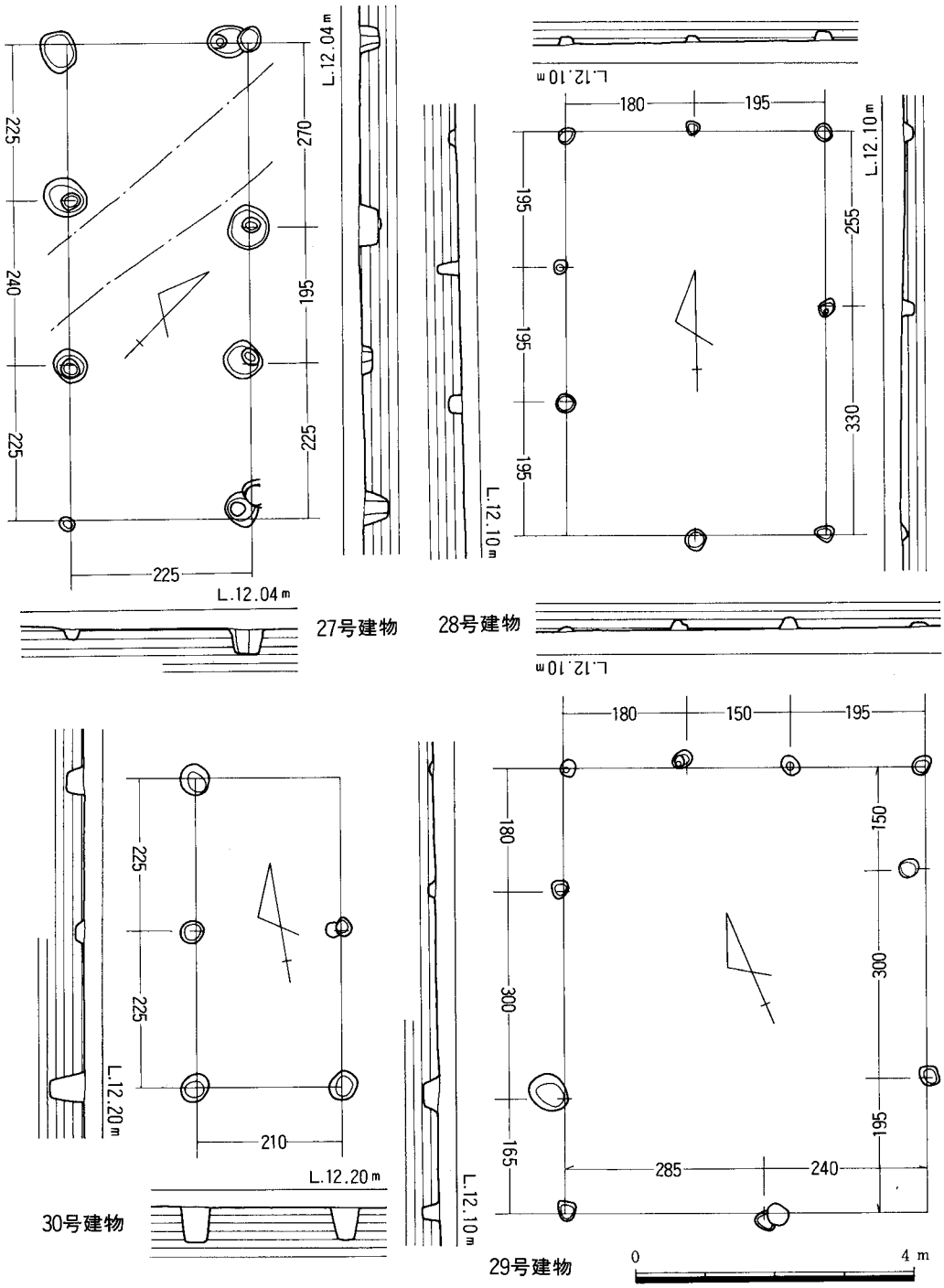


Fig.17 27～30号掘立柱建物（1/100）

tab. 2　第30次調査　掘立柱建物計測表

単位　cm

	規　模	方向	桁　行		梁　行		方　向	床面積(m²)	備　考
			実　長	柱間寸法(尺)	実　長	柱間寸法(尺)			
01	2×2	北西	360(12)	6・6	315(10.5)	5・5.5	N57°E	11.23	総柱
02	2×2	北西	420(14)	7・7	420(14)	7・7	N61°W	17.64	総柱
03	2×2	北東	420(14)	7・7	390(13)	6.5・6.5	N46°E	16.38	総柱
04	3×2	北東	390(13)	5・5・3	360(12)	6・6	N49°E	14.04	総柱，庇付
05	1×1	北西	270(9)	9	270(9)	9	N27°W	7.29	
06	2×2	北西	330(11)	5.5・5.5	260(8.6)	4.3・4.3	N47°30′E	8.58	総柱
07	1×1	北東	270(9)	9	270(9)	9	N41°W	7.29	
08	2×2	北西	480(16)	8・8	450(15)	8.3・6.6	N64°30′E	21.60	第75次へ続く
09	3×2	南北	525(17.5)	6.2・5.3・6 6.5・5.5・6.5	330(11)	5.5・5.5 5・6	N 2°W	17.33	
10	2×2	北東	420(14)	7・7	360(12)	6・6	N52°E	15.12	
11	3×2	南北	555(18.5)	6.5・5.5・6.5	360(12)	6.5・5.5 5.5・6.5	N 4°30′W	19.98	
12	3×2	東西	540(18)	6・5・7 5・6・7	390(13)	5・8	N	21.06	
13	2×2	北東	450(15)	6・9	360(12)	6・6	N31°E	16.20	総柱
14	3×1	東西	465(15.5)	5.5・6・4	225(7.5)	7.5	N90°W	10.46	
15	2×2	南東	510(17)	8.5・8.5	480(16)	8・8	N19°10′W	24.48	総柱
16	1×1	北西	240(8)	8	240(8)	8	N51°30′W	5.76	
17	3×2	東西	450(15)	5・5・5	390(13)	6.5・6.5	N	17.55	第53次へ続く
18	3×1	東西	495(16.5)	5.5・5.5・5.5	165(5.5)	5.5	N81°30′W	8.17	
19	3×2	北東	465(15.6)	5.2・5.2・5.2	390(13)	6.5・6.5	N44°E	18.14	
20	3×2	南北	600(20)	6.6・6.6・6.6 5.5・7.5・7	360(12)	6・6	N87°W	21.60	1間の庇
21	3×2	東西	630(21)	7・7・7	390(13)	6.5・6.5	N86°W	24.57	
22	2×2	北東	390(13)	6・7	330(11)	6・5	N35°E	12.87	
23	2×2	北東	390(13)	6.5・6.5	345(11.5)	5.5・6	N33°E	13.46	総柱
24	1×1	東西	210(7)	7	200(6.6)	6.6	N88°E	4.20	
25	3×2 2×2	南北	570(19)	10・9 6・5.5・7.5	345(11.5)	5.5・6	N 1°W	19.67	
26	1+α×2	北東	270+α	9	430(14.3)	7.2・7.2	N33°E	(11.61)	第75次へ続く
27	3×1	北西	690(23)	9・6.5・7.5 7.5・8・7.5	225(7.5)	7.5	N45°W	15.53	第75次へ続く
28	3×2 2×2	南北	585(19.5)	6.5・6.5・6.5 8.5・11	375(12.5)	6・6.5	N 2°E	21.94	
29	3×3 3×2	北東	645(21.5)	6・10・5.5 5・10・6.5	527(17.5)	8・9.5 6.5・5・6	N23°30′E	33.86	
30	2×1	南北	450(15)	7.5・7.5	210(7)	7	N 6°30′E	9.45	第53次へ続く
柵列	現存11	東西	2895(96.5)		225(7.5)	7.5	N89°30′E		柵列は第75次へ続く

間は梁間平均が4.7尺，桁間は4.5尺－8尺－4.5尺を測る。掘方径は18～46cm，深さ8～25cmを測る。

30号掘立柱建物（Fig.17）

第75次調査地との境界地に位置する。梁行1間，桁行2間の掘立柱建物である。主軸方位をN6°30′Eに置き，柱間は梁間7尺，桁間7.5尺を測る。北東の隅柱を欠いている。掘方径22～38cm，深さ12～40cmを測る。

出土遺物

1号住居跡出土遺物（Fig.18，PL，11）

玉　類

小玉（13）　滑石製の小玉で，側辺を算盤玉状に成形している。径5mm，厚さ2.5mm，孔径1.5mmを測る。

2号住居跡出土遺物（Fig.18，PL.12）

土師器

壺（1・9）　1は口径19cmを測り，二重口縁を有する。頸部の屈折は強く，口縁部内外面はヨコナデ調整を，胴部内面はヘラ削りを施す。胎土に砂粒を含み灰白色を呈する。焼成はやや弱い。9は小型で平底の壺形土器である。焼土，炭化物層内より出土。口径10.3cm，器高10.5cmを測る。頸部の立ち上りはやや外傾し，口縁部は外反する。口縁部内側に平担面を形成する。体部外面にはタテ方向のハケ目調整を施す。内面はナデ仕上げである。

甕（2）　床面より出土。口径16cmを測り，最大径が胴部中位にある。口縁部は外反し，端部下方を少しつまみ出している。内外面磨滅している。胎土に粗砂を含み，黄土色を呈する。外面に黒斑がある。焼成弱い。

高坏（3～6）　3～6は全て破片である。3，4は床面出土。3，4は色調，胎土から同一個体と考えられる。3の口径は22cm，坏部の現存高7.8cmを測り，体部に二重の段を有している。器面は磨滅しているが，ヨコナデ調整が施されている。1段目と2段目の間にはタテ方向のハケ目痕が認められる。4の脚部径は18cmを測り，脚裾部は低く，大きく開いている。脚端部はやや丸味をもつ。脚の屈折部分に径1cmを測る孔を数ヶ所設ける。外面には細かいハケ目調整を施す。3，4は胎土に細かい砂を含み，黄褐色を呈する。焼成は弱い。5は口径23cmを測る。底部と体部の間に段をもつもので口縁は大きく外反する。端部は丸味をもつ。内外面はヨコナデ調整が施される。胎土に砂粒を少し含み，暗赤褐色を呈する。焼成は良好。6は口径20cmを測る。体部に二重の段を有する器形である。3に比べ口縁部は短く，外反も弱い。内外面ヨコナデ仕上げである。胎土に粗砂を含み，黄褐色を呈する。焼成は不良である。

坏（7）　床面直上より出土。口径16cm，復原高41.6cmを測る。口縁部は緩く外反し，端部は丸味をもつ。内外面磨滅している。胎土に砂粒を少し含み，黄褐色を呈する。焼成は弱い。

手づくね土器（10）　底径7.6cmを測る。緩い丸底である。内面には指圧整形痕を残している。胎土に粗砂を多く含み，外面は暗赤褐色，内面は暗黄褐色を呈する。焼成は良好である。

鉢（12）　覆土中より出土。小型の鉢，或いは蓋形土器と考えられる。底径38cmを測る。内外面に指圧痕残る。胎土に砂粒を含み暗茶褐色を呈する。焼成は良好。

器台（8）　口径10cmを測る。体部下半に段を有し，立ち上りは緩く外反し，端部は内弯気味である。器台形土器としては径が小さく，口縁が大きく外反しないことから他の器形が考え

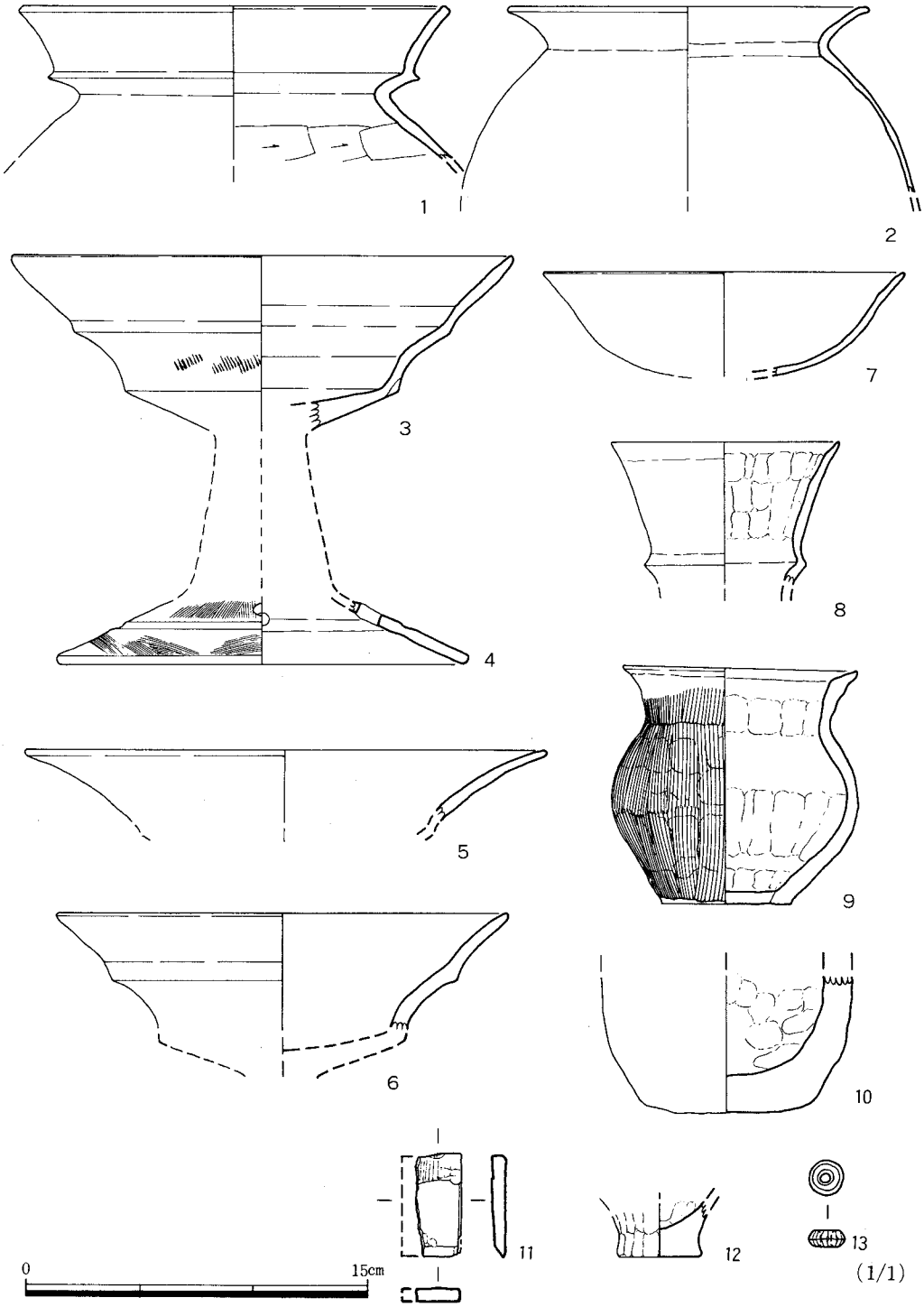


Fig.18　1号住居跡出土遺物　(1/3)

られるかもしれない。内外面磨滅しているが，内面には指圧痕が認められる。黄褐色を呈し，焼成は弱い。

石器

扁平片刃石斧（11）　左側辺を破損している。長さ4.5cm，現存幅2.0cm，刃部幅0.5cmを測る。刃部は裏面からも若干研ぎ出している。石材は頁岩である。

1号土壙出土遺物（Fig.19，PL.11）

須恵器

坏蓋（14，15）　いずれも口径は12cm，器高4.5cmを測る。天井部は丸味をもち，器高のほぼ半分の長さの直立した体部をもつ。天井部と体部の境は明瞭で有段をなして境としている。1は特に段が張り出し，その下を沈線状にめぐらす。1の端部は肥厚している。口縁端部はつまみ出して作り，内側は明瞭な段をなしている。暗い灰青色を呈する。ヘラ削りは天井部の$\frac{3}{4}$ほどに施される。削り方向は時計回りである。

坏身（16，17）　16は口径10.5cm，器高5.3cm，17は口径10.8cm，器高5.2cmを測る。器高の深い坏身である。天井部は丸味を持ち，立ち上りは内傾して直立する。16の立上りは1.6cm，17の立上りは2.0cmを測る。口縁端部はやや肥厚し，端部をつまみ出す為，内側に明瞭な段を有している。ヘラ削りは天井部の$\frac{1}{3}$～$\frac{1}{2}$迄施される。削りの方向は時計回りである。17の天井部外面にはヘラ記号が施される。色調はやや暗い灰青色を呈している。

土師器

坏（18）　口径9cm，器高7cmを測る。体部は球形を呈し，口縁部は小さく直口し，端部は尖り気味である。黄褐色を呈し，胎土に砂粒を含む。内外面ヨコナデ調整が施される。

3号土壙出土遺物（Fig.19，PL.12）

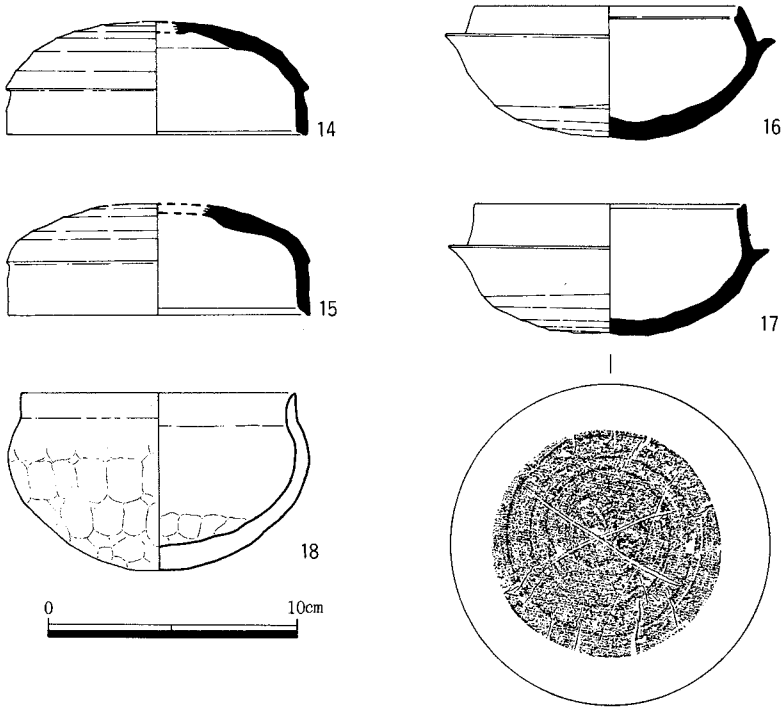
土師器

甕（19，20）　19，20共に胴部の破片である。19は頸部径15cmを測り，胴部にタテ方向の叩きを施している。20は頸部径19cmを測り，ヨコ方向の荒い叩きを施している。胎土に粗砂を含み暗い黄土色を呈する。焼成は19が良好である。

高坏（22）　脚径13.8cmを測る。脚は大きく開き，裾部は低く長い。内面はヨコ方向にケズリ調整を施す。外面と裾部分の内面はヨコナデを施す。胎土は精選しており，色調は褐色を呈している。

手づくね土器（21）　口径5.6cmを測り，胴部は丸味を持つ。内外面に成形時の指圧痕を残しているが，口縁端部と外面は丁寧なナデ仕上げが施される。胎土に砂粒を含み，外面は赤褐色，内面は黄褐色を呈している。焼成は良好である。

1 号 土 壙



3 号 土 壙

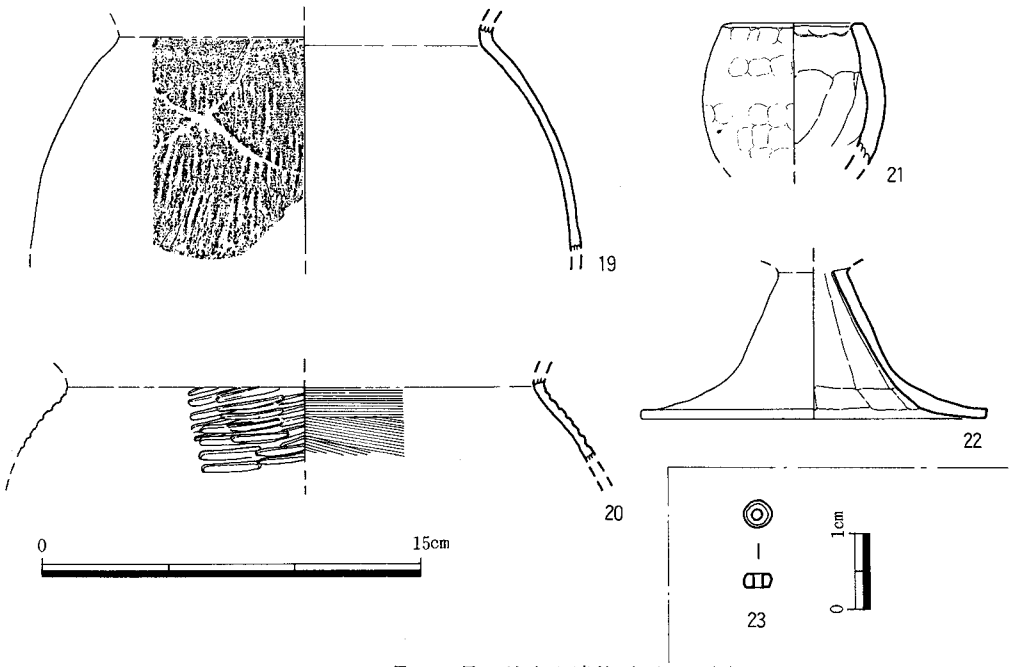


Fig.19 1号, 3号土壙出土遺物 (1/3, 1/1)

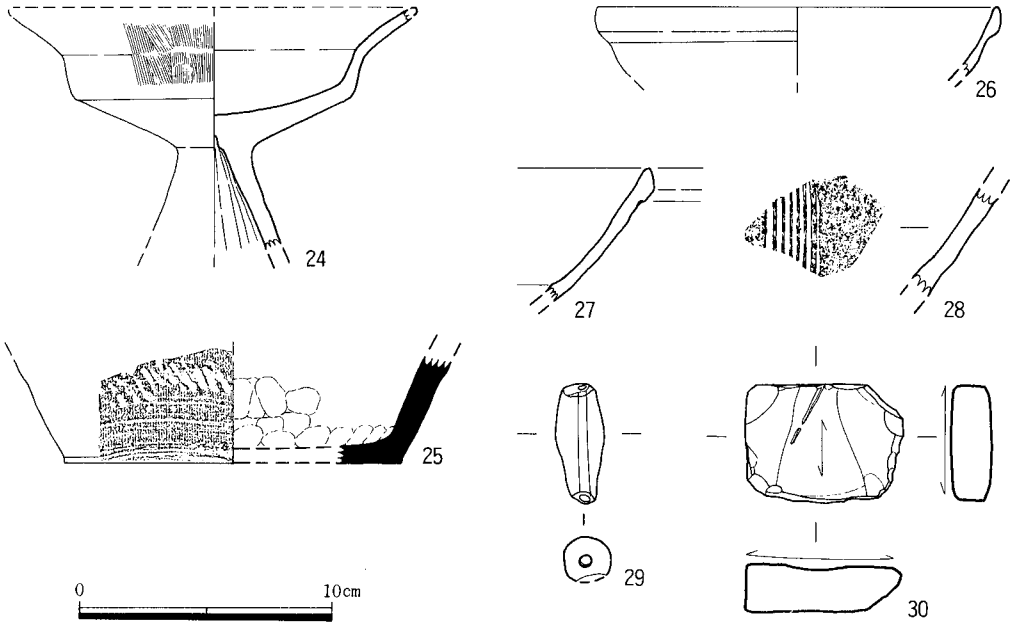


Fig.20 溝出土遺物 (1/3)

玉類

小玉（23） 滑石製の小玉である。径４㎜，厚さ２㎜，孔径1.5㎜を測る。

Ｉ号溝出土遺物（Fig.20, PL.11）

土師器

高坏（24） 復元口径16cmを測る。体部と底部の境に段を有し，口縁部は内面に稜をもって外反する。脚はやや開く器形である。体部にはタテ方向のハケ目が施される。脚内面にはしぼり痕が認められる。内外面磨滅している。胎土は精選されており，淡褐色を呈している。

須恵器

広口壺（25） 底径13.5cmを測り，体部は外反し，直線的に立上る。体部には格子目叩きがナナメに施され，底部周辺の２～３cm幅にヘラによるヨコナデが施される。又，外底面は同心円の叩きが施されている。内面はナデ調整である。胎土に粗砂を含み青灰色を呈する。焼成は良好である。

白磁

碗（26，27） 玉縁の碗である。26は口径16cmを測る。27に比べ玉縁は肥厚しない。器肉も薄手である。胎土，釉色は灰白色を呈する。27はやや厚目に釉が施されるが，外面の下半は露胎である。内外に粗い貫入がある。玉縁は稜をもつ。見込みには沈線による圏線が施される。胎土は灰白色を，釉は灰色を呈する。

陶器

摺鉢（28）　内外面茶褐色を呈しており，ヨコナデ調整が施される。内面には幅2～3㎜の7本単位の条線が施される。胎土には細かい砂粒を多く含んでいる。焼成は良好である。

瓦質土器

摺鉢　　内面に幅2㎜で6本単位の条線が施される。胎土に少量の砂を含み，黄白色を呈する。

土錘（29）　長さ4.8cm，最大幅1.9cm，口径4㎜を測る。胎土は精選されている。黄褐色を呈し，焼成良好。

石器

砥石（30）　頁岩質で，長さ4cmを測る。上面のみ研磨を施し，細かい面取りは施していない。剝片を利用している。B面の弧形部分には部分的に打撃がみられるので，刃部を形成途中とも考える。

滑石製品

破片のため図示しなかった。石鍋片の他，再利用品が2点ある。再利用品は部分的に面取りを行ない，一部に穿孔をもつものもある。

火葬墓出土遺物（Fig.23－60）

弥生式土器

甕（60）　壙底の礫に転用された甕棺の口縁部である。口縁部の内側に断面三角形の粘土を貼付けて上面を平坦に作り，逆L字形の口縁部を形成している。口縁部の下に断面〝コの字形〟の突帯を貼付けている。頸部がすぼまり，最大径が胴部にある器形であろう。

Pit，及び表土出土遺物（Fig.22，23，PL.11，12）

出土地点は56が1号建物，59が5号建物，45が6号建物，52，53，61が21号建物，41が23号建物，47が26号建物，57が29号建物，40が30号建物，49，62は円形住居状遺構，50，51は27号建物である。

弥生式土器

甕（31～34，36～38）　口径は31が30.4cm，32は31.2cm，33は31.4cm，34は28.2cm，35は22cmを測る。いずれも口縁が〝逆L字形〟を呈す。34は他の土器に比べて小形である。31，32，35は口縁下に断面三角形の突帯を一条巡らしている。胴が張る器形で，33，34も属すると考えられる。いずれも内外磨滅しているが，35の胴部にはタテ方向のハケ目が施される。37は口径2.5cmを測る。口縁部内面に粘土を貼付けて平坦部を幅広く作ったもので，胴部は大きく張り，最大径が胴部にある。外面，及び内面の口縁端部迄丹塗りが施されている。38は口径25cmを測

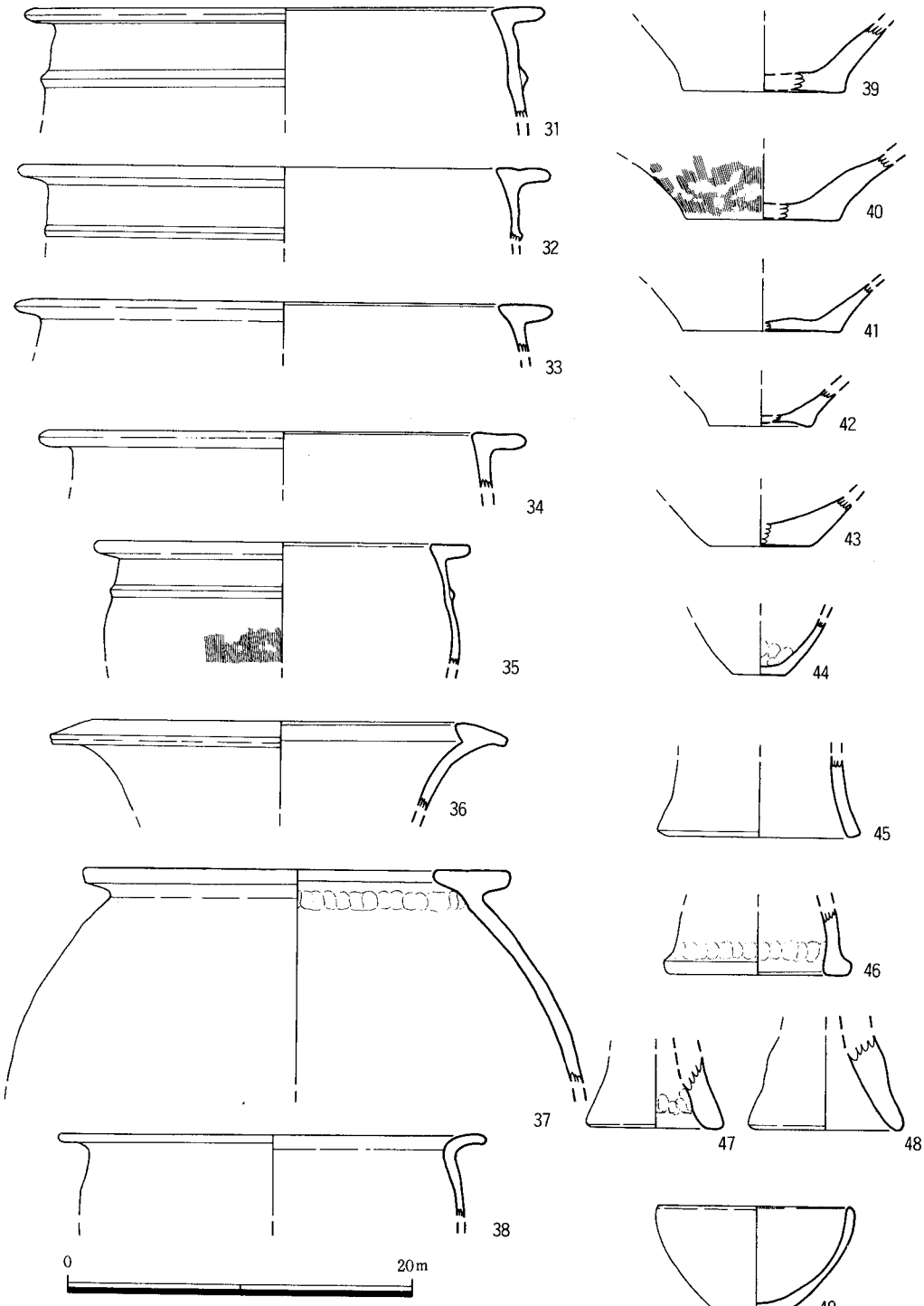


Fig.21　Pit出土遺物　(1/4)

る。〝くの字形〟口縁を呈し，頸部内面の稜は弱い。39, 40, 41, 43は底部である。16は底径9.5cmを測り，やや上げ底である。40は底径9cm，41は底径9.2cmを測る。いずれもやや上げ底を呈し，立上りは外傾化が強い。41の外面にはタテ方向のハケ目が施される。40，41は壺形土器の底部の可能性がある。43は底径6cmを測り，やや丸底を呈している。弥生時代後期末に比定できる。

壺（36，42）　36は口径26.6cmを測る広口の壺の口縁である。断面〝鋤形〟を呈した口縁を有する。口縁端部内面に粘土を貼付けて上面を平坦にしている。内外面磨滅している。42は底部である。底径6cmを測り，上げ底で，立上りは底径に比して大きく外傾する。

鉢（44，49）　44は口径が小さく，小形の鉢で，底径3cmを測る。内外面に丹塗りを施している。底部周辺には指圧痕が残る。49は口径11.5cm，器高6.3cmを測る。体部は丸味をもち，端部はやや内反する。磨滅しているが内外面はナデ調整である。

器台（45，46）　45は口径12cmを測る薄手の作りで，端部を平坦にしている。内外面は磨滅している。46は口径11cmを測り，端部外面に粘土を貼付けて下面を平坦に作っている。口縁部周辺に指圧痕が残る。

支脚（47，48）　47は口径8cm，48は口径9cmを測り，器肉が厚い作りである。内外に指圧痕が残っている。

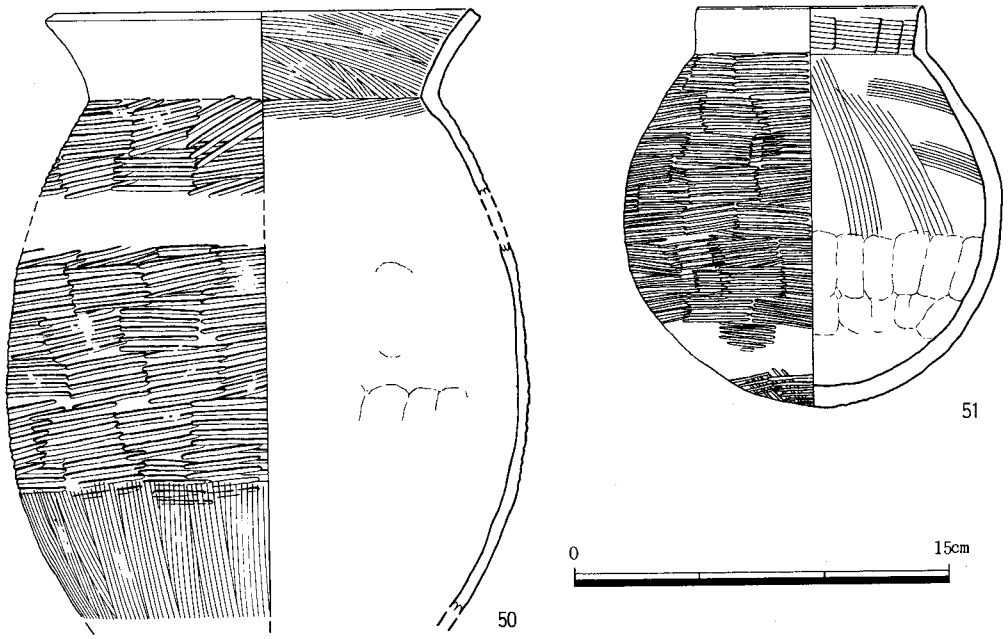


Fig.22　Pit出土遺物（1/3）

須恵器 (Fig.23)

甕 (56)　胴部の破片である。外面には平行叩きを施している。内面はナデ調整である。内外面に自然灰釉がかかり，淡緑灰色を呈する。

土師器

甕 (50)　口径19.2cm，現存高24cmを測る。胴部は長胴形を呈し，中位に最大径を有している。口縁は外反し，端部を平坦に仕上げている。外面は頸部から胴部下位迄，ヨコ方向の叩きを

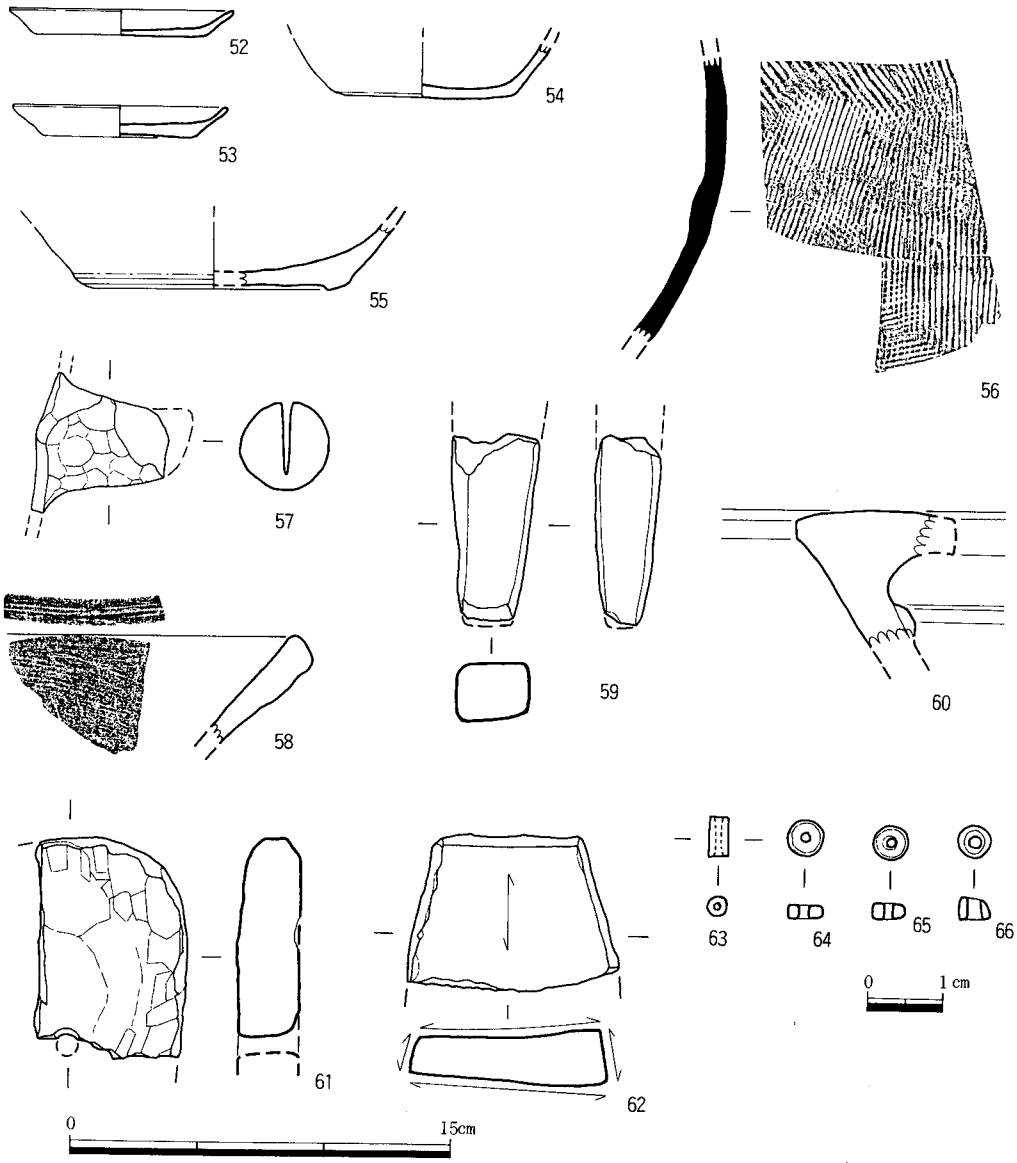


Fig.23　Pit出土遺物 (1/3, 1/1)

施す。叩きは5～6本単位で，長さは約3cm以上である。胴部下位は下から上方向にナデを施す。口縁部外面はヨコナデ調整し，内面は細かいヨコ，ナナメのハケ調整である。黄褐色を呈している。

壺（51）　50と共伴する。50の甕と重なった状態で出土した。口径9cm，器高16cmを測る。口縁は直口し，叩きの長さ3cm以上を測る。叩きの原体は甕形土器と相違する。胴部はやや卵形を呈する。底部は尖り気味である。外面には頸部から底部まで平行叩きを施すが胴部下半の3～4cm幅をナデ消している。外底部は丁寧に何度も叩きを施している。口縁部外面はヨコナデを，内面にはヨコハケ調整を施す。胴部内面はナデ仕上げだが，部分的にナナメ方向のハケ目を施す。色調は黄褐色を呈する。

甑（57）　甑形土器の把手である。57は幅4cm，厚さ2.8cmを測り，断面は扁平な楕円形を呈する。上面に幅4mm，深さ2.7cm，長さ2.5cm以上を測る溝をタテ方向に切り込んでいる。

坏（54）　底径7cmを測る。ヘラ切り底で，ナデ調整を丁寧に施している。

皿（52，53）　いずれもP－26より出土。糸切り底である。52は口径9cm，器高1cmを測る。53は口径8.8cm，器高1cmを測る。53の底部の器壁は厚い。

青磁

碗（55）　底径11cmを測る。内底見込みと高台畳付に目跡が残っている。釉は薄く，外底部迄施されるが畳付はカキ取られる。胎土は灰青色を，釉は暗い緑灰色を呈する。越州窯系である。

土師質土器

五徳（59）　現存長7.5cm，幅2～3.5cm，最大厚2.5cmを測り，断面長方形を呈する。色調は灰白色を呈している。

瓦質土器

捏鉢（58）　口縁端部は肥厚し，丸味を帯びる。内面と端部にヨコ方向のハケ目を施す。外面には指圧成形痕とタテ方向のハケ目痕が認められる。色調は黄灰色を呈する。

石器

砥石（62）　硬質の砂岩製である。下半を欠損している。現存長6.2cm，最大幅8.5cm，最大厚2cmを測る。A，B面，上小口，右側辺を研磨使用している。左側辺は研磨が部分的に行なわれる，A，B面はやや中窪みを呈している。

滑石製品

盤（61）　隅丸長方形状を呈している。現存長8.9cm，現存幅6cm，厚さ2.5cmを測る。側辺は面取り仕上げを行なう。盤の全面が磨滅風化している為，削り痕は認められない。欠損部に径1.2cmの穿孔がある。孔を盤の中心にあると考えれば長さ約16.5cm，幅約9cmを測る楕円形の盤を復元できる。用途は中央の穿孔などから蓋として利用されたと考えられる。

玉類（Fig. 23－63～66）

1は碧玉製の管玉で，穿孔は二方向からである。2～4は滑石製小玉のである。穿孔は全て一方向からである。1，2はP1より出土。3はP28，4はP68より出土した。

tab. 3　玉類計測表

単位mm

No.	種類	径	厚(表)	孔径	材質	色彩	備　考
13	小玉	5mm	2.5mm	1.5mm	滑石	明灰緑色	1号住居跡
23	小玉	4mm	2mm	1.5mm	滑石	暗 灰 色	3号土壙 第1層出土　算盤玉形
63	管玉	2.5mm	5mm	1mm	碧玉	濃グリーン	P1出土
64	小玉	5mm	2mm	1.5mm	滑石	淡 灰 色	P1出土
65	小玉	4.5mm	2mm	1.5mm	滑石	灰 白 色	P28出土
66	小玉	4mm	3mm	2mm	滑石	黒　　色	P68出土

小　　結

調査地は古墳時代から中世に至る時代の遺構である。

2号住居跡の平面形は片袖にL字形のベットをもつ形態であろう。1の2重口縁壺は口縁部が余り開かず，胴部内側はヘラケズリを施している。2の甕は口縁部が外反している。内面はヘラケズリと思われる。布留式土器の古期に相当する。4，6の高坏は底部と体部の境，体部と口縁部の境に段を形成し，脚の筒部と裾部との境には3～4個の孔を設けている。これらの土器は在地系の土器に類似をみない。4，6の外来系の土器の出現期が庄内式土器の新期にあるところからこの住居跡の時期は庄内式土器併行期から布留式土器併行期への過渡期の段階が考えられる。3号土壙出土の甕は外面に叩きを施し，内面はハケ調整であり，4世紀の中頃に属するものと思われる。但し，共伴した高坏は筒部が大きく開き，新しい形態を示している。

1号住居跡はやや長方形を呈し，北壁にかまどを設け，主柱が4本柱である。一般的に平面形の方形化は5世紀の中頃に始まっており，1号住居跡は古い要素を残している。この住居跡に伴う遺構は1号土壙である。出土した須恵器から5世紀後半頃の年代が考えられる。

1，2号溝は東西方向に設けられ，底面は西から東へ低くなる。溝の東側は南と北方向の2方向に分岐している。これらの溝は区画のための地割り溝と考えられる。出土した陶器の摺鉢は備前系である。有田遺跡では，備前系の鉢はIII期以降－14世紀以降から認められる。

堀立柱建物は第53次，第75次調査分を含めて30棟を検出した。建物群をその主軸方位から大きく6類に分類した。方位の一致は建物の機能や敷地の土地利用を考えて配置を行なうことに通じる訳であるが，こうした意図が働くのは規律性，企画性，画一性が政治的に行なわれる律令時代を前後する時期以降の所産と考えられる。竪穴住居の時代にどれだけの規律性があるのか疑問も残るが一応の目安とした。

I類は方位のわずかな違いから1号，5号，8号のAグループと4号，7号，10号のBグループ，16号，27号，Cグループに分けられる。10号建物は3号建物と切合っており，いずれかが建てかえられたものと思われる。よって，10号建物も総柱の可能性が強い。1号建物からはFig23－6に示す6世紀～7世紀頃の須恵器の甕片が出土している。27号建物からは4世紀中頃の布留式古期の甕が出土している。この建物は3号土壙を切っており，3号土壙が4世紀後半代に比定される。4号建物からは須恵器片を出土する他は全て土師器片である。5号建物出

土の製鉄関係遺物（Fig23－９）は時期が明確ではない。有田遺跡では製鉄遺構の検出例は３例であるが，いずれも奈良時代に相当している。以上を考慮するとＣグループは４世紀後半～５世紀前半頃に比定できる。Ａグループは梁行２間，桁行２間以上の居宅的な建物を伴なっている。時期は６世紀から奈良時代の幅が考えられ，竪穴住居から掘立柱建物へ移行した形態であろう。Ｂグループは倉庫を主体とし，４号建物は北側に庇が付設している。この建物群はⅡ類Ａグループと重複しているがⅡ類Ａグループには19号建物のような居宅的な建物を伴っておりⅠ類Ｂグループに後出するものである。Ⅰ類Ｂグループは１号住居跡の時期に伴う建物群の可能性が強い。

Ⅱ類は３号，６号，19号建物がＡグループに，２号，22号，26号建物がＢグループに分けられる。22号建物は総柱の建物の可能性がある。３号建物は須恵器片が出土しており６世紀以降の年代が考えられる。Ａグループ，Ｂグループは同時存在も考えられる。

Ⅲ類は13号，23号，29号建物である。13号は１号住居跡を切っている。23号は２号住居跡を切っており，１号土壙と切合い関係にある。遺物は６世紀～７世紀の甑形土器の把手が出土している。29号も同時期の把手の出土がある。これらの建物は６世紀後半から７世紀代を考えることが妥当である。29号建物は２間×３間の建物で，居宅として用いられたものと思われる。

以上Ⅰ～Ⅲ類についてまとめるといずれのグループも非常に近似した時間にあって，その先後関係はⅠ類Ｃ→Ⅰ類Ｂ→Ⅱ類Ａ，Ｂ→Ⅲ類→Ⅰ類Ａの変遷が考えられる。

Ⅳ類はⅠ～Ⅲ類に比べ建物配置が整然と行なわれる。このグループは９号,11号，17号建物，柵列である。建物の主軸は磁北～4°Ｗに振った範囲にある。９号,11号建物は東西に併置する。17号建物はＬ字形の柵列内に配置され，９号，11号とは区画される。柵列は第29，32，55，56次調査で検出した大型の建物群を区画する溝に併行する。この溝はほぼ100ｍ四方に巡ることが明らかで，柵列はそれより50ｍ外側を巡るものと思われる。これらの官衙的な建物の中でも用途による区別があったものと思われる。柵列は第75次調査の溝と切合っている。この溝は出土した須恵器より８世紀中頃が考えられる。覆土が同一のため先後関係が不明であるが近い年代であろう。官衛的な建物の中でも用途による区別があったものと思われる。

Ⅴ類は24号，25号，12号，21号,28号建物である。主軸方位は磁北～27°Ｅの範囲にあって整然と配置される。Ⅳ期より東に主軸方位を振る。12号，21号建物は東西方向に併置し，24号，25号，28号は南北方向に連なっている。この期は土地区画の目的をもった１号，２号溝が伴なう事も考えたが覆土が暗茶褐色粘質であるため，これらの建物群とは相違する。21号建物より検出した土師皿（Fig23－２・３）は13世紀前半に比定できる。第32次調査で検出した井戸と近い時期であり，この時期に集落があったことを示している。

Ⅵ類はⅤ類と切合っている。14号，18号，20号，30号建物である。18号建物は主軸方位が他と相違しており，時期差が考えられる。30号は17号建物を切っている。20号建物から布目瓦片

が出土しているが時期比定できない。いずれもV類よりも主軸方位を東へ振る傾向にある。

以上Ⅰ～Ⅵ類の建物について分類したが，明らかに時期の比定できるのはⅣ，Ⅴ類である。

Ⅰ～Ⅲ類は4世紀後半～7世紀を，Ⅳ類は律令時代，Ⅴ，Ⅵ類は中世前半の時代を考えたい。

Ⅰ～Ⅲ類は主軸方位を東から磁北に近くなる傾向にあるがⅢ類は磁北から西に扁し，Ⅳ，Ⅴ類は徐々に東に扁している。

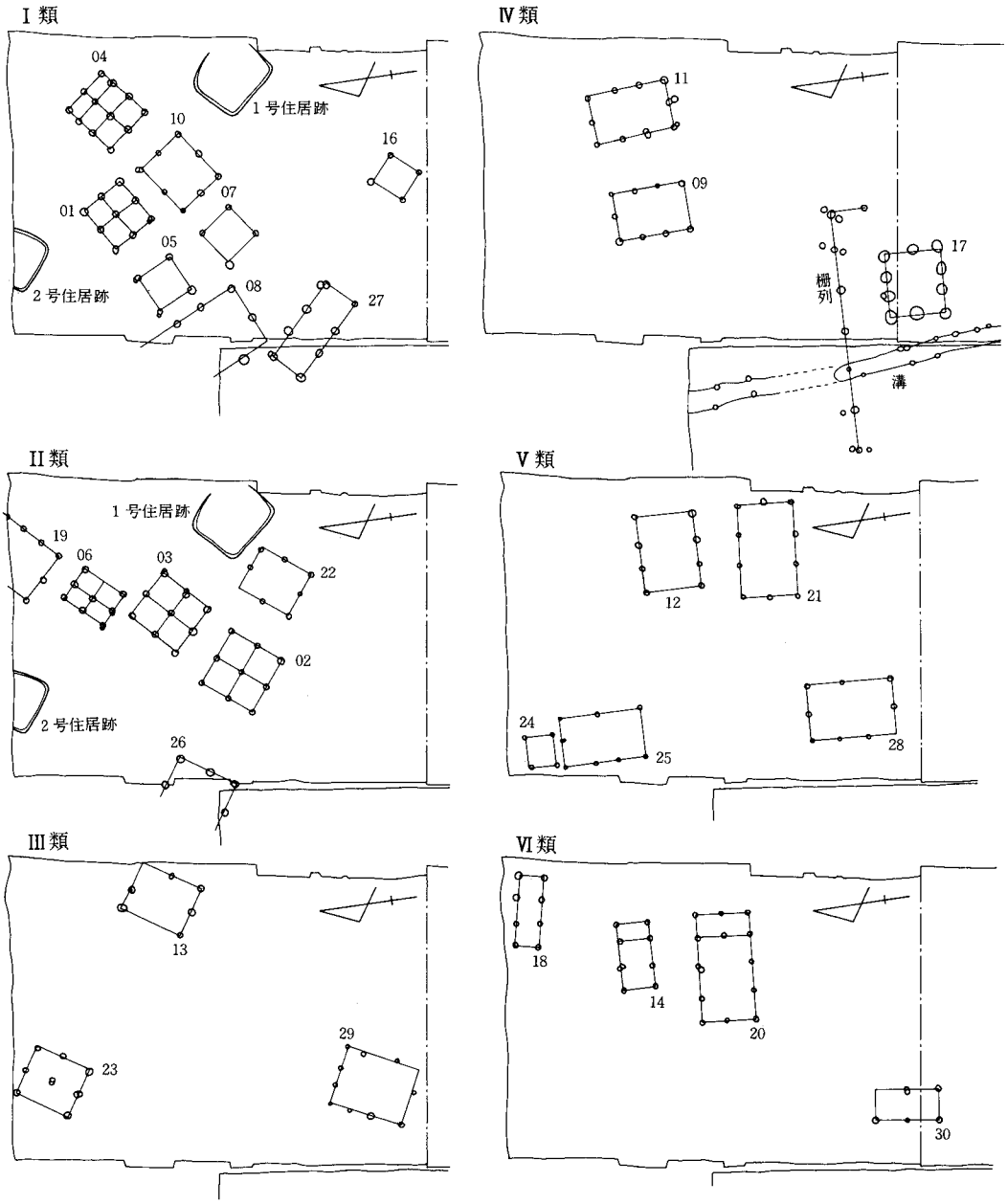


Fig.24　掘立柱建物変遷図（1/500）

2，第44次調査

調査の概要

調査対象地は福岡市早良区有田２丁目14－９番地に所在し，対象面積は1,028m²である。

有田地区台地は標高14m前後を測る有田１丁目周辺と，南端部の標高12～13mを測る小田辺城伝承地の高台との間に，標高10～11mを測る鞍部を形成しており，当該地はこの鞍部にある。小田辺城伝承地周辺はFig.３の旧地形図で見ると東西方向の土塁が存在しており，東側と西側の台地落ち際には，それぞれ鬼丸ホゲ，ホカヤネ等の濠の存在が伝承され，それらの濠の跡といわれる水路が現在も細々と残[註2]ている。又，現在でも南北方向に土塁が一部残存しているところがあるので，これら小田辺城に関する濠，土塁が鞍部に形成されていたことは充分考えられる。又飯盛文書中の青柳文書，飯盛宮行事屋敷注文写によれば，約1500年代にこの地域に幾つかの屋敷地の在った事が記されている。事実当該地[註1]周辺の旧字名は「常丸」と言い，この字名は前記文書の中で屋敷地として表記されている。以上の事柄からこの地域の調査は中世後半代の小田辺城を解明する手懸りとして重要である。昭和55年度末に当該地に建築確認が申請されたので，試掘調査を行なった。その結果溝状遺構を検出したため発掘調査を実施した。

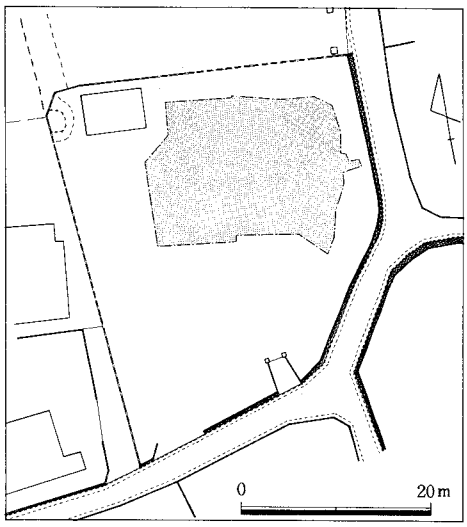


Fig.25 現 況 図（1/800）

発掘調査は昭和56年４月17日～４月30日迄実施した。表土は耕作土，或いは客土であり，住宅地であったためか攪乱がかなりひどかった。遺構面は黄褐色ロームの風化土で，砂質状を呈しており，深さは西側が30cm，北東側が80cmである。北東側の落ち込みは最近迄池があったといわれ近代の遺物を含んだヘドロが堆積していた。遺構は緩斜面に沿って環状に巡っている溝３条，集石遺構２基，石組井戸１基を検出した。

検出遺構

溝状遺構

３条検出した。いずれも弧状を呈す。南から北へ１～３号溝状遺構とする。

１号溝状遺構（Fig.26）

調査区南側境界で検出した。南側の両延長部は調査区外で不明。削平をかなり受けている。上面の幅は0.75～3.0mを,現在の深さは0.25～0.45mを測る。平面形はかなり不整形で，一見楕円形状の土壙が連なる様な状態を呈す。覆土は暗茶褐色粘質土でしまりがない。青磁碗，

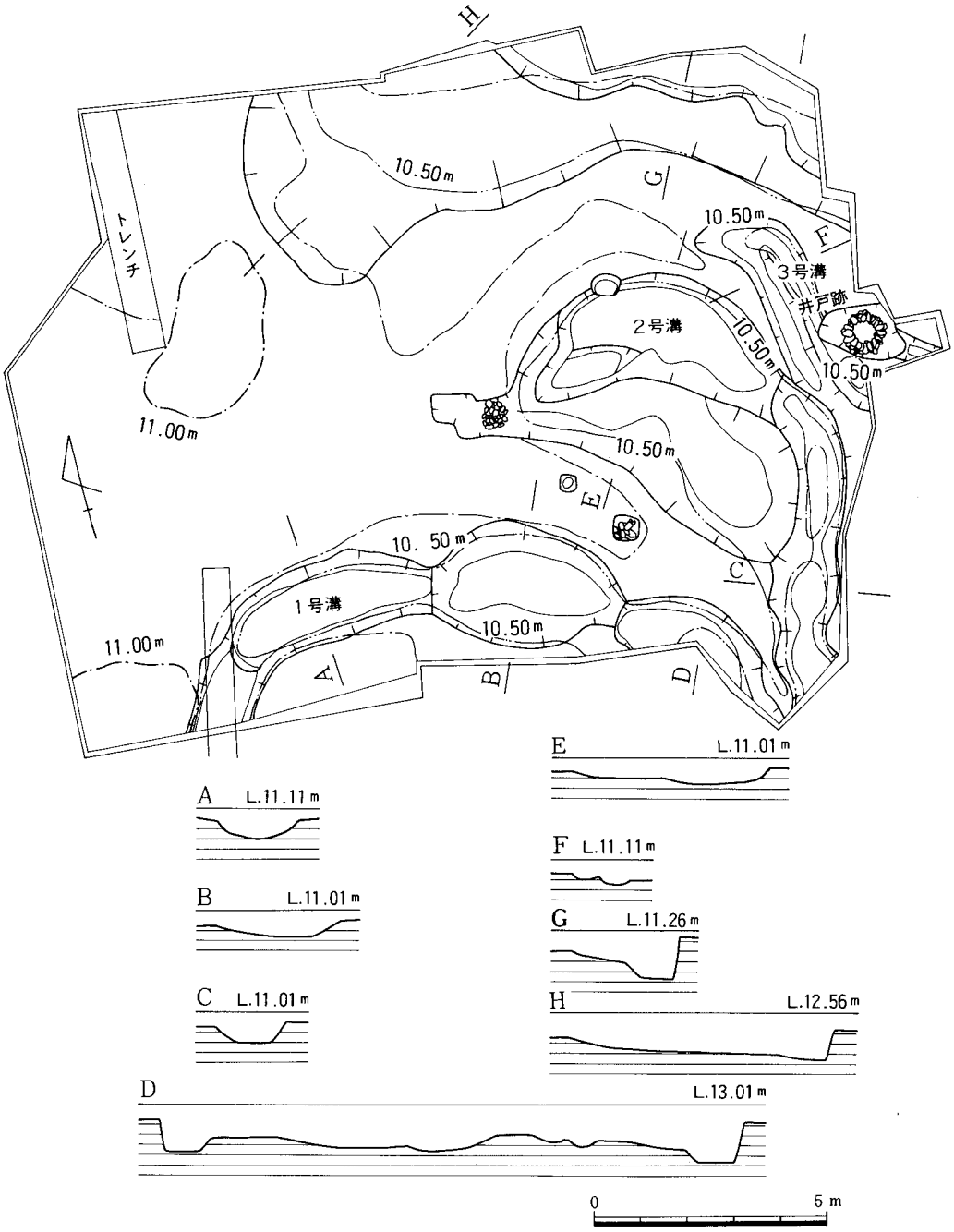


Fig.26 第44次調査遺構配置図（1/150）

明の染付，碁笥底の皿，瓦質土器の鼎，土師質の鍋等が出土した。

2号溝状遺構（Fig.26）

1号溝状遺構をとり囲むように調査区南東隅から北方向に蕨手状に延びる溝である。3号溝状遺構と切り合う。溝の上面幅1.1～2.6m，現存の深さ0.31～0.52mを測る。覆土は1号溝とほぼ同じである。出土遺物はない。

3号溝状遺構（Fig.26）

2号溝状遺構の北側に位置し，2号溝状遺構や井戸と切り合う。溝の上面幅は1.5m，現存の深さ0.15mを測る。溝底は中央で凸部を持つ。出土遺物はない。

集石遺構

1号集石遺構（Fig.27，PL15－2）

調査区中央で検出した。攪乱で西壁と南東隅は削平され，長さ80cm，幅62cm以上，現存の深さ16cmを測る。平面形は隅丸長方形を呈し，底面は平坦である。長軸をN14°Eに置く。土壙内に長さ10～20cm前後の花崗岩の転石が，1段～2段に不規則に詰められていた。

2号集石遺構（Fig.27，PL.15－3）

1号集石遺構より南東側に約4m離れて検出した。長さ67cm，幅57cm，現存の深さ16cmを測る。平面形は隅丸長方形を呈し，底面は平坦である。1号集石と同様に削平を受ける。長軸をN73°Wに置く。土壙内には人頭大の花崗岩の転石が1段～2段に不規則に詰められていた。

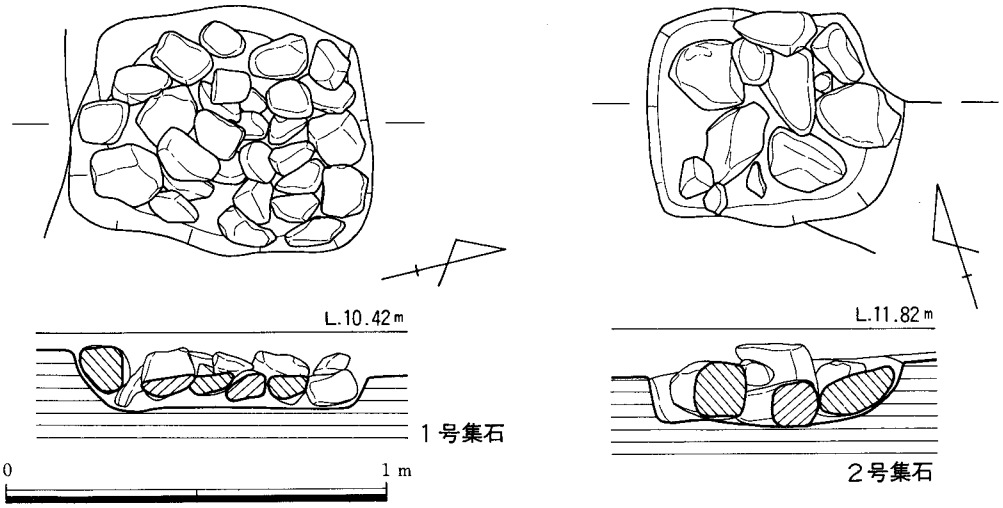


Fig.27　集石遺構（1/20）

井戸（Fig.28, PL.14）

調査区の東側境界地で検出した為，調査区を拡大して調査を行なった。井戸掘方の上面は長径2.20m，短径1.32mを測り，平面形は不整の楕円形を呈す。石組の井戸側は上部で内径50cm，底面で内径60cmを測り，円形を呈している。上面より2.8m掘り下げた面一面に礫が検出され井戸底の状況を示した。井戸が現状保存されることから，それ以下の掘り下げは行なわなかった。石組井戸の遺存は良好。石積方法は長さ20～30cmの細長い扁平な転石や割石を用い，玉石積みで，石と石との間に長さ10cm未満の小石を粘土と共につめ込み補強しながら垂直に積み上げている。石組使用石材の中には板碑や石臼の破片や2次焼成を受けた割石がある。使用石材の石質は砂岩や花崗岩が大半を占める。

井戸の掘方は上面より深さ30cm位下から内側に30cm程抉れる。この抉れた部分と石組の井戸側間を粘土や小さな転石で裏込めしている。裏込粘土は上面から1.6m迄は暗茶褐色土，その下は八女粘土ブロックで小石を混入した裏込めとなる。遺物は井戸内より弥生式土器片や初期伊万里の染付皿，青磁，土師質の鍋，茶臼，滑石製石鍋，擦り石，叩石，板碑，鉄滓が，掘方裏込めより，白磁，美濃焼の皿，土師質の摺鉢，鍋，石鍋，石臼が出土した。

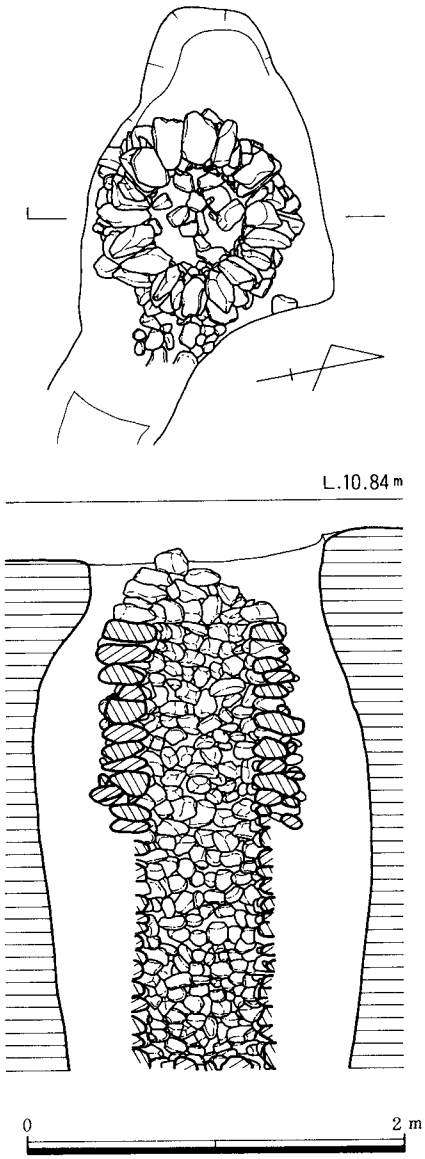


Fig.28 井戸実測図（1/40）

出土遺物

表土出土遺物（Fig.29, PL.16）

染　付

碗（1）　底部片で高台径4.9cmを測る。器壁は厚手，体部は高台から内弯気味に開く。体部内外面に淡い青味を帯びた白色の透明釉が施され，細かい貫入が入る。畳付は釉をかき取る。体部外面には青色の呉須によって絵がかかれる。文様は不明。胎土は淡黄灰色を呈す。

陶　器

天目茶碗（2）　底部片で高台径4.6cmを測る。高台は幅広く低い。体部外面下半から高台部に

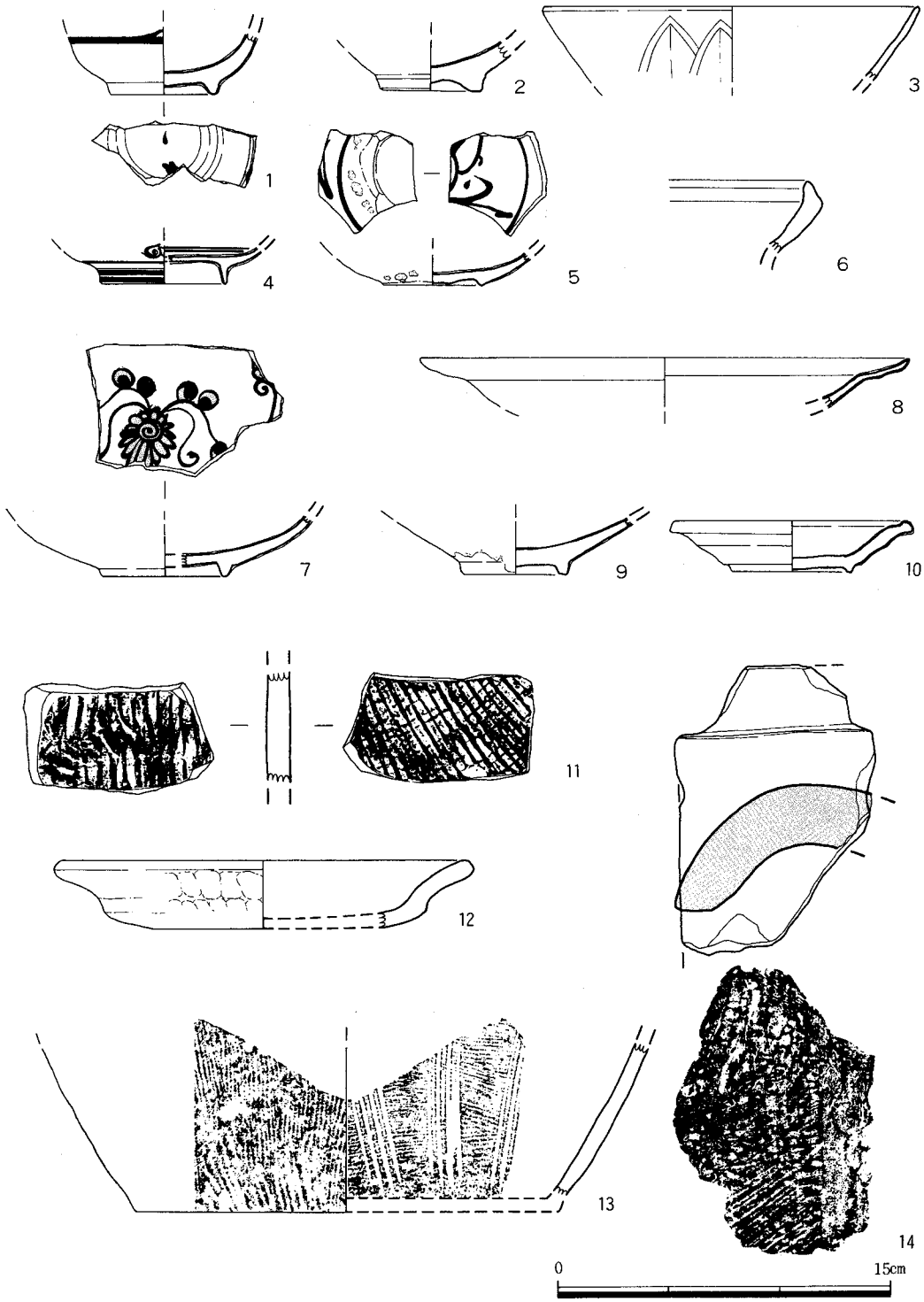


Fig.29　出土遺物（1/3）

かけてケズリを加え，高台内面はナデている。内面全体に黒緑色の釉がうす目に施される。胎土は赤褐色を呈す。唐津焼系である。

土師質土器

鍋（15）　口縁部片で，復元口径45.0cmを測る。体部は大きく直に開き，口端部を丸くおさめる。体外面は10本単位の粗いタテハケを施す。内面は口縁部が粗いヨコハケのちナデ消し，体部はヨコ，又は斜めの10本単位のハケを施す。胎土は黒雲母，石英粒を少量含む。焼成良好。外面に煤が付着し，色調は黒褐色を呈する。

1号溝出土遺物（Fig.29，PL.16）

青　磁

碗（3）　鎬蓮弁碗の口縁部小片で，復元口径17.0cmを測る。体部は底部からやや内弯気味に外側へ大きく開き，端部を丸くおさめる。内外面に緑灰色釉が厚めに施される。胎土は灰白色を呈す。

染　付

皿（4，5）　4は小片で復元高台径5.9cmを測る。内外面に青味がかった白色透明釉が施されるが，畳付は釉をかき取る。高台外面，体部外面下半に3条，内面には2条の淡青灰色の呉須による圏線がめぐり，体部外面，及び内底見込みには呉須による絵がかかれる。絵柄は外面は唐草文，内面は不明である。中国明の染付である。5は底径4.3cmを測る，いわゆる碁笥底の底部片である。体部内外面に厚めの灰緑色釉が施されるが，外底部は露胎である。外底部付近に目痕の粘土塊が付着する。胎土は4が白色，5が淡黄灰色を呈す。貫入が入る。

瓦質土器

鼎（6）　口縁部細片である。内外面ともヨコナデ，胎土は砂粒をわずかに含む。焼成は良好。色調は灰褐色を呈す。

土師質土器

鍋（16）　底部1／4片で，復元底径34.5cmを測る。体部は直立気味にやや開く。体部外面から底部にかけて一部ナデ調整を行うが，全体に幅2mmの粗いハケを施す。体部内面はヨコ，又は斜めのハケ，内底部はハケのちナデ仕上げである。

井戸内出土遺物（Fig.29・30，PL.16）

染　付

皿（7）　底部1／2片で，高台径5.8cmを測る。体部は低く，丸味をもつ。内外面とも青味がかった白色透明釉が施され，細い貫入が入る。畳付は釉をかき取る。内底に牡丹唐草文を描く。呉須は暗青色，胎土は灰白色を呈す。初期伊万里の皿で，17世紀初頭に位置づけられる。

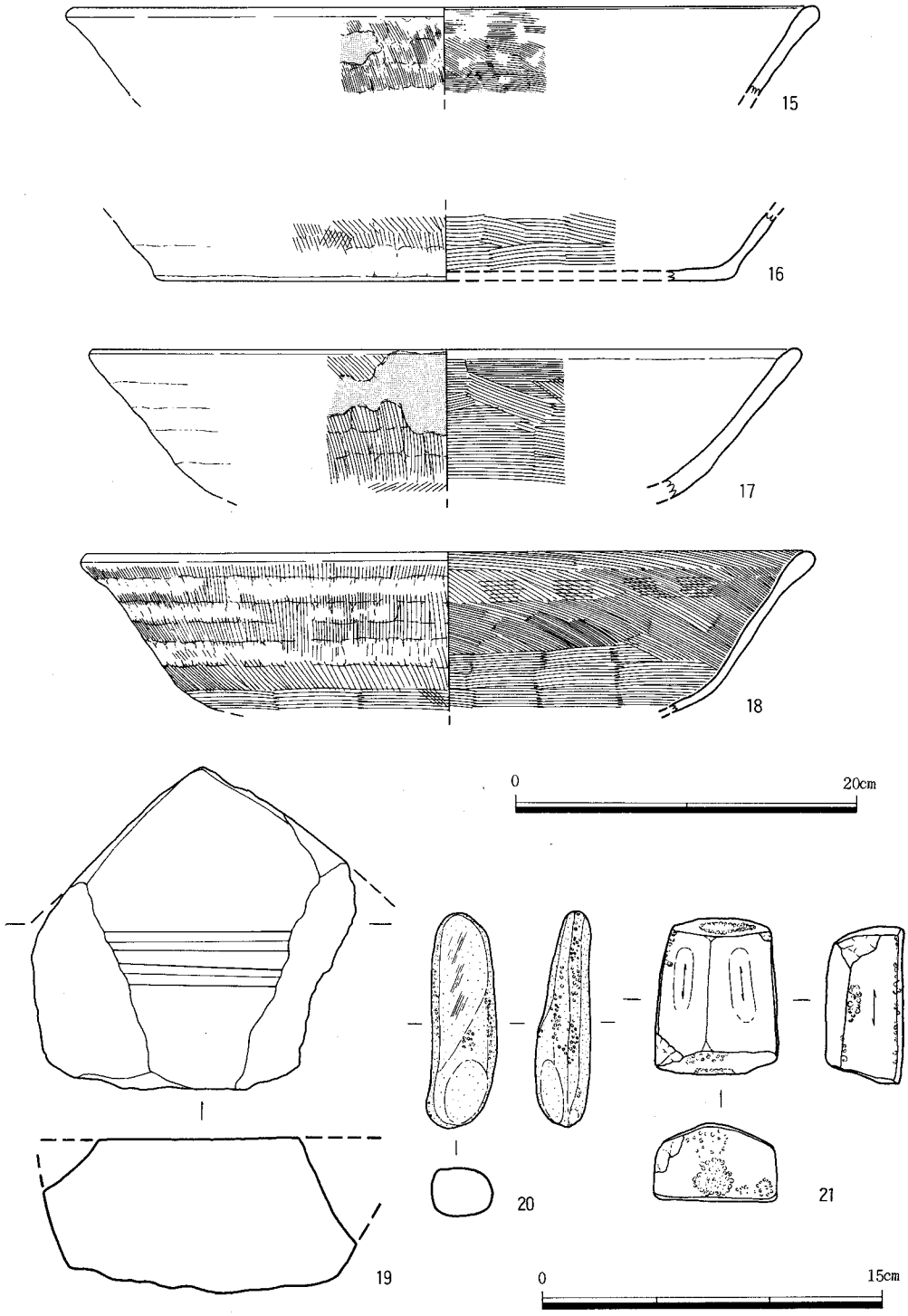


Fig.30　出土遺物（15～18は1/4，19～21は1/3）

青　磁

皿（８）　小片で，復元口径22.0cmを測る。　口縁部は体部より外側に屈折し，口端部を少し上方につまみ上げる。内外面に淡灰緑色の釉が施され，細い貫入が入る。胎土は灰色を呈す。

土師質土器

皿（12）　小片で口径は18.3cm，器高3.1cmを測る。底部はやや丸味を持つ。体部は底部から外反して大きく開き，口端部を丸くおさめる。体部内面はヨコナデ，体部外面は指ナデである。胎土は２mm以上の砂粒を含み，焼成は良好。色調は黒灰色を呈す。

鍋（17）　口縁部片で，復元口径46.6cmを測る。口径の割には器高は低い。口端部は肥厚し，丸くおさめる。体部外面上半は粗いタテハケ，下半はヨコ，又は斜めハケを施す。胎土は２mm内の砂粒を含み，焼成は良好。外面に煤が付着し，色調は黒色を呈す。

石　器

擦石（20）　全長9.5cm，最大幅2.4cm，最大厚2.1cm を測る。両側辺に敲打調整痕が残る。Ａ面，及び上小口は部分的に使用によって磨滅し，Ｂ面には擦過痕が残る。上小口には使用による敲打痕が残り，叩石としての使用も考えられる。石質は玄武岩。色調は淡灰褐色を呈す。

砥石（21）　全長6.9cm，最大幅5.4cm，最大厚3.4cmを測る。Ａ，Ｂ両面，両側辺，及び両小口のすべての面を砥面として使用し，特にＡ面の磨滅が著しい。両小口には叩石として使用したと思われる敲打痕が残る。石質は細粒砂岩，色調は灰褐色を呈す。手持ち砥石であろう。

茶臼（22）　上臼1／4片である。復元直径19.0cm，上面の周縁幅2.8cm，厚さ12.4cm，芯棒孔径2.4cmを測る。側面，及び上面は敲打調整後研磨仕上である。目は8分画8主溝，副溝の数は７本である。使用によりかなり磨滅する。側面には挽き木を入れるための2.6×2.4cm，奥行き3.8cmを測る方形の孔が穿たれ，孔の周縁に菱形文様が浮彫りされる。石質は砂岩である。井戸底より出土。

石塔類

板碑（19）　頭部片である。現存長14.2cm，現存幅13.3cm，最大幅6.8cmを測る。頭部を三角形に成形する。Ａ面は粗成形のち研磨し，断面三角形を呈する溝を二条彫り込む。Ｂ面は粗成形のままである。左右側辺は欠損が著しいが，研磨を行なっている。砂岩製である。

井戸掘方出土遺物（Fig.29・30・31，PL.16）

白　磁

皿（９）　底部片で，高台径5.8cmを測る。畳付はやや内傾し，重ね焼きの砂目の目痕がある。体部は低く外方に開く。高台周辺はカンナケズリを加える。内外面に青味をおびた乳白色釉を厚めに施し，部分的に釉溜りがある。内底見込みには環状の釉のかき取りを行なう。胎土は白色を呈す。初期伊万里である。

陶　器

皿（10）　復元口径11.0cm，器高2.3cm，高台径5.4cmを測る。高台は低く，畳付は平坦を呈す。体部は器壁が厚く，外反気味に大きく開く。口端部は水平に屈折し，上方へ少しつまみ上げる。内底見込みを除いて全面に淡灰緑色の釉が施されるが，畳付は釉をかき取る。施釉部分には貫入が入る。高台内面には粘土塊が付着し，目痕状を呈す。胎土は精選されており，焼成は良好。美濃焼である。

須恵質土器

甕（11）　細片である。最大長8.4cm，　厚さ1.1cmを測る。内外面に平行叩きが施されるが，特に外面は平行叩きが交互に施される為，一見格子目状を呈する。胎土は精選され，焼成は良好。色調は外面で淡黒灰色を呈す。

瓦類

丸瓦（14）　玉縁から筒部の小片である。現存長は6.0cm，最大幅8.9cm，玉縁部長2.9cmを測る。器厚は2.6cmを測る。玉縁から筒部外面は縦のヘラケズリのちナデ調整である。玉縁内面は布目痕が，筒部内面には糸切り痕が残る。側縁辺，及び玉縁端部はヘラによる面取り調整を施している。

土師質土器

摺鉢（13）　体部片である。体外面は縦方向9～10本単位のハケ，内面ではヨコ方向の10本単位のハケを施し，更に4本単位の条線を底部より上方へ加える。胎土は2mm内の砂粒を含み，焼成は良好。色調は暗褐色を呈すが，一部煤が付着し，黒褐色を呈す。

鍋（17）　口縁部片で復元口径43.4cmを測る。体部は底部から内弯気味に外反して伸び，口縁部は更に屈曲して口端部は肥厚して丸くおさめる。器高は約10cmで口径の割りには低い。体外面にはナデのち8～10本単位のヨコハケ，下部はヨコハケを施す。内面は3mm内の砂粒を含み，焼成は良好。色調は濃赤褐色を呈す。

石　器

臼（23，24）　23は復元直径32.0cm，受皿部径24.9cm，厚さ2.8～4.9cm，受皿の深さ1.0cmを測る。全体を敲打で整形する。石質は多孔質の火成岩である。茶臼の下臼であろう。24は現存長13.8cm，現存幅3.4cm，現存厚7.3cmを測る茶臼の細片である。復元直径は17.0cmである。全体に研磨調整を施す。石質は砂岩である。直径の規模から上臼と思われる。

滑石製品

石鍋（25）　底部片である。復元底径22.1cm，現存高3.1cmを測る。表面は欠損剝落がかなりひどい。体外面は幅6mm，長さ2cm前後の縦長のケズリを加え，底部も縦長のケズリを加える。体部内面は研磨，内底部は工具によるひっかき痕が多く残る。外面は煤が付着し，色調は黒灰色を呈す。

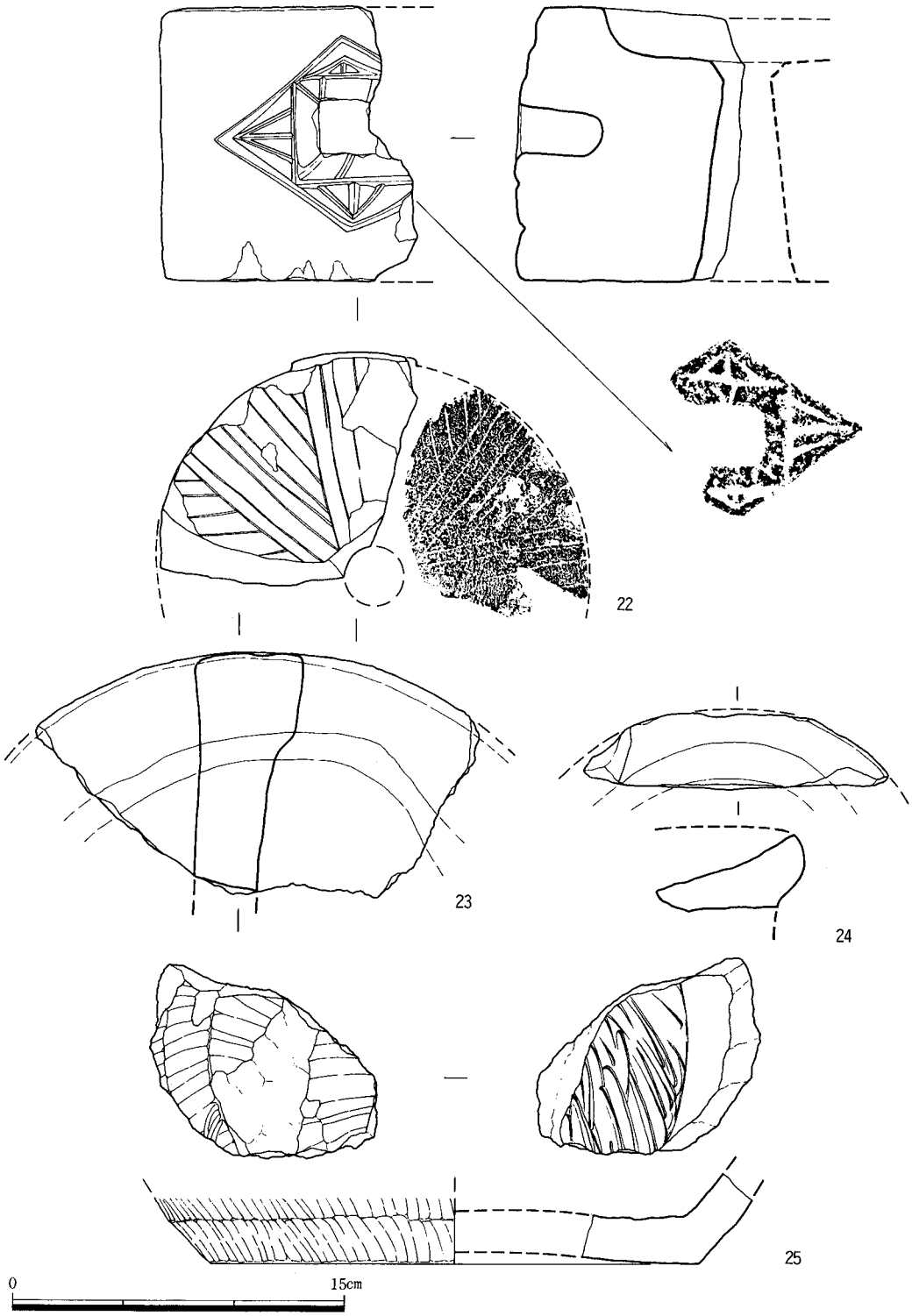


Fig.31　出土遺物（1/3）

小　　結

遺構は全て中世に比定されるが，出土遺物からⅠ期の溝状遺構とⅡ期の井戸跡の２つの時期に分けられる。

Ⅰ期の溝状遺構は孤形状を呈し，幅，深さ共に一定していない。台地斜面に対し扇状に展開しており，機能については確定できない。１号溝から青磁鎬蓮弁文碗，及び明代の染付碗，碁笥底の皿が出土している。染付碗は蓮子碗で，内底には唐草文状の文様がある。明代の染付碗，皿はいずれも15世紀後半から16世紀中頃に出現するものである。共伴する瓦質の鼎は，15世紀後半から16世紀の前半を考えるところから，この溝状遺構は16世紀の前半代を考えることが可能である。

Ⅱ期の井戸跡は玉石を用いた井戸側を有し，円筒形を呈している。作業上危険なため井戸の底部は確認しなかったが恐らく水の汚れを防ぐため底に礫を敷いていたものと思われる。井戸の底部からは初期伊万里の皿や白磁碗が，裏込めからは唐津焼，美濃焼の皿が出土している。これらには土師質の盤や鍋が伴うが，いずれも同形態を示し，同時代性を表わしている。唐津焼は現在，文禄，慶長の役以前に始まることが明らかにされつつあるが，これらの出土した陶磁器は16世紀末から17世紀初頃に求められる。よって井戸の埋没年代は17世紀初頭と考えるのが妥当である。同時期の遺構は有田遺跡第41次調査の１，２号溝や波多江遺跡のＳＤ０３があって，上記の陶器に伴う雑器を出土している。[註7]この時期には16世紀中頃まであった須恵[註]質や，硬質の瓦質土器は失なわれており，いずれもいぶしのかかった土師質土器で占められる。又，薄手の鉢や鍋は硬質で，器種が分化する傾向にある。特に大形の盤（15～18）は16世紀の中頃には認められない。

石組井戸は奈良県の大官大寺検出のＳＥ116が最古の例で，７世紀第Ⅲ４半期に比定されているが，古代の例は少なく，中世に石組井戸は増加する。有田・小田部では弥生時代から近世初頭の井戸を検出するが，その多くは特に中世後半期に集中する。[註34]井戸側は素掘りが多く，石組み等の設没をもつ井戸は２例にすぎない。上部施設の井戸枠を有していたと推測されるものに第３次調査検出の弥生時代中期後半の井戸がある。素掘り井戸が形成される条件にローム層の台地であるため非常に土質に粘着性があり，井戸側の崩壊が少ない点がある。井戸の底部は当然，湧水層のシルト層，又は砂質層に達しているが，この部分には八女粘土を貼付けたり礫を敷くなど水の汚れと崩壊を防ぐ方法がとられている。第35次調査で検出した中世後半の井戸は，底部に小枝を厚目に敷き，その上に礫や平坦な板石を置いて水の汚染を防いでいた。濾過施設と考えても良いだろう。石組みの井戸側や底部施設をもつ井戸は台地においても地域的に非常に限られている。当該調査地と同様な石組み井戸は当該地の東側約５ｍに１基，南側約50ｍの第54次調査の西応寺境内に１基存在する。どちらも飲料水として近年迄使用されていた。玉石の石積み

で，口径も当該調査井戸とほぼ同じである。東側の井戸の所有物は「常丸」の屋号を称しているがこの「常丸」は中世の名の位置を示している。又，第54次調査の井戸は西応寺の境内に位置し，通称「お殿井戸」といわれる。この地域は中世後半代の小田辺城推定地の範囲内にあるが，特に本丸と推定される場所である。伝承によれば，この西応寺は荒平城落城によって滅びた小田部氏とその一族をまつるため家臣の一人が小田部氏ゆかりのこの地に開山したと云われている。
註2

当該調査地の井戸跡を含めたこれら3例の石組井戸が年代や規模・形態の近似性，更に同一地域に集中すること等から小田辺城にかかわる遺構である可能性が強い。

荒平城の落城は1580年であるので，当該井戸の構築と終末の年代は小田部氏の衰退とかかわりを持つものであろう。井戸出土の茶臼は茶の湯の作法を知っていた豪族の存在を裏付けるものである。第46次調査で検出した井戸は，切石や礫石を用いた井戸側である。先細りの円筒形を呈し，水溜は素掘りである。この井戸は出土遺物から15世紀の後半から16世紀初頭の年代が考えられる。この井戸からは石組みに利用された茶臼や青磁碗等が出土している。この地域は飯盛神社文書の「飯盛宮行事屋敷小田部村郷地頭名注文」にある早良郡小田部村中園名，下中園屋敷に推定される。下中園屋敷は16世紀中頃に大内氏の早良郡代であった大村興景の知行地であったことが文書[註8]に記されている。この地域には第35次調査の濾過施設を持った井戸跡をも含む。こうしてみると石組み井戸[註9]や底部に濾過施設を持った中世の井戸は全て有力豪族や家臣の居住地，或いは知行内に存在していることが云える。今後とも中世の各屋敷地との関連を考えながら調査を進めてゆきたい。

註34　宇野隆夫　「井戸考」史林65巻5号1982
註35　福岡県教育委員会「波多江遺跡」今宿バイパス関係理蔵文化財調査報告（7）1982

3．第46次調査

調査の概要

調査対象地は福岡市早良区小田部５丁目143－1番地にある。調査対象面積は264m²である。

有田・小田部台地の北側は，北から４つの小谷が入り込み、八手状に小台地を分岐している。各々の台地最高所は東側から標高10～７mを測る。当該地はこれら西側の台地に所在し，標高７m前後の台地縁辺部に位置している。当該地の東側隣接地は 昭和55年に第36次調査として行なわれ，弥生時代の甕棺墓２基，古墳時代や中世の土壙，中世の溝，柵列等を検出している。遺構の検出状況から当該地にも当然遺構の存在が予想された。昭和55年当該地に，住宅建設に先立って埋蔵文化財の事前調査願が出され，同年試掘調査を実施した。試掘結果は当該地にも遺構が存在する事を確認した。

発掘調査は昭和56年５月６日～５月28日迄実施した。遺構は褐色ローム層上面に検出された。表土は耕作土で，東側で20cm，西側で30cm前後を測る。南側と西南側境界にかけて大きく攪乱を受け，溝やPitがカットされている。この為，南西隅は調査を実施しなかった。西側境界では中世溝を切る段落ちがあり，覆土は茶褐色土に地山粘土ブロックを含む層を主体とする。出土遺物は少数であるが，中世が主体である。溝状遺構の可能性もある。

検出遺構は調査区西側と南側に中世の溝状遺構２条，柵列１条，中世土壙１，掘立柱建物３棟，中世の石組井戸１基，その他Pit多数を検出した。Pit31の中は多量のベンガラがつめられていた。遺物は井戸から陶磁器，瓦質土器，土師質土器，石器，滑石製品等が出土している。又，柵列は第36次調査で検出した１号柵状遺構と主軸方向や形状が一致することから同時期と考えられる。２重の柵列をめぐらす居館跡が第36，46次調査地点の東側に存在する事を予想させる。昭和57年度に当該地の東側を第64次調査として発掘したが，そこではこの柵列とほぼ主軸を同じくする掘立柱建物群が検出されており，これら柵列に伴う可能性がある。

検出遺構

土　壙（Fig.33，PL.19－1）

調査区南側で検出した。長さ1.02m，幅は南側小口幅0.56m，北側小口幅0.64m，最大の深さ0.32mを測る。平面形状は隅丸長方形を呈し，断面は逆台形状を呈す。床面中央はやや深くなる。主軸をN32°Eに置く。覆土は暗茶褐色粘質土。土器の細片が少量出土した。

井　戸（Fig.34，PL.18）

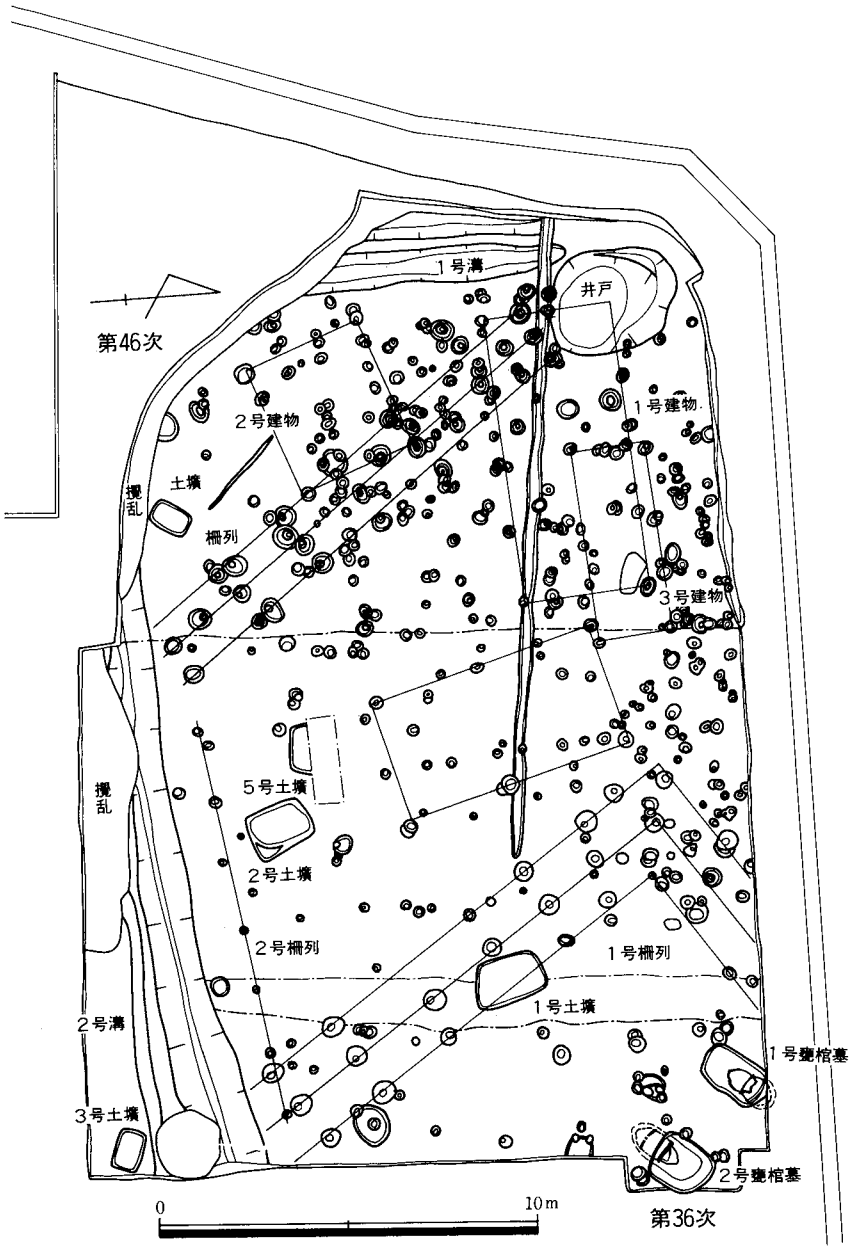


Fig.32　第36，46次調査遺構配置図（1/200）

上部土壙は長径3.64m，短径2.84mを測る。不整の隅丸長方形を呈す。井戸上部土壙の底部はやや傾斜を持ち，最深部で0.93mを測る。上部土壙の南東側に長径2.0m，短径1.92mを測る，ほぼ円形を呈する井戸掘方がある。この井戸上部土壙内には長径1.6m，短径1.35m最大厚0.42mを測る平面不定形状の礫群がある。土層断面によれば，この礫群は中央が皿状に落ち窪み，投げ込まれた状況を示す。井戸埋戻し時に井戸の塡圧の為に集中して投げ込んだものであろう。

上部の大きな掘方は井戸埋戻しの為に，意図的に掘ったものであろう。礫群の石材は花崗岩，玄武岩，砂岩などの転石が用いられ，一部に焼けた石がある。又，板碑片や石器類の破片なども少数ある。遺物は土師器，青磁，瓦質土器が上層埋土や礫群中より，礫群下の暗茶褐色粘質土からは，扁平片刃石斧，石鍋等が出土した。

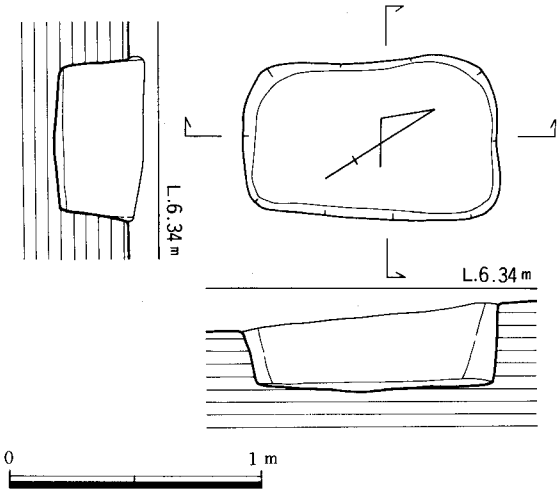


Fig.33　1号土壙（1/30）

石組井戸の内法は，上面で径1.05×1m，底面で径0.46×0.36mを測り，ほぼ円形を呈する。底はすぼまる。井戸底面には直径48cmのほぼ円形の水溜が掘り込まれる。地表面からの深さは2.84mを，テラス部より1.91mを測る。石組の残存高は底部より1.45m程の高さしかなく，遺存は不良である。井戸内に石組の使用石材と思われる礫が多量に落ち込んでいた。石組は20～30cm前後の扁平な割石を井戸壁面に沿ってはりつけるように，乱雑に積み上げ，隙間を茶褐色粘質土で補強している。石組の使用石材は砂岩や花崗岩，玄武岩の転石が大半を占めるが，二次焼成を受けたものや割石もかなり多い。井戸内から弥生式土器，格子目叩きの瓦，須恵器，瓦質土器，土師器，滑石製品，黒曜石片，鉄滓が出土している。又，石組中より完形の挽き臼の下臼や鉄滓が出土した。

掘立柱建物

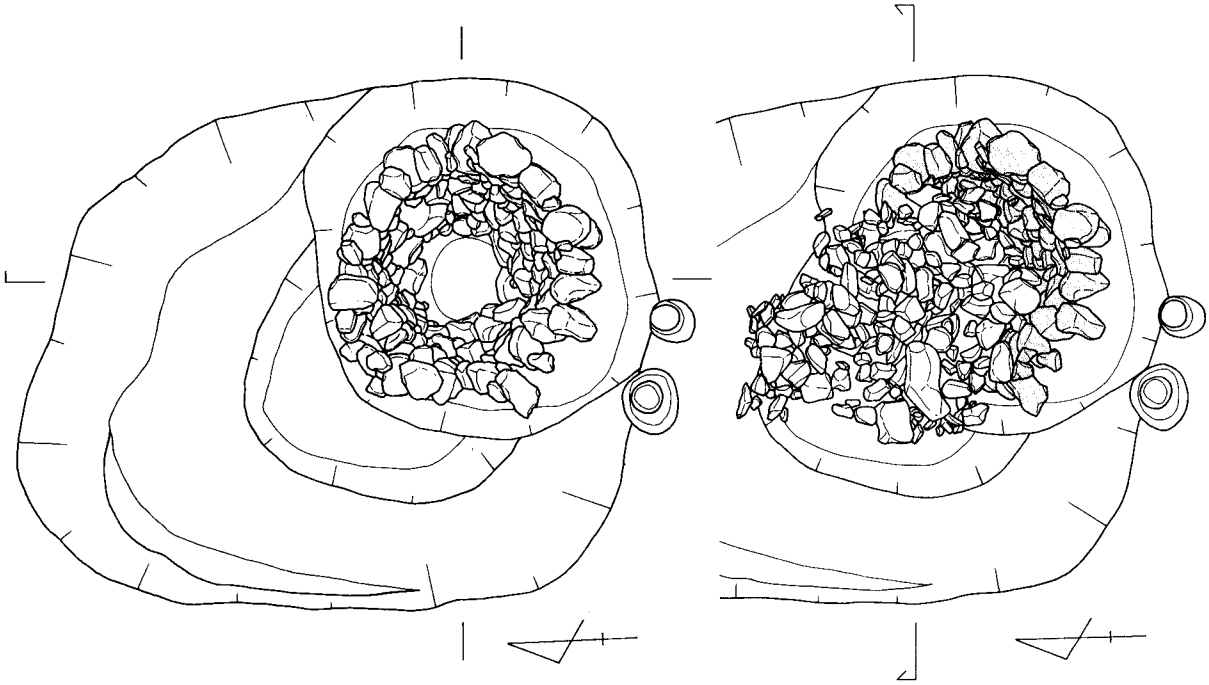
3棟検出した。すべて図上復元である。Pitの中には根石を配するものもあったが，建物としてまとめ得なかった。

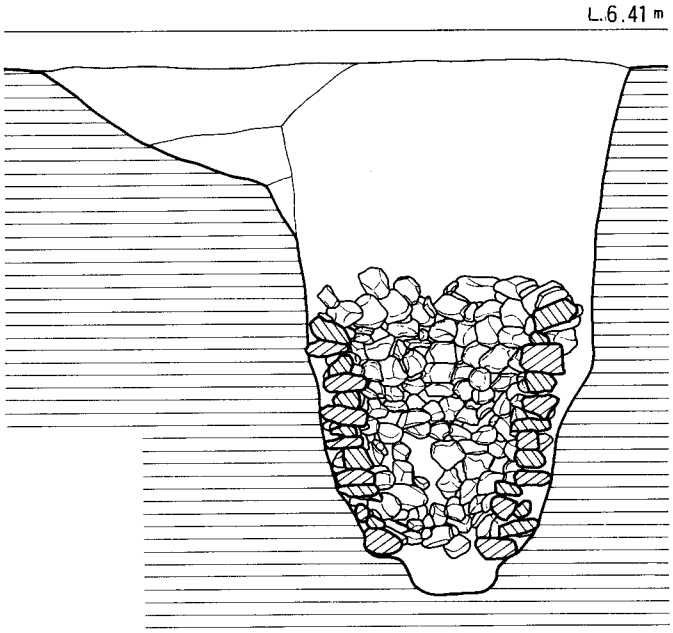
1号掘立柱建物（Fig.35）

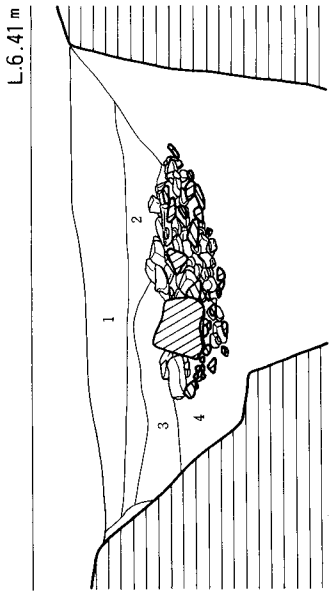
調査区北側で検出した。井戸と切り合うため柱穴が一部欠失する。主軸をN87°Eに置く。桁行7.5m，梁行全長3.3mを測る4間×2間の掘立柱建物である。柱穴径は22～35cm，深さは8～42cmを測る。柱根径は推定で10cm前後であろう。柱穴より青磁が出土した。

2号掘立柱建物（Fig.35）

調査区南側で検出した。主軸をN65°Eに置く。桁行長3.3m，梁行長3.3mを測る1間×1間の掘立柱建物である。柱穴径は35～45cm，深さは5～30cmを測る。柱根径は約10cmである。柱穴より土師器細片，黒曜石片が出土している。







0　　2 m

井戸土層名称

1．暗茶褐色粘質土（褐色土を少量含む）
2．1に黄褐色粘質土ブロックを多く混入（層位状をなす）
3．茶褐色粘質土（やや暗い，粘質強い）
4．3と同じ（やや黒色に近い）

Fig.34　井戸跡実測図（1/40）

3号掘立柱建物（Fig.35）

調査区北側の1号掘立柱建物と切り合う。主軸をN85°Eに置く。桁行全長4.95m，梁行全長1.95mを測る3間×1間の掘立柱建物である。柱穴径は20～35cm，深さ8～30cmを測る。柱根径は約12cm前後であろう。

tab.4　第46次調査掘立柱建物計測表

単位cm

	規模	方向	桁行		梁行		方位	床面積(m²)	備考
			実長	柱間寸法(尺)	実長	柱間寸法(尺)			
1号	4×2	東南	750(25)	6.5・6・6・6.5	330(11)	5.5・5.5	N87°E	24.75	
2号	1×1	北東	330(11)	11	330(11)	11	N65°E	10.89	
3号	3×1	東西	495(16.5)	6.5・5・5	195(6.5)	6.5	N85°E	9.65	

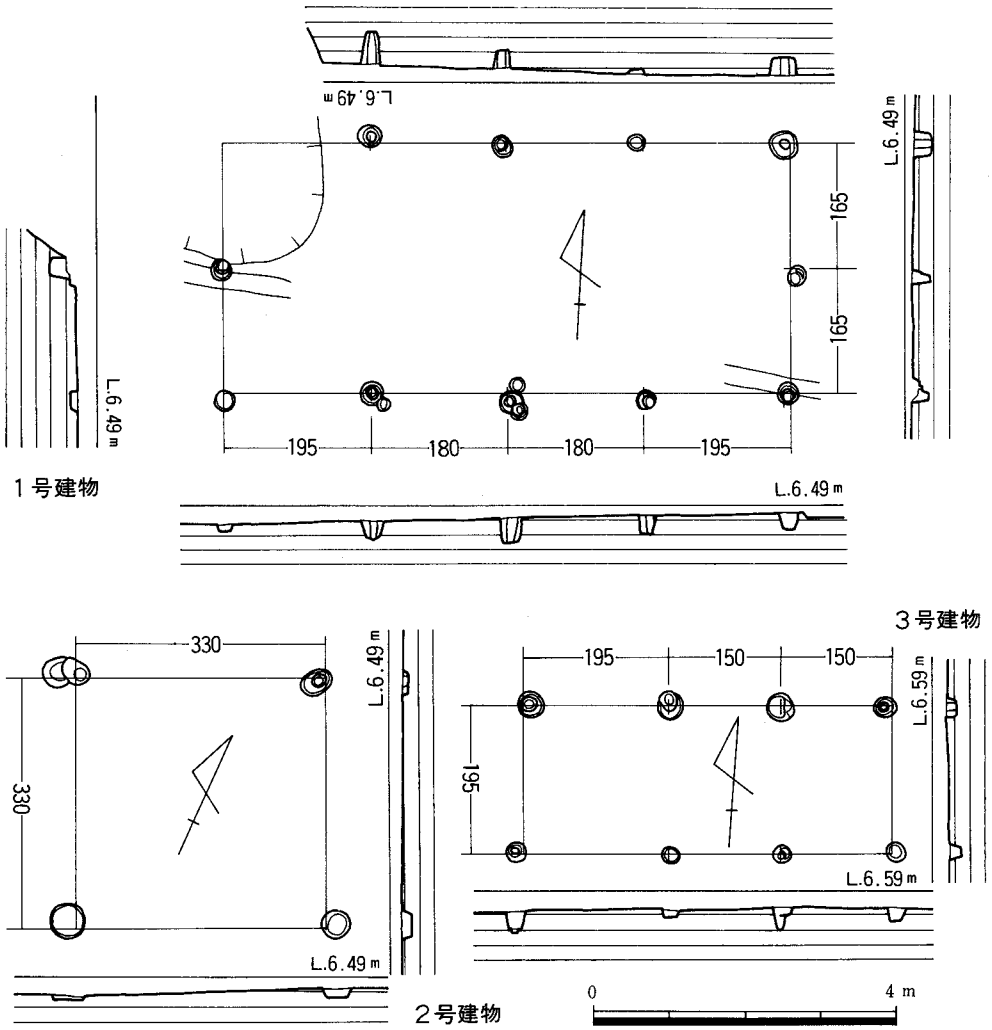


Fig.35　1号～3号掘立柱建物（1/100）

柵状遺構（Fig.32, 41）

調査区の南東隅から北西部方向の柵列である。主柱，支柱を含めた３本柱で構成される。北西端は井戸に切られる。現存長12.8ｍを測る。主軸方向はＮ36°30′Ｗに置き，東側隣接地の第36次調査で検出した柵列とほぼ同一方向である。第36次調査では北へ曲るコーナー部分が検出されている事から，当該地検出の柵列はその柵列を更にとり囲むものである。柱穴掘方径40～60cm，深さは15～40cmを測る。柱根径は約15cmである。各々の柱間は1.95ｍ～2.25ｍ（6.5 ～7.5尺）を測り，主柱と支柱の柱間は平均0.9ｍ（3尺）である。又，柱穴の覆土は褐色土に灰褐色粘土ブロックを混入しており，柱根部分は茶灰色を呈す。第36次調査と覆土が同様である事から同時期と考えられる。柱穴より遺物の出土はない。

溝状遺構

１号溝（Fig.36, PL.19－２）

調査区西側で検出した。南北方向の溝で，南側を撹乱で切られている。北側は底が浅くなり消滅する。現存長7.0ｍ，最大幅1.0ｍ，最大の深さは31cmを測る。溝断面は逆台形状を呈す。覆土は大きく２層に分かれ，上層は暗茶褐色粘質土，下層はやや暗い茶褐色粘質土である。土師器，瓦質土器が少量出土した。

２号溝（Fig.32, PL.19－３）

調査区南側境界地で検出した。東西方向の溝で，西側は撹乱で切られる。現存長3.0ｍを測る。第36次調査で検出した1号溝の続きである。出土遺物は少ない。時期は16世紀中頃であろう。

出土遺物

井戸出土遺物（Fig.37～39, PL.20・21）

１～７，13, 14, 16は井戸上層，10は井戸下層，８，９，11, 12は井戸上部礫群，15, 17～

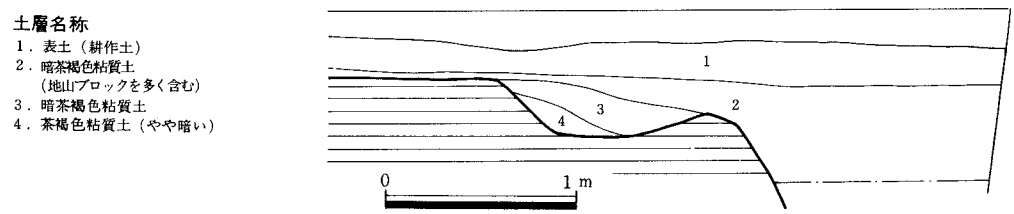


Fig.36　１号溝断面図（1/40）

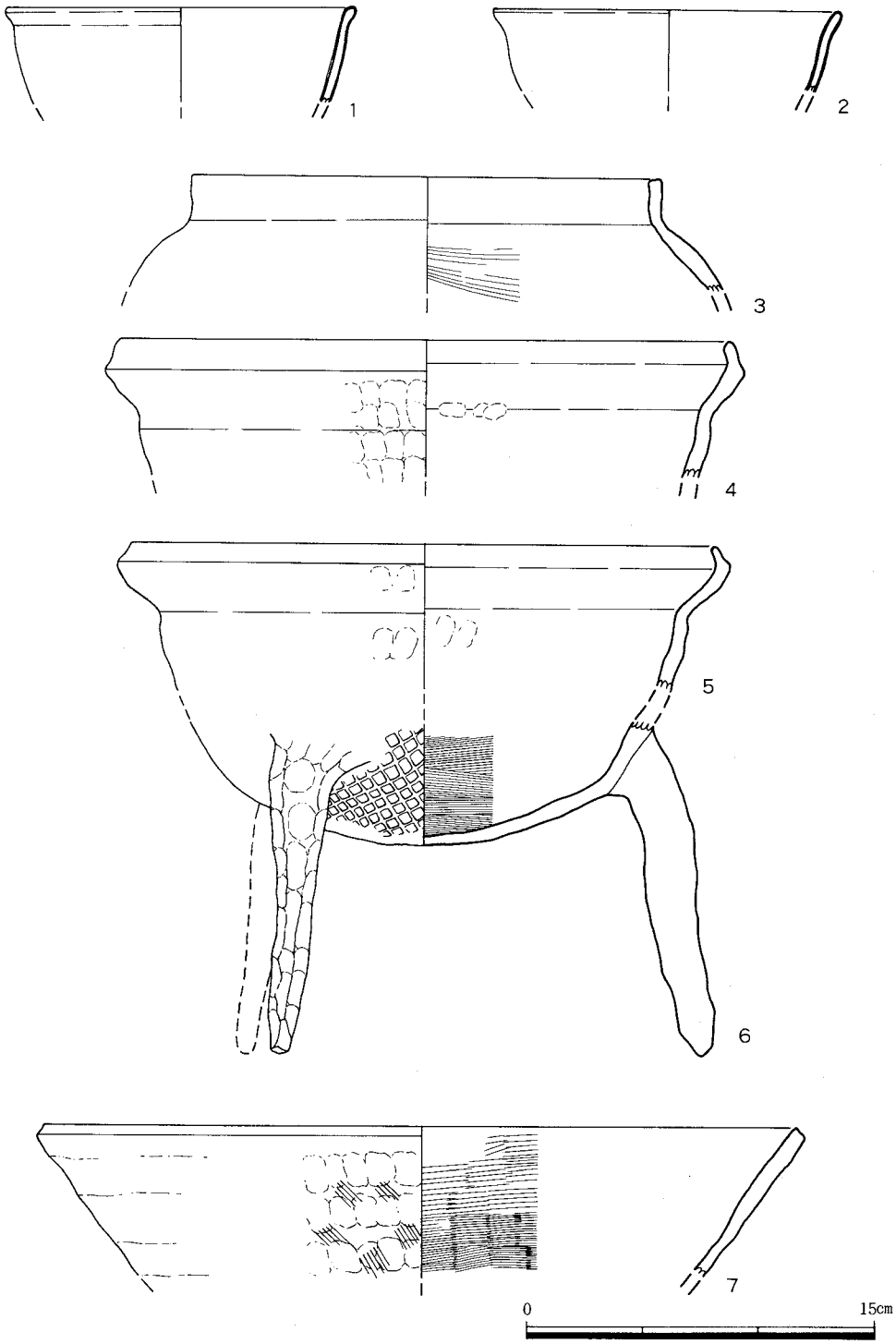


Fig.37　井戸出土遺物（1/3）

19は井戸石組内より出土した。

青　磁

碗（1，2）　1，2共口縁部細片であり，口端部はやや外反し口端部を丸くおさめる。1は内外面に淡青色釉を厚めに施し，2は黄緑色釉を施す。

陶　器

摺鉢（8，9）　いずれも備前焼系の口縁部細片である。8は口縁端部が"逆くの字状"に内側に屈折し，端部をやや尖り気味におさめる。8，9とも内外面はヨコナデ調整である。8の内面には8本単位の，9には6本単位の深い条線が施される。胎土は8，9共に2㎜内の砂粒を含み，焼成は良好。色調は8が黒灰色，9が明褐色を呈す。

瓦質土器

湯釜（3）　口縁部片である。口径20.1cmを測る。口縁部は胴部より屈曲し，2cmの高さを測り，直立する。外面はヨコナデ，内面は体部上半にヨコハケを施した後ナデ消す。胎土は3㎜内の砂粒をわずかに含む。焼成は良好。色調は灰色を呈す。

鼎（4～5）　4は口縁部片である。復元口径は4が27.1cm，5が26.4cmを測る。口縁部は体部との境で"くの字"に屈折し，更に口端部を内側に長くつまみ出し，丸くおさめる。口縁部外面，及び内面がヨコナデ，体部がタテナデを施す。5は破片より全体を復元した。復元口径25.0cm，復元器高22.0cm，脚長14.0cmを測る。形態は4とほぼ同様で体部に3本の支脚がつく。外面は口縁部から体部上半迄はヨコナデ，底部は格子目状の叩きを加える。内面は体部半迄がナデ調整。底部はヨコ，又はナナメハケを施す。支脚は指調整で仕上げる。胎土は4が3㎜内，5が1～2㎜の砂粒を少量含む。焼成はいずれも良好。色調は4が灰白色，5が淡灰褐色を呈し，5の外面には部分的に煤が付着する。

揑鉢（7）　口縁部片で，口径33.1cmを測る。体部は鉢形に開く器形で，口端部は中窪む。外面は1～2㎜目のナナメハケを加え，のちナデ消す。内面は上半に2㎜内外のヨコハケ，下半は1㎜目のタテハケを施す。1～3㎜の砂粒を含み，焼成は良好。色調は外面に煤が付着し，黒色を呈す。

土師質土器

摺鉢（10）　体部外面は磨滅のため調整不明。内面には5本単位の深い条線が入る。胎土は1～9㎜のかなり大きな砂粒を含む。焼成は普通。色調は明褐色を呈す。

滑石製品

石鍋（11）　口縁部片である。口径28.2cm，鍔部径33.4cmを測る。鍔部は上面が平坦になるように削り出されている。器厚は2.5cmである。口端部から内面にかけては丁寧な研磨を施す。外面は口縁部をタテケズリ，鍔上面は丁寧な研磨を施す。色調は黒灰色を呈し，外面の鍔下に煤が厚く付着する。

他に石鍋の転用品である用途不明石製品がある。現存長は7.4cmで左側辺に2ヶ所穿孔されており，石錘として利用された可能性がある。

石　器

石斧（12，13）　12は扁平片刃石斧であり，基部が欠損し，現存長3.9cm，幅2.6cm，厚さ1.4cmを測る。丁寧な研磨調整を行ない，刃部は片刃である。B面に使用痕がある。頁岩製で，色調は暗灰褐色を呈す。13は大型蛤刃石斧の刃部片である。現存長7.1cm，最大幅6.2cm，最大厚3.8cmを測る。両側辺には敲打調整痕が残る。A・B両面の刃部は研磨を施されるが，使用により刃部はややつぶれている。玄武岩製である。色調は淡青灰色を呈す。

叩石（14，15）　14は現存長6.2cm，最大幅5.4cm，最大厚4.9cmを測る。平面形は不整円形で，角礫を利用する。A・B両面に使用痕があり，両側辺は剝離している。色調は淡緑灰色を呈す。15は現存長6.1cm，幅7.0cm，厚さ3.5cmを測る。扁平な自然円礫を利用している。左側辺に使用による敲打痕が残る。下端部は長さ4.6cmに亘って欠損し，使用によるものと考えられる。石質は14が角閃岩であり，15が花崗岩である。

砥石（16，17）　16は現存長7.3cm，最大幅5.0cm，最大厚5.0cmを測る。A面と左側辺，上端を砥面として用いる。B面から右側辺は欠損する。色調は黄褐色を呈す。17は完形である。最大長24.7cm，最大幅9.7cm，最大厚10.5cmを測る。不整な細長い形状を呈す。砥面はA面のみである。周囲は荒割成形痕を残す。断面が不整な多角形を呈し，安定が悪く，使用時に何らかの方法で砥面を水平に固定し，使用したと思われる。石質は16が砂岩で，17は頁岩である。

臼（18，19）　18は茶臼の上臼1／4片である。復元径18.5cm。器高13.0cm，上面の周縁幅は3.0cm，芯棒孔径2.8cmを測る。全体に表面の欠損が著しいが，研磨仕上げである。目は小片で全容はつかみ得ないが，8分画主溝8本副溝7本と考えられ，時計回りである。目は使用によって磨滅している。周縁のすり合わせ部を作り出す為，中心で0.6cmほど窪む。側面中央に表面を欠損するが，長方形を呈した挽き木の横打ち込み孔が穿れている。口径が2.4×1.9cm，現存の奥行き3.7cmを測る。19は挽き臼の下臼である。一部を欠失するがほぼ完形である。直径36.2×35.8cm，器高9.4cm，芯棒孔径2.6cmを測る。目は6分画主溝6本副溝5～7本で，時計回りにめぐる。目溝は幅3～5mm，深さは3mm程で，断面三角形を呈す。使用でかなり磨滅する。芯棒中心部は径14.3×13.4cm，深さ1.5cmを測り，皿状に窪む。成形方法は磨滅がひどく不明。石質は24が鉄分が全体に付着し，灰褐色を呈する砂岩，19が黒褐色を呈す多孔質の凝灰岩である。いずれも石組より出土。特に19は幾つかの破片に分けられ石組石材として使用されていた。

鉄　滓

4個出土した。いずれも10～25cmと大きい。内訳は井戸内より2個，石組より2個である。

I号溝出土遺物（Fig.40，PL.21）

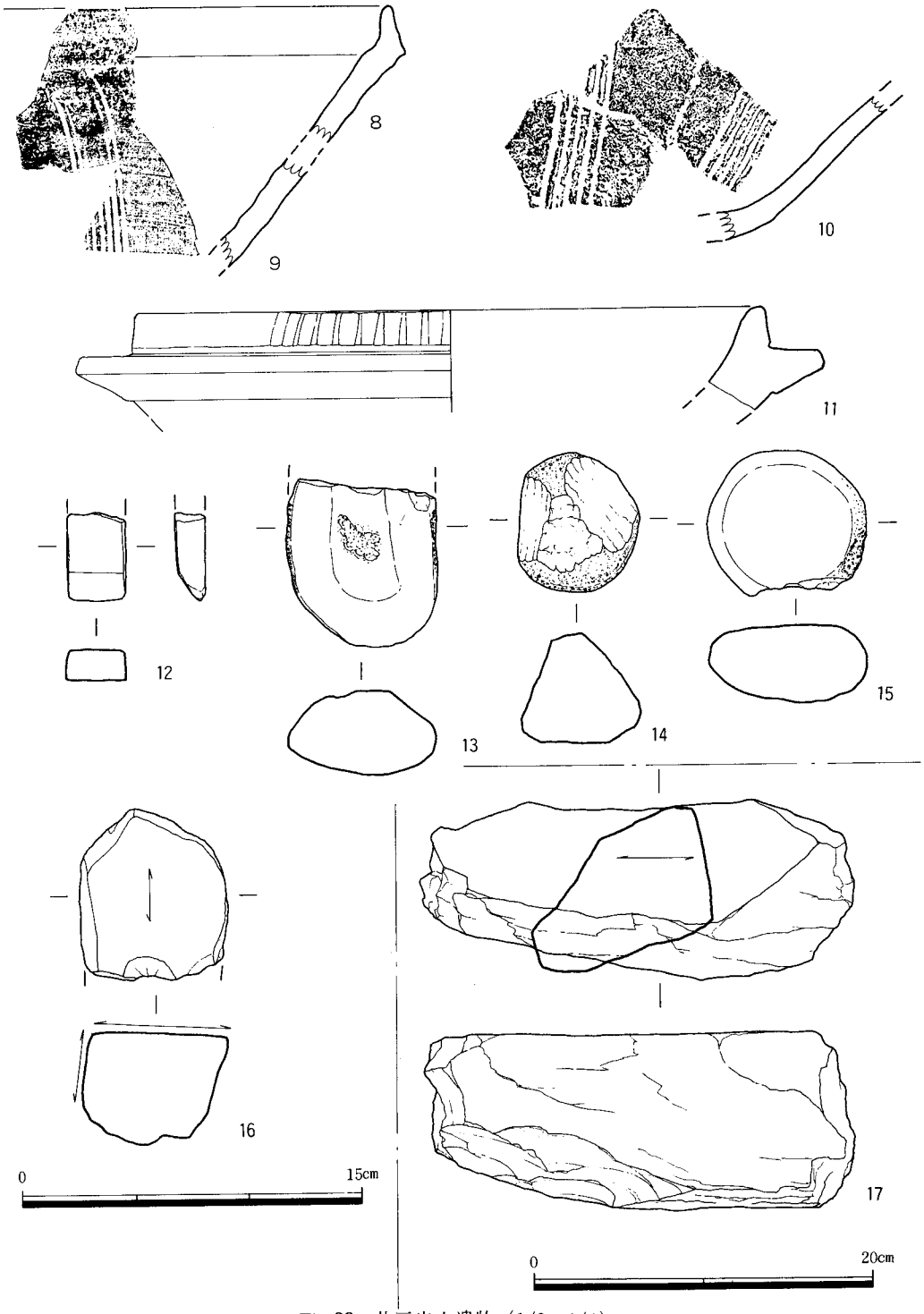


Fig.38　井戸出土遺物（1/3, 1/4）

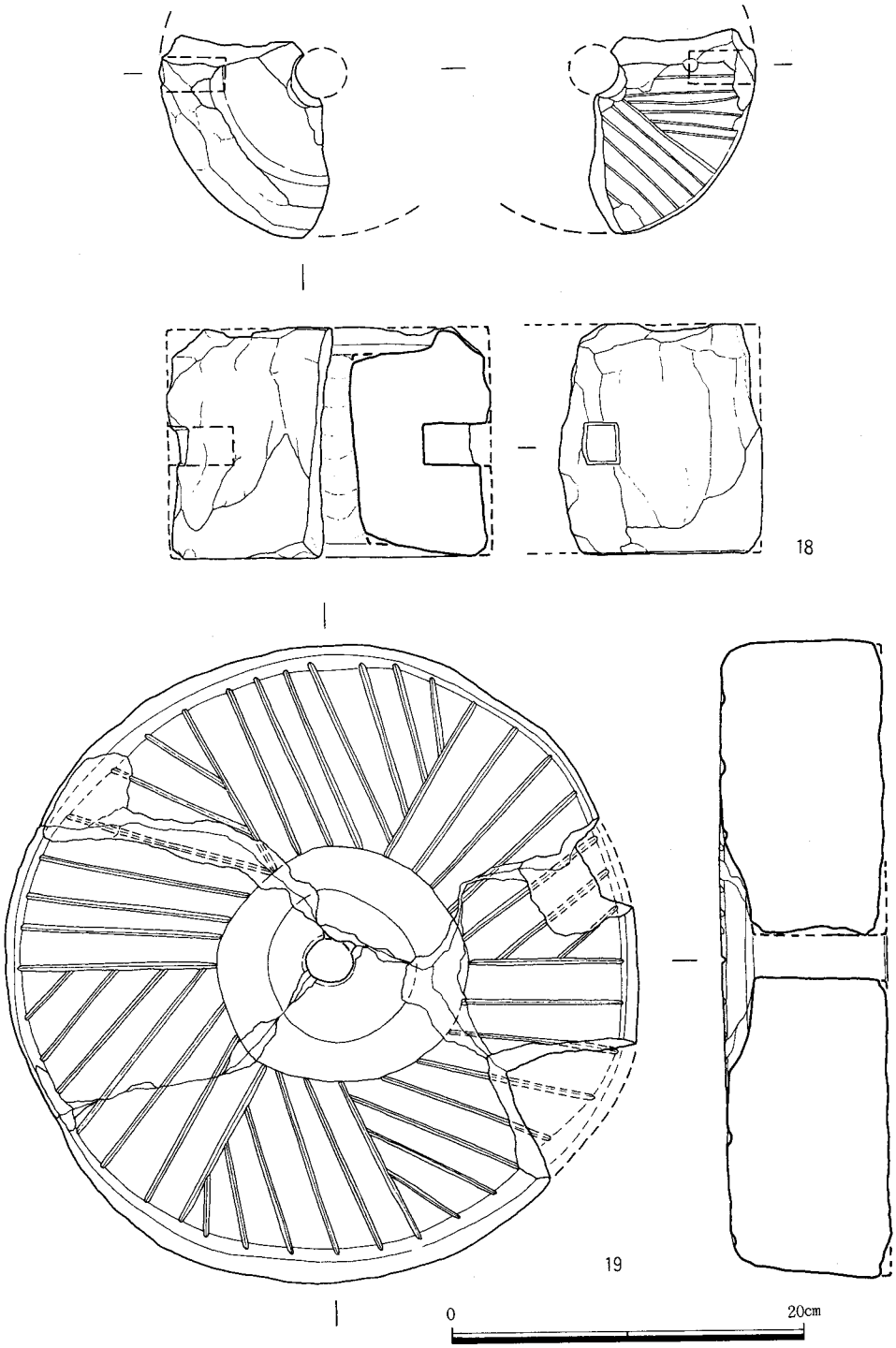


Fig.39　井戸出土遺物（1/4）

瓦質土器

湯釜（20）　胴部片で，復元胴径25.6cmを測る。胴部は鍔上面より内弯して内側にすぼまる。鍔は上面を水平に引出す。外面は鍔より上部は指ナデ調整し，鍔より下部は細いハケ後ナデ消す。胴部上半部分には櫛による鋸歯状の点列文が施される。内面は全体にヨコハケを施す。胎土は赤褐色粒子を含み，焼成は良好。色調は内面が明褐色，外面は一部に煤が付着し，灰味をおびる。

Pit出土遺物（Fig.40，PL.21）

青　磁

碗（21）　鎬蓮弁碗の底部片で，高台径5.7cmを測る。高台は高くケズリ出し，畳付部を細くケズリ込む。体部は緩やかに開き気味に内弯する。内底見込みから高台外面迄淡緑色の釉を施す。内底見込みに蓮の花文をスタンプする。Pit 7より出土。

石　器

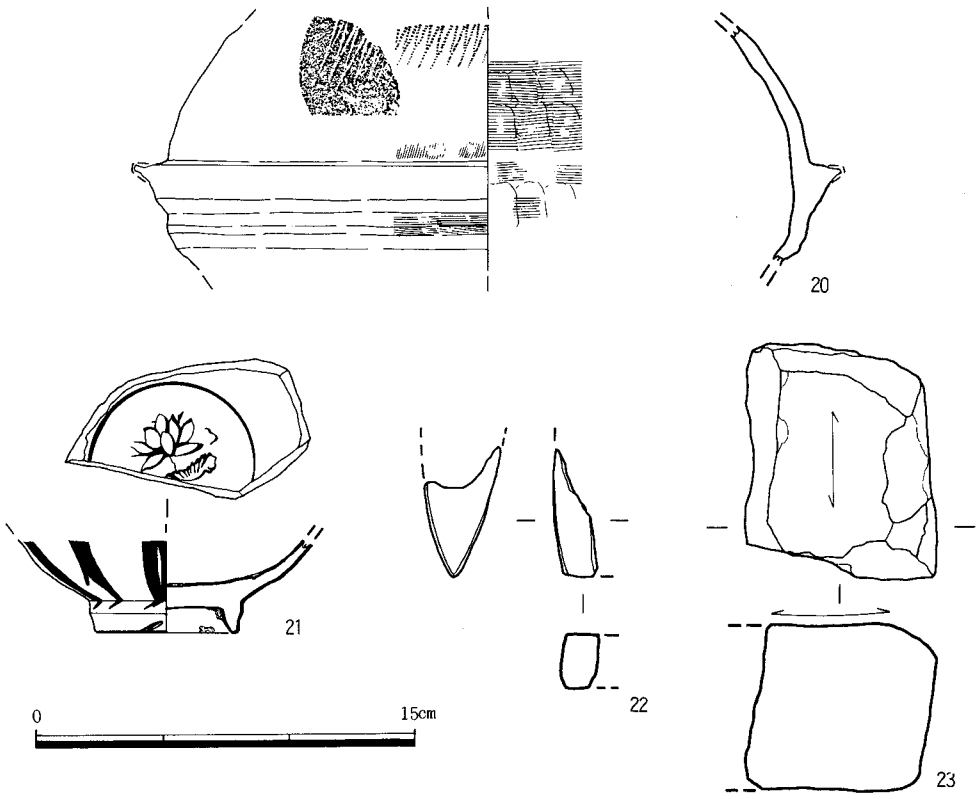


Fig.40　1号溝，及びPit出土遺物（1/3）

石斧（22）　抉入石斧の刃部片である。現存最長5.2cmを測る。研磨で刃部を作り出している。刃部には使用による擦痕がある。頁岩製で暗青色を呈す。Pit37より出土。

砥石（23）　最大長9.3cm，最大幅7.6cm，厚さ6.7cmを測る。A面を砥面として用いる。上下の小口と左側辺は欠損する。右側辺は雑な粗割成形で，B面にはノミ跡が残る。板碑を転用している。細粒砂岩である。色調は褐色を呈するが，部分的に二次焼成を受け赤変する。

小　　結

昭和54年度の第36次調査に引きつづき西側を調査したが，当時構造が明確でなかった柵状遺構や溝等に新たな資料を得ることができた。第36次調査も含めて考えると遺構はⅠ～Ⅴ期に細分することが可能である。

Ⅰ期は第36次調査で報告したように弥生時代中期後半の甕棺墓である。この甕棺墓は東西50m四方に限られることは述べた通りであり，検出の甕棺墓は西端部に位置する。

Ⅱ期は第36次調査検出の住居跡内の貯蔵穴と考えられるPit 6である。4世紀中頃が考えられる。[註7]

Ⅲ期は柵状遺構を中心とするが，当該地では第36次調査検出の柵状遺構より約12mの間隔で，並行する柵状遺構を検出している。主軸方位はN 35°Wに置いており，3本柱で構造され，掘方，柱根の規模は全て第36次調査柵状遺構と合致する。各々の柵状遺構の主柱間は約40尺を測るもので，2重構造の柵を巡らす遺構が存在するものと思われる。柵状遺構の方向は台地の主軸方向にほぼ合っており，この舌状台地の立地を意識しているので柵状遺構が巡る範囲も幅120mを測る当該台地上に限定されるものと思われる。又，東側の第64次調査では3間×4間の規模で総柱の建物を2棟検出したが，この建物は南北方向に連なっており，主軸方位はほぼ柵状遺構に合致する。とすれば，二重の柵状遺構によって囲まれた内側に掘立柱建物が存在することが云えよう。1号柵状遺構は4号土壙に切られている。第36次調査で検出した土壙の内，2号土壙から14世紀代の香炉片を検出しているので，他の土壙もほぼ同時期が考えられる。よって柵状遺構の時期は14世紀以前と思われる。又，この地域は旧字名を「中園」と称し，16世紀中頃の屋敷地として「下中園屋敷」として文書に表われる。[註8] 前回に於いて鎌倉時代からの屋敷地として利用されたものと考えた。しかし，主軸方位が条里の方位から西に大きく振れている点や規則的な建物の配置を考慮するとこれらの柵状遺構，及び掘立柱建物は律令時代以前に位置づけることが可能かもしれない。今後，第64次調査を待って再度検討したい。

Ⅳ期は当該調査で検出した井戸がある。この井戸は割石を用いた乱積みの井側を有している。有田，小田部の井戸は概して弥生時代以来素掘り井戸が主体であり，井戸側に石材を利用しているのは中世末に至ってからである。第44次調査の井戸は玉石を用いた井戸側を有しているが，

時期は16世紀末から17世紀初頭が考えられる。当該井戸出土の遺物を検討すると，青磁碗は小さく外反する口縁部を玉縁状に形成しており，釉はいずれもくすんだ青緑色である。これらは15世紀～16世紀に出現する明代の青磁である。備前系の陶器８，９は口縁部の特徴から第Ⅳ期の後半に属し，15世紀後半から16世紀初めの時期が考えられる。７の土師質の鍋は第19次調査で検出した鍋に比べて,内面に体部と口縁部の境である稜を有しないことから古い形態をもつものと思われる。鼎形土器は大内氏が筑前支配によって流入する土器である。４，５，６の器形は口縁端部の立ち上がりが発達しており，15世紀～16世紀中頃迄の時期が考えられる。総じて15世紀～16世紀の特徴をもった土器群ではあるが，明の染付碗を伴っていない事を考えると15世紀後半から末期を考えるのが妥当であろう。

Ⅴ期は当該地検出の1号溝，及び第36次調査の１号溝が相当する。第36次調査の溝は東西方向に延びており，当該地に於いて南北方向の溝である１号溝に接続する可能性がある。１号溝は井戸の南側で終わっているので，この溝は南北から東西方向に曲がる矩形を呈した溝と云えよう。第36次調査の溝より出土した明代の赤絵付の皿から年代はほぼ16世紀前半から中頃が考えられる。とすれば16世紀中頃に大内氏の早良郡代大村興景に知行地として与えられた「中園名」又は「下中園屋敷」はこの地域を指していると思われる。[註9]

その他，掘立柱建物や土壙を検出しているがどの時期に相当するのか位置づける事ができなかった。今後の資料の増加と共に検討を加えてゆきたい。

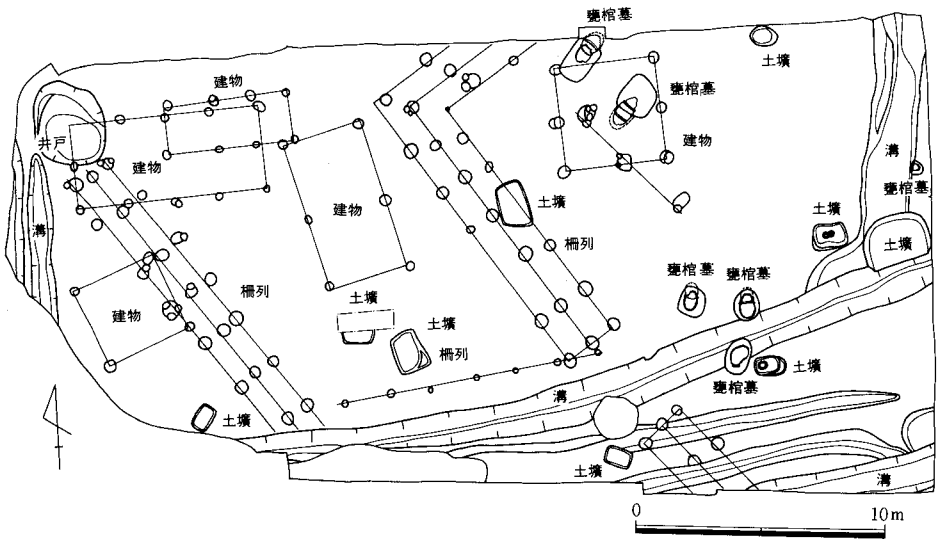


Fig.41　第36，47，86次調査遺構配置図（1/300）

4．第47次調査

調査の概要

調査対象地は福岡市早良区有田1丁目28－7，28－8番地に所在する。調査対象面積は372m²である。

有田地区での台地の標高は12～14mを測り，平坦部を形成するが，この平坦部は北東，北西の両方から谷が入る為，約200m四方に限られている。当該地は，この平坦部のほぼ中央に位置しており，標高12mを測る。この地域は昭和40～43年の区画整理に伴って第1，2次調査が実施されいる。昭和58年度迄に21ヶ所の発掘調査が終了しており，第6，19，77次調査が南側に隣接して発掘調査されている。とりわけ道路をはさんで南側に隣接した第77次調査地では弥生時代前期の溝，古墳時代住居跡，律令時代掘立柱建物，及び溝，柵列，中世の濠等を検出している。道路を隔てて南東側に隣接する第19次調査地では古墳時代の住居跡や中世の溝，及び14～16世紀の瓦を多量に含む濠1条，井戸等を検出した。それぞれの調査での遺物は各時代に亘っており，良好な資料が出土している。特に第19次調査の2号溝からは14～16世紀の瓦が多量に出土したことは特記すべきものである。

昭和56年4月に開発に伴う埋蔵文化財の事前審査願いが文化課に申請され，試掘調査を行なった。

試掘結果では区画整理による削平を受けているものの，南側と北側の東西トレンチで溝をそれぞれ1条ずつ検出した。遺存状況は悪いものの遺構が全面に存在すると予想された。

発掘調査は昭和56年5月8日～26日迄実施した。遺構面は南側で

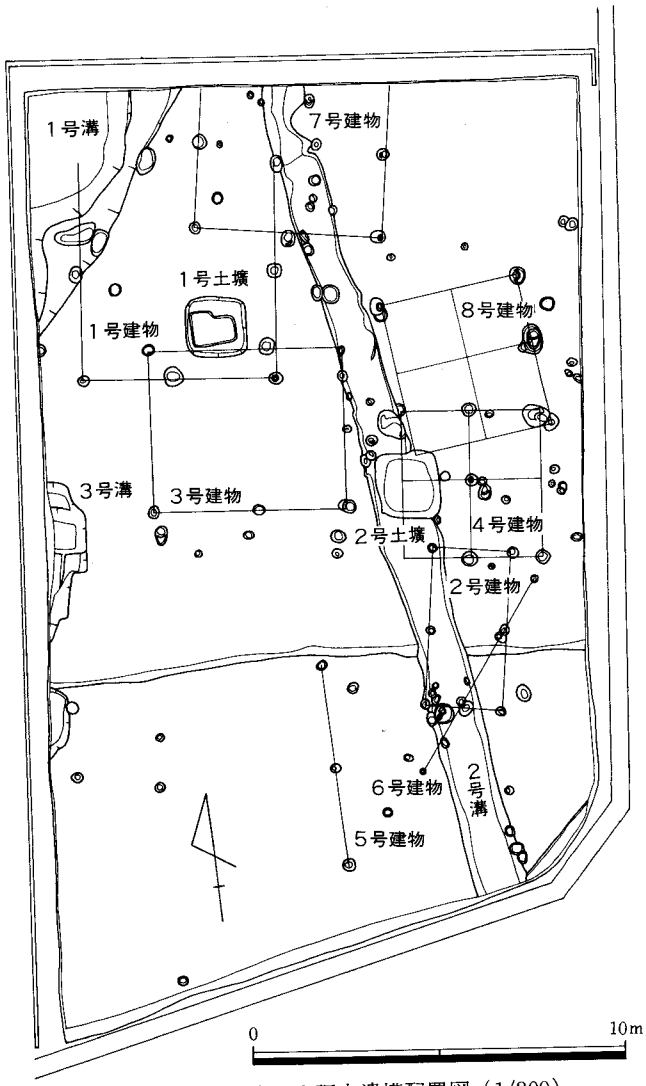
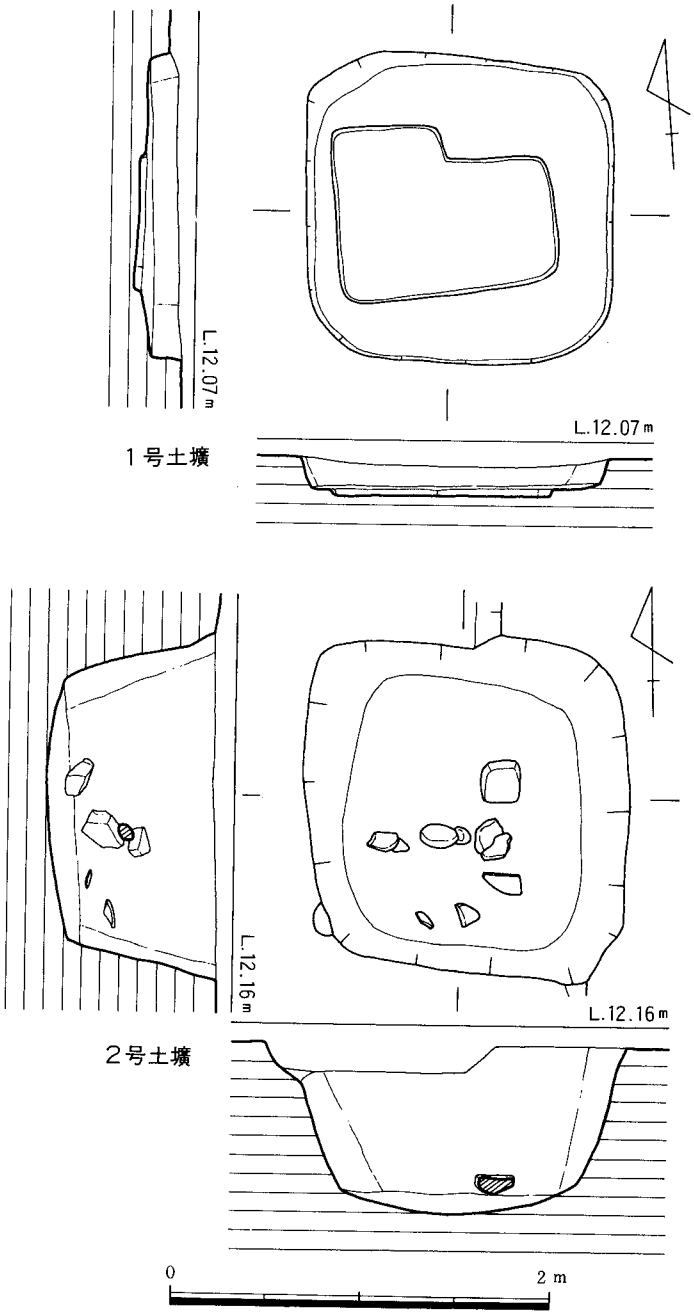


Fig.42　第47次調査遺構配置図（1/200）

は表土下10cmで検出する。調査区中程で20～30cm段落ちし，北側での遺構面の深さは約40cmである。遺構面迄の堆積土は南側は耕作土,北側は耕作土,及び褐色粘質土である。地山面は砂質の暗黄褐色粘質土である。試掘結果どおり，遺構面の削平はひどく遺構の遺存状態は不良であった。旧畑地のうね跡が何条も残り，凹凸がはげしい。検出遺構は中世の土壙２基，中世の溝状遺構３条，掘立柱建物８棟である。遺物は２号土壙から須恵器，鉄器類，土師器，陶磁器，瓦質土器，瓦類，板碑が，１号溝から土師器，瓦質土器，陶磁器，瓦類が出土している。特に2号土壙と1号溝出土の瓦類は第19次調査地点出土のものと同時期である。



１号土壙

２号土壙

Fig.43　１号，２号土壙（1/40）

検出遺構

土　壙（Fig.43，PL.23）

１号土壙

長さ1.62m，幅1.65m，深さ0.16mを測る。隅丸方形の土壙である。底面には更に1.15×0.92m，深さ4cmを測る浅い不整長方形の掘り込みがある。底面はほぼ平坦を呈す。遺物は土師器の細片や木炭片を少量検出した。

２号土壙

２号溝を切る，長さ1.77m，幅1.72m，深さ88cmを測る。隅丸方形を呈する土壙である。断面は船底形を呈する。覆土は土層図のように大きく３層に分けられる。

①～③層は茶褐色粘質土を主体に黒褐色粘質土や明褐色粘質土を混入する。④～⑨層は暗茶褐色粘質土を主体に礫や瓦，茶褐色地山粘土ブロックを混入する。⑩層は底面直上の黒褐色粘質土で，木炭を含む。覆土中に礫や板碑，炭化物を混入し，堆積状況も土層がレンズ状を示すことから，少しずつ埋ったものと考えられる。遺物は主に④～⑨層から多く出土した。

遺物は弥生式土器片，須恵器，土師器，陶磁器，瓦質土器，瓦類，砥石，石塔類，鉄製品，鉄滓等が出土した。又，細片で図示し得なかったが，梅花文を象嵌した高麗青磁の細片が4点出土している。

掘立柱建物

8棟検出した。他に根石を有するものもあるが，建物としてまとめ得なかった。

1号掘立柱建物（Fig.44）

北西隅で検出した。1号溝によって切られる。桁行全長5.85m，梁行全長5.10mを測る2間×1間の掘立柱建物である。主軸をN7°Eに置く。柱穴径25～35cm，深さ26～80cmを測る。柱根径は10cm前後である。一部根石が残る。柱穴より須恵器の細片1点出土。

2号掘立柱建物（Fig.44）

調査区南東側で検出した。2号溝を切る。桁行全長4.20m，梁行全長2.10mを測る2間×1間の掘立柱建物である。主軸をN10°Eに置く。柱穴径は20～30cm，深さは20～50cmを測る。柱穴径は10cm前後である。

3号掘立柱建物（Fig.44）

1号掘立柱建物と切り合う。桁行全長5.25m，梁行全長4.20mを測る2間×2間の掘立柱建

tab. 5　第47次調査掘立柱建物計測表

単位cm

	規模	方向	桁行		梁行		方位	床面積(m²)	備考
			実長	柱間寸法(尺)	実長	柱間寸法(尺)			
1号	2×2	南北	585(19.5)	10・9.5	510(17)	8.5・8.5	N7°E	29.84	
2号	2×1	南北	420(14.0)	7・7	210(7)	7	N10°E	8.82	
3号	2×2	東西	525(17.5)	9.5・8 10.5・7	420(14)	7・7	N85°E	22.05	
4号	2×2	東西	390(13)	6.5・6.5	390(13)	6.5・6.5	N83°W	15.21	
5号	2	南北	540(18)	9.5・8.5			N1°30′W		
6号	3	南北	600(20)	5.5・7.5・7			N36°30′E		
7号	2×1	東西	510(17)	8.5・8.5	225(7.5)	7.5	N80°30′W	11.48	
8号	2×2	南北	405(13.5)	8・5.5	390(13)	6.5・6.5	N6°W	15.80	

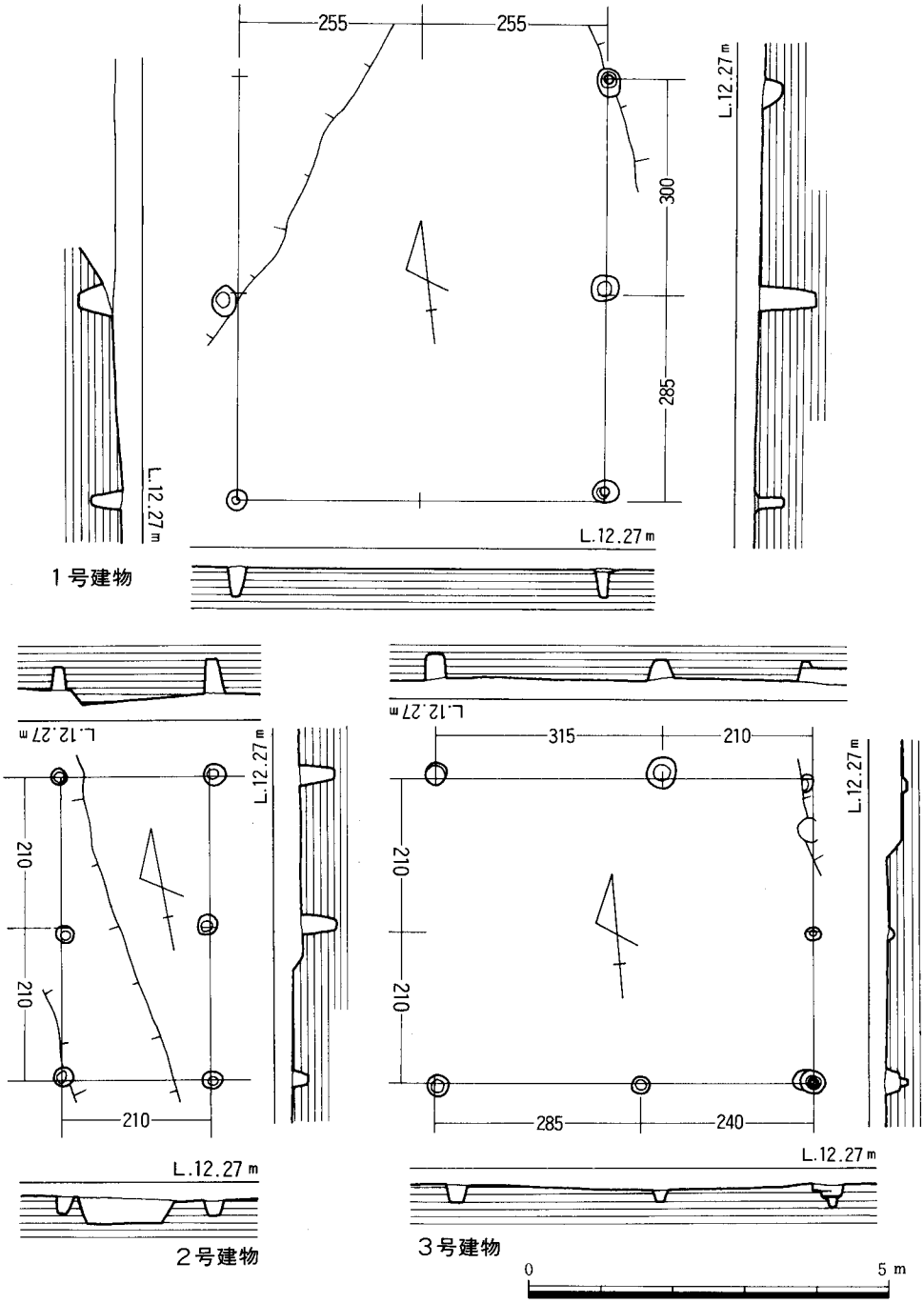


Fig.44　1号～3号掘立柱建物（1/100）

物である。主軸をN85°Eに置く。柱穴径は15～45cm，深さ8～35cmを測る。柱痕径は10cm前後である。遺物は土師皿と瓦質土器の細片が少量出土した。

4号掘立柱建物（Fig.45）

2号溝，2号土壙と切り合う。桁行全長3.90m，梁行全長3.90mを測る。2間×2間の掘立柱建物である。主軸をN83°Wに置く。柱穴径15～20cmを測り，深さは8～50cmを測る。柱根径は約10cmである。遺物は土師器，鉄製品の細片が出土している。中央にPitがあり，総柱の建物と思われる。3号掘立柱建物と主軸を同じくし，同時期であろう。

5号掘立柱建物（Fig.42）

調査区南東側で検出した。桁行全長5.4mを測り，桁行2間を測る。主軸をN1°30′Wに置く。梁行は確認できなかった。柵列の可能性もある。

6号掘立柱建物（Fig.42）

調査区東側で検出した。桁行全長6.00m，桁行3間を測る，梁行は確認出来なかった。柱根径は12cm前後である柵列の可能性もある。

7号掘立柱建物（Fig.45）

調査区北側で検出した。2号溝と切り合う。桁行全長5.10m，梁行全長2.25mを測る2間×1間の掘立柱建物である。柱穴径24～35cm，深さ35～45cmを測る。

8号掘立柱建物（Fig.45）

桁行全長4.05m，梁行全長3.90m

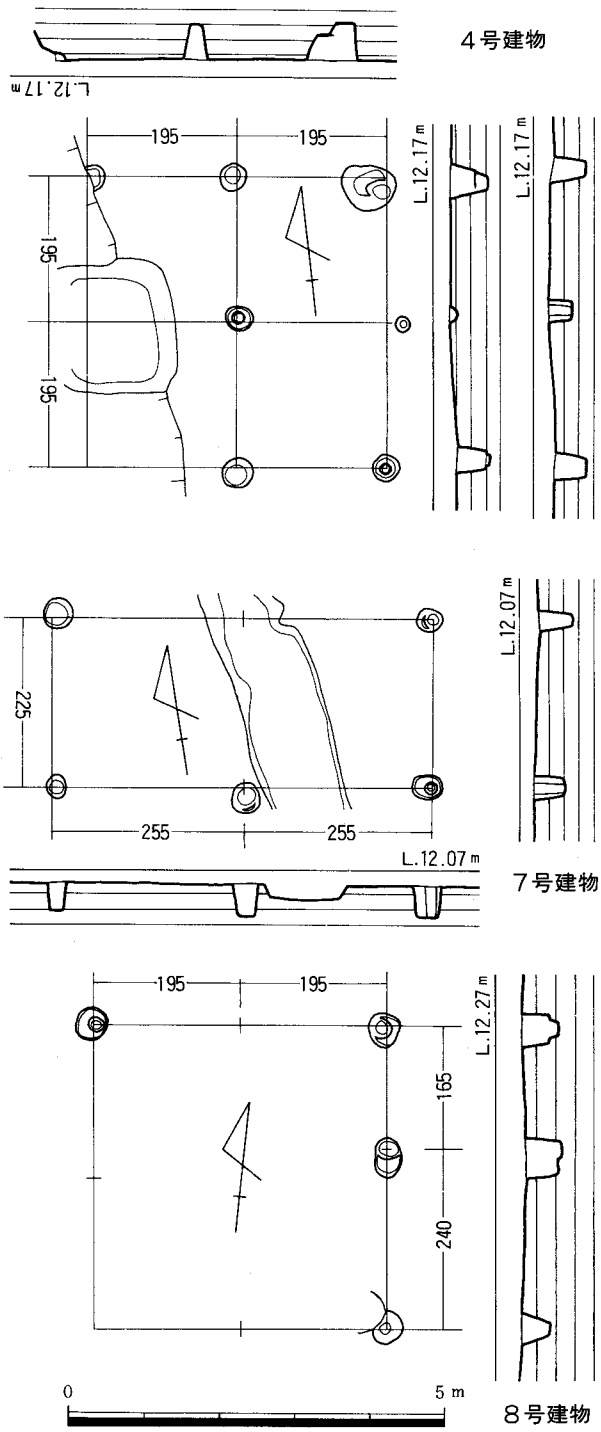


Fig.45　4号，7号，8号掘立柱建物（1/100）

を測る2間×2間の掘立柱建物である。柱穴径40～75cm，深さ20～50cmを測り，柱根径は15cmである。

溝状遺構

3条検出した。内2条は調査区に一部かかったのみで形状，規模は不明である。形状を明らかにし得たのは2号溝の1条だけである。

1号溝（Fig.46，PL.24－3）

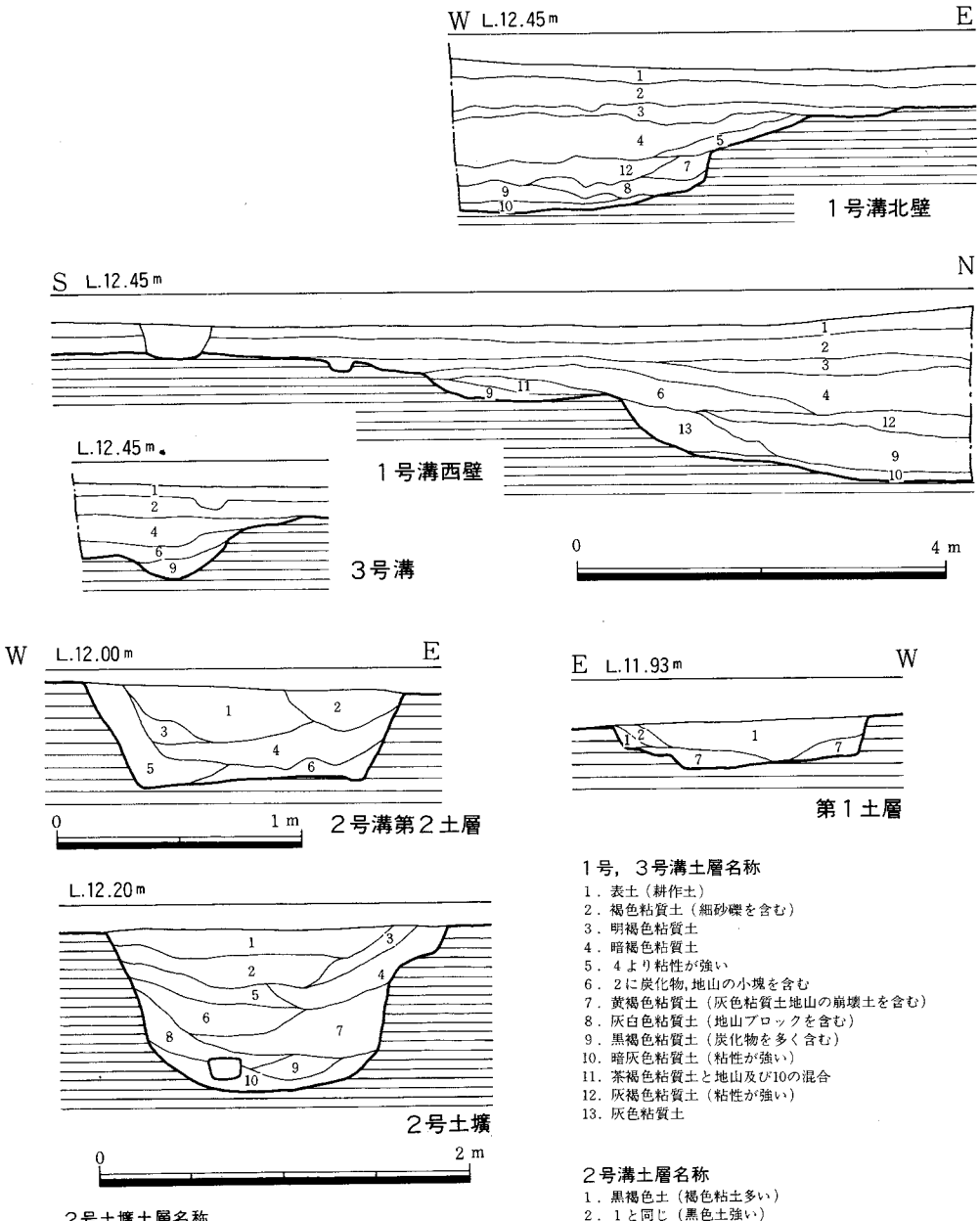
調査区北西隅の境界地に検出した。南北方向は現存長6.4m，東西方向は現存長4.2m，深さは1.4mを測る。平面形は不明である。濠状遺構のコーナー，又は終末部分と思われ，第53次調査で検出した濠状遺構に接続すると思われる。断面形は2段掘りの底面逆梯形状を呈す。覆土は大きく上・中・下の3層に分けられる。上層は3～6層で明茶褐色粘質土を主体とし，最大厚50cmを測り，レンズ状に堆積する。中層は12層で灰色粘質土である。厚さ20cm前後の比較的薄い層で，東壁側が厚くなる。下層は7～10，13層で黒褐色粘質土を主体とし，灰白色や黄褐色地山粘土ブロックを含む。厚さ50～60cmを測る。土層は自然埋没ではなく，人為的に廃絶された状況を示す。又，東壁からの地山ブロックの流れ込みは溝の東側に土塁の存在を予想させる。遺物は上・中層を中心に土師器，瓦質土器，陶磁器や瓦類が出土している。又，完形の塼が下層上面より出土した。遺物の年代差は少なく，16世紀の一時期に廃絶されたと思われる。

2号溝（Fig.46，PL.24－1，2）

調査区南東隅から北壁中央に延びる。主軸方向はN8°Wである。現存長22.4m，溝幅1.0～1.5m，最大の深さ43cmを測るが，北側では遺構面が削平されるため，深さは約15cm浅くなる。断面形状は逆台形状を呈し，溝底はほぼ水平である。遺物は1号溝と同様に弥生，古墳時代土師器，瓦類，砥石等が出土している。多くは細片で流れ込みである。

3号溝（Fig.46，PL.24－4）

調査区西側境界で検出した。溝状遺構の先端部である。現存の長さ8.6m，現存の幅1.6m，最大の深さ0.6mを測る。覆土は暗褐色～黒褐色粘質土で，1号溝と同じである。遺物は16世紀代の丸瓦が少し出土している。形態が不定形な長方形状であることから，他遺構との切り合いも考えられる。



1号，3号溝土層名称

1．表土（耕作土）
2．褐色粘質土（細砂礫を含む）
3．明褐色粘質土
4．暗褐色粘質土
5．4より粘性が強い
6．2に炭化物，地山の小塊を含む
7．黄褐色粘質土（灰色粘質土地山の崩壊土を含む）
8．灰白色粘質土（地山ブロックを含む）
9．黒褐色粘質土（炭化物を多く含む）
10．暗灰色粘質土（粘性が強い）
11．茶褐色粘質土と地山及び10の混合
12．灰褐色粘質土（粘性が強い）
13．灰色粘質土

2号溝土層名称

1．黒褐色土（褐色粘土多い）
2．1と同じ（黒色土強い）
3．2と同じ
4．1より暗い
5．黒色粘質土（褐色土の粒子少ない）
6．暗褐色土（黒色土を含む褐色土の混入多い）
7．黄褐色粘質土（地山と黒褐色粘質土の混合）

2号土壙土層名称

1．茶褐色粘質土（黒褐色粘質土少量，地山粒子，木炭を含む）
2．暗茶褐色粘質土（　〃　〃　〃）
3．茶褐色粘質土と明褐色粘質土の混合土
4．灰褐色粘質土（地山粒子を多く，木炭少量を含む。やや軟質）
5．暗茶褐色粘質土（やや軟質）
6．5と同じ（明茶褐色地山ブロックを混入）
7．〃　〃　（地山ローム粒子を多量に含む）
8．5よりも粒子が緻密
9．暗灰褐色粘質土（地山ブロック，土器片を含む。やや軟質）
10．黒褐色粘土（木炭を含む，やや軟質）

Fig.46　1号～3号溝，2号土壙土層図（1/80，1/30，1/40）

出土遺物

2号土壙出土遺物（Fig.47・48, PL.26）

須恵器

壺（1）　口縁部片である。口径16.1cmを測る。口縁部は外反し，口端部に段を有す。口縁部直下に2条の突帯をもち，その下に波状文を施す。胎土は精選されている。焼成は良好。外面には自然釉が部分的にかかり，色調は黒灰色を呈す。

白　磁

碗（2）　口縁部片である。口端部は外反し，尖り気味におさめる。乳白色の透明釉が施されるが，口端部は口ハゲである。胎土は淡灰白色を呈し，内面に釉だれがある。

青　磁

碗（3）　体部片である。外面には花文，内面には雷文と花文をヘラ描きする。内外面に淡緑色釉が施され，胎土は青灰色を呈す。

土師器

皿（4～6）　口径は4が7.2cm，5が6.9cm，6が6.7cm，器高は4が1.5cm，5が1.1cm，6が1.4cm，底径は4が5.6cm，5が5.3cm，6が5.6cmを測る。4，5はヨコナデを施し，底部は糸切痕を残す。6は磨滅がひどく調整不明。胎土はいずれも精選されており，焼成は良好。色調は4が明褐色，5が淡黄褐色，6が茶褐色を呈す。

瓦　器

碗（8）　底部片である。底径7.1cmを測る。大きく開く体部と，外方に開いた断面“コの字状”を呈す高台を持つ。全体に磨滅がひどい。胎土は精選されているが，焼成はややあまい。色調は灰白色を呈す。

瓦質土器

火舎（9）　底部径26.5cmを測る。体部は底部より74°の角度で開き，断面三角形状の突帯をもつ。内外面とも磨滅が著しいが，内面に指ナデ調整痕が残る。胎土は5mm内の砂粒を少量含む，焼成は良好。色調は外面で暗灰色を呈す。

土師質土器

鍋（7）　口縁部細片である。口縁部は体部より外方に少し開き，内弯気味に口端部を平坦におさめる。内面はヨコナデを施す。胎土は砂粒を多く含み，焼成は良好。色調は淡茶褐色を呈し，外面は煤が付着し，黒変する。

瓦　類

32点出土した。内訳は平瓦28点，丸瓦2点，道具瓦1点，塼1点である。大部分は細片である。

平瓦（11）　28点あるが，大部分は細片で図示し得ない。いぶしのかかるものもある。(11)は完

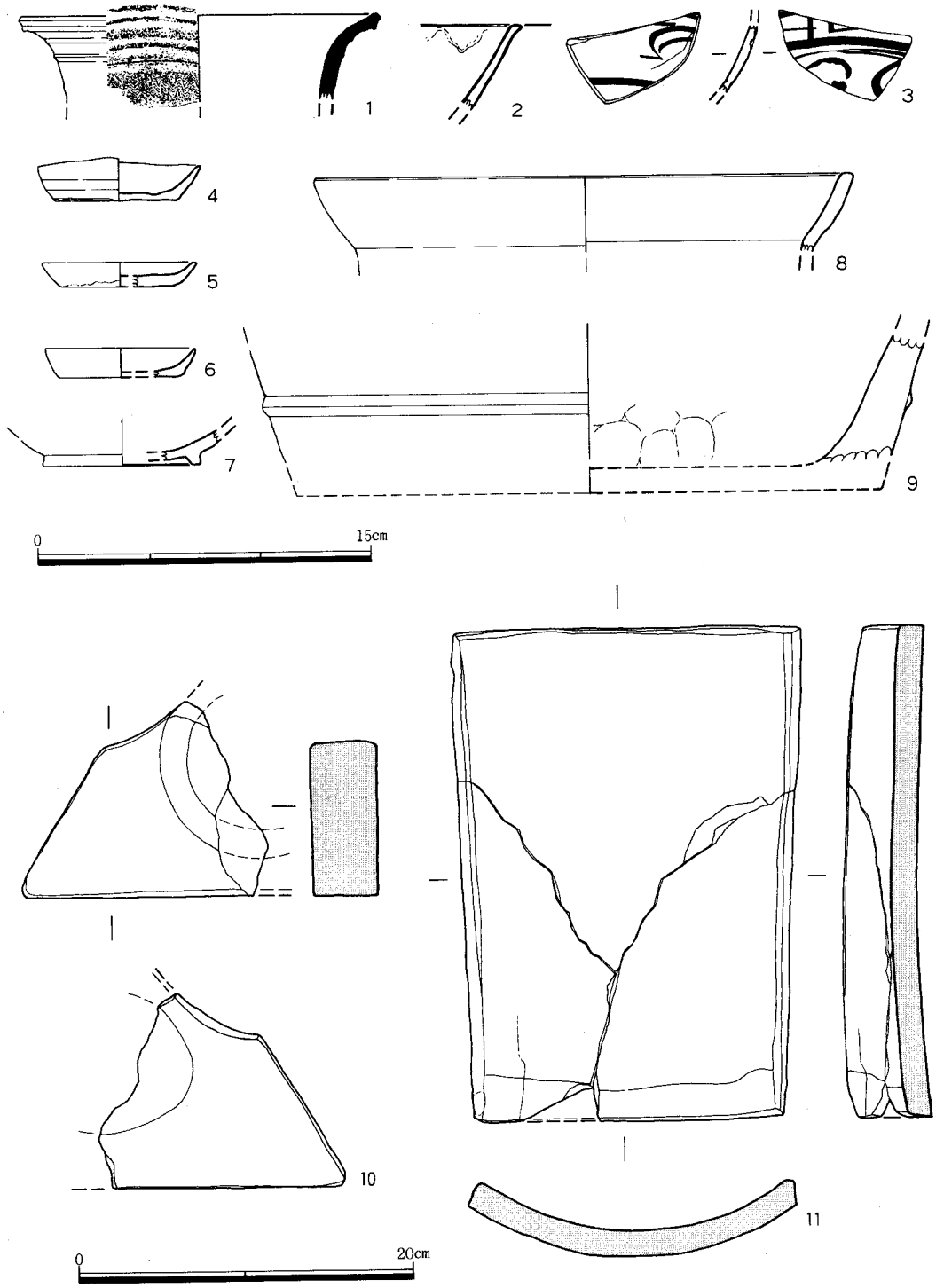


Fig.47　2号土壙出土遺物（1/3，1/4）

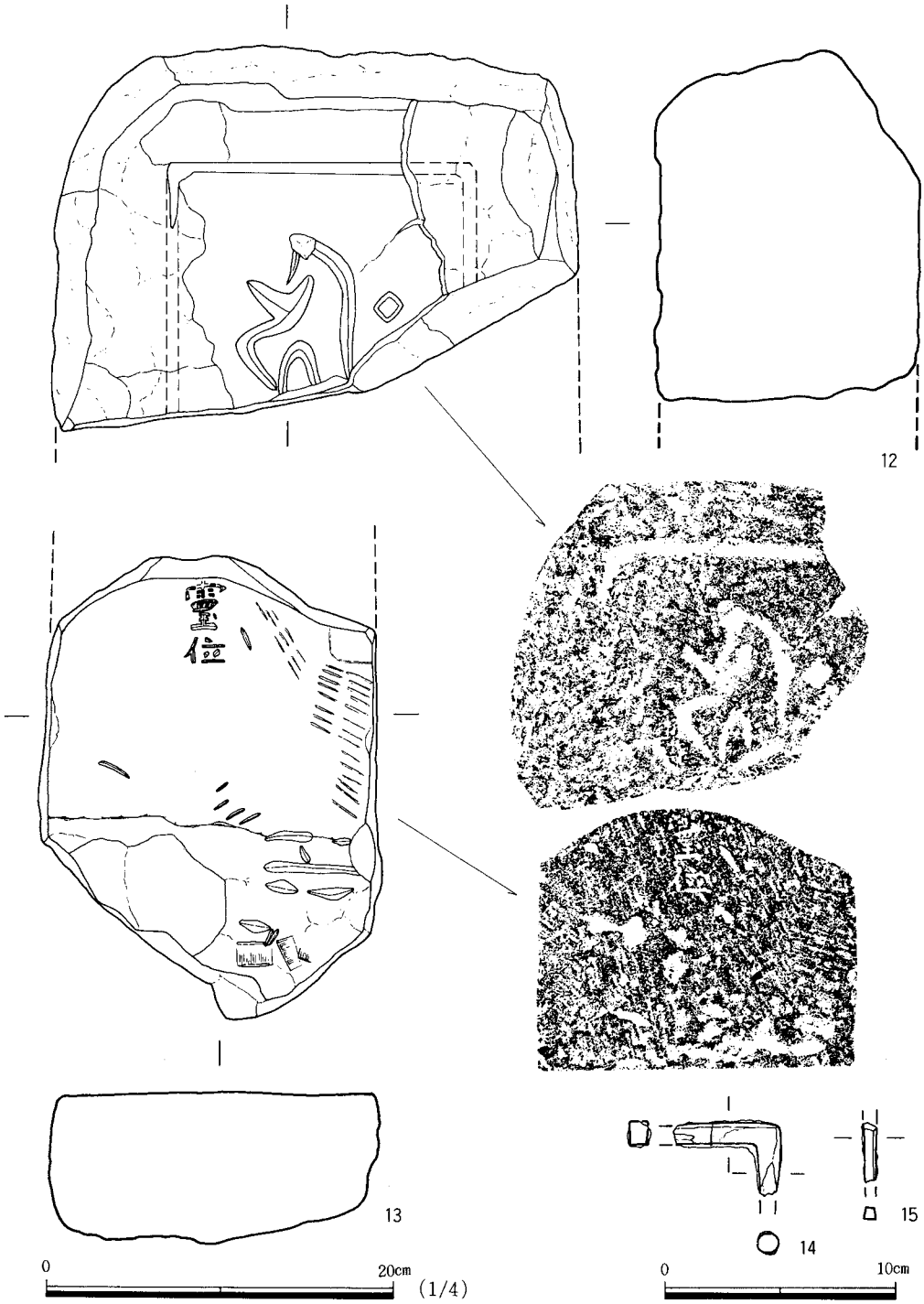


Fig.48　2号土壙出土遺物（1/4, 1/3）

形品である。長さ29.7cm，後端部幅18.7cm，前端部幅21.0cm，器厚は後端部で1.4cm，前端部で1.5cmを測る。調整は谷，背部ともにタテ方向のヘラケズリのちナデである。両側辺，両端部はヘラによる面取りである。胎土は最大5mmの砂粒を含み，焼成は良好。色調は褐色を帯びた灰白色を呈す。

瓦　類

丸瓦　　破片で，2点出土している。すべて背部に縄目叩痕が，谷部は糸切痕が残る。

道具瓦（10）　道具瓦の破片である。不整三角形状を呈している。底径28.7cm，現存高11.8cm，厚さ3.9cmを測る。A面ではヘラにより円形状のケズリ込みがある。B面では中央部に直径12.0cmを測る円形の筒部の貼付け痕を残す。A面はナデを施し，離れ砂が付着する。B面はヘラ削りのちナデを施す。各側辺もヘラケズリのちヨコ方向のナデを施している。胎土は3mm内の砂粒を含み，焼成は良好。いぶしを施し，黒灰色を呈する。鬼瓦の一部分の可能性もある。

石塔類

供養塔（12）　碑身の上半部分である。現存長22.2cm，最大幅30.4cm，最大厚15.4cmを測る。全体に破損がひどいが，各側辺は隅丸長方形状に粗成形される。B面は船底形に粗成形される。A面は研磨を施し，外周に幅4.5cm位の縁をとり，碑面より3mmほど低くする。中心に幅0.8～1.0cm，深さ3mm程の太さで，キリークを薬研彫りする。色調は暗灰褐色を呈す。

墓石（13）　基部から碑身部分である。現存長26.7cm，最大幅19.7cm，最大厚4.3cmを測り，断面形状は長方形を呈する。両側辺は粗成形のち雑なケズリ仕上げのためノミ痕を残す。B面は粗成形のままである。A面の碑身は丁寧にケズリ，平坦になしている。その中央上端に長さ5cm，幅2.5cmの範囲に楷書体で「靈位（れい）」と彫り込んでいる。基部は粗成形のままでノミ痕が残る。塔身部は二次焼成を受け黒変している。上半分の破損は廃棄後である。(12)・(13)とも2層より出土。いずれも砂岩製である。

鉄製品

鎹（かすがい）（14）　現存長4.4cm，尖端部長さ2.9cmを測る。0.9×0.8cmを測る断面方形の柱状体部である。尖端部は断面円形を呈す。全体に腐蝕による錆が著しい。

釘（15）　現存長2.5cmを測る。断面は0.5×0.6cmの方形を呈す。全体に腐蝕による錆が著しい。

1号溝出土遺物（Fig.49，PL.25）

瓦質土器

摺鉢（16）　片口と思われる。口縁部は肥厚する。外面はナデ調整痕が残る。内面は磨滅が著しく不明。胎土は2mm内の砂粒を含み，焼成は良好。色調は淡灰褐色を呈す。復元口径32.7cmを測る。

火舎（17）　方形を呈する火舎の口縁部片である。口縁部は内側に幅広く，口端部は平坦である。外面はヨコ方向のヘラ磨きを施し，内面は指ナデ調整である。口端部の隅角はヘラで面取

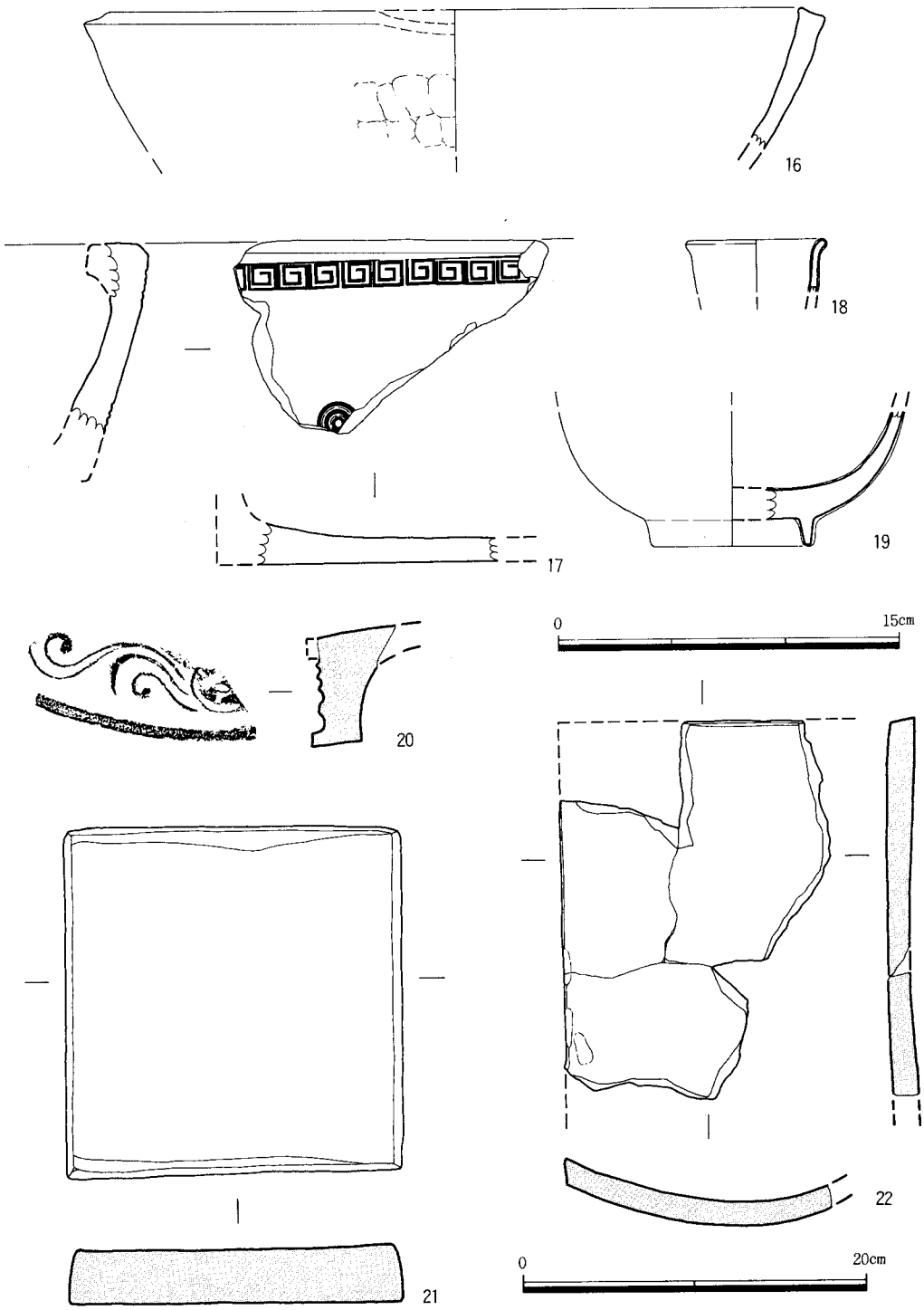


Fig.49　1号溝出土遺物（1/3，1/4）

りする。口縁直下に雷文を，体部に直径２cmを測る３重の同心円文をスタンプする。

青　磁

坏（18）　口径6.3cmを測る口縁部片である。口端部を外方に引出し，端部を丸くおさめる。全体に淡緑色の釉が施され，細かい貫入が入る。胎土は灰白色を呈す。

碗（19）　口縁部を欠損する。復元高台径6.4cmを測る。高台高1.2cmを測り，直立する。体部は開き気味に大きく内弯する。全体に暗緑色の釉を厚めに施す。胎土は青灰色を呈す。

瓦　類

総数で32点以上出土している。出土は上，中層に集中する。内訳は軒平瓦１点，塼１点，平瓦25点，丸瓦５点である。

軒平瓦（20）　瓦当部片で，現存長10.6cm，幅3.7cm，瓦当厚2.6cmを測る。外縁は深い。中心飾りは宝珠形，左右に唐草文を配する。顎は曲線顎で，丁寧なナデを施す。胎土は５mm内の砂粒を多く含み，色調は黄灰色を呈す。第19次調査での分類による軒平瓦Ⅰ類にあたる。[註1]

塼（21）　完形である。Ａ面は18.7×19.5cm，Ｂ面は19.5×20.4cmを，器厚は3.2～3.5cmを測る。断面形状は台形を呈す。Ａ，Ｂ面ともナデ調整で，表面に離れ砂が付着する。各側辺はヘラによる面取り調整である。胎土は細砂粒を含み，焼成は良好。色調はＡ面が黒灰色，Ｂ面が白灰色を呈す。

平瓦（22）　器厚が平均1.4cm前後のものと，平均2.1cm前後のものの２種類に分ける事が出来る。量的にいえば1.4cmの方が圧倒的に多い。いぶしを施されるものが８点ある。23は現存長22.3cm，現存幅15.8cm，器厚は1.4～1.6cmを測る破片である。2号土壙のものと形態，成形方法は同じである。谷部には離れ砂が少し付着する。胎土は３mm内外の砂粒を多く含み，焼成は良好。色調は灰褐色を呈し，谷部で一部黒変する。

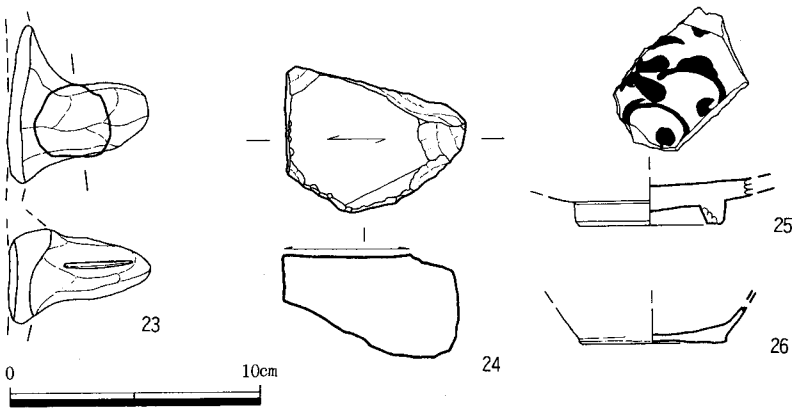


Fig.50　２号溝，及び表土出土遺物（1/3）

丸瓦　　5点出土した。いずれも細片である。器厚や筒部と玉縁との段差から2種類に分かれる。A類は器厚1.4cm，玉縁の段差1.6cmであるが，B類は器厚2.1cm，玉縁の段差1.0cmである。A類は段差をヘラで面取りし，B類は丁寧なナデ調整である。

2号溝出土遺物（Fig.50，PL.26）

土師器

甑（23）　把手である。現存長5.7cmを測る。断面は直径3.1cmを測る不整円形である。把手の真中に長さ2.8cmの切り込みを入れる。接合は貼付けである。明黄褐色を呈する。

石　器

砥石（24）　現存長7.1cm，最大厚4.1cmを測る。砥面はA面のみ使用，両側辺は粗成形を施し，上・下小口は欠損する。砂岩製である。

3号溝出土遺物

土師器や瓦が少量出土した。

表土及びPit出土遺物（Fig.50，PL.26）

染　付

碗（25）　底部片である。高台径6.0cmを測る。外面は露胎である。内面には淡黄灰色釉が施され，呉須により唐草文らしき文様を描く。呉須はやや暗い青色を呈す。焼成は不良であまり発色は良くない。胎土は淡黄灰色である。表土より出土。

土師器

皿（26）　口縁部は欠損する。底径6.0cmを測る。体部はヨコナデを施し，底部は糸切りである。色調は明褐色を呈し，焼成は良好。4号掘立柱建物の柱穴であるPit12より出土。

小　　結

当該地は区画整理時にかなり削平を受けているものの，土壙2基，掘立柱建物8棟，溝状遺構3条を検出した。検出遺構の時期は大きく2時期に分けられる。

第Ⅰ期は2号溝の時期である。遺構はこの溝のみである。削平で残りは悪く，年代を決定し得る遺物はない。しかし第75次調査で検出した奈良時代の溝と，同一方向で連続する可能性があり，同時期と考えられる。第75次調査で検出した溝は須恵器の高台を持つ坏の出土から8世紀中頃から後半が考えられる。

第Ⅱ期は1号，3号溝，1号，2号土壙を中心とする時期である。1号溝上・中層，及び2号土壙出土の瓦類は第19次調査で出土したものと同類である。1号溝出土の平瓦(11)の計測値は長[註7]

さ29.7cm，後端部幅18.7cm，前端部幅21.0cmを測り，第19次調査２号溝出土平瓦の計測値の範囲に収まるもので，成形手法等も同じである。軒平瓦も軒平瓦Ⅰ類とするものである。これらと共伴する青磁碗や瓦質土器の火舎や摺鉢は16世紀に比定出来るものである。第19次調査の２号溝と同時期の16世紀前半頃廃絶したと思われる。又，この１号溝は，北側の第53次調査の１号溝に連なる可能性を持つ。

１号，２号土壙は同一方向で平面形状がほぼ同じであることから同時期と考える。２号土壙で出土した平瓦は１号溝出土のものと同類であり，青磁，瓦質土器のなかで同時期の所産のものがあり，１号溝とほぼ同時期が考えられる。１号，２号土壙が巨大な建物の柱穴である可能性も考えたが，調査区が狭いため明確にし得なかった。

掘立柱建物は８棟検出した。規模は桁行２間×梁行２間が３棟，桁行２間×梁行１間が１棟，桁行２間以上×梁行２間が２棟，残り２棟は桁行，又は梁行方向のみで全容をつかみ得なかった。これらは目かくし状の柵列の可能性もある。建物の年代決定し得る遺物は少ない。

建物の時期については主軸方向，及び切合い状態から，３類に分けることが出来る。Ⅰ類は主軸を南北に置く１号，２号掘立柱建物の時期である。Ⅱ類は主軸を東西に置く３号，４号，７号掘立柱建物である。Ⅲ類は北よりやや西寄りに主軸を置く８号掘立柱建物である。切り合い関係は１号と３号，７号掘立柱建物と，２号と４号掘立柱建物がそれぞれ切り合う。４号掘立柱建物は８号掘立柱建物を切り，４号は８号掘立柱建物より新しい。４号掘立柱建物の柱穴から糸切りの土師皿が出土している。糸切り手法の始まりが12世紀後半であるから，主軸が同一方向の３号，７号掘立柱建物は14世紀後半以降である。又１号掘立柱建物は16世紀前半に廃絶した１号溝に切られており，Ⅰ類の建物群は16世紀前半より古い。Ⅲ類の８号掘立柱建物はⅡ類の４号掘立柱建物より古い。

註７　福岡市教育委員会「有田・小田部」第４集　1983

5．第48次調査

調査の概要

調査対象地は福岡市早良区小田部２丁目140番地に所在し，対象面積は約600m²である。

有田・小田部の台地は北東，及び北西方向から幾つかの谷が深く入り込み，そのため細長い舌状台地を派生している。当該地は台地の中央部にあって，国道202号線バイパスに面しており，北西側は谷頭が，東側100ｍには広く浅い谷が存在している。周辺では東側に隣接して第４次調査が実施され，奈良時代以降の掘立柱建物40棟，製鉄炉跡などが検出されている。又，当該地の南側の住宅地ではかつて甕棺も検出されており，甕棺墓，及び弥生時代集落等の存在が予想されていた地域でもあった。昭和57年４月に当該地と同一敷地内の南西部の一角が土取り作業されているのを現認し，地権者との協議の結果，部分的な確認調査を行なった。その結果，遺存状態は悪いものの甕棺２基を検出したため将来の開発に際しては発掘調査を行なう旨，地権者と協議を行なっていた。昭和56年３月に店舗建設の計画が申請され，これによると計画地内を現在の道路面迄約 1.5m 程地下げして店舗を建設するものであった。このため昭和57年度の国庫補助を得て福岡市教育委員会が発掘調査を実施した。

発掘調査は昭和57年５月18日～６月10日迄実施した。調査に先立って用地内の植木類の撤去，或いは計画地域外の調査範囲の拡大について，地権者の多大な協力を得た。調査対象地の西側約⅓は土取り作業のため既に遺構は消滅していた。又，住宅地，或いは庭として利用されていたため排水孔，水道管，或いは樹木の移植壙，廃棄物壙などが多く存在し，特に西半分は著しい遺構の破損状態であった。又，昭和43年の小田部地区の区画整理による削平も受けている。

表土は20～30cmを測り，遺構面はローム層である。検出した遺構は弥生時代住居跡９軒，古墳時代住居跡１軒，時期不明住居跡１軒，弥生時代甕棺墓２基，土壙４，井戸１基，掘立柱建物３棟である。

検出遺構

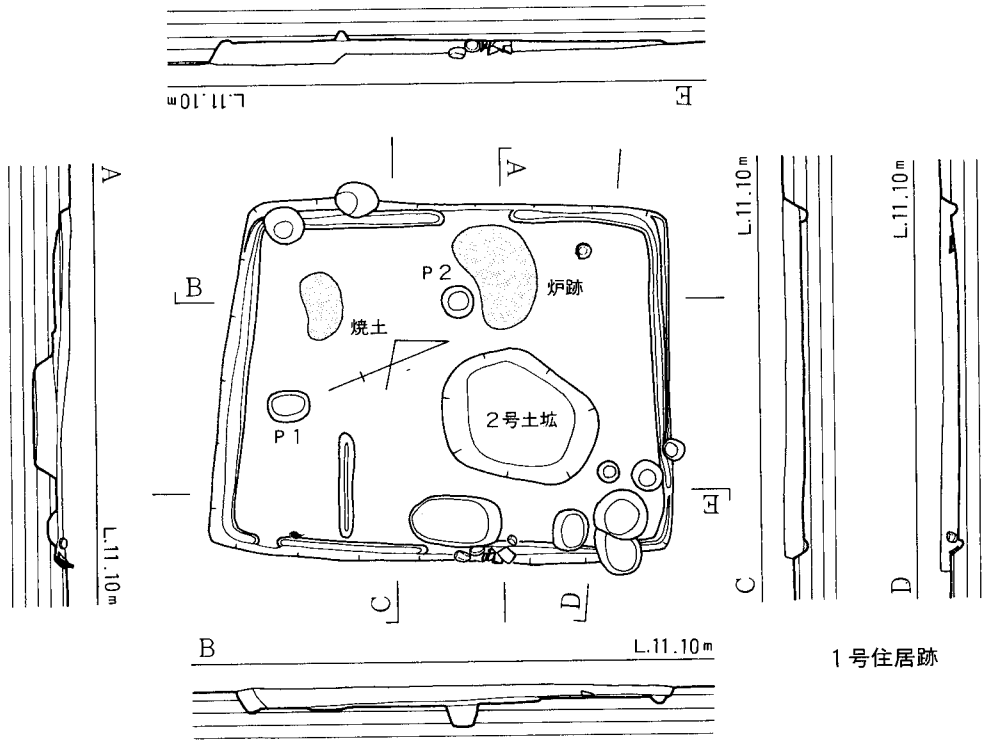
住居跡

方形，長方形，小形隅丸長方形，円形住居跡の各種がある。小形の隅丸長方形については規模にもバラエティーがあるが，弥生時代の長方形の貯蔵穴のように袋状を呈していない事などから一応住居跡として報告するが，今後この遺構を明確にする資料の検出によって訂正したい。

１号住居跡（Fig.52，PL.29－１）

３号，４号住居跡を切っている。長さ3.7ｍ，幅2.7ｍを測り，長方形を呈する。壁の残存状

Fig.51　第48次調査遺構配置図（1/250）



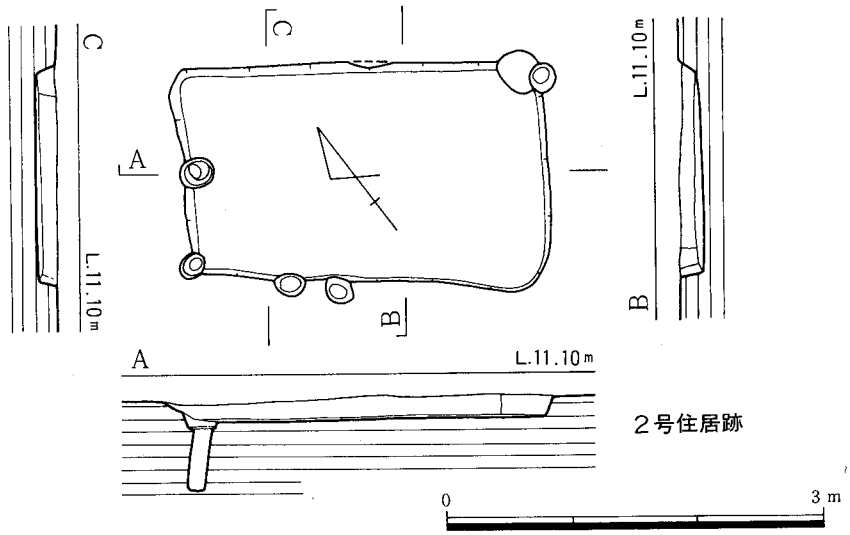


Fig.52　1号，2号住居跡（1/60）

態は悪く約15cmを残す。壁下には周溝が廻るが全周しない。溝幅は10～18cm，深さ15cmを測る。東辺の周溝から直角に長さ80cmの小溝が延びている。この溝はベットのなごりと思われる。炉跡は西辺中央部分に接しており，長さ80cm，幅50cm，深さ3cmを測る不整形を呈している。住居跡の中央に土壙が存在するが，これは床面の清掃によって検出したもので住居跡に伴う遺構ではない。主柱はP1，P2の可能性もあるが確定できない。古墳時代前期住居跡の規模としては小さく，炉が西壁に寄りすぎていることなど，本来の形態を残していると思えない。出土した遺物の内，坏，石器などは東辺中央部分の壁上にのった状態で出土している事から，本来，南辺，北辺，西辺の3壁の外側にベットを有した形態と思われる。東壁の中央に接して不整円形のPitが存在する。遺物は坏，埦，高坏，甕，石器，軽石の浮子等が出土している。

2号住居跡（Fig.52，PL.30－1）

1号住居跡の南側に接しており，長さ2.9m，幅1.8m，深さ20cmを測る。隅丸長方形を呈し，東側は攪乱により破損を受けている。床面はほぼ一定している。西壁中央部分に径15cm，深さ50cmを測る柱穴が在るが主柱として確定できない。遺物は全て細片であり，時期判断はできない。覆土は黒褐色土である。

3号住居跡（Fig.53，PL.29－2）

1号住居跡に切られ，更に1号，5号住居跡と切合い関係にあるため南側壁が明確ではない。遺存状態は悪い。長さ2.3m，現存幅1.4m，深さ6cmを測る。2号住居跡同様の形態を考えれば全体形は隅丸長方形に復元できる。遺物は少なく，砥石が出土している。覆土は黒褐色である。弥生時代中期の土器片が出土しているが，5号住居跡からの混入であろう。

4号住居跡（Fig.53，PL.29－2）

遺存状態は悪く，1号，3号，4号住居跡と切合い関係にある。先後関係は不明である。覆土は黒褐色である。現存長2.2m，現存幅1.7mを測り，隅角を残すのみである。隅丸長方形もしくは隅丸方形を呈すると思われる。主柱も不明である。遺構上面より鉄滓の大塊が出土しているが，住居跡の深さからみて当該住居跡に伴うとは考えがたい。覆土は黒褐色土を呈する。

5号住居跡（Fig.53，PL.30－2）

3号，4号住居跡と切合い関係にあるため西側壁を欠いている。又，1号掘立柱建物が住居跡を切っている。長径4.3m，短径4m，深さ10cmを測る。円形を呈している。床面はほぼ一定している。中央に隅丸長方形を呈し，長さ60cm，幅50cm，深さ25cmを測る土壙を設けている。この貯蔵穴の覆土は黒褐色を呈し，焼土を含んでいる。炉はこの土壙の西側に接し，長さ50cm，

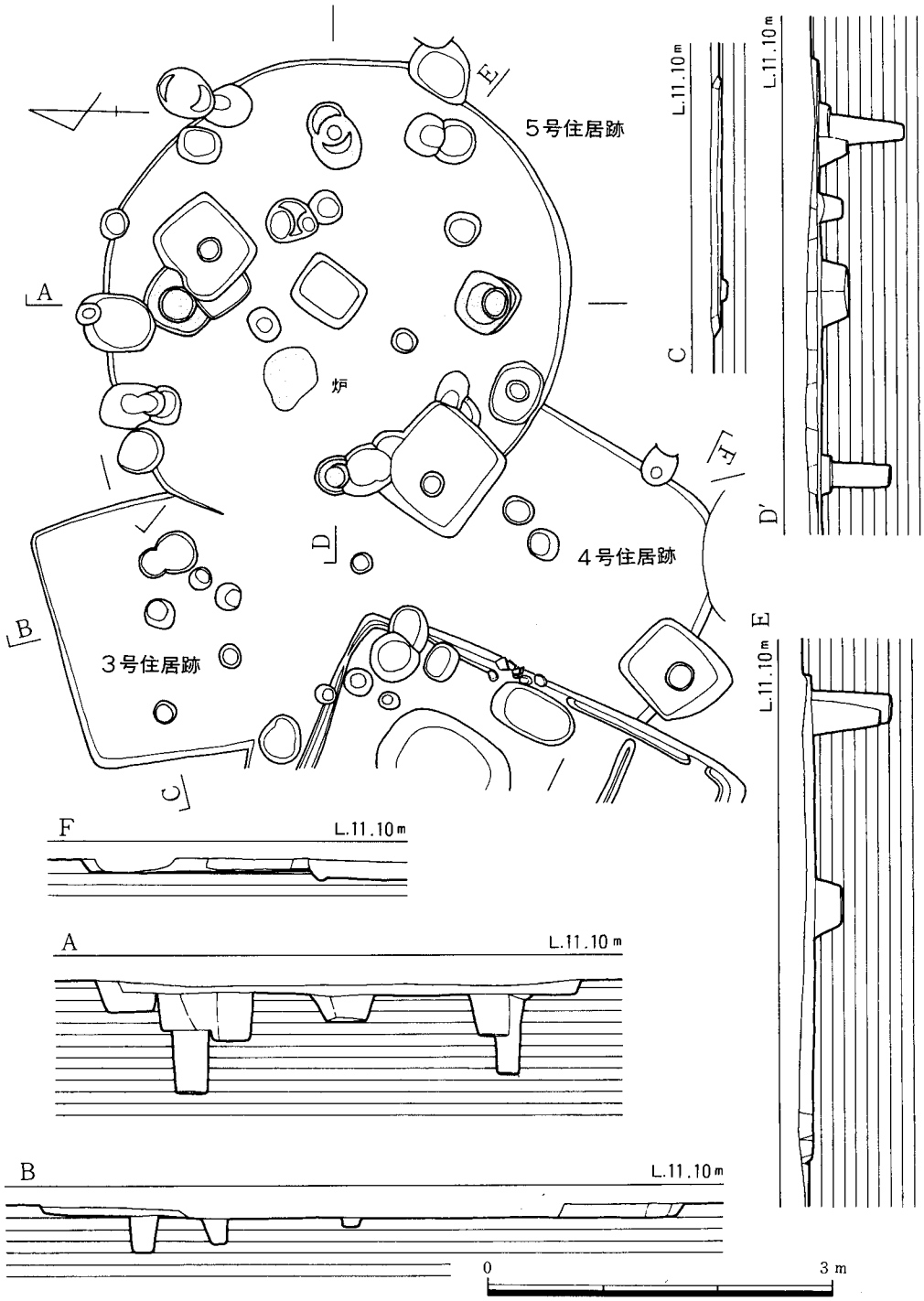


Fig.53　3号，4号，5号住居跡（1/60）

幅40cm，深さ３cmを測る。主柱は４本である。掘方径は40～50cm，深さ70～75cmを測る円形もしくは隅丸方形を呈す。柱根径は約30cmである。遺物は少ないが，弥生時代中期の甕片や石器が出土している。

６号住居跡（Fig.55，PL.31－１）

８号住居跡より切られている。長さ2.7m，幅1.9m，深さ８cmを測る。隅丸長方形を呈し，床面はほぼ一定である。中央に径20cm，深さ20cmを測る柱穴があるが，主柱として確定できない。黒褐色の覆土である。遺物は細片である。

７号住居跡（Fig.55，PL.31－２）

当初の調査区より南側へ延ばしたトレンチより検出した。排水溝や攪乱壙によって破損を受

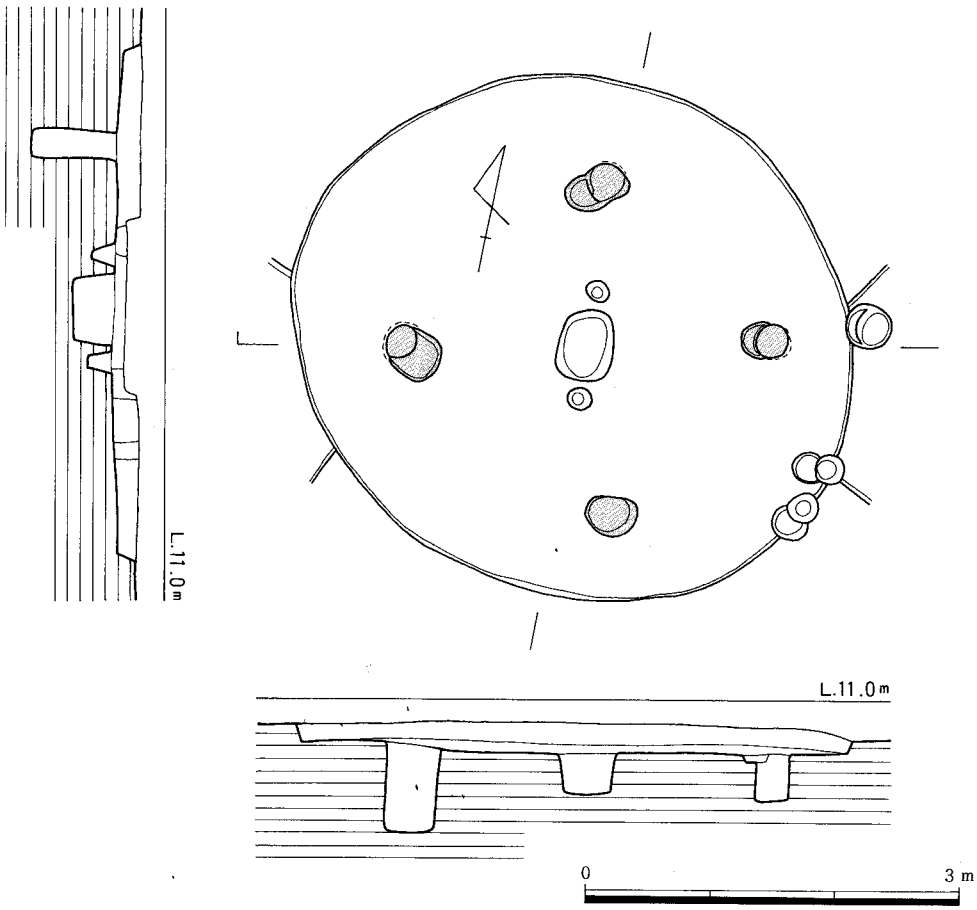


Fig.54　８号住居跡（1/60）

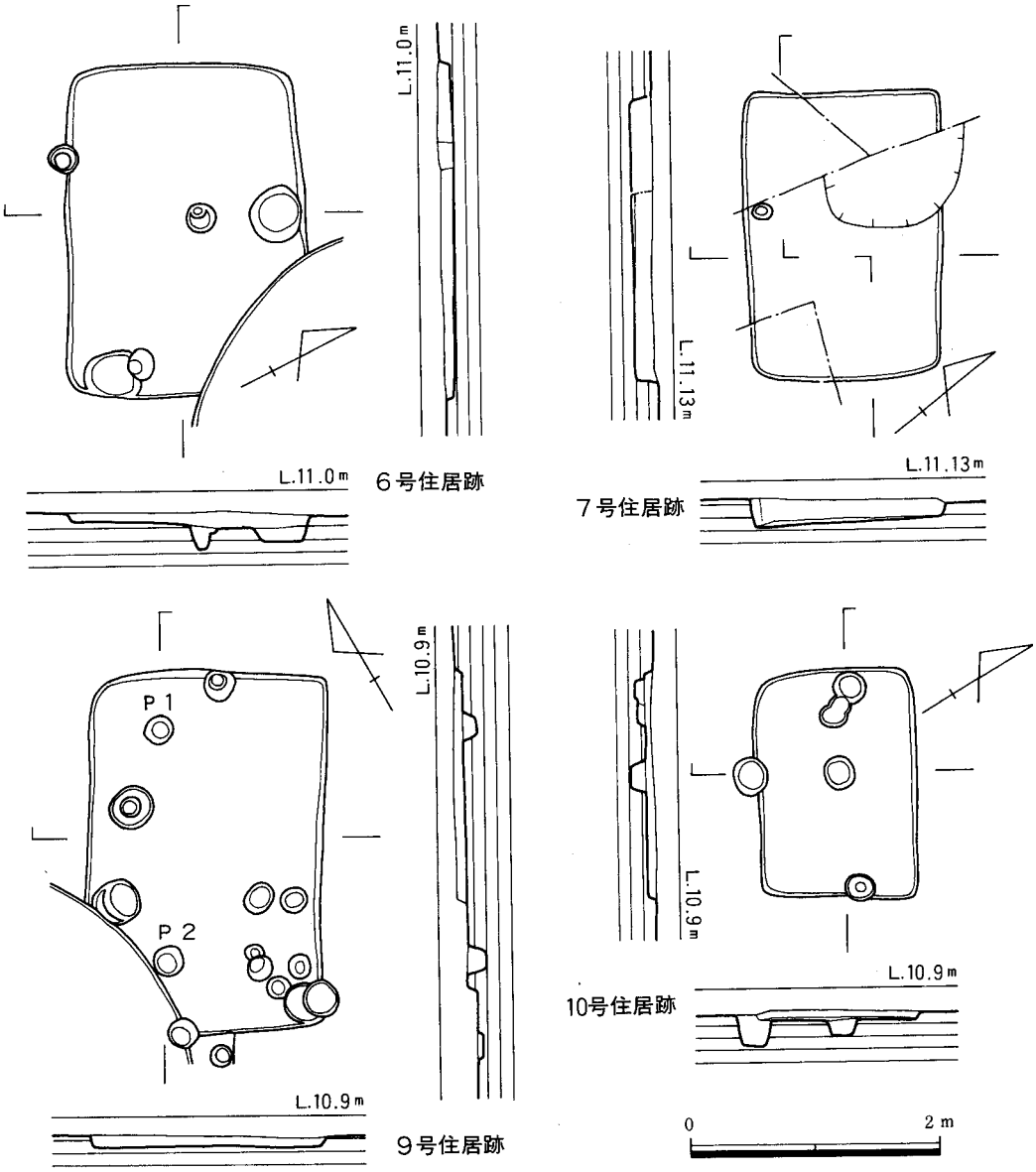


Fig.55　6，7，9，10号住居跡（1/60）

けている。住宅や樹木の関係で完掘していない。隅丸長方形を呈し，長さ2.3m，幅1.6m，深さ24cmを測る。南壁中央部分に径20cm，深さ10cmの柱穴が存在する。遺物はいずれも弥生式土器細片であった。黒褐色土の覆土である。

8号住居跡（Fig.54, PL.32－1）

6，9号住居跡を切っている。円形を呈し，長径4.6m，短径4.1m，深さ20cmを測る。床面はほぼ一定で，タタキ締められている。主柱は4本で，不整円形を呈し，径40cm，深さ40～70cmを測る。床面中央には長さ60cm，幅45cm，深さ35cmを測る長方形の土壙がある。この貯蔵穴の土層は第1層が黒褐色土で，焼土，炭化物を多く含んでいる。第2層は暗褐色粘質土で，褐色土ブロック，及び焼土，炭化物を含んでいる。第3層は暗茶褐色粘質土と黒褐色粘質土の混合土である。この土壙の小口近くには各々1個の柱穴が存在する。径18～20cm，深さ18cmを測る。炉は認められなかった。遺物は弥生式土器の甕片等が出土したが特に黒曜石の出土量は多く，チップが約96点出土している。

9号住居跡（Fig.55, PL.32－2）

8号住居跡に切られる。11号住居跡とは切合い関係にあるが，先後関係は不明。隅丸長方形を呈し，長さ2.9m，幅2.4m，深さ8cmを測る。床はほぼ一定している。Pitは幾つか認められ

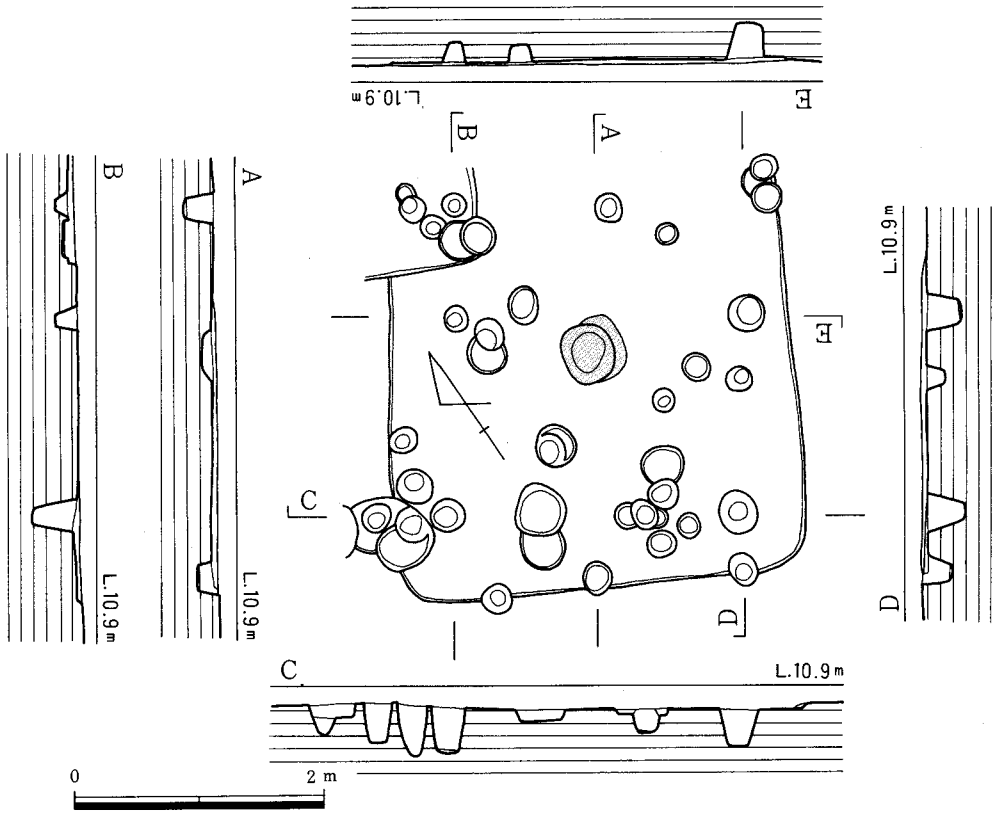


Fig.56　11号住居跡（1/60）

る。P1は径22cm，深さ12cm，P2は径25cm，深さ15cmを測る。遺物は全て細片である。

10号住居跡（Fig.55，PL.33－1）

隅丸長方形を呈す。長さ1.9m，幅1.3mを測る。他の同様な住居跡に比べ最も規模が小さい。床面はほぼ一定で，幾つかのPitが認められる。P1は径28cm，深さ8cm，P2は径25cm，深さ15cm，P3は径20cm，深さ9cmである。遺物は弥生時代の甕片等が出土している。

11号住居跡（Fig.56，PL.33－2）

9号住居跡と切合い関係にあるが先後関係は不明である。北側壁は削平されている。南辺は3.3m，東側壁の現存長2.8m，西側壁の現存長2.6mを測る。壁高は5cmを測る。炉は長さ50cm，幅40cm，深さ8cmを測り，断面レンズ状を呈す。炉が住居跡の中心とすれば長辺は約3.8mを推測できる。周溝は認められない。又，主柱は確定できなかった。かまどを有しておらず，4本の主柱ではないことや隅丸長方形の形状から，4世紀以前の年代が考えられる。

甕棺墓

発掘調査以前の予備調査の段階で検出したもので，当該調査区の南側に位置する。いずれも弥生時代前期の甕棺である。

1号甕棺墓（Fig.57，PL.34－1）

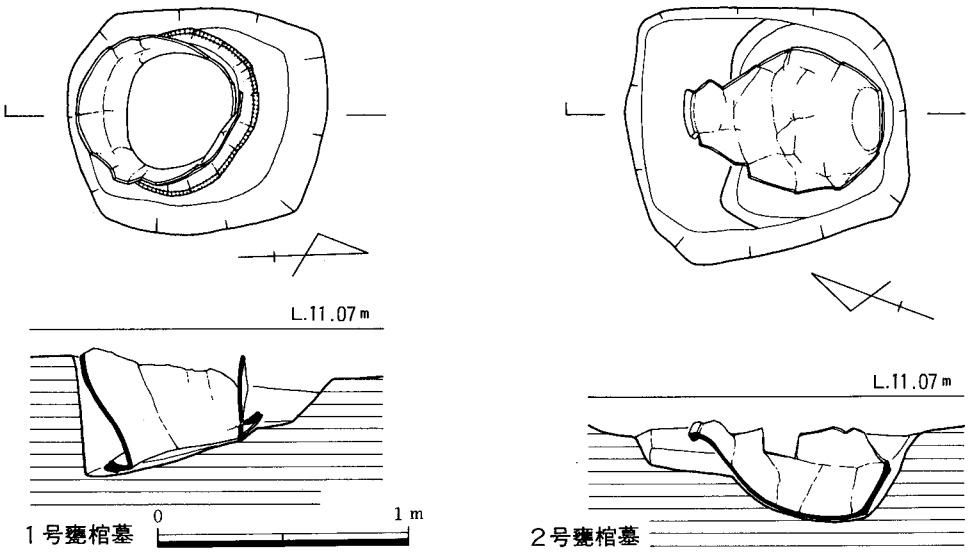


Fig.57　1号，2号甕棺墓実測図（1/30）

主軸方位をN 2°30′Eに置く。甕棺はやや斜目に倒立して据えられており，体部下位は削平のため欠損している。墓壙は長さ103cm，幅 90cmを測り，隅丸方形を呈する。底は斜目になっており，北から南へ下がる。南側の壁は直壁を呈し，深さ50cmを測る。甕棺は南側へ傾斜している。

2号甕棺墓（Fig.57，PL.34－2）

主軸方位をN21°Wに置く。墓壙は長さ11.2cm，最大幅10.3cmを測る。やや北側が広い隅丸方形を呈する。底部は二段になっており，一段目の深さ18cm，2段目の深さ35cmを測る。甕棺を斜目に据えており，その角度は35°30′である。体部の半分は削平のため破損している。上甕と思われる破片は出土していないので単棺と考えて良いであろう。

土　壙

いずれも不整形を呈し，時代を明らかにできるのは3号土壙だけである。

1号土壙（PL.36－1）

不整楕円形を呈し，長さ1.7m，幅90cm，深さ24cmを測る。攪乱にて削平が著しい。底部は舟底状を呈す。覆土は黒褐色土である。遺物は全て細片であった。

2号土壙（PL.36－2）

1号住居跡の床面より検出した。不整円形を呈し，長さ1.3m，最大幅1m，深さ17cmを測る。底部はレンズ状を呈し，浅い。覆土は暗茶褐色土に黒色土が混入していた。遺物は非常に少ない。

3号土壙（Fig.58，PL.36－3）

不整楕円形を呈す。長さ1.2m，最大幅1.0m，深さ20cmを測る。周壁は袋状を形成しており，底部はレンズ状を呈す。覆土は黒褐色粘質土である。遺物は弥生時代前期～中期の土器片が多数出土した。袋状貯蔵穴が削平されたものとも考えられる。

4号土壙（Fig.58，PL.36－4）

柱穴で切られるため東側の壁を欠いている。不整円形を呈し，長さ約90cm，幅88cm，深さ18cmを測る。壙底から約10cm浮いた状態で拳大の礫が敷かれている。底部は浅いレンズ状を呈す。覆土は黒色土である。

井　戸

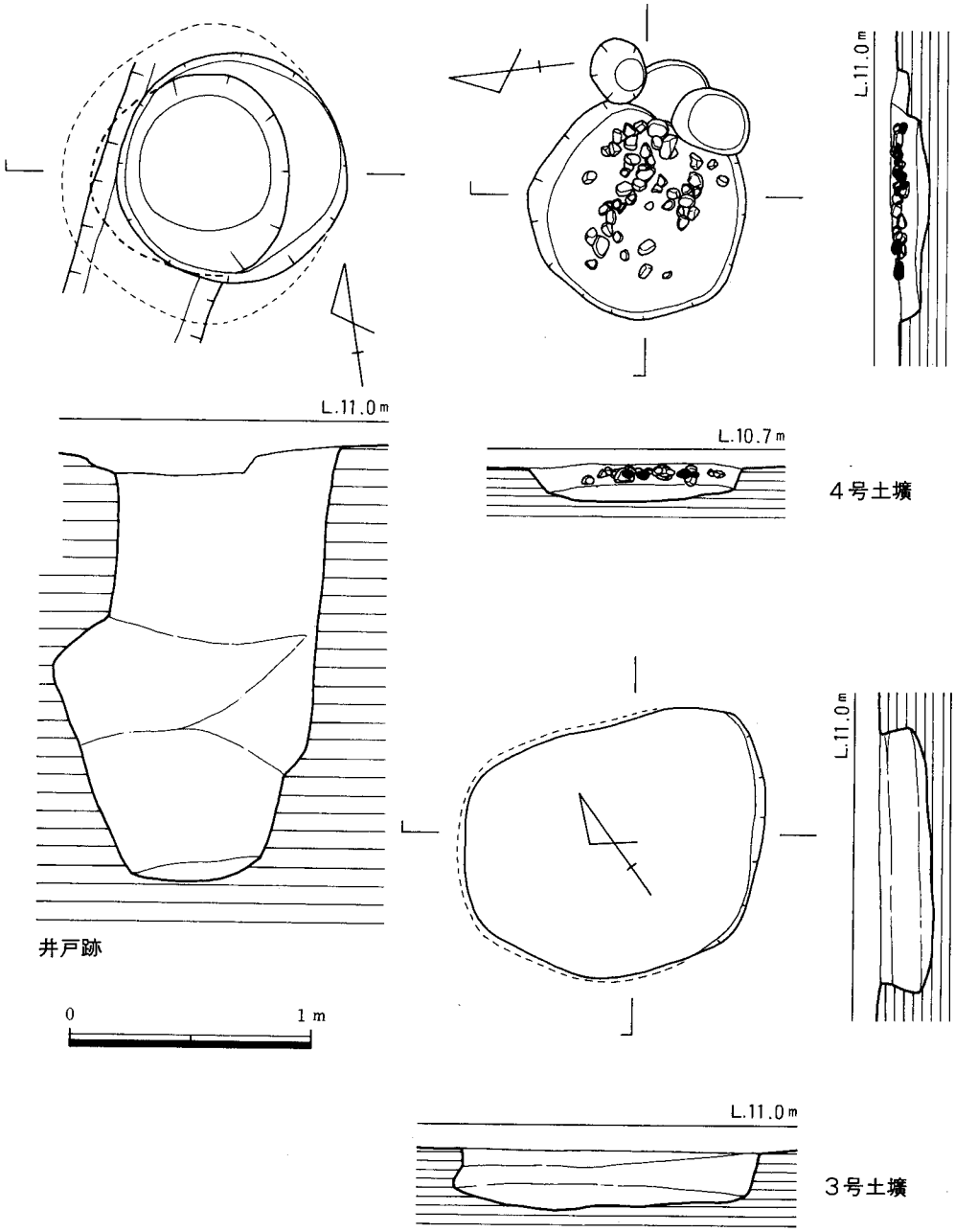


Fig.58　井戸跡３号，４号土壙実測図（1/30）

調査区の西寄りに検出した。平面形は円形で，径96cmを測る。深さは1.8m，底径50cmを測る。井戸肩から約80cmのところは壁が内側に20cm，幅50～60cmに亘り抉ぐれており，喫水線を示している。覆土は上層が黒褐色粘質土，下層は暗茶褐色粘質土である。遺物は全く出土しなかった。台地の中央部に位置するわりには浅い。そのため湧水の出も悪かったと思われる。使用期

tab. 6　第48次調査 掘立柱建物計測表

	規　模	方向	桁　行		梁　行		方　位（磁針）	床面積（m²）	備　　考
			実　長	柱間寸法(尺)	実　長	柱間寸法(尺)			
1号	2×1	NE	555(18.5)	9・9.5	300(10)	10	N40°E	16.65	
2号	3×3	NE	655(21.8)	8.3・7.5・6	396(13.2)	4.3・4.3・4.3	N40°30′E	25.54	床束あり庇付
3号	2×1	NW	450(15)	7.5・7.5	315(10.5)	10.5	N85°W	14.18	

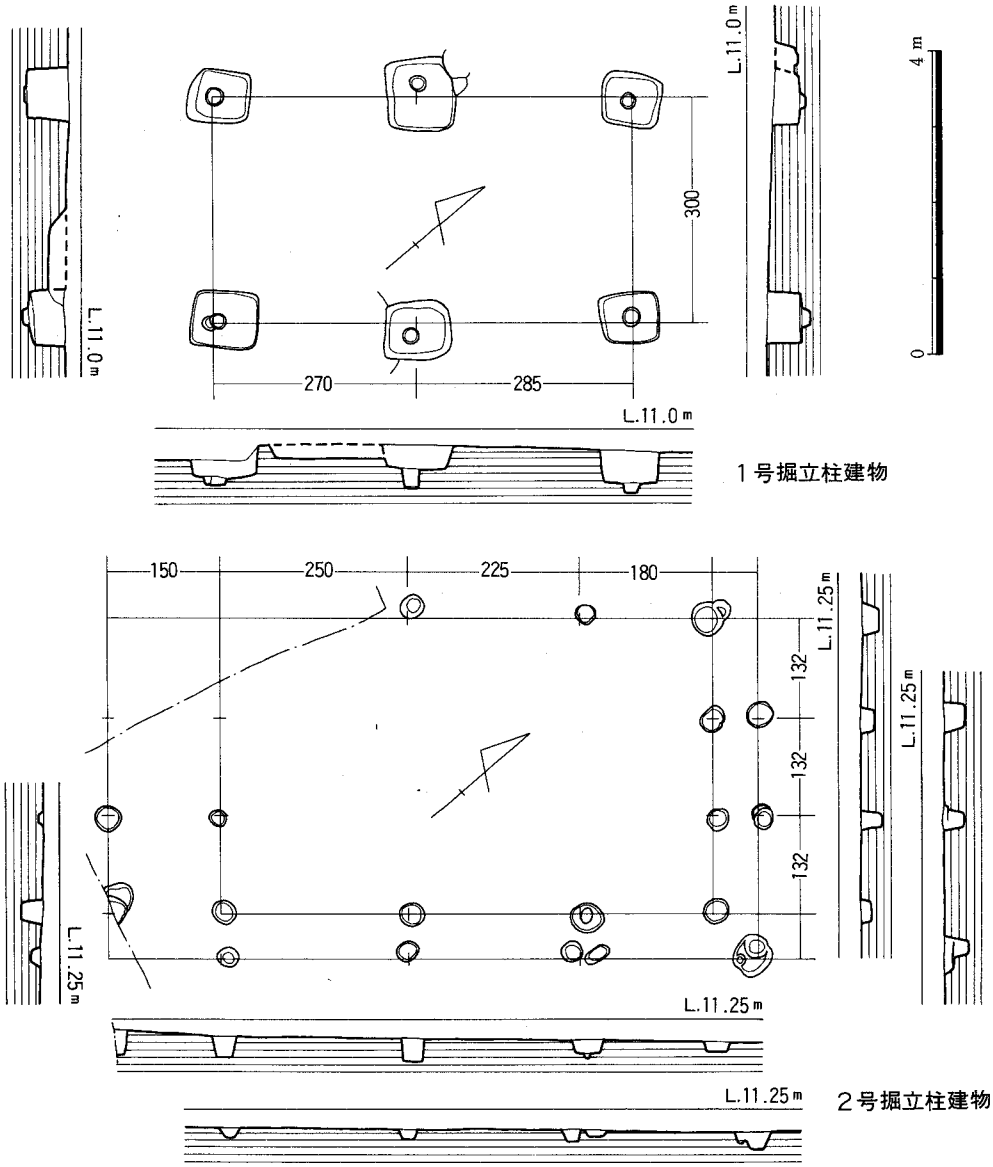


Fig.59　1号，2号掘立柱建物（1/100）

間は非常に短いゆえ遺物の出土が無いのであろう。

掘立柱建物

3棟検出したが，柱筋が通る柱穴が幾つかあるので他に建物が存在すると思われる。発掘調査の段階では検出できなかったが，今後機会をみて再検討することにしたい。

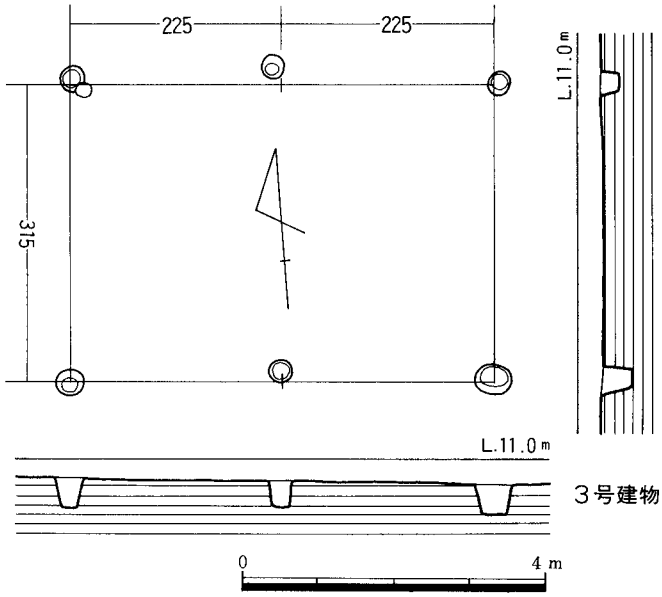


Fig.60　3号掘立柱建物(1/100)

1号掘立柱建物（Fig.59, PL.35−1）

主軸を南北方向に置き，梁行1間，桁行2間を測る。側柱だけの掘立柱建物である。柱間10尺，桁間平均は9.3尺を測る。柱穴掘方は大規模で隅丸長方形を呈する。長さ80～90cm，幅70～90cm，深さ60～70cm，柱根径25～28cmを測る。遺物は弥生式土器片が多く出土する。P3より出土した土器は1点だけ古墳時代初頭と思われる土器が出土している。覆土は黒褐色土である。

2号掘立柱建物（Fig.59）

主軸を南北方向に置き，3面に庇をもち，束柱のある建物である。身舎は梁行3間，桁行3間の掘立柱建物で，梁間平均は4.3尺，桁間平均は7.3尺を測る。柱穴掘方は円形で，径35～42cm，深さ10～30cmを測る。東側と北側の庇は幅60cmを測るが，庇よりも縁台に近いと思われる。南側の庇は身舎との間隔を150cmとっている。いずれも掘方径は30～40cmを測る。

3号掘立柱建物（Fig.60）

梁行1間，桁行2間を測り，主軸を東西北向に置いた側柱だけの掘立柱建物で，桁行は450cm，梁行は315cm，各柱間は梁間10.5尺，桁間7.5尺を測る。柱穴掘方は不整円形で，径30～40cm，深さ20～30cmを測る。遺物は全て細片で年代の手懸りとなり得ない。覆土は黒色土である。

出土遺物

1号住居跡出土遺物（Fig.61，PL.37）

土師器

坏（１）　口縁部をわずかに欠いている。復元口径11cm，推定高2.8cmを測る。皿状の浅い器形で，内外面ヨコナデ調整である。胎土に砂粒を含み茶褐色を呈する。風化著しい。

埦（２・３）　２は口縁部を欠いている。２の現存高2.8cm，３の口径13.4cm，現存高5.1cmを測る。２の口縁部は〝如意形〟に外反する器形で，底部には静止ヘラケズリを施す。３は体部が直線的に開き，内外面はヨコナデ調整である。いずれも胎土に砂粒を含むが，３の胎土は坏と同一である。２は暗黄灰色を，３は淡茶褐色を呈す。

高坏（４・５）　４は脚部を欠いている。４の口径17.4cm，器高5.1cm，５の口径16.1cm，坏部高5.0cm，脚部高6.0cm，脚裾部径7.0cmを測る。５は坏の底部と体部の境には強い段がある。体部は外反気味で，口縁部は小さく外反する。脚筒部はわずかに脹らみをもつ。裾部との境には段を有し，内面には稜が付く。裾部は水平に仕上げ，器壁は厚目である。４は底部，体部ともに丸味をもっており，坏底部は平坦である。底部と体部の境の段は弱い。４，５ともヨコナデ調整を施し，５の筒部内面はヘラケズリであろう。淡茶褐色を呈している。胎土に砂粒を含む。

甕（６）　口径18cm，現存高13.6cmを測る。外反する口縁部は丸く仕上げる。口径に比べ胴部最大径が大きくなる。長胴形化するものと思われる。体部内面はヨコ方向のヘラケズリを施し，外面は細かいハケ後ナデ調整を行なう。胎土に砂粒を含み，黄灰色を呈する。

石　器

擦石（７，８）　７は蛇紋岩製，８は玄武岩製である。７は長さ6.0cm，最大幅2.4cm，最大厚2.2cmを測り，棒状を呈する。両先端は丸く磨滅しており，全体に滑らかである。８は長さ11.4cm，最大幅7.2cm，最大厚3.2cmを測る。扁平で，隅丸長方形に近い形態を示している。Ａ面の一部に大きな破損部分がある。両小口部は研磨使用されており，両側面も面取りが施される。Ａ面の中央部分には敲打痕が認められる。

敲打器（９）　最大長7.3cm，最大幅7.8cm，最大厚7.2cmを測る。打撃，及び剥離調整で立方体に成形したのち，敲打使用しているもので，各面には剥離痕を残している。玄武岩質である。

浮子（10）　軽石製の浮きである。風化が著しいので原形をとどめていないと思われる。長さ10cm，現存最大幅8.2cm，現存厚5.0cmを測る。平面形は菱形を，断面形は隅丸長方形を呈す。風化のため，紐がかりは認められなかった。浮子は第55次調査の２号住居跡からも出土しており，同様な器形を呈している。

２号住居跡出土遺物（Fig.62，PL.37）

弥生式土器片と思われるもの数片と黒曜石を３点検出している。

３号住居跡出土遺物（Fig.62，63，PL.37）

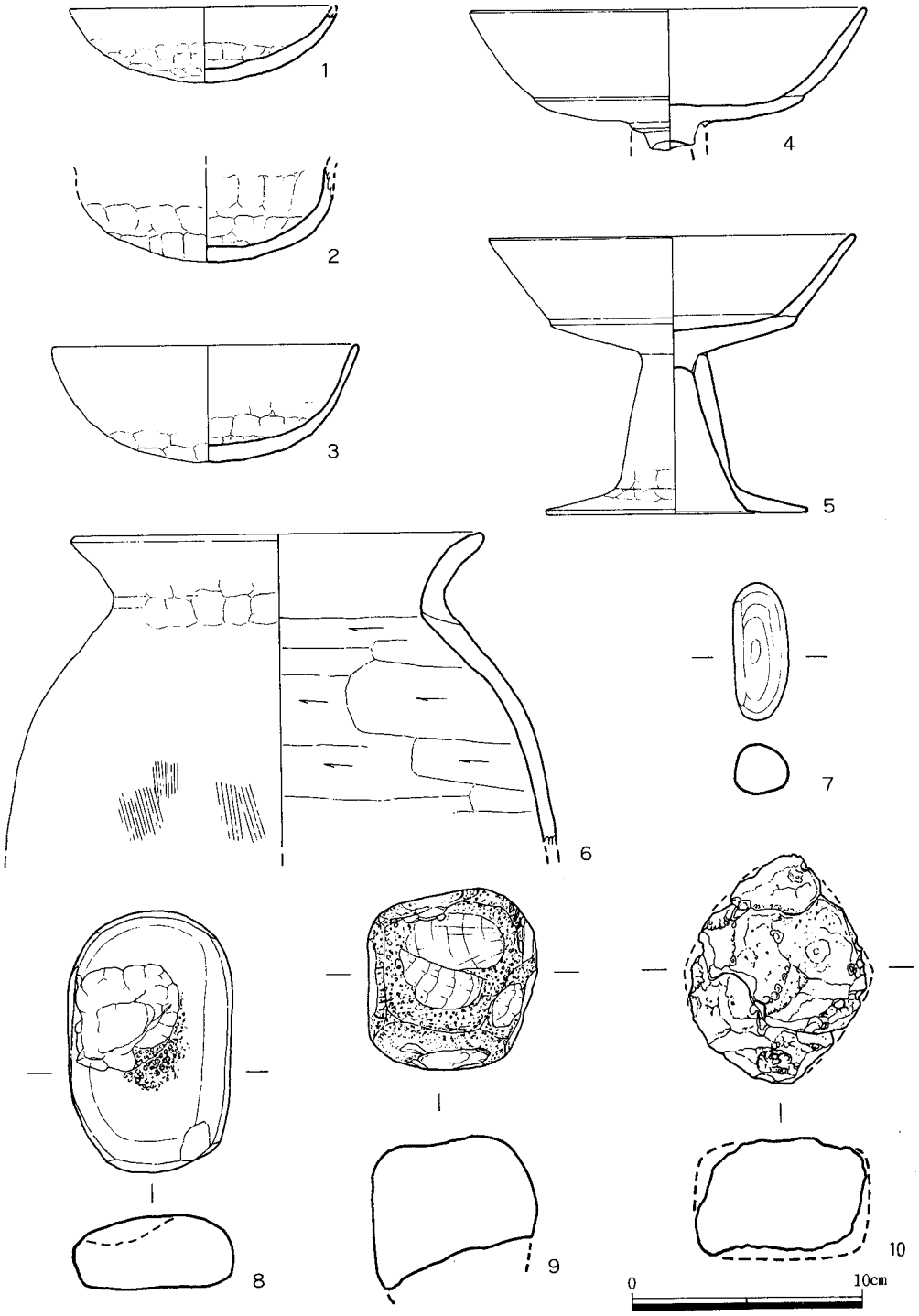


Fig.61　1号住居跡出土遺物（1/3）

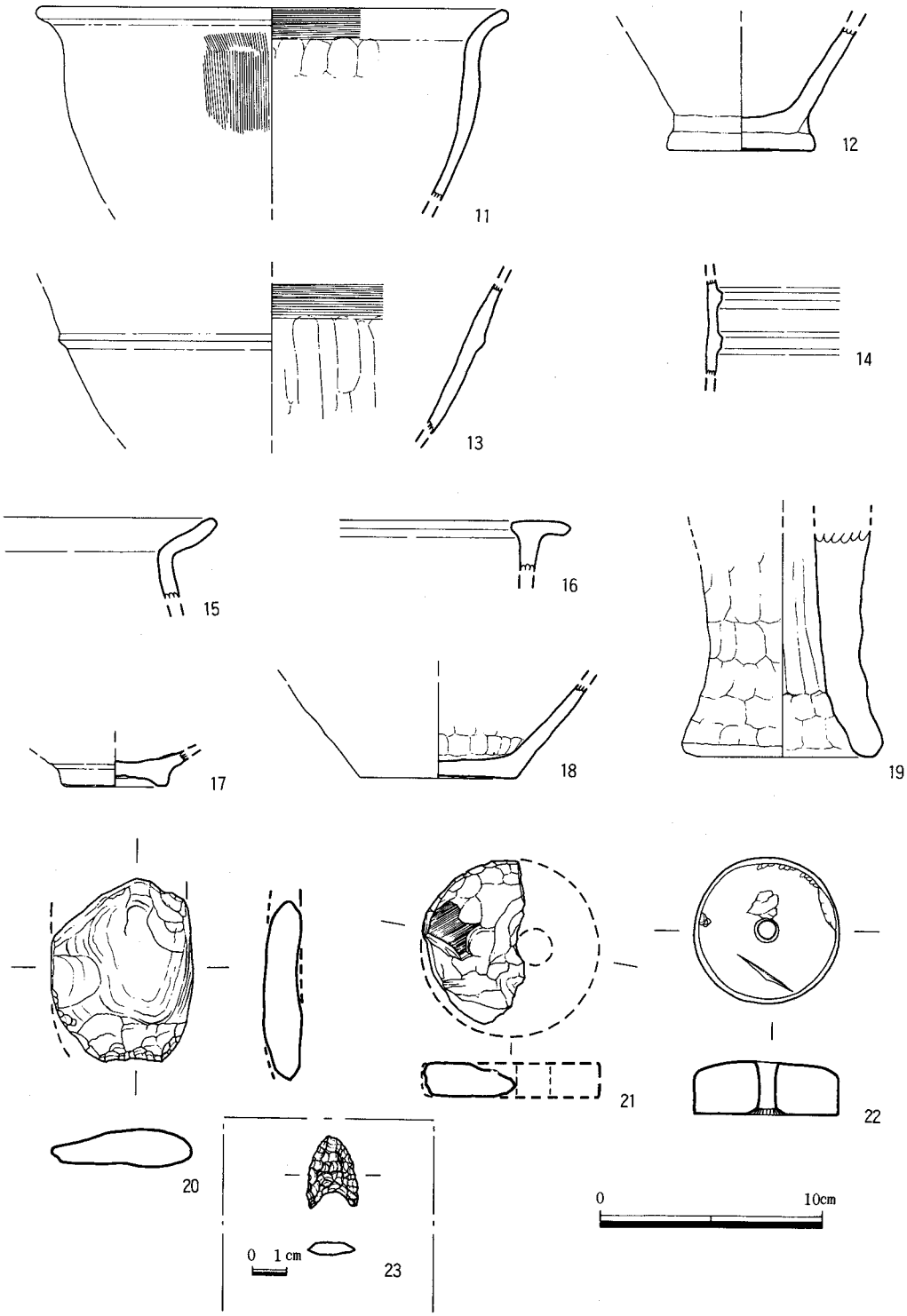


Fig.62 住居跡及び表土出土遺物（1/3, 1/2）

弥生式土器片を多数と土師片を少数出土した。甕片，支脚片の他，黒曜石３点，砥石を検出した。１号，５号住居跡と切合っており，遺物の大部分は混入の恐れがある。

弥生式土器

甕（14）　胴部に２条の突帯を貼付けている。突帯は逆台形状を呈し，低い。丹塗り土器で，黄褐色を呈する。その他，“くの字形”の口縁部片，山形突帯片がある。

石　器

砥石（24）　不整隅丸長方形を呈す。最大長21.5cm，最大幅19.6cm，最大厚7.9cmを測る。上，小口は欠損している。Ａ面と左側辺を砥面として利用し，他は粗割り調整のままである。砥面は全て窪んでいる。中粒砂岩製である。

４号住居跡出土遺物

土器は全て弥生式土器片で，中期中頃の甕口縁部片も出土している。又，鉄滓の大塊が出土しているが，住居跡は２～５cm程の壁高しか残存しておらず，覆土の上位に在った事を考えると他からの混入も考えられる。

鉄　滓

長さ33cm，最大幅21cm，最小幅９cm，最大厚12cmを測る。片方の側辺が内弯しており，面取りしたように滑らかである。

５号住居跡出土遺物

全て弥生式土器の細片で，図示した他に支脚片等がある。

弥生式土器

鉢（13）　口縁部と底部を欠いており，体部は開く器形である。現存高6.8cm，最大径25cmを測る。体部外面に低い山形突帯を貼付ける。内面の上位には細かいヨコハケを施し，他はナデ調整である。淡黄褐色を呈する。

石　器

黒曜石の剝片，及びチップが９点出土した。

石斧（20）　蛇紋岩製であるが風化著しい。基部は破損している。現存長8.3cm，幅6.4cm，厚さ1.7cmを測る。断面が扁平

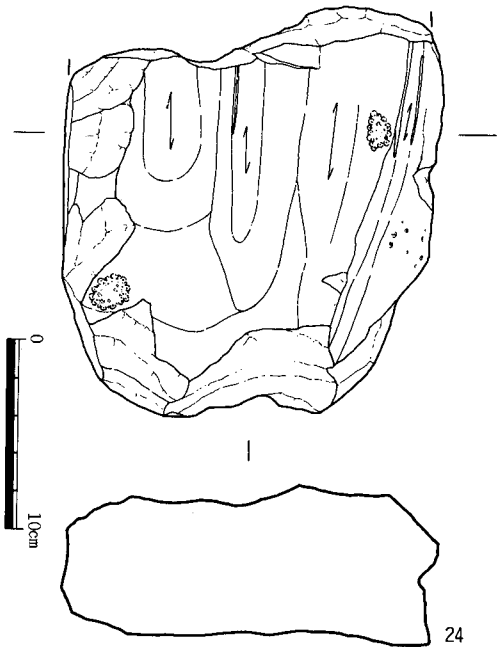


Fig.63　３号住居出土遺物（1/4）

な楕円形態を示し，刃部がやや幅広くなる形態と思われる。刃部には打撃痕がある。

6号住居跡出土遺物

全て弥生式土器の細片である。図化，計測は不可能である。黒曜石が1点出土した。

7号住居跡出土遺物

弥生式土器片が2点の他，黒曜石の剝片，及びチップが8点出土した。

8号住居跡出土遺物

弥生式土器片が出土したが甕形土器が多い。

弥生式土器

甕（12）　底径6.5cmを測る。底部の端部が外へ張り出しており，体部は直線的に立ち上がる。内面ナデ調整を，外面は磨滅している。胎土に砂粒を含み，暗黄灰色を呈する。

石　器

黒曜石の剝片，及びチップを計96点検出した。他に玄武岩のチップが3点出土している。

紡錘車（21）　推定の直径は8cmを測る。現存の厚さ1.5cmである。風化が著しく，A面の一部に研磨痕を残している。孔は径1.5cmを推定するが，孔の推定位置が片方に寄りすぎている。本来，単なる円盤状を呈していたのかもしれない。蛇紋製である。

9号住居跡出土遺物

弥生式土器片の他，黒曜石片3点が出土した。

10号住居跡出土遺物（Fig.62，PL.37）

図示した甕形土器片以外は全て細片である。

弥生式土器

甕（11）　復元口径は21.2cm，現存高8.8cmを測る。口縁部は〝如意形〟を呈し，胴部は張り出さない。外面にタテハケ調整を，口縁部内側はヨコハケ調整を施す。外面は茶褐色を呈し，胎土に砂粒を含む。

3号土壙出土遺物

細片のため図示し得ないが，前期後半の壺形土器片，及び中期の小形の“L字形”口縁部片が出土している。他に黒曜石が2点ある。

Ⅰ号掘立柱建物出土遺物（Fig.62, PL.37）

全て細片ではあるが幾つか特徴的な破片については図示した。

弥生式土器

甕（16, 18） 16は〝L字形〟の口縁部で,端部を内面にわずかに張り出している。風化しており赤褐色を呈する。18は底径6.8cmを測る平底で，胴部は丸味をもって立ち上がる。淡褐色を呈する。

土師器

甕（15） 破片のため口径は不明である。外反した口縁部は内弯気味である。全体に磨滅している。砂粒を含み淡褐色を呈する。

石　器

石鏃（23） 長さ2.2cm，最大幅1.6cm，厚さ0.4cmを測る。体部は丸味をもち，抉りは深い。器面の調整は粗い。黒曜石製である。

Pit出土遺物(Fig.62, PL.37)

弥生式土器

支脚（19） P28より出土。上半分を欠いている。底径8.9cm，現存高10.2cmを測る。端部がわずかに裾広がりになる器形である。ナデ調整で暗黄灰色を呈する。

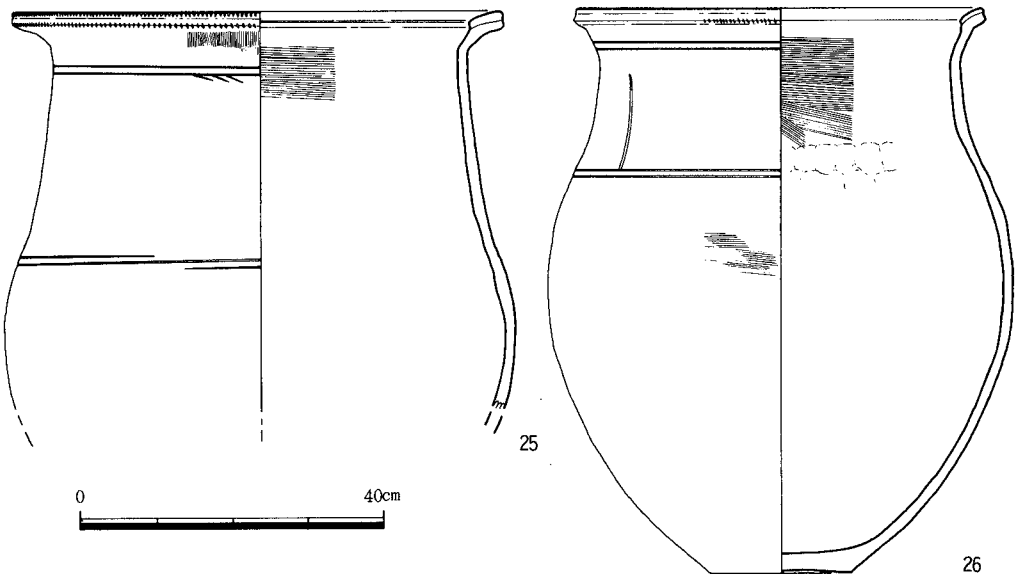


Fig.64 1号，2号甕棺（1/10）

表土出土遺物（Fig.62, PL.37）

青　磁

皿（17）　高台径4.7mを測る。暗灰緑色の釉が外底迄施される。内底見込みと畳付に目痕が認められる。李朝の皿である。

石　器

紡錘車（22）　滑石製である。直径6.7cm，孔径0.8cm，厚さ2.4cmを測る。A面はやや丸味をもたせ，B面は平坦に仕上げる。孔は両方から穿孔している。全体を丁寧に研磨しケズリ痕を残さない。

甕棺出土遺物（Fig.64, PL.37）

1号甕棺（25）　体部下半を欠いている。口径64.5cm，現存高52.6cmを測る。頸部が長く，外反する口縁部と小さく張った胴部との境には外面に各2条の沈線を施すが，胴部のそれは螺旋状である。口縁部の内側は粘土を貼付けて肥厚させ，端部の上・下に刻目を施す。口縁部外面にタテハケを，内面にヨコハケ調整を施す他は丁寧なナデ調整である。褐色を呈する。

2号甕棺（26）　口径54cm，器高74.8cm，底径19cmを測る。体部は丸味をもち長胴である。最大径は上位にある。頸部は小さく内傾し，外反した口縁部の内側に粘土を貼付けて肥厚させる。口縁端部の下位に刻目を施す。又，頸部と口縁部，胴部の境にはそれぞれ2条の沈線を施す。頸部にはタテ方向の2条の沈線を下位の横線より立ち上げている。等間隔に施されているものと思われる。底部は厚く，やや上げ底である。頸部内面にはヨコハケを施す。体部の下位はヘラナデ状を呈している。焼成は良好で，暗褐色を呈する。

小　　結

遺構は弥生時代前期から中世迄亘っているが年代の確定できる遺構は弥生時代前期から律令時代迄である。各遺構を年代毎に大別するとI期－弥生時代前期～中期，II期－古墳時代前期～後期，III期－中世に分けられる。

I期は弥生時代前期～中期迄の甕棺墓，住居跡，井戸，1号，3号土壙を含み，更に2小期に分けられる。第1小期－この時期が最も遺構が多く検出され，台地の利用度が高い。前期末に比定できる甕棺墓の内2号甕棺は頸部が短く，頸部と胴部の差が不明瞭な形態を示し，頸部にタテ方向の沈線を施すなど金海式甕棺の要素を有している。有田・小田部地区での前期末の甕棺墓は現在までに4ヶ所検出されている。調査面積が限定されているが，各地点での検出数は1～3個体である。その内，西福岡高等学校敷地内から検出した甕棺内からは細形銅戈を出土している。[註10]

住居跡はいずれも隅丸長方形を呈す。法量に統一性が無く，10号住居跡のような小型の遺構は住居跡として判断に迷う。しかし，いずれも周壁が直立し，中央，もしくは小口に柱穴と思われる Pit を有していることや前期の貯蔵穴に比べ規模が大きいことなどから住居跡として報告した。6号，9号住居跡が8号住居跡に，3号住居跡が5号住居跡に切られるので円形住居跡に先行する遺構である。8号，10号住居跡より出土した甕形土器は口縁部が如意形を呈し，底部は端部が張り出しており前期の古い形態を示している。11号住居跡は先の住居跡に比べ方形に近い形状を示すが，遺存状態が悪い。又，各時期の小 Pit が切合っており，遺物からは時期を知る手懸りを得ないが，わずかに9号住居跡と切合っている。古墳時代の1号住居跡は周囲のベットが削平された遺構と思われるが，各壁は直線的で，隅角は明瞭である。更に周壁下に周溝をもち床はタタキ状を呈するなどの特徴をもっている。又，かまどをもつ住居跡は方形を呈し，4本柱の形状を示すところから上記の時代の住居跡には概当しない。断定はできないが弥生時代終末から古墳時代の住居跡に近似する特徴を見い出さないとすれば弥生時代前期及び後期が考えられる。この遺跡では後期の土器は1点も出土していないので前期の住居跡を考えるのが妥当かもしれない。とすれば野黒坂遺跡[註11]等に同形状の住居跡が検出されており，弥生時代前期後半の時期比定されているところから11号住居跡が甕棺に伴う遺構と考えることも可能である。

第2小期は円形住居跡である。出土遺物は非常に少ないが5号住居跡出土の甕形土器は体部外面に小さく低い突帯を施しており中期前半迄の時期が考えられる。5号住居跡は4本柱の柱穴が切合っており，建て替えを示しているが，円形住居跡の集落は短期間であったろうと思われる。8号住居跡は貯蔵穴の小口部分に小 Pit を設けているが，こうした例は韓国松菊里遺跡[註12]或いは宗像郡今川遺跡[註13]，行橋市下婢田遺跡[註14]で認められる。今川遺跡は前期後半に，下碑田遺跡は前期～中期に比定された円形住居跡である。有田七田前遺跡[註15]では縄文晩期の土器に無文土器が伴っているが，この台地に於ける朝鮮半島との関わりを如実に示している。この小期には井戸，及び3号土壙の貯蔵穴が伴うものと思われる。この時期に伴う墳墓は今回検出しなかったが，当該地の南側約50mに甕棺墓群が推定されているので，これが当該の円形住居跡に伴う墳墓と考えて良いであろう。

II期は古墳時代住居跡と掘立柱建物である。この住居跡はベットを削平されており，全体形を把握することはできないが，第55次調査の2号住居跡と同様に削平された形状を呈している。東辺中央の不整楕円形の Pit は貯蔵穴，もしくは入口部分を表わすものと思われる。高坏の坏部は深く，4のように全体に丸味を帯び，体部と底部の境が不明瞭になる傾向にある。甕形土器は口縁部の器壁が厚く，外弯した端部は丸味をもつなどいずれの器形も4世紀後半～5世紀前半代の土器にはみられない特徴をもつことなどから5世紀中頃の時期が考えられる。

掘立柱建物は3棟検出した。1号建物は1間×2間の規模を測り，柱穴掘方径が約50×80cm

程の規模をもつ。こうした例は有田遺跡第41,74次調査で検出している。規模は近似しており，第41，74次調査では建物の掘方からは弥生時代の土器片しか検出していない。当該地の1号建物は弥生時代の土器片を多く含んでいるが，Fig62－5に示す甕形土器が出土している。この土器は磨滅が著しいものの口縁部が内弯している特徴から4世紀後半～5世紀前半の時期が考えられる。この1号建物の東側に接した2号建物は2間×3間の規模を測り，1号建物とはほぼ同一方位である。南側梁行に庇をもち，北面と東面には幅60cmを測る犬走り状の庇がある。2号建物は居宅的な建物と考えて良いだろう。1号，2号建物との配置から，居宅的な2号建物に1号建物のような倉庫が伴うのであろう。竪穴式住居から掘立柱建物への移行は畿内では一般的に6世紀中頃もしくは後半にはほぼ終了すると云われる。福岡県内に於いても屋形原遺跡のように7世紀後半～8世紀代まで竪穴住居跡が残る例は少ない。早良平野に於ける竪穴住居跡[註36]は奈良時代に下る小型で特殊な竪穴形態をもつ遺構は別にして，古墳時代の住居跡は6世紀の後半には掘立柱建物へ移行するようである。有田遺跡では7世紀前後と思われる第3次調査の大型竪穴住居跡1軒を除いては6世紀の中～後半期以降の竪穴住居跡を検出しない。但し，拠点的な集落に於いては竪穴住居跡から掘立柱建物への移行は更に早い時期に行なわれたと推測されている。上記の事実を踏まえると，2号建物は竪穴住居跡から掘立柱建物への移行形態，すなわち6世紀後半から7世紀の時期が推測される。しかし，有田台地が早良平野にあって拠点的な集落のひとつを形成していたことは云うまでもなく，当該地域が律令時代に入って早良郡田部郷に比定されていることを考え合せると1号建物から検出した甕形土器の年代までさかのぼらないまでも，一般の掘立柱建物よりも先行した時期に存在した可能性は充分にある。

Ⅲ期は表土より李朝の皿を検出しているだけで具体的な遺構は判別し得なかった。3号掘立柱建物は中世の時期と思われるがどの時代に相当するのか不明である。

次に有田・小田部台地の弥生時代～古墳時代の遺構について概括する。縄文時代終末から弥生時代初め頃の溝は，有田地区の台地中央を横断する状態で環状に巡る。但し，台地を巡ると云うよりも谷地を巡る形状である。この内側には近年夜臼期の住居跡や，弥生時代前期の貯蔵穴が検出されている。弥生時代前期後半の溝は台地縁辺を巡るが，未だ規模，構造は不明である。この時期の甕棺墓は4ヶ所検出されており，西福岡高校敷地内からは細形銅戈が伴っている。いずれも台地の先端に位置していることが特徴づけられる。この時期の住居跡も検出例が無い。住居跡が台地上に形成されたのでは無く，谷地に面した緩斜面に存在した可能性が強い。中期は前期と同じ立地を踏襲し，一部には拠点的な集落を形成し，更に，各支丘の先端部にも集落は形成される。第3次調査では径8～9mの住居跡が6棟～8棟存在し，環状に配置している。いずれも数度の建て替えを行なっている。広場の中央には井戸を2基を設けており，井戸からは井戸枠や，溶笵等も出土している。こうした拠点的な集落は台地中央部分に位置し，他の集落は支丘の先端に立地している。第64次調査では前期からつづく甕棺墓が径50m四方に限

られるなどの特徴を有している。弥生時代後期は遺構の検出は少なく，第74，85次調査で，各々1基の井戸を検出するにとどまった。いずれも台地東側斜面に位置する。この時期以降4世紀に至るまで有田・小田部台地に於いて遺構の検出は無く，わずかに遺物を採集するのみである。集落の立地条件が変わるのか，今後の検討を要する。

4世紀以降は弥生時代の立地を踏襲すると共に住居跡の件数は爆発的に増加し，特に4世紀中頃～5世紀前半には4～5軒を単位とした集落が約50～60m間隔で形成される。集落における単位集団の構成を表現すると思われる。5世紀～6世紀に及んでも立地形態は変化が無く，第64次調査では4世紀後半から6世紀中頃までの集落が緩斜面に継続して形成されていた。

以上概括したが，遺跡内部をパズル的に調査しているに過ぎないため推測に終始している点が多分にある。今後，各時代の集落の問題点を踏まえて肉付けを行なってゆきたい。

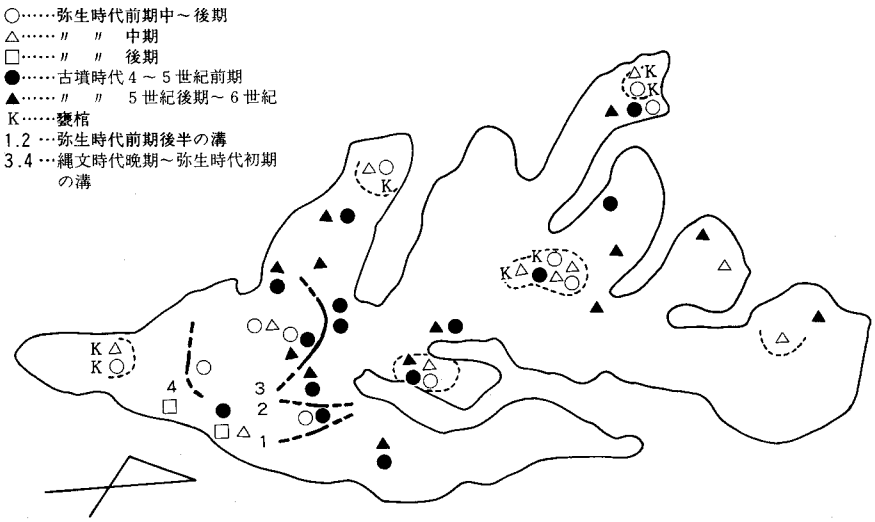


Fig.65 有田・小田部台地の弥生・古墳時代の遺跡（1/10,000）

6．第49次調査

調査の概要

調査対象地は福岡市早良区小田部２丁目20－21番地に所在する。対象面積は655m²である。

当該地は北から小谷が入り込み，八手状に分岐する有田・小田部台地の一番東側の小台地の中央部にあり，標高9.7mを測る。当該地の南側は道路によって開削され，比高２～３mを測る小崖面を呈している。当該地の西側隣接地は，昭和53年に第10次調査として発掘調査が行われた。昭和56年４月に埋蔵文化財の事前調査願いが文化課に申請され，それを受けて５月に試掘を行なった。その結果当該地は既に著しい削平を受けているものの，溝や土壙等の遺構をわずかながら検出した。又南側で段落ちする事を確認した。

発掘調査は昭和56年６月９日～19日迄実施した。北側では表土下20～30cmを測り，遺構面は明黄褐色粘質土である。南側段落ち部分では表土上に１m以上の八女粘土ブロックを主体とする埋土がなされている。遺構は土壙３，溝条遺構３条，少数のPitを検出した。遺物はPitより古墳時代前期と考えられる古式土師器数点，３号土壙より完形の白磁碗が出土している。各遺構の遺物の出土量は非常に少ない。

検出遺構

土　壙

１号土壙（Fig.67，PL.39－１）

平面形は円形を呈し，直径92cm，深さ18cmを測り，底面に直径37cm，深さ10cmを測る円形Pitが更に掘り込まれる。出土遺物はない。

２号土壙（Fig.67，PL.40－２）

１号土壙の北東約5.5m離れた所にある。平面形状は楕円形を呈し，直径90×58cmを測る。長軸を略南北方向に取る。断面形状は逆台形を呈し，底面北側は一段深く掘り込まれ，最深部で60cmを測る。覆土は黒褐色粘質土に黄褐色粘質土の粒子を混入する。出土遺物はない。

３号土壙（Fig.67，PL.39－３，４）

調査区北側に検出された。主軸をN７°30′Eに，長辺129cm，短辺75cm，深さ15cmを測る。平面形は隅丸長方形，断面形は船底形を呈す土壙墓である。覆土は暗茶褐色粘質土に地山ブロックを混入し，粘土等は混入しない。北東隅に玉縁口縁の白磁碗が副葬されていた。北側が頭位と考えられる。

溝状遺構

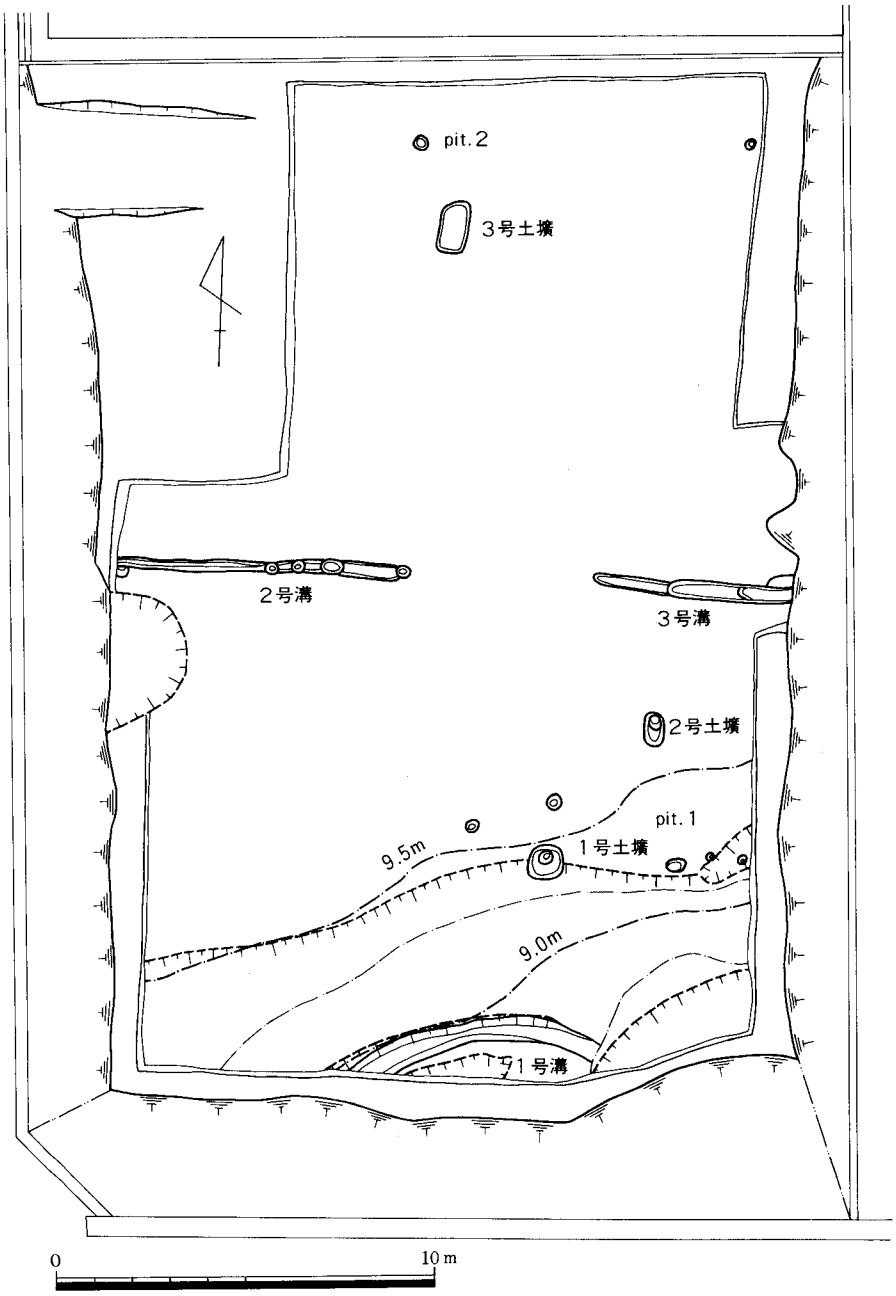


Fig.66　第49次調査遺構配置図（1/200）

1号溝（Fig.66）

南側段落下境界地で検出した。弧形状で，断面皿状を呈する小溝である。南側は道路によって切られ，東側は細く浅くなり消滅する。幅は36～102cm，深さ10～25cmを測る。覆土は茶褐色粘質土。遺物は土師器，須恵器，瓦質土器，白磁の細片が数点出土した。旧畑地の地割りに関連する溝上と思われる。

2，3号溝（Fig.66,PL.39－1，2）

調査区中央に位置し，ほぼ東西方向の溝である。2号溝は幅24～36cm，深さ10～16cm。3号溝は幅42cm，深さ15cmを測る。断面皿状を呈する小溝である。両溝は4.8m離れているが同一延長線上にあり，それぞれの覆土が黒～暗褐色粘質土を主体とし同時期と考えられる。遺物は須恵器，土師器の細片が数点出土した。

Pit-1，2（PL.40－3）

Pit 1は調査区南側段落際で検出した。直径45×30cm，深さ39cmを測る楕円形のPitである。土師器の壺，高坏片が出土した。Pit 2は北側で検出した。直径35×30cm，深さ19cmを測る円形のPitである。土師器の直口壺，脚付鉢等が出土した。

出土遺物

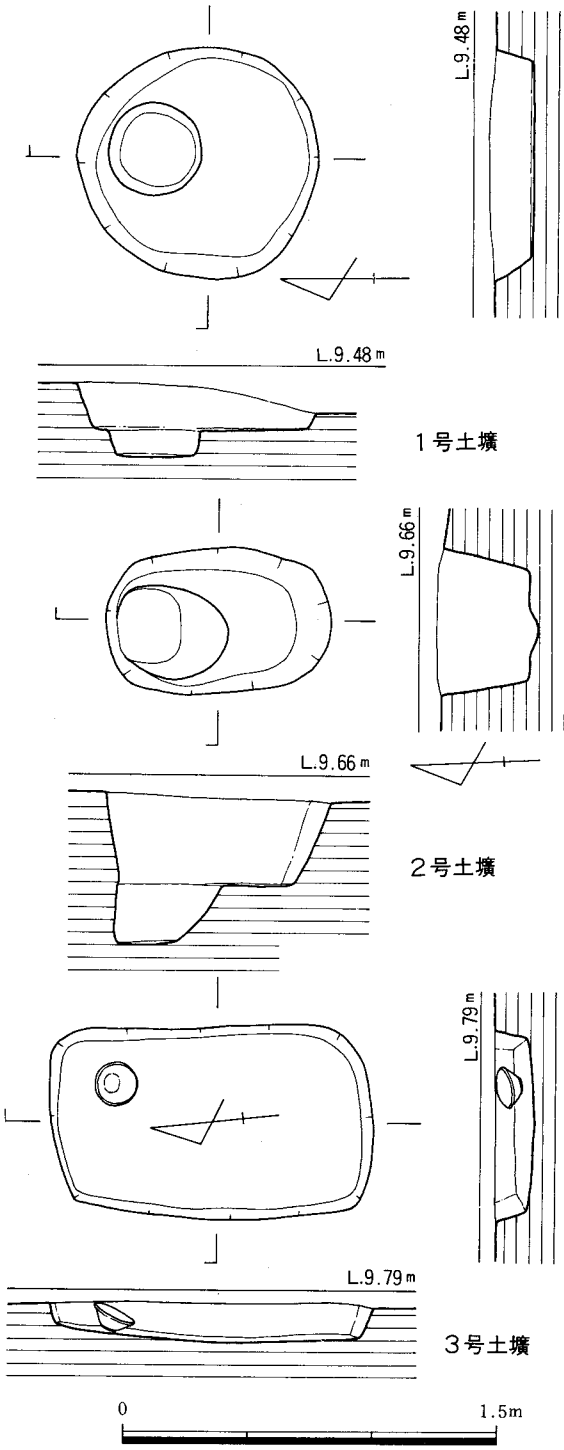


Fig.67　1～3号土壙（1/30）

Pit出土遺物（Fig.68，PL.41）

Pit 1より1，2が，Pit 2より3～6が出土している。

土師器

壺（1）　2重口縁を呈す口縁部片である。復元口径21.5cmを測る。内外面とも磨滅がひどく調整は不明。胎土は細砂粒を含み焼成は良好。色調は外面が暗茶褐色，内面は黄灰色である。

高坏（2）　脚部片である。裾端部は大きく外に開く。外面はナデ調整，内面は磨滅がひどく調整不明，胎土は砂粒をわずかに含む。色調は黄灰色を呈す。

直口壺（3）　完形で，口径15.0cm，器高17.0cm，胴部最大径17.7cmを測る。底部は尖底気味で，胴部最大径は胴部上半にある。口縁は直立し二重口縁の名残りを残す。外面は胴部でタ

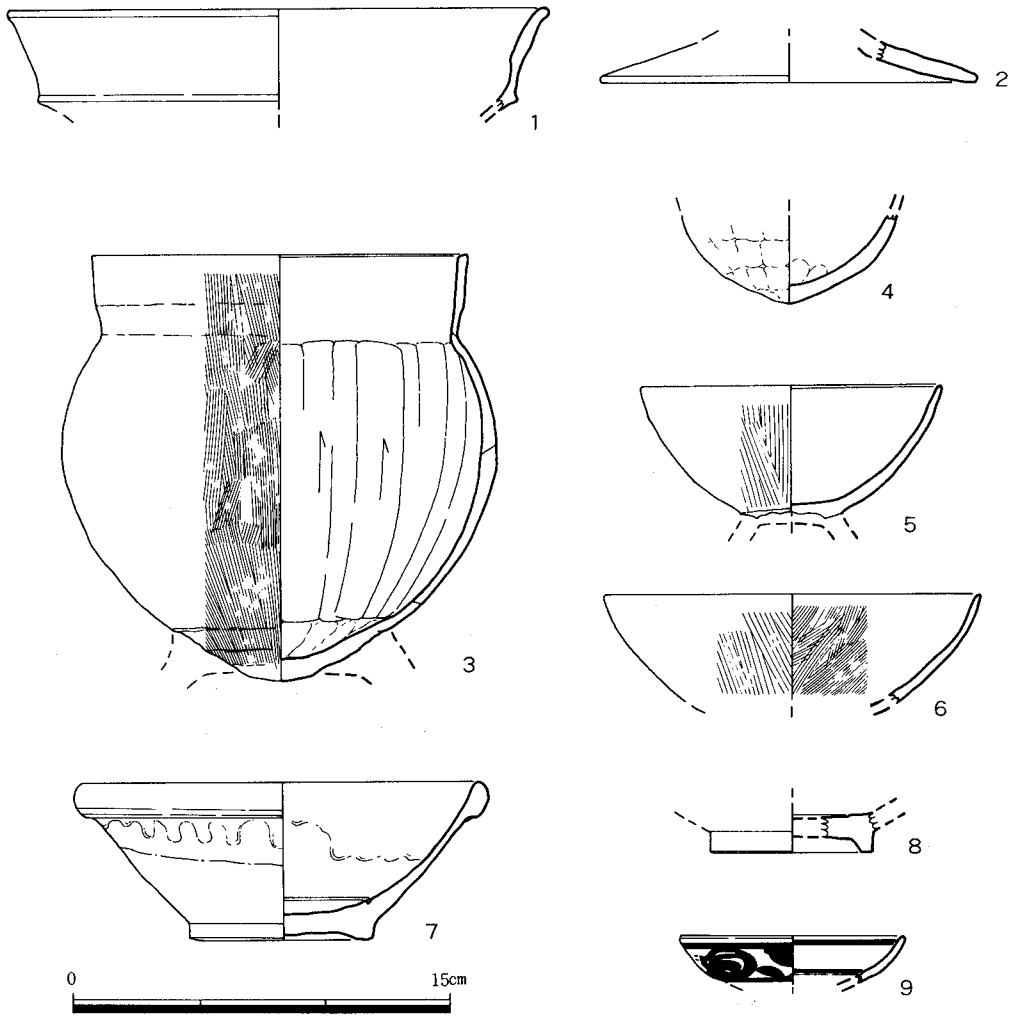


Fig.68　出土遺物（1/3）

テ，又はナナメのハケ，内面はタテ方向のヘラケズリである。胎土は3㎜内の砂粒を含み，焼成は良好。色調は明褐色を示す。

鉢（4～6）　4は口縁部を欠失するが，推定で器高9㎝前後である。全面ナデ調整，指圧痕が残る。手捏土器である。5，6は底部を欠失するが，脚付鉢と思われる。5は口径12.2㎝を測る。内外面とも磨滅がひどく調整不明。6は口径14.5㎝を測る。外面は磨滅が著しいがタテハケがかすかに残る。内面は1㎜間隔10本単位のタテハケが施される。胎土は4が精選され，5が砂粒を少量含む。6が3㎜内の砂粒を含む。焼成はいずれも良好。色調は4が灰褐色，5，6は明褐色を呈す。

3号土壙出土遺物（Fig.68，PL.41）

白磁

碗（7）　完形で，口径16.4㎝，器高6.3㎝，高台径7.5㎝を測る。口縁部は大きな玉縁を持つ。体部外面下半部は露胎である。体部外面上半部から内面見込にかけて縁味をおびた灰白色の釉がかかる。内底見込みに一条の沈線がめぐる。胎土は灰白色を呈す。

1号溝状遺構出土遺物（Fig.68，PL.41）

白磁

碗（8）　底部小片である。復元高台径6.5㎝を測る。内面に青味を持った灰白色釉が施され，内底見込みは輪状の釉のかき取りを行なう。胎土は灰白色を呈す。

表土出土遺物（Fig.68，PL.41）

染付

皿（9）　復元口径9.1㎝を測る。底部は欠失する。体部外面には2条の圏線を施し，その間に唐草文様を施す。体部内面には2条の圏線が青色の呉須によって描かれている。胎土は灰白色を呈す。色調は全体にうすい透明釉が施されており，白色を呈す。中国明代の所産である。

小　　結

遺構の年代は大きく2時期が主体となる。第Ⅰ期はPit1・2の時期である。出土土師器が武末純一氏の編年による宮ノ前B期段階に相当し，古墳時代前期である。第Ⅱ期は第3号土壙の時期である。副葬品の玉[註17]縁口縁の白磁碗は太宰府史跡分類の第Ⅳ類に比定され，12世紀後半が考えられる。同種の土壙墓は第3，56次調査でも検出している。

以上調査の概要について述べたが，今回の調査で特記すべきことは，白磁碗を副葬した中世古墓といわれる3号土壙である。市内においては開発に伴う発掘調査件数の増加につれて，青磁や白磁を副葬し

た中世古墓の調査例が増加して来ている。現在知り得た範囲では，中世古墓は西区は今津古墓，早良区は有田遺跡群第３，49，56，77，80次地点，藤崎遺跡第５，６次地点，西新町遺跡，城南区は片江浄泉寺遺跡，博多区は博多遺跡群，諸岡遺跡Ｇ区，席田久保園遺跡，東区は馬出遺跡，多々良遺跡，和白遺跡群と11遺跡で18ヶ所以上を数える。その分布は南区を除く全市域に亘っている。検出遺構数は200体以上の人骨を出土した集団墓の今津古墓や，都市遺跡の博多遺跡群を除けば，各遺跡とも１～２基と少ない。[註18][註19][註20][註21][註22][註23][註24][註25][註26][註27]

墳墓の形態は，土壙墓もしくは木棺墓である。土壙墓と思われるものは，和白遺跡７号遺構，久保園遺跡（２基）藤崎遺跡第５，６次調査，有田・小田部遺跡群第３，49，56，77（２基），80次調査検出のものである。木棺墓については，馬出遺跡，西新町遺跡等である。博多遺跡群では木棺墓と土壙墓の両方がある。平面形状は大半が長方形又は隅丸長方形である。規模については，計測値の判明している例から，２類に分類出来る。Ｉ類は長さの割には幅の狭いもの。II類は長さは短いが幅の広いものである。これら２つの形態の間には時期差は認められず，又副葬品による差も認められない。この形態の差が何に起因するのか，まだ調査例が少なく不明である。今後の調査例の増加をまって更に検討したい。

副葬品は少なく，青磁，白磁１～２枚が多いが，博多遺跡群では青磁・白磁を10数枚副葬する例がある。白磁を伴う例としては久保園遺跡11号土壙，有田，小田部遺跡群第３，49，56次調査，諸岡Ｇ区で検出されており，いずれも玉縁口縁碗である。青磁を伴う例では，同安窯系を伴うものが，和白遺跡７号遺構，久保園遺跡２号土壙墓である。他は龍泉窯系のものであり，器種は鎬蓮弁及び劃花文碗が多い。磁器以外の副葬品は，和白遺跡７号遺構で土師皿３，鉄刀１，西新町遺跡で土師皿２，鉄鎌１，藤崎第６次調査で，鉄刀２，砥石１，有田第３次調査区で刀子１，第56，80次で土師皿２，諸岡Ｇ区で土師器の坏１，浄泉寺で土師皿１が検出されているのみである。出土状況は大きく３つに分れる。①は隅にあり正位で床面密着するもの，②はやや中央寄りに正位で床面密着するもの，③は床面より浮いた状況で流れ込んだ状況を示すもの。①は頭部に，②は腹又は胸部に副葬されたものであろう。③は木棺墓の可能性があり，棺土に置かれたものが，棺の腐蝕に伴って落ち込んだものであろう。

造営年代については，年代決定出来うる共伴土師器や磁器の形態からほぼ時期が限られる。12世紀から13世紀までの間で，特に13世紀が中心である。この種の古墓が博多湾沿岸の砂丘地帯に多いことから元寇に関連する墓とする考えもある。しかし出土地が内陸部に及んでいることや，各遺跡で１，２基しか検出されず，同時期の他の土壙墓と副葬品で明確に差があることから，各地域の豪族の墓とも考えられる。調査区近辺に豪族がいたという文献的裏付はない。しかし諸岡Ｇ区の近くでは，昭和57年度に14～15世紀と思われる館跡が調査されている。有田・小田部地区でも16世紀には小田辺城が築城されるので，それ以前に豪族がいた事は充分考えられる。このように磁器を副葬する古墓は種々な問題を含み，中世遺跡の性格を解明するうえで重要な手懸りになると思われる。有田遺跡群ではこの種の古墓が５ヶ所（６基）も検出されているので，次の機会に再度詳細な検討を行ないたい。

註17　武末純一「福岡県・早良平野の古式土師器」古文化談叢第５集所収1978
18　柳田純孝編「今津」今津小学校百周年記念会1975
19　福岡市教育委員会「藤崎遺跡II」1982
20　福岡市教育委員会「高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告II西新町遺跡」1982
21　福岡市教育委員会「浄泉寺遺跡－遺構編」1983
22　福岡市文化課　池崎譲治氏の御教示によると多数の木棺墓や土壙墓が青磁，白磁を伴うとのことである。
23　福岡市教育委員会「板付周辺遺跡調査報告書（６）」1980
24　福岡市教育委員会「席田遺跡群久保園遺跡」1983
25　昭和58年地下鉄線内遺跡で調査。市文化課池崎譲治氏の御教示による。
26　福岡市教育委員会「多々良遺跡」1972
27　福岡市教育委員会「和白遺跡群発掘調査報告書」1971

7．第55次調査

調査の概要

調査の対象地は福岡市早良区有田１丁目33－３外番地に所在し，対象面積は317m²である。

有田地区の最高所は標高15m前後を測る平坦地形を形成する。これより北側は北東方向，北西方向から二つの谷が入り込むため幅150m，標高12m前後を測る狭長なくびれ部を形成する。当該地はこの地域に位置している。周辺では昭和54年度に第29，32次調査が，昭和56年度には第56次調査が実施され，当該調査地と関連する掘立柱建物や溝等が検出されている。昭和55年度に専用住宅建設に先立って発掘調査が行なわれ，当該地との境界地に古墳時代の住居跡と大規模な掘立柱建物を検出しており，これらの残存部分が存在することが予想されていたため昭和56年度の国庫補助を得て発掘調査を実施した。

発掘調査は昭和56年８月７日～９月29日迄実施した。表土，及び排土は狭い調査区のため外部へ搬出し，調査終了後に埋戻しを行った。遺構はローム層上に検出されるが残存状態は良好ではない。検出した遺構は古墳時代住居跡２軒，古墳時代～中世の掘立柱建物４棟，古墳時代土壙１基，中世土壙２基，律令時代溝２条，中世溝２条を検出した。この内には第29次調査と同一遺構がある。1号住居跡は第29次調査の第3号住居跡と，1号掘立柱建物は同じく第29次調査の１号掘立柱建物と同一遺構である。

検出遺構

住居跡

２軒の住居跡を検出したがいずれも削平のため壁下の周溝を残しているのみで遺存状態は悪い。

１号住居跡（Fig.70，PL.43－1，44－1）

北東隅の境界地に位置する。第29次調査の3号住居跡と同一遺構である。削平のため住居壁，及びベッドは消滅している。現存長4.35m，現存幅3.92m，深さは２～４cmである。周溝幅は５～８cm，深さ約５cmを測る。炉は長径70×短径55cm，深さは12cmを測る。南辺の中央に幅50cm，深さ約20cmを測る隅丸方形のPitがある。このPitから砥石等が出土している。この住居跡は東側，西側，北側の3辺にベッドを架設する形状と思われるので，このPitは入口を想定することができる。又，住居跡は建て替えが行なわれた形跡がある。第29次調査分では東辺に接して長さ約1.5m，幅68cm，高さ約５cmのベッドが付設され，ベッドの南辺に沿って周溝が第55次調査分迄延びている。この周溝は先の入口を想定したPitと切合い関係にあるところから，規模の拡大が計られていると思われる。住居跡の主柱は２本で，P1は掘方径46cm，深さ60cm，P2は掘方径30

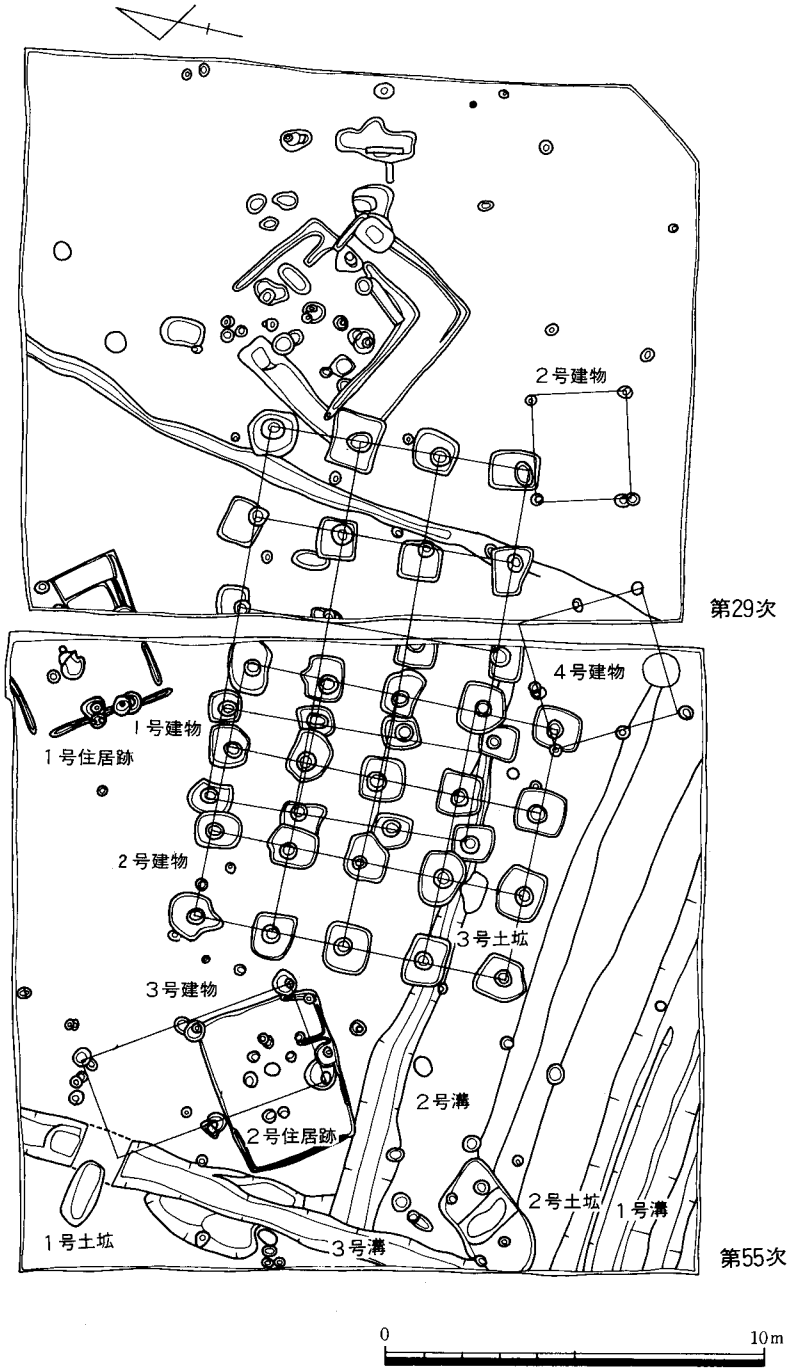


Fig.69　第29，55次調査遺構配置図（1/200）

cm，深さ38cm，柱根径18cmを測る。遺物はP1より鉄製の手鎌が出土した。

2号住居跡（Fig.71，PL.43－2，44－2）

削平のため遺存状態は悪い。長さ4.16m，幅3.26mを測る。壁はわずかに高さ2～4cmを残している。周溝は東辺の南側から左回りに北辺の西側⅓迄廻っている。幅6～15cm，深さ6cmを測る。炉は住居跡のほぼ中央にあって，長さ36cm，幅30cm，深さ2cmを測る。主柱は東西方向にP1，P2の2本が検出された。柱穴径25～28cm，深さ44～48cmを測る。南辺の中央に位置し，長径58cm，短径54cmの不整円形のPitが設けられる。深さは12cm程度で，内部より小形の高坏，埦，軽石製の浮子が出土した。このP3の東側には，周溝から北へ直角に曲がる長さ約80cmの小溝がある。削平のため住居跡の本来の形態は不明だが，この直角に曲がる小溝がベッドの位置を示している可能性がある。しかし，住居跡の残存形状をみた場合，古墳時代前期の住

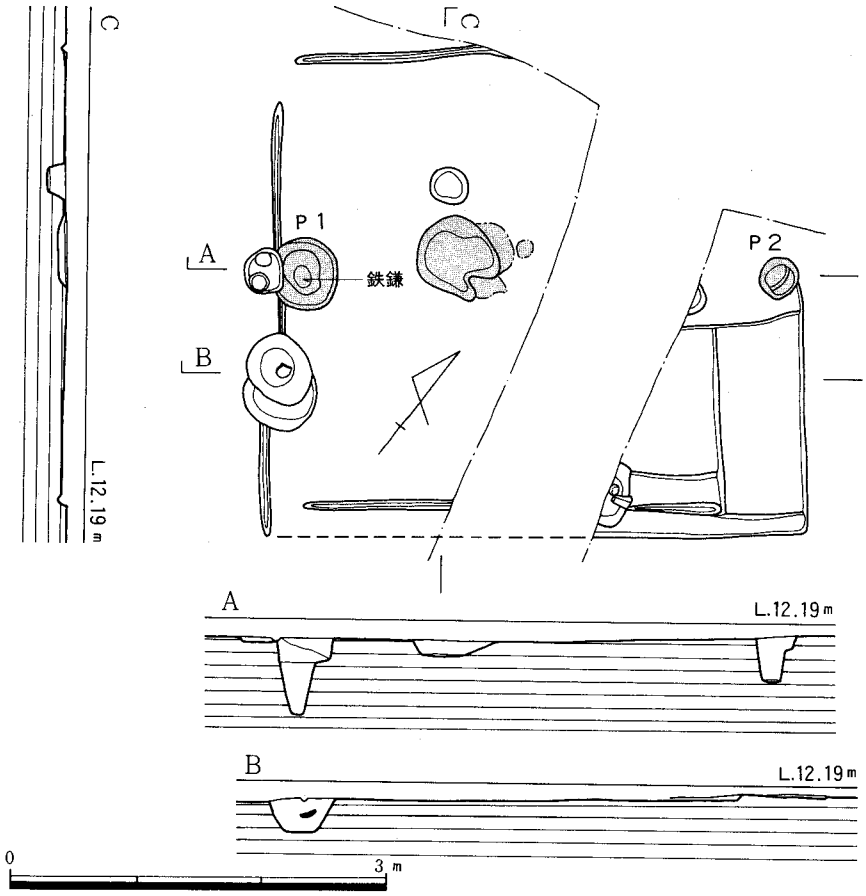


Fig.70　1号住居跡（1/60）

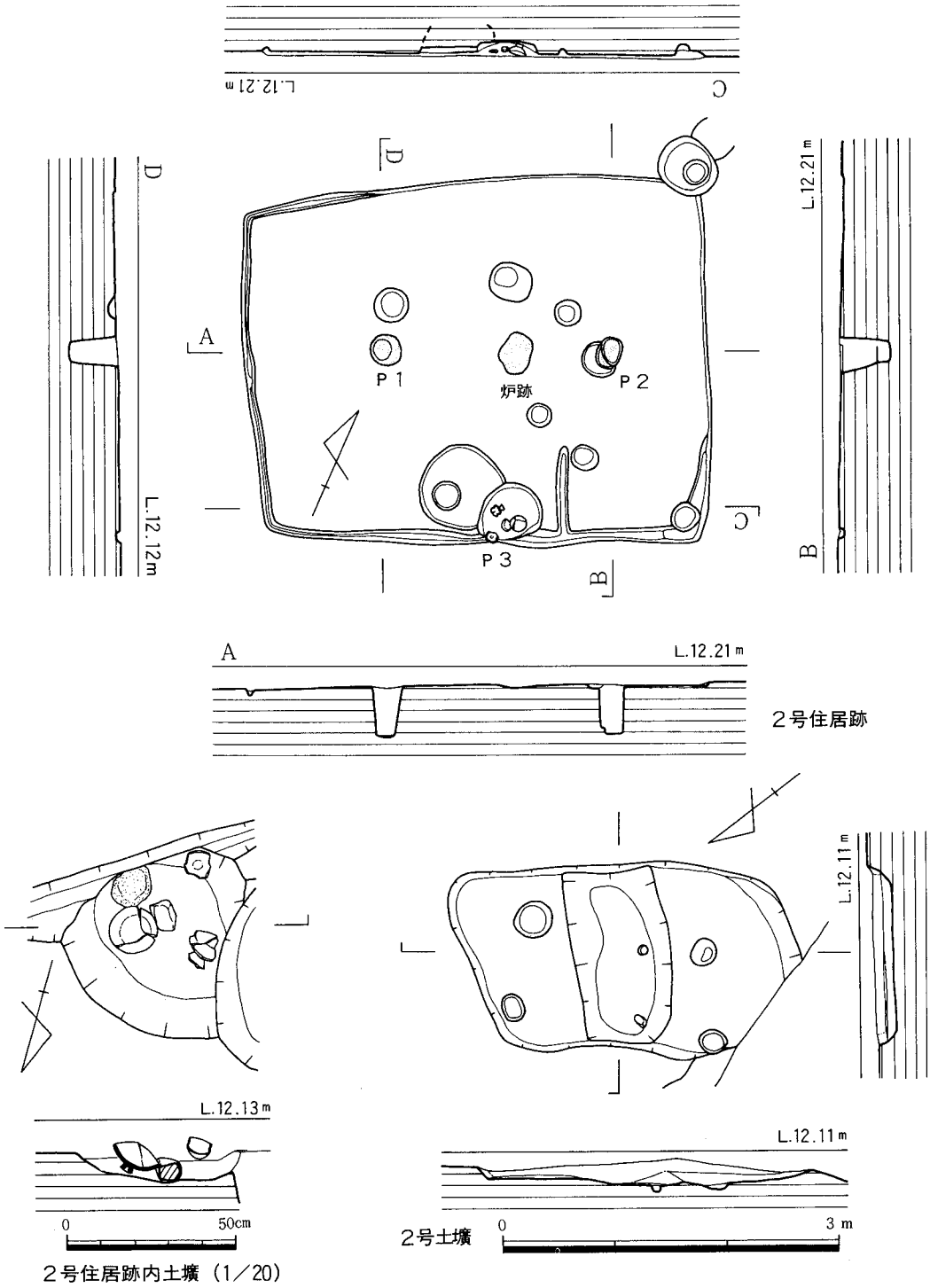


Fig.71　2号住居跡，2号土壙（1/60）

居跡の規模として小さく東辺，西辺，北辺の外側にベッドを付設した可能性が強い。入口の問題についてはかつて，第32次調査検出住居跡の東辺に設けられたPitがはしごを置いた位置として報告したが，2号住居跡が3辺にベットを有した遺構を考えれば，P3は入口に相当することが考えられよう。[註1]

土　壙

住居跡と判別できないものや不定形の遺構を土壙とした。

1号土壙（Fig.72，PL.45－1）

3号溝を切っている。長さ1.76m，最大幅78cm，深さ13～20cmを測る。不整隅丸長方形を呈し，底部は浅いレンズ状である。覆土は暗茶褐色粘質土である。須恵器片等が出土しているが，中世の時期である。第56次調査では同規模，同形態で，白磁碗を伴った土壙墓を検出しており，この土壙も墓と考えることができる。

2号土壙（Fig.71，PL.45－1）

削平を受けており，本来の形態をとどめているとは思えない。現存長約3.2m，現存幅約1.8mを測る不整隅丸長方形を呈している。内部は2段になっており，中央は幅約90cm，深さ12cmを測る土壙状を呈している。底の高さも一定ではなく起伏が著しい。覆土は黒褐色土である。須恵器の坏蓋，小形壺等が出土した。6世

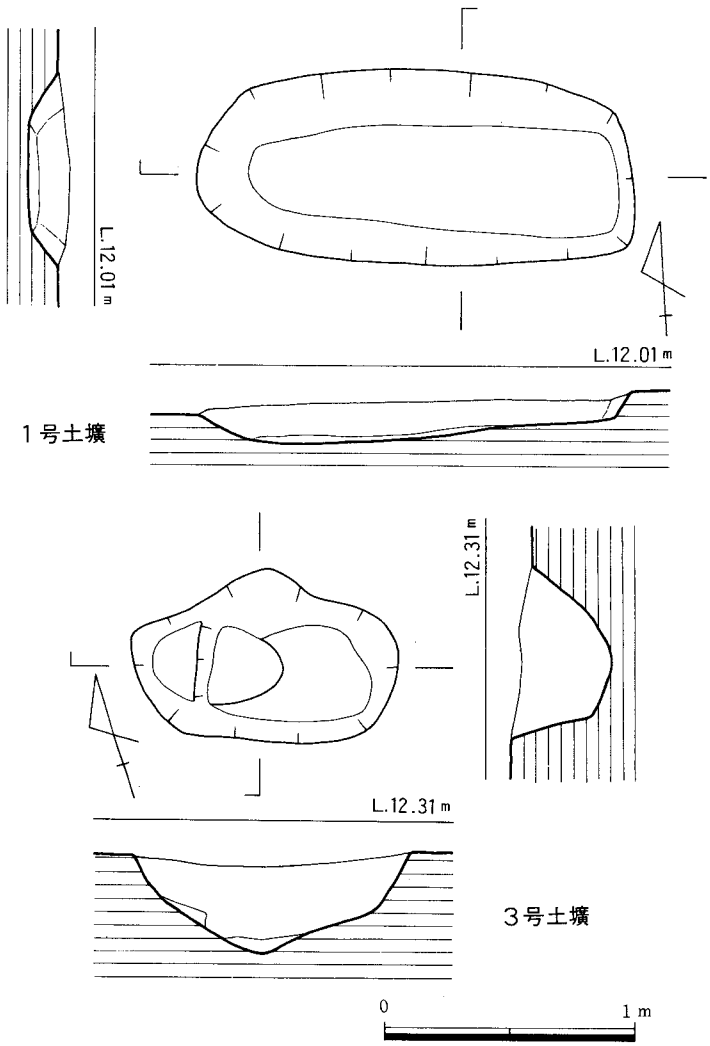


Fig.72　1号，3号土壙（1/30）

紀代が考えられる。

3号土壙（Fig.72, PL.45－3）

長さ107cm，最大幅70cm，最大の深さ40cmを測る。底部は舟底状で，西側に段がある。覆土は暗茶褐色粘質土である。中世の遺構である。

掘立柱建物

4棟の建物を検出した。律令時代が2棟，中世が1棟，古墳時代が1棟である。

1号掘立柱建物（付図2，PL.42－2，44－3・4）

第29次調査検出の1号建物の西側半分で，合わせて報告する。削平のため西側の遺存状態は悪い。2号掘立柱建物より先行する。東西方向の建物で桁行4間，梁行3間の規模をもち，主軸をN8°Wに置いている。桁行長は9.75m，梁行長は6.9m，掘方径80×130cm，柱根径30～40cm，掘方の深さ30～40cmを測る。各柱間は一定の数字で割り切れず，平均すると桁間は8.1尺，梁間は7.7尺である。遺物は全て細片であり年代の決め手となり得ない。

2号掘立柱建物（付図2，PL.42－2）

1号掘立建物より後出するが，これは1号建物を建て替えたものと思われる。南北方向に桁行4間，梁行3間の規模をもち，主軸をN5°Wに置いている。桁行長は8.25m，梁行長は6.75mを測るが，各柱間は一定の尺度で割り切れない。梁間平均7.5尺，桁間平均6.9尺である。掘方径100cm×140cm，柱根径35～40cm，深さ25～75cmを測る。遺物は少ないがP12より高坏の坏部片が出土している。

3号掘立柱建物（Fig.73）

南北方向の建物で1間×2間の規模である。側柱だけの掘立柱建物で，桁行長6.0m，梁行長2.7m，掘方径40～75cm，柱根径10～12cm，深さ10～20cmを測る。覆土は黒褐色土である。

4号掘立柱建物（Fig.73）

第29次調査との境界地に位置している。梁行2間，桁行2間以上を測る南北方向の掘立柱建物である。梁行長3.6m，桁行長3.6m＋α，柱穴径20～28cm，深さ8～18cmを測る。覆土は暗茶褐色土である。

第29次調査2号掘立柱建物（Fig.73）

1間×1間の建物で，桁行2.7m，梁行2.5m，柱穴径20cm，深さ10～20cmを測る。覆土は黒褐色土である。

tab.7　第55次調査掘立柱建物計測表

単位cm

	規　模	方向	桁　行		梁　行		方　位	床面積 (m²)	備　　考
			実　長	柱間寸法(尺)	実　長	柱間寸法(尺)			
1号	4×3	東西	975(32.5)	8・8・8・8.5	690(23)	7.5・8・7.5	N 8°W	67.28	
2号	4×3	南北	825(27.5)	7・7・7・6.5	675(22.5)	7.5・7.5・7.5	N 6°E	55.69	
3号	2×1	南北	600(20)	10・10	270(9)	9	N37°W	16.20	
4号	2×2	南北	360(12)	6・6	360(12)	6・6	N33°W	12.96	
第29-2号	1×1	東西	270(9)	9	250(8.3)	8.3	N73°E	6.75	第29次

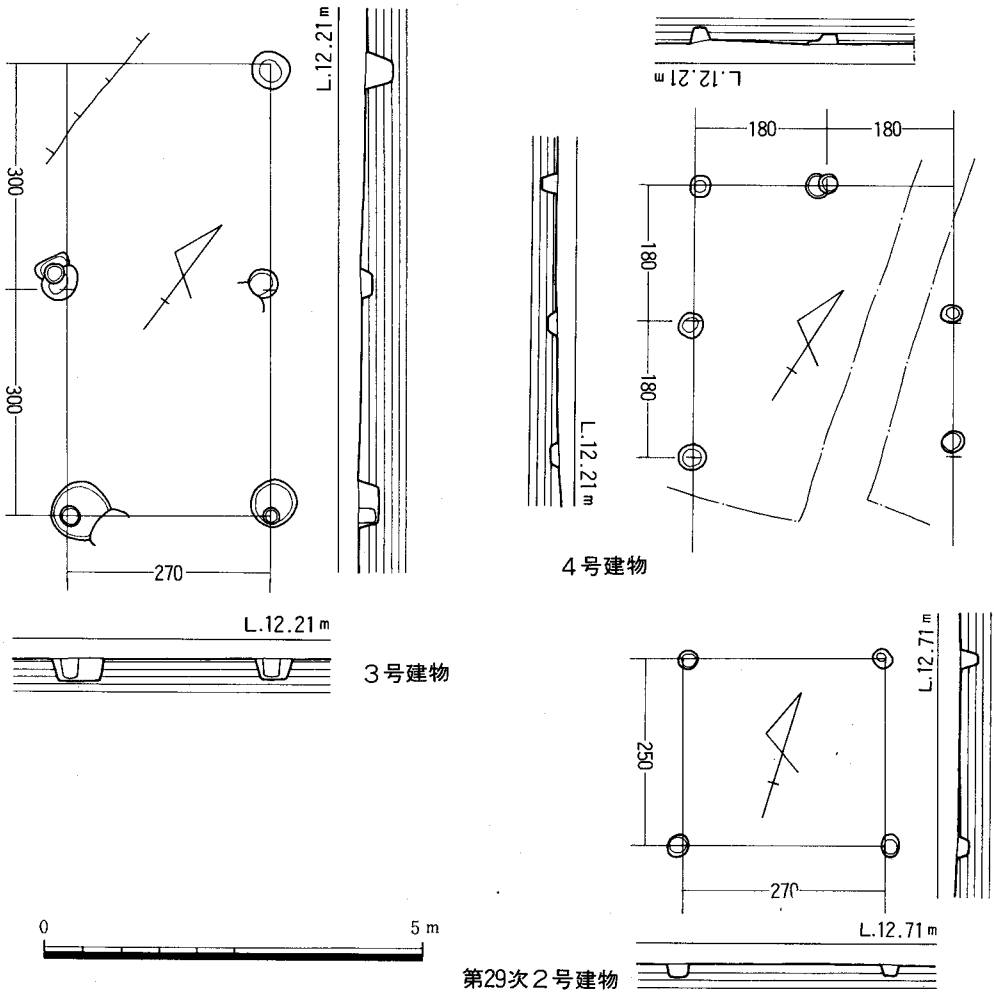


Fig.73　3号，4号掘立柱建物（1/100）

溝

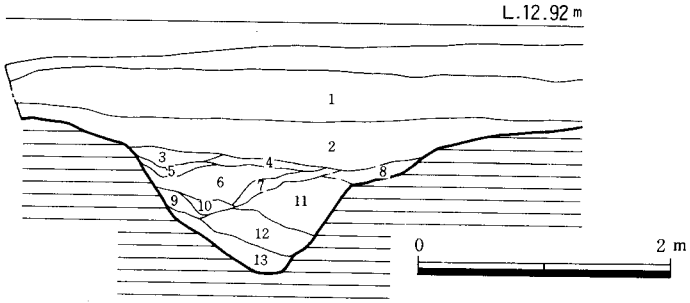
3条の溝を検出したがいずれも削平を受けたり，調査区隅に位置するため全容は明きらかではない。

1号溝（Fig.74，PL.45－4）

調査区の南西隅に検出した。東西方向の溝で，断面形は2段掘りである。1段目は浅いレンズ状を，2段目はV字形を呈している。幅4.1m，深さ約1.3mを測る。溝の肩から約1m下には拳大の礫が2～3重に認められたが，底部から浮いた状態であり，しかも礫群に規則性が無い事から埋没時の所産と判断した。この溝の東側延長部分は第32次調査検出の南北方向溝である1号溝に接続するか，もしくは直前で終るものと思われる。覆土は暗茶褐色粘質土を主体に構成するもので，遺物は青磁碗，白磁碗，明の染付碗，皿，国産陶器，雑器などが出土している。

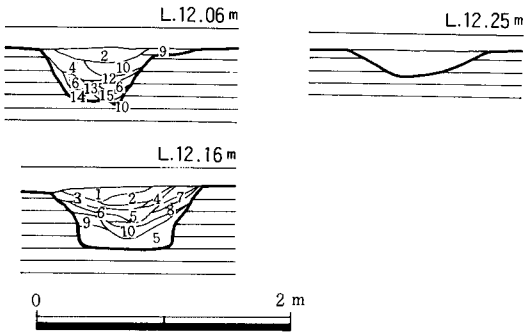
2号溝（Fig.74，PL.46－2）

1号の北側に平行している溝で，削平のため東側は第29次調査地との境で消滅している。現存の溝幅は1.4m，深さ約30cmを測り，断面形は浅いレンズ状を呈している。覆土はやや暗い



1号溝　土層名称

1．旧耕作土
2．茶褐色土，地山粒子多量混入
3．2に黒色土ブロック混入
4．2より明るい，地山土粒子混入
5．2に黒色土ブロック少量，茶褐色粘質土混入
6．黒色粘質土と明褐色粘質土，茶褐色土の混入
7．灰褐色粘質土に明褐色粘質土，黒色土混入
8．暗茶褐色粘質土
9．明褐色粘質土に地山土ブロック混入
10．灰褐色粘質土に黄褐色粘質ブロック混入
11．暗茶褐色粘質土，下ほど暗くなる。
12．灰褐色土と明褐色土の混合
13．褐色土に地山土粒子混入



2号溝土層名称

1．暗茶褐色粘質土に地山粒子混入
2．黒褐色粘質土に地山粒子，茶褐色粘土ブロック混入
3．暗茶褐色粘質土と暗黄褐色地山粒子多く混入
4．黒褐色粘質土に地山粒子少量混入
5．黄褐色地山土と暗茶褐色粘質土の混合土
6．明褐色土と地山土，黒褐色粘質土の混合土
7．4に明褐色地山ブロックを少量混入
8．黒色粘質土と暗茶褐色粘質土の混合土
9．3より明るく地山粒子を多く含む
10．黒褐色粘質土と明褐色粘質土の混合土

Fig.74　1号～3号溝土層図（1/60）

茶褐色土である。遺物は土師皿，白磁碗等が出土している。

3号溝（Fig.74，PL.46－1・3・4）

1号，2号掘立柱建物の西側に沿って南北方向に設けられた溝である。断面は逆梯形を呈し，最大幅120cm，深さ50cmを測る。この溝は北方向で東に向きをかえ第32次調査の2号溝，第17次調査の1号溝に接続する。覆土は黒褐色土で，土師器碗，陶質土器の壺形土器片が出土している。

出土遺物

1号住居跡出土遺物（Fig.75，PL.47）

鉄器

手鎌（5）　Pit 1から出土した。全長10cm，幅2.6cm，厚さ2mmを測る。両方の先端を1.1～1.4cmほど折返して袋部を形成する。刃部はやや弯曲している。折返し部分に一部木質が残っている。銹が付着している。

2号住居跡出土遺物（Fig.75，PL.47）

土師器

高坏（1，2）　低い高台状の脚を有しているが，いずれも脚裾部を欠いている。1は坏部口径11.4cm，坏高5.0cm，現存高7.5cm，2は坏部口径14cm，坏高4.5cm，現存高5.5cmを測る。1は体部が丸味をもつ深い坏で，2は浅い坏である。いずれも内外面はナデ調整で，茶褐色を呈している。胎土に砂粒を多く含む。

坏（3）　口径11.5cm，器高6.0cmを測る。底部は尖り気味で，体部はやや丸味をもつ。内外面ナデ調整を施こし，暗灰色を呈する。胎土に砂を含む。外面に煤が付着している。

石器

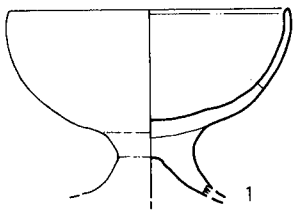
浮子（4）　平面形は菱形状を呈し，側面は不整である。側辺には紐がかりの溝を螺旋状に刻みつけている。軽石製である。

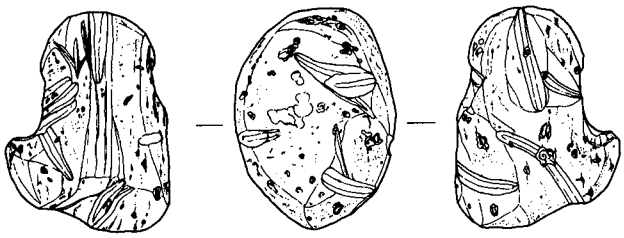
1号土壙出土遺物（Fig.75，PL.47）

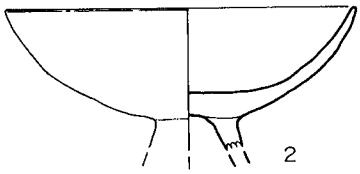
須恵器

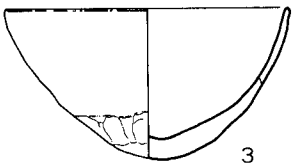
埦（6）　高台付の坏である。高台は細い。高台径9cmを測る。外面は暗青灰色，内面は青灰色を呈す。胎土に砂粒を含む。

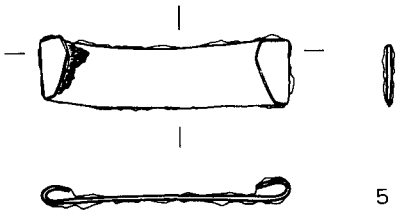
住居跡



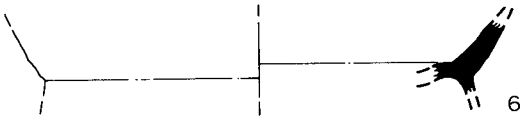




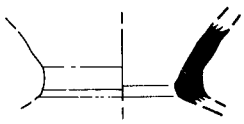




1号土壙



2号土壙



Pit出土

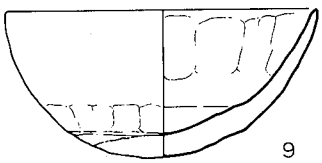


Fig.75　出土遺物（1/3）

2号土壙出土遺物（Fig.75, PL.47）

須恵器

坏蓋（7）　天井部と口縁部を欠く。天井部と体部の境は明瞭な段をなす。体部の中位に浅い沈線がある。ヘラケズリは施こされず，内外面ヨコナデ調整である。外面は淡灰青色，内面は灰褐色を呈する。胎土に砂粒を含まない。

壺（8）　頸部の破片である。口縁部は大きく外反している。内外面ヨコナデ調整である。胎土に砂粒を含む。軟質の土器である。

掘立柱建物出土遺物（Fig.75, PL.47）

須恵器

高坏（10）　2号建物のP12より出土。脚部を欠き，口径14cm，現存高3.8cmを測る。浅い坏部で，体部と口縁部の境には段を有し，沈線状に形成する。内底には自然灰釉が付着する。内外面ヨコナデ調整で，胎土に砂粒を含む。外面は暗青灰色，内面は暗灰色を呈している。

Pit出土遺物（Fig.75, PL.47）

土師器

坏（9）　1号住居跡の西側周溝と切合っており，住居跡に伴うのか否か不明である。口径12.5cm，器高5.9cmを測る。体部は半球体に近い。内外面ヨコナデ調整である。黄褐色を呈し，砂粒を多く含む。

1号溝出土遺物（Fig.76, 77, PL.48）

土師器

皿（11）　底径4.5cmを測る。体部は腰部で小さく屈曲して外へ開いている。糸切り底で，外面はヨコナデ調整である。内面は黄灰色，外面は淡黒灰色を呈し，胎土に細かい砂粒を含む。

須恵器

高坏（12）　底部と口縁部を欠いている。体部は丸味をもち，蓋受は三角形を呈し，小さくつまみ出される。底部にはカキ目が施される。内外面ヨコナデ調整である。色調は暗灰色を呈している。胎土は緻密である。陶質土器の可能性がある。

白磁

碗（13）　玉縁口縁を有し，口径15.5cmを測る。釉は厚目で，緑味を帯びた灰白色を呈する。

壺（14）　四耳壺の口縁部と思われる。口径9.5cmを測る。口縁端部は内側へ折返している。釉は厚目で，黄緑味を帯びた灰色を呈し，胎土は灰白色である。

青磁

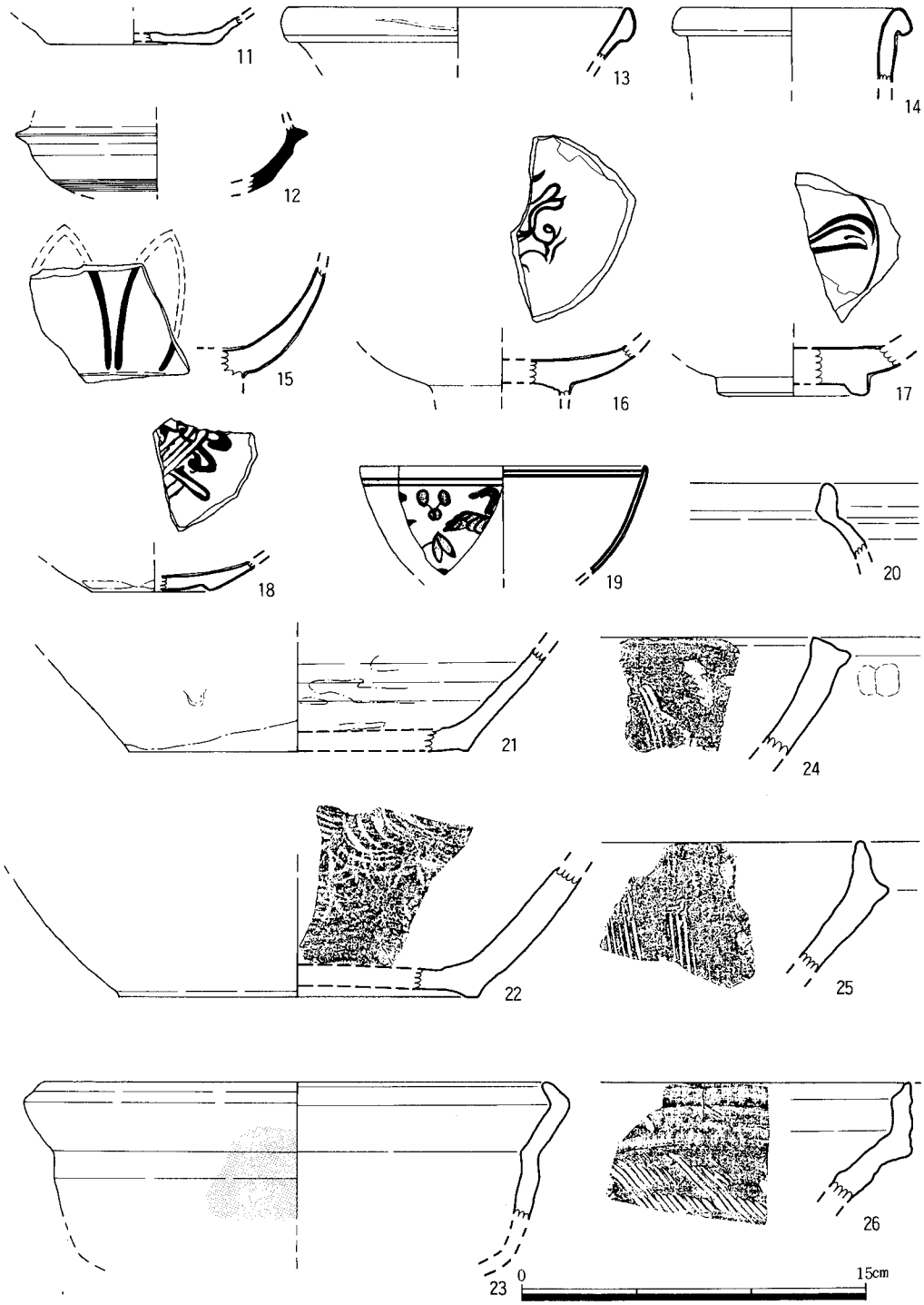


Fig.76　1号溝出土遺物（1/3）

碗（15～17）　いずれも竜泉窯系である。15は体部外面にヘラ彫りの蓮弁を施す。16は高台径約6cmを測り，内底に印文を施す。17は高台径6.7cmを測り，内底に雲文をヘラ彫りしている。釉は厚目に施こし，15は濃緑色，16は緑灰色，17は淡黄緑色を呈する。17は焼成が弱い。

染付

碗（19）　蓮子碗で，口径12.6cm，現存高4.7cmを測る。体部は丸味をもち，端部はやや内傾する。口縁部内外に2条の横線と外面に花鳥文を呉須にて施す。釉は青味をもった透明釉を厚目に施こす。胎土は白色である。

皿（18）　碁笥底の底部で，底径は5.1cmを測る。内底には福寿文？を配している。釉は厚目で気泡が多く，黄白色を呈している。外底には釉を施さない。焼成は軟質である。

陶器

21は灰釉陶器，他は褐釉陶器である。20は輸入陶器で，他は国産品と思われる。

壺（20）　2耳壺，或いは4耳壺の口縁部片である。釉は濃褐色を呈している。

甕（21，22）　21は底径15.0cm，現存高4.5cm，22は底径15.8cm，現存高5.7cmを測る。21は平底を呈し，外底はケズリ痕が残る。22は低い高台を削り出しているが，畳付は滑めらかに磨滅している。21の外面は暗黄緑色の釉が底部近く迄施され，内面は灰釉の付着が認められ，灰褐色を呈する。体部はヨコナデ調整である。22の体部はやや丸味をもっており，内面には青海波のタタキを施す。外面は暗褐色の釉を施す。いずれも砂粒を含まないが，21の胎土は灰白色を呈する。

摺鉢（24～26）　いずれも備前系の鉢と思われる。21は口縁端部をやや上下につまみ出し，平坦部を作る。25は口縁上端部を長くつまみ出し，平坦部を広くしている。内面に5本以上の条線を施す。26は“くの字形”を呈した口縁部で，端部は内側を抉っている。内面には8本以上の条線をナナメ方向に施す。胎土に砂粒を含み，24，25は茶褐色を呈する。26は暗茶褐色を呈する。

瓦質土器

鼎（23，27，28）　28の脚は現存長15cmを測る。23の口径は21.2cm，27の口径は25cm，現存高8.8cmを測る。外反した口縁部の上端部を内側に長くつまみ出している。27の体部下半には格子目のタタキが施される。内外面ヨコナデ調整で，27の体部外面には粗目のハケを施す。23の外面に煤が付着している。23は淡青灰色，27は淡灰褐色を呈し，砂粒を少し含む。

摺鉢（30，31）　30の底径は17.5cmを測る。31は口縁端部の内側に粘土を貼って肥厚させる。体部内面の条線は30が8本単位を，31が4本以上を単位としている。内外面ヨコナデ調整で，30の外面下位はナデ調整である。胎土に砂粒を含み，30は黒灰色，31は灰白色を呈する。

土師質土器

揑鉢（29）　口径16.8cm，現存高5.8cmを測る。口縁部を肥厚させ，平端部を沈線状にくぼませる。内面はヨコハケを，外面はナデ調整である。胎土に砂粒を含む。淡灰褐色を呈し，焼成

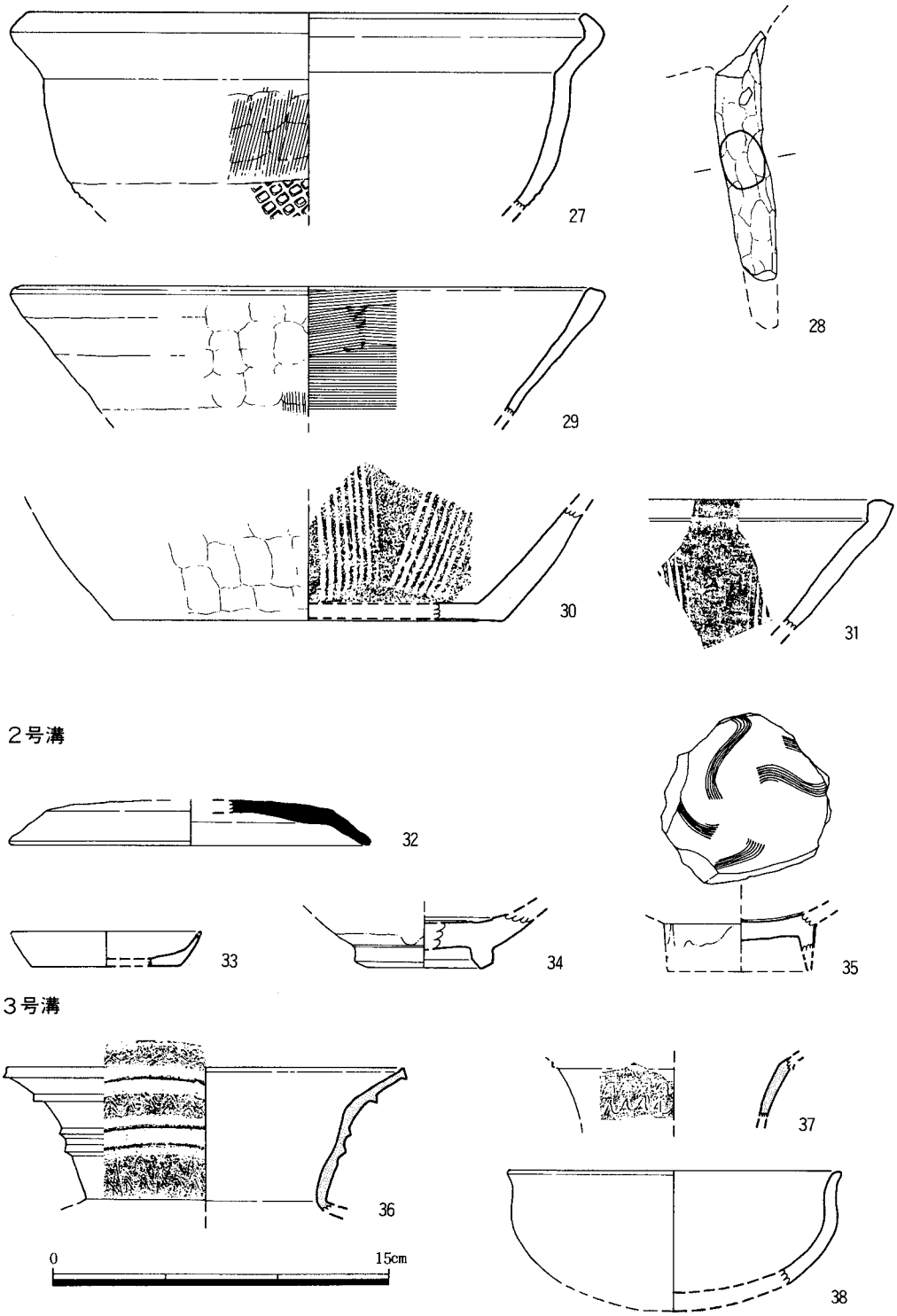


Fig.77　1号～3号溝出土遺物（1/3）

は良好である。

2号溝出土遺物（Fig.77, PL.48）

須恵器

坏蓋（32）　口径16.4cm，現存高2.0cmを測る。体部と口縁部との境には稜を有している。口縁端部は丸味をもつ。内底部はナデ，他はヨコナデ調整である。暗灰色を呈し，胎土は緻密である。

土師器

皿（33）　口縁部をわずかに欠く。糸切り底で，底径6.8cmを測る。体部は余り開かない。外面は黒灰色，内面は黄灰色を呈す。細かい砂を含む。

白磁

碗（34，35）　2種類ある。34は底径6.2cm，35は6.6cmを測る。34の内底は環状のカキ取りがある。釉は体部下位迄施す。釉は風化している。35の高台は細く高い。小さく外反する口縁部を有する。内底に櫛描き文を施す。釉は緑味を帯びた灰白色で，高台上位迄施される。

3号溝出土遺構（Fig.77, PL.48）

陶質土器

壺（36，37）　口径18.2cm，現存高6.0cmを測る。頸部以下を欠いている。口縁部の中程で強く外へ開き，端部を上下につまみ出して平坦面を作っている。外面には3条の三角突帯を施こし，その間に波状文を施す。上から順に8，15，18重を数える。内面はヨコナデ調整である。胎土は緻密で，青灰色を呈する。37は口縁部の破片で，上位に突帯を有している。外面の波状文は11重を数える。暗灰褐色を呈し，胎土は緻密である。破片のため器形については再検討の必要がある。

土師器

埦（38）　口径15cmを測る。体部は丸く，口縁部を如意形に作る。胎土に砂粒を多く含み，明黄褐色を呈する。

小　　結

大きく3期に分ける。Ⅰ期は1，2号住居跡の古墳時代前期，Ⅱ期は1，2号掘立柱建物と3号溝の時代，Ⅲ期は1，2号溝の時代である。

Ⅰ期の住居跡はいづれも削平のため平面形が不明確であるが，3辺にベットを有する形態であろう。第29次調査の1号住居跡も同一形態である。遺物は少くないが2号住居跡の高杯の特徴はほぼ4世紀後半に位置づけられる。第29次調査の1号住居跡，当該調査の1号，2号住

居跡は形態，規模を同じくし，更に等間隔に配置されていることから4世紀後半から5世紀にかけての単位集落を構成しているものと思われる。3号掘立柱建物は2号住居跡を切り，3号溝より切られているので，4世紀後半から律令時代までの幅が考えられる。

II期は1号，2号掘立柱建物を主体とするもので3号溝が伴っている。建物はいずれも梁行3間，桁行3間の規模で，1号建物が2号建物に切られている。1号建物は東西方向に2号建物は南北方向に配置され，主軸方位は1号建物がN8°W，2号建物がN6°Wである。いずれも掘方は80cm～145cm，柱根径は30～45cmを測る大規模な建物である。当該調査の南側の第56次調査では2棟の同様な建物が検出され，東側の第32次調査でも大型の建物の一部が検出されている。第56次の1号建物は当該調査の2号建物と柱通りが一致している。当該地の西側には建物群に併行して幅1m前後の溝があるが，この溝は当該地の北側で東に向きをかえ，第32次調査の2号溝，第17次調査の溝に接続する。昭和58年度の第77次調査は九州大学調査の第27街区に相当するが，南北方向の3間×7間，3間×？間の建物2棟と東西方向の2間×4間？の建物1棟を検出した。この建物群の東側と南側に併行して幅1.5m前後の溝がある。南側の東西方向の溝は幅2mの陸橋を挟んで更に西へ延びる。第77次調査の西側では昭和57年度に松尾半三郎氏所有地を試掘した際，同規模の柱穴掘方をもつ2間×5間の側柱だけの建物2棟，2間×3間の総柱の建物を1棟検出している。いずれも東西方向の建物で，建物群の南側には第77次調査から延びた溝が東西方向にある。以上の各調査地点で確認した溝は大型の建物群を方形状に囲んでおり，南北約100m，東西約85mを測り，約方1町を形成する。この方形区画の北側には約50mの間隔をおいて柵列が存在する。この柵列は第30次，第75次調査で検出したもので，主柱と副柱の3本で構成され，東端はL字形に曲がって終末となる。この鈎形部分には第30次17号掘立柱建物が存在する。この建物の主軸は磁北方向である。第30次調査の小結で述べた通り，他に同時期と思われる建物を2棟検出したが明らかに柵列によって仕切られる。この柵列が方1町の区画の更に50m外側に存在すると仮定すれば方2町の区画を形成することになる。この柵列は第75次調査で8世紀中頃の溝と切合っているが，覆土の同一から溝に近い時期が考えられる。この建物群の東側約100mの第66次調査でも同規模で，2間×5間，2間×6間の建物，或いは3間×？間の総柱の建物群が南北方向に配置されている。この建物は切合い関係から8世紀中頃が考えられる。

上記の建物の規模，構造から検討すると現在のところ福岡県小郡遺跡や筑後国府推定地の遺跡に同様な規模をもつ建物が存在する。小郡遺跡は御原郡衙に推定されており[註29]，I期～III期の建物が39棟検出された[註30]。いずれも8世紀代に比定され，特にII期の建物は最も多く，3群に建物を配置している。内1ヶ所は正倉とみられる建物だけを配列し，柵で他と仕切っている。建物配置に計画性があり、柵列820の西南方に位置する建物は郡庁館や厨屋とみなされている。正倉とみられる倉庫跡はI期に3棟，II期に8棟存在する。いずれも3間×4間の建物で，I期

は床面積57.9㎡，II期は57.9㎡～60.7㎡の間にある。当該調査地の建物は床面積でわずかに上記の建物を上まわっているが，同じ時期の正倉とみなすことが可能である。第55次の倉庫群の南側には松尾半三郎氏所有地や第77次調査の居宅的な建物が配置されている。約1町四方の方形区画の内に倉庫群や居宅的な建物が計画的に配置され，更にその外側にも[註33]2町四方を区画する柵列が存在し，柵列によって内外に建物が仕切られ，他の一般の建物と機能の違いを示している。又，東側の第66次調査でも同規模の建物が計画的に造営されており，[註33]一般の建物とは考え難い。早良郡は「和名抄」によると毗伊，能斛，額田，早良，平群，田部，曽我の7郷があったが，この内，田部郷が現在の小田部に相当している。早良郡の郡司については天平宝字2年の観世音寺奴婢帳に官位が主帳一外少初位上の「平群部」が現らわれ，延喜16年8月3日には三宅春則の記録があるが，この三宅春則は観世音寺奴婢帳の中の額田郷三家連の系統と推測されている。郡家の位置については前者を平群郷に，後者を額田郷に推定され，その間に郡家の移動が[註30]あったことを示されている。郡司は地方在住の豪族や子弟が任じられ，領域一円の収税実務を行なうのであるが，施設としての郡衙[註30]の規模は一般的に2町4方であり，その内には庁院，館舎，厨屋，厩，倉庫を設置していた。当該地で検出した建物は正倉と考えられるが方形周溝区画内の南側には庁院や館舎と思われる建物も備えており，更に建物群が2町四方の広りをもち，周辺にも建物群が存在することは，単に郷倉や郡倉の別院とは考え難い。第75次調査の柵列はほぼ8世紀中頃を前後する時期に，第66次調査の建物群は同じく8世紀中頃に比定できる。建物は1度の建て替えが行なわれ，その存続期間は非常に短時間である。この地より西に約2㎞の地点には橋本，野方の集落が存在するが，この地はいずれも古代官道の額田駅に推定されている。又，早良平野の条里の方位はN10°Wにあるが，第55次調査の建物は1号がN14°40′W，[註32]2号がN12°40′Wにあって条里の方位に近い数値を示している。もっとも条里の施行時以前に官衙が設置された場合，必ずしも条里と官衙の方位は一致をみないようである。遺物は第3次調査より巡方が1点，第73次調査から「春」の字墨書した8世紀代の土師杯が櫛と共に出土した。第77次調査では硯片が出土している。周辺では，鴻臚館系の瓦や越州窯系の青磁を出土する。遺物の種類，量の少なさは建物群の期間が短期間であることや台地が中世末まで綿々と土地利用された結果であると思われる。従来の郡衙推定地とは異なるが，郡衙の移動があったことを考えれば，上記の条件から建物群は8世紀代の早良郡衙の一部を構成していることは充分に説明がつくと思われる。8世紀に現われる平群部，早良勝，三連等の群司層がどの地域を群家としたのか不明であるが，平群，額田，曽我等の郷名は早良平野が中央貴族との強いつながりをもった特殊な地域であったことを伺わせる。

III期の1号溝は明の染付碗や備前系の鉢などの流通年代から16世紀の前半代が考えられる。

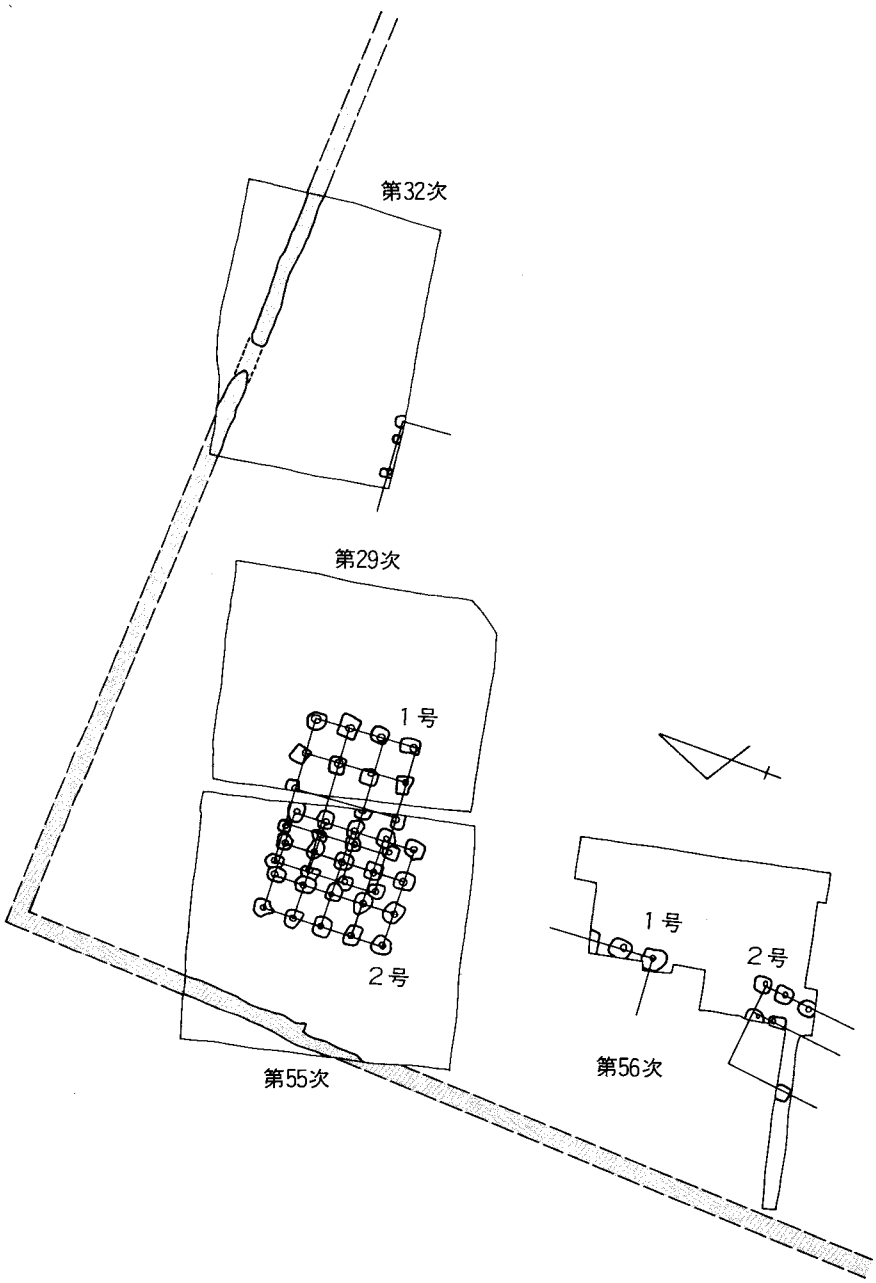


Fig.78　第29，32，55，56次調査掘立柱建物配置図（1/400）

8．第63次調査

調査の概要

調査対象地は福岡市早良区小田部１丁目224番地に所在し，調査対象面積は115㎡である。

有田・小田部台地は北へ向って伸びる舌状台地を多く派生しているが，小田部１丁目周辺の台地は標高10ｍ前後を測り，最も高い。台地の東側斜面は急で，西側は緩く傾斜している。台地の北側は室見川の蛇行により小断崖を形成している。当該地は小断崖に近い台地尾根筋上に位置する。北側には第25次，第27次，第37次の調査が実施されている。第25次，第37次調査では小規模な建物群が検出されている。南側の第26次調査では11世紀代の土壙墓や，掘立柱建物群を検出している。

昭和56年度末に専用住宅の改築のため確認申請が行なわれており，試掘調査の結果，掘立柱建物跡を検出した。福岡市教育委員会は国庫補助を得て，昭和57年度事業として発掘調査を実施した。

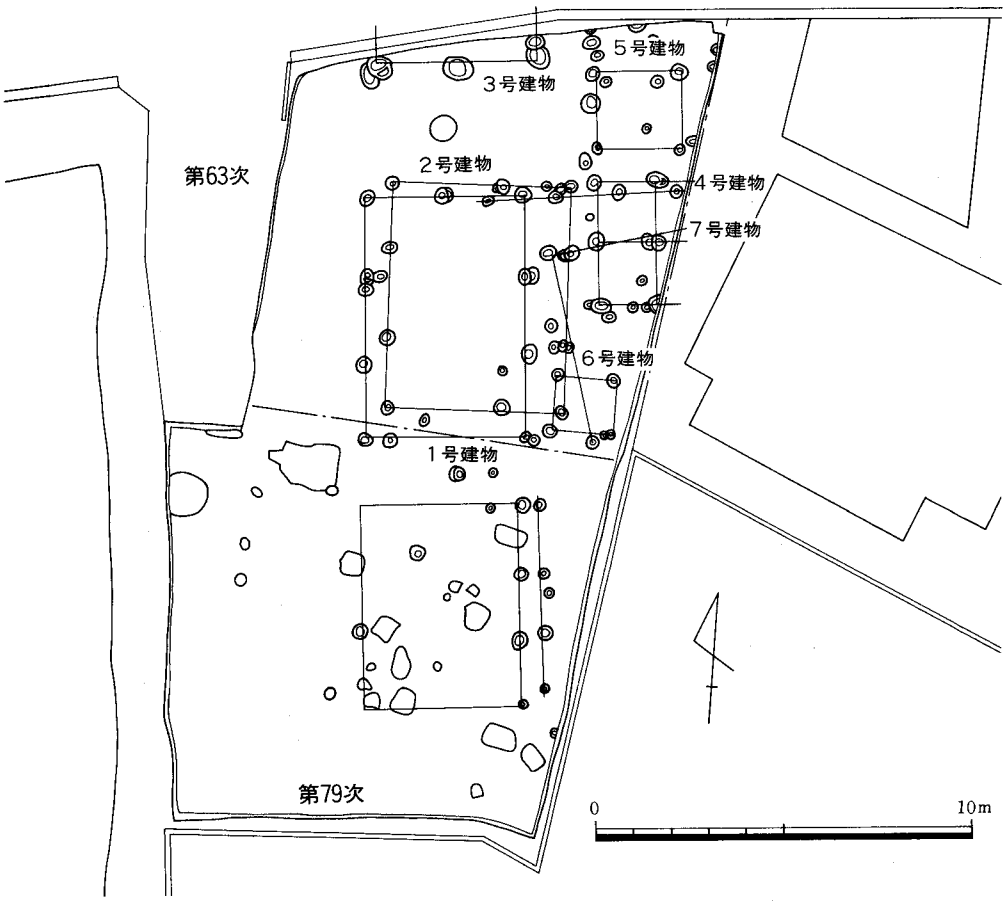


Fig.79　第63，79次調査遺構配置図（1/200）

発掘調査は昭和57年４月２日～４月12日迄実施した。以前に住宅が在ったため，遺構面は良好では無かった。表土は約20cm程で，遺構面はローム層である。遺構は掘立柱建物６棟，及び柱穴群を検出した。覆土はいずれも黒褐色土である。

検出遺構

掘立柱建物

６棟検出したが，規模の明確な５棟について図示した。計測値は表を参照されたい。

１号掘立柱建物（Fig.80，PL.49－１）

桁行３間×梁行２間の側柱だけの掘立柱建物で，主軸は南北方向である。柱穴径28～30cm，深さ８～26cmを測る。柱根径は10cmである。各柱間は平均で桁行約6.7尺，梁間約7.8尺を測る。

２号掘立柱建物（Fig.80）

１号建物と切合い関係にあるが，同規模であり，建て替えが行なわれたものと思われる。梁行２間×桁行３間の側柱だけの掘立柱建物で，主軸は南北方向である。柱穴径28～45cm，深さ20～50cmを測る。各柱間は平均で桁行約7.2尺，梁間約7.2尺である。南側は境界地のため不明である。

３号掘立柱建物（Fig.80，PL.49－１）

梁行２間の南北方向の掘立柱建物であるが，桁行方向は南側道路のため確認できない。柱穴掘方は隅丸方形を呈し，掘方径は40～48cm，深さ20～25cm，柱根径15cmを測る。梁行は420cmを測り，各柱間は７尺間隔である。

４号掘立柱建物（Fig.80，PL.49－２）

東側の境界地に位置しているため構造は不明である。南北方向に主軸をおき，梁行１間＋α桁行２間の掘立柱建物である。梁行２間，桁行２間の総柱の建物の可能性が強い。柱穴掘方は不整円形を呈しており，径は30～45cm，深さ40～50cmを測る。桁行は320cmを測り，各柱間は5.3尺である。梁行の柱間は5.3尺を測るから正方形に近い建物の可能性が強い。

tab. 8　第63次調査掘立柱建物計測表　　単位cm

	規模	方向	桁行		梁行		方位	床面積(m²)	備考
			実長	柱間寸法(尺)	実長	柱間寸法(尺)			
１号	３×２	南北	600(20)	６・８・６	465(15.5)	６・9.5	N４°W	27.9	tab. 8
２号	３×２	南北	645(21.5)	7.2・7.2・7.2	430(14.3)	7.2・7.2	N７°W	27.74	
３号	2	東南	420(14)	７・７			N78°E		
４号	２×１	南北	320(10.7)	5.3・5.3	160(5.3)	5.3	N５°W	5.12	
５号	１×１	南北	150(5)	5	150(5)	5	N３°E	2.25	
６号	3	東西	225	7.5	195	6.5	N81°E		

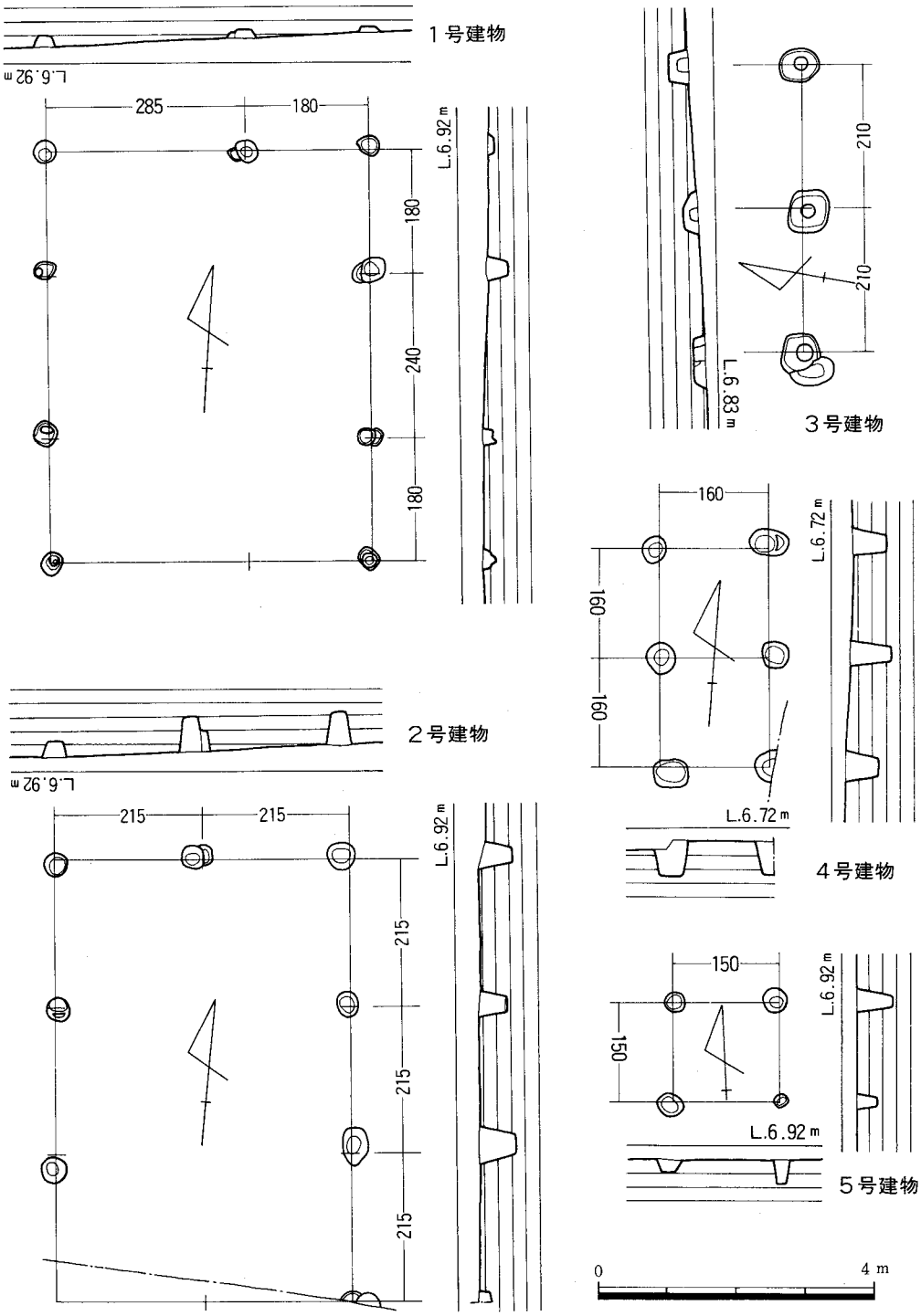


Fig.80　1号～5号掘立柱建物（1/100）

5号掘立柱建物（Fig.80）

主軸を南北方向に置き，桁行1間×梁行1間の掘立柱建物である。桁間150cm，梁間150cmを測り，各柱間5尺の正方形である。柱穴掘方径は18～28cm，深さ25～42cmを測る。

6号掘立柱建物

主軸を南北方向に置き，桁行1間×梁行1間の掘立柱建物である。調査地東部の境界地にあるので規模が拡大する可能性がある。桁行225cm，梁行195cmを測り，各柱間は桁間7.5尺，梁間6.5尺である。柱掘方径は25～40cm，深さ18～50cmを測る。

7号掘立柱建物

調査区北東部の境界地にあるため規模は明確ではない。南北方向に主軸を置き，梁行1間＋α×桁行2間＋αの掘立柱建物である。桁行は約233cmを測り，柱間は平均7.8尺である。梁行は9尺を測る。柱穴掘方は不整円形を呈し，径30～40cm，深さ12～50cmを測る。

柵状遺構

東西方向に設定された3間以上の柵列で，東へ更に延びている。柵列の長さは5.1mを測り，各柱間の平均は5.7尺である。柱穴掘方径は30～40cm，深さ11～35cmを測る。この柵列は3号建物と6号建物と同一方向であるので，これらの建物と同時期の所産であろう。

出土遺物

いずれも細片のため時期の判断材料にはなり得ない。

小　結

今回の調査範囲は著しく狭いが，周辺では第25，27，37次調査等が実施されており，これらの検出遺構との関連も考えなければならない。当該調査での検出遺構は全て掘立柱建物であった。南側の第79次調査では，削平されているものの2間×3間の掘立柱建物2棟を検出している。[註33] 南側の第79次調査検出の建物を併せて検討したい。

2号，3号，4号，5号掘立柱建物の主軸方位は磁北から西に7°～12°振れる範囲にある。3号掘立柱建物の柱穴掘方規模は大きく，北側へ伸びる側柱だけの建物と思われる。4号掘立柱建物は2間×2間の総柱の建物が想定でき，5号掘立柱建物と近接するものの方位は全く同一である。1号，

2号掘立柱建物は規模に於いて余り差異が無く，1号掘立柱建物がわずかに東に振れて重複している点から建て替えが考えられる。先後関係は不明である。南側の第79次調査で検出した建物は2号掘立柱建物と柱筋が一致しており，同時性が強い。この建物の東側にも柱筋の通る柱列が存在するので建て替えが行なわれた状態を示している。以上をまとめると2号，3号掘立柱建物と第79次調査の掘立柱建物はほぼ南北方向に連なって立地し，2間×2間の総柱の建物を伴っていることが云えよう。5号，6号，7号掘立柱建物は境界地に位置しており規模，構造については再検討の必要がある。又，1号柵列は東西方向に延び，西側は1号掘立柱建物の北側梁行の中間で止まっている。この柵列は1号掘立柱建物のPitを切った柱穴を更に後に切っており，1号，2号，4号掘立柱建物とは切合い関係にある。更に5号掘立柱建物の南側に位置し，平行な位置間隔にある。以上を考えると5号掘立柱建物と柵列は一体しており，1号掘立柱建物の柱穴を切っているところから，南北方向に連なる建物群に後出するものと考えられる。

以上を整理すると1号，3号，4号，8号建物→6号建物，柵列の関係になる。これらの建物の時期については遺物が少ないため明瞭ではないが，覆土より，古墳時代～中世初頭の幅広い時期が考えられる。

註33　福岡市教育委員会昭和58年度調査
現在整理中

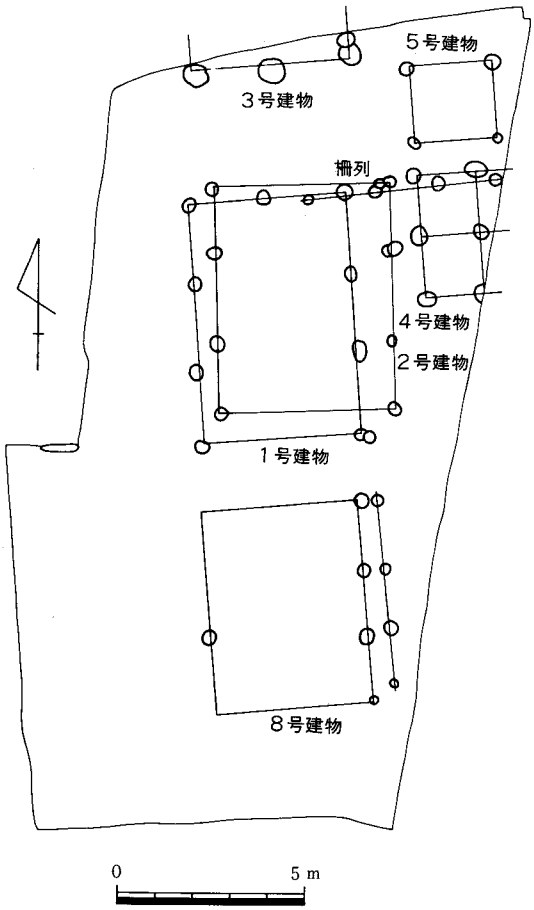


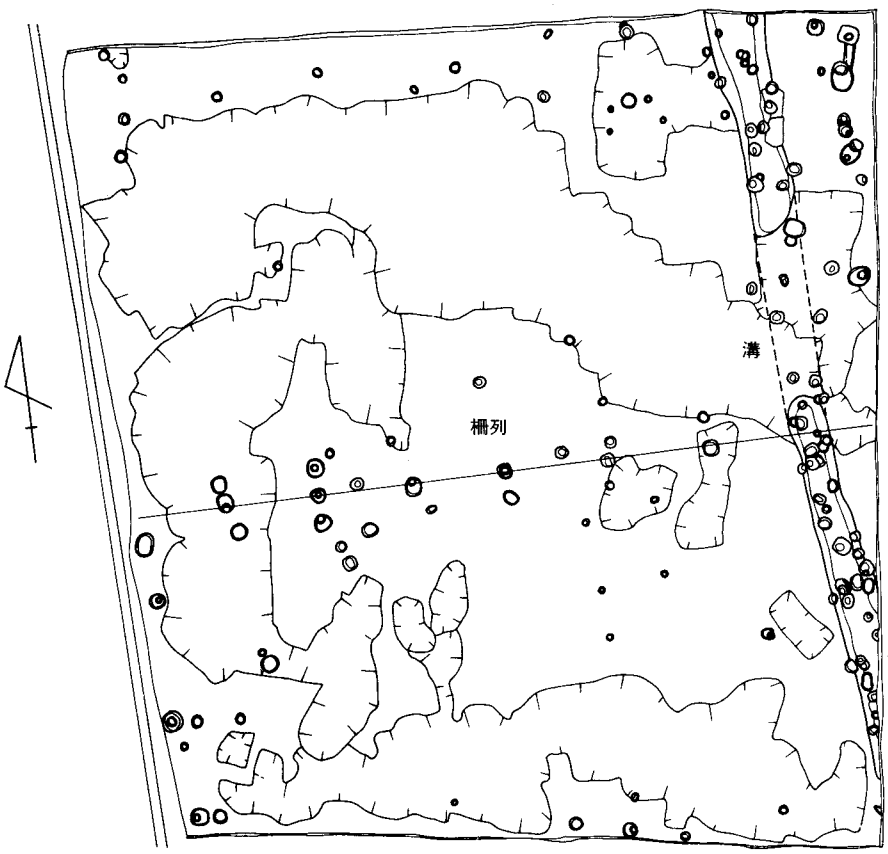
Fig.81　掘立柱建物配置図（1/200）

9．第75次調査

調査の概要

調査対象地は福岡市早良区有田１丁目27－11番地に所在し，調査対象面積は284m²である。

有田地区の台地は標高12～14mを測る平担地を形成しているが，この平担地は北東側と北西側から谷が入り込むため幅約150mのくびれ部を形成する。当該地はこのくびれ部の中央に位置し，標高12mを測る。周辺では東側に第30次，第53次調査が，西側に第23次，第72次調査が実施されている。これらの調査では古墳時代から律令時代に亘る掘立柱建物群，古墳時代の住居跡，中世の溝等が検出されており，当該地は上記に関連する遺構が検出されるものと期待された。昭和57年８月に専用住宅建設のため建築確認申請が提出されるとともに埋蔵文化財の発掘調査が要請された。福岡市教育委員会は国庫補助を得て，昭和57年度事業として発掘調査を実施した。



0　　10m

Fig.82　第75次調査遺構配置図（1/200）

発掘調査は昭和57年10月20日～11月4日迄実施した。発掘調査に際し，表土,及び残土については全て外部に搬出したが，埋戻しについては原因者の協力を得た。表土は耕作土で,深さ10～12cmを測る。しかし樹木の苗床になっていたため出荷の際に機械によって深く掘削されており，遺跡地の大部分が攪乱，削平を受け，遺存状態は悪かった。深さは地山面より40～50cmを測る部分もあった。遺構面は地山ローム層で，遺構は第30次調査に継続する柵列1条，同じく第30次調査にまたがっている掘立柱建物3棟，第53次調査にて検出した1号溝に接続する溝1条を検出した。

検出遺構

掘立柱建物

掘立柱建物の各々の大部分は第30次調査で検出しており，当該地ではその一部を確認するにとどまった。それゆえ，遺構番号も第30次調査に合致させるが，掘立柱建物計測値表，及び遺構図についても第30次調査の報告を参照いただきたい。覆土は全て黒褐色土である。

8号掘立柱建物

主軸を南北方向に置き，梁行2間，桁行2間以上の側柱だけの掘立柱建物である。当該地では西側桁行の1間分を検出した。柱穴掘方は径50cmを測る楕円形で，深さ20～60cmを測る。柱間は桁間6.5尺，梁間6.3尺を測る。

26号掘立柱建物

主軸を東西方向に置き，梁行2間，桁行1間以上の側柱だけの掘立柱建物である。当該地では南側桁行の1間分を検出した。柱穴掘方は径75cm，深さ20～58cmを測り，隅丸方形を呈する。柱根径は18cmである。柱間は梁間7.2尺，桁間平均8.3尺を測る。

27号掘立柱建物

主軸方位を東西方向に置き，梁行1間，桁行3間の側柱だけの掘立柱建物である。当該地では西側梁行1間分と，桁行の南側，北側をそれぞれ1間分検出し，建物規模を完全に把握できた。柱穴掘方は径40～60cmの楕円形，又は隅丸長方形を呈し，深さ10～32cm，柱根径18～25cmを測る。柱間は梁間6.5尺を，桁間は平均で6.2尺を測る。

柵列（PL.52－1）

東西方向に延びた柵列で，主軸方位はN1°Eに置く。主柱1本と副柱2本の計3本で構成されているが，ほとんどが削平のため副柱を失っている。主柱は径40cmを測る円形，もしくは隅

丸方形を呈し，深さ30～50cm，柱根径18～20cmを測る。総延長は約31ｍで，各柱間の平均値は2.55ｍ，約8尺である。副柱も同じ規模を測るが，主柱との柱間は必ずしも一定では無く，柱間は60～70cmである。又，両者は正しく平列していない。覆土は黒褐色土である。この柵列は第30次調査で確認されているが，約29ｍ延長した地点で南側に直角に曲がって終る。このカギ形に曲がった部分には第30次調査報告の通り，内側に大規模な17号建物が位置している。柵列の西側延長については昭和54年度に第23次調査が実施されているので検討した。主軸線を通す柱穴があるものの，いずれも各柱間に不均衡があって断定できない。この地点も削平が著しく，今後検討を要する。この柵列と直交する形で，調査地の東側に溝が存在する。柵列はこの溝と切合い関係にあるが残念ながら同じ覆土であるため先後関係を明確にし得なかった。柵列の柱根はこの溝底より検出した事を報告しておく。遺物は全て土師器の細片であった。

溝（Fig.83，PL.51－２）

大部分が削平を受けており，中間部分が完全に破損される。南北方向に延びる溝で，主軸方位をＮ３°30′Ｗに置く。断面形は逆梯形を呈し，幅1.1～1.5ｍ，深さ58cmを測る。溝肩には多くの柱穴が伴っているが，溝に伴う柱穴は確定できなかった。この溝は第53次，及び第47次調査地迄延長すると思われるが，溝自体がどのような構成を有しているのか現時点では不明である。柵列，及び27号建物と切合い関係にあるが先後関係は不明である。しかし，上記の柵列とほぼ直交している事から，先後関係の状態によっては第32次，第55次，第56次調査で検出した大規模な建物群との関わりを明らかにすることが可能である。遺物は須恵器の高台付埦，蓋等が出土しており，８世紀中頃の年代が確定できる。

出土遺物

Ｉ号溝出土遺物（Fig.84，PL.53）

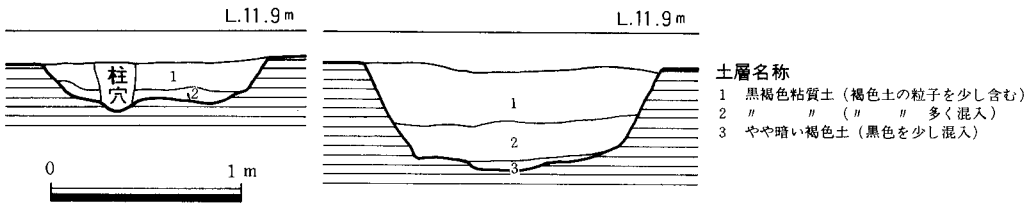


Fig.83 溝断面土層図（1/40）

須恵器

蓋（1，2）　1は口径19.7cm，現存高1.5cmを測る。体部と天井部との境は内面には認められず，外面は小さい屈折をもっている。端部は上につまみ出して厚みをもたせている。つまみは扁平な宝珠形である。天井部，及び体部はヨコナデ調整である。胎土に微砂を含み灰色を呈する。2は口径13cm，現存高3.6cmを測る。体部と口縁部の境には断面三角形状の段を有している。

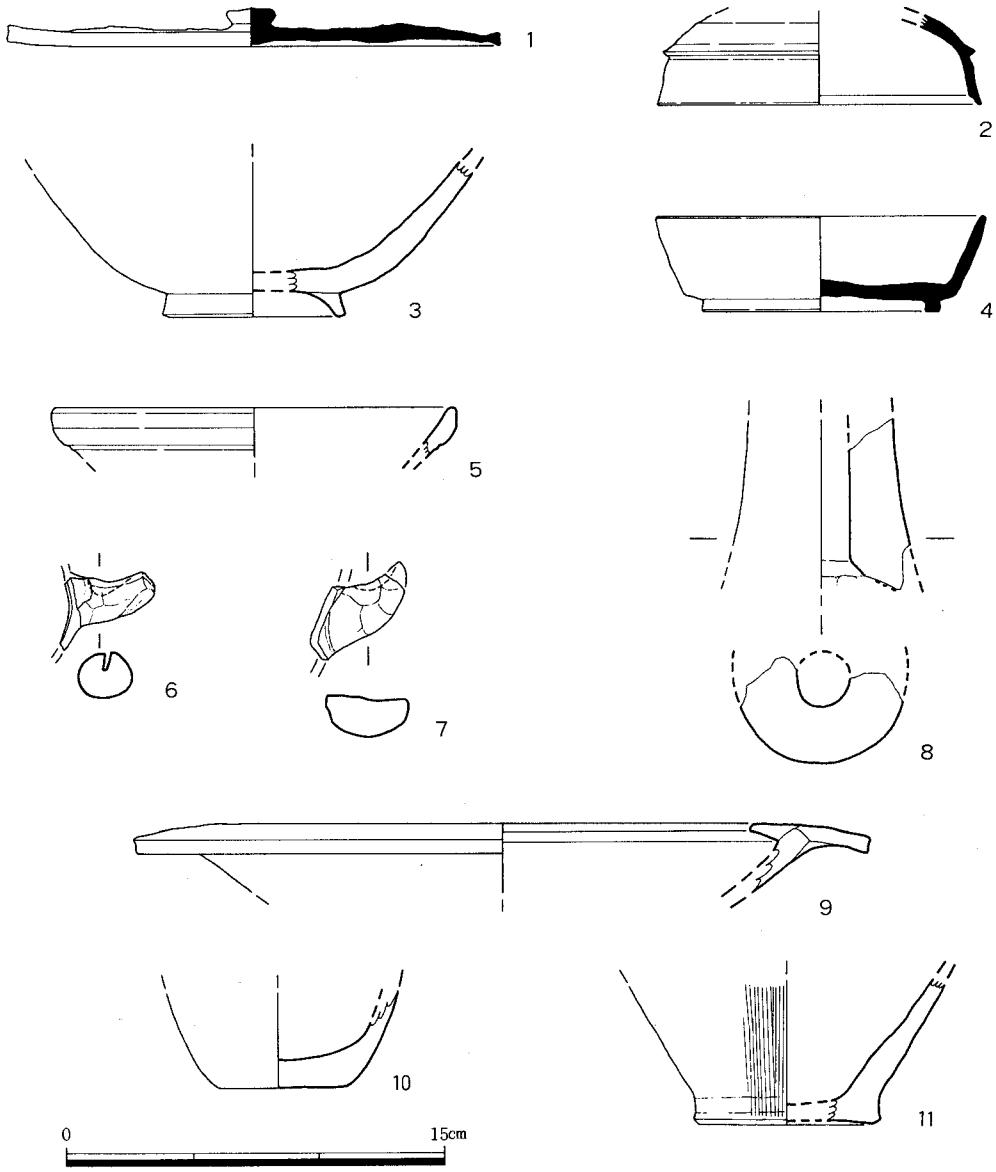


Fig.84　出土遺物（1/3）

口縁部は余り開かず，端部は内側を抉っている。体部外面の約2／3は右回りのヘラケズリを施し，他は内外面ヨコナデ調整である。細かい砂粒を含み，外面は暗灰青色，内面は灰青色を呈している。

坏（４）口径13.4cm，器高3.8cm，高台径9.6cmを測る。高台は低く“コの字形”を呈す。腰部は強く屈折し，体部は小さく開く器形である。外底にはヘラオコシの痕跡が残る。ヨコナデ調整を施す。胎土は精良で，暗青灰色を呈している。

土師器

埦（３）高台径7.4cm，現存高5.8cmを測る。高台は外へ張っている。体部は丸味をもって開く器形である。内外面は磨滅している。胎土に砂粒を多く含み，焼成は軟質である。外面は暗灰青色，内面は灰青色を呈している。

把手（６，７）６は甕，７は鉢の把手と思われる。６は断面棒状を，７は断面扁平な半円形状を呈している。６は長さ4.3cm，厚さ1.5cm，７は長さ3.2cm，厚さ1.7cmを測る。いずれも胎土に砂粒を含み，明赤褐色を呈し，一部黒変する。

白磁

碗（５）復元口径16.1cmを測る。玉縁を有する碗である。玉縁は12～13世紀の白磁碗に比べて小さく，釉の塗布も薄目である。釉は灰白色を呈し，気泡が多い。胎土も灰白色を呈する。

鞴

鞴羽口（８）破片のため器台の可能性も残る。現存高6.8cm，復元最大径7.1cm，復元孔径２cmを測る。器壁の厚さは２cmであるが，基部は厚く2.5cmを測る。又，孔は基部の部分が大きく漏斗状に開いている。砂粒を含み，黄灰色を呈している。孔の内壁は淡黒色に焼けている。外面の調整は不明である。

Pit出土遺物（Fig.84，PL.53）

９はＰ25，10，11はＰ46出土である。

弥生式土器

高坏（９）復元口径29.5cmを測る。〝鍬形〟の口縁部の内側に粘土を貼付けて平坦面を大きく作っている。丹塗りの痕跡を残している。焼成はやや軟質で，淡黄灰色を呈している。

甕（11）やや上げ底の底部で，底径7.5cmを測る。外面にはタテハケを施している。胎土に砂粒を多く含む。内外面は黄灰色を呈し，外面の一部は黒変している。９の高坏に伴う時期の甕である。

坏（10）口縁部を欠く。底径5.0cm，現存高3.8cmを測る。体部は丸味をもっている。器面の調整は磨滅のため不明。胎土に砂粒を多く含み，黄灰色を呈する。

小　　結

遺構は非常にかぎられており，又，第30次調査，第53次調査にまたがっているところから，これらの成果をも踏まえて検討してみたい。遺構は全て年代的に近いと思われるが便宜上３期に分ける。いずれが先後関係なのか現時点では不明である。

第Ｉ期は８号，26号，27号掘立柱建物であるが，主軸方向に相違がある。26号，27号建物が切合い関係にあることからこのグループでも幾つかの時期に分けられる。

II期は柵列で，この柵列には17号建物が伴う。第30次調査で，柵列はカギ形に曲がって途絶えるが，これが更に南へ延びるのか，或いは東側に対時して同様な柵列を構成するのか幾つかの可能性をもっている。この柵列の内側には先述した様に第32次，第55次，第56次調査等で検出した大規模な建物群を包含している。この建物群に沿って南北方向から東西方向に幅1～1.2ｍを測る溝が巡っていることが確認された。柵列はこの溝にほぼ平行しており，溝との間隔は約50ｍを測っている。大規模な建物群は周辺の試掘調査などから，ほぼ100ｍ四方に限られ，周囲を先の溝で囲まれるものと推定している。この柵列が大規模な建物群と時期的に合致するとすれば，溝で囲繞された建物群の更に外側に柵列によって囲まれた建物が存在することが推定される。そうすると，柵列，及び溝の二重の区画線に囲まれた範囲は200ｍ四方を測る事ができる。従来，各地で検出されている郡衙等の官衙の規模は１町，及至は２町とも云われており，この数字に合致する。又，これらの柵，溝の区画された構造物には当然出入口等も考えられるので今回の柵列の終末状態も良い判断材料を与えている。各地の遺跡の例を検討すると共に，これらの遺構の関連について更に明確にしたいと思う。

III期は南北方向の溝である。この溝から出土した須恵器の高台付埦，蓋等は先述の通り８世紀中頃に位置づけられる。この溝と柵列の先後関係が不明なのは残念であるが，覆土が同一なことや柵列に直交し，先の大型建物群とも並行に近いなど時期的な隔りは大きくないと思われる。この溝は第47次調査迄延長するが，総延長は110ｍを測る。溝は逆梯形状を呈しているが，第55次調査等で検出した溝と規模，構造共に近似している。第55次調査の３号溝は第17次調査地までその延長が認められる。そして，その北端は北方向の第53次調査地の西側端部まで延長するものと推定される。しかし，方位的には当該地の溝とは合致するものの，位置関係には随分相違をみる。しかしながら，当該地の溝が大規模な建物群にほぼ平行し，且つ囲繞する溝とも同一方位をもつ事は建物群に関連のあることを示している。又，第29次，第55次調査検出の建物も最底１回の建て替えを行なっていることを考えれば建物群全体の改築も含めて，敷地の規模等の構造的な変更があった可能性もあり，今後の例に期待したい。

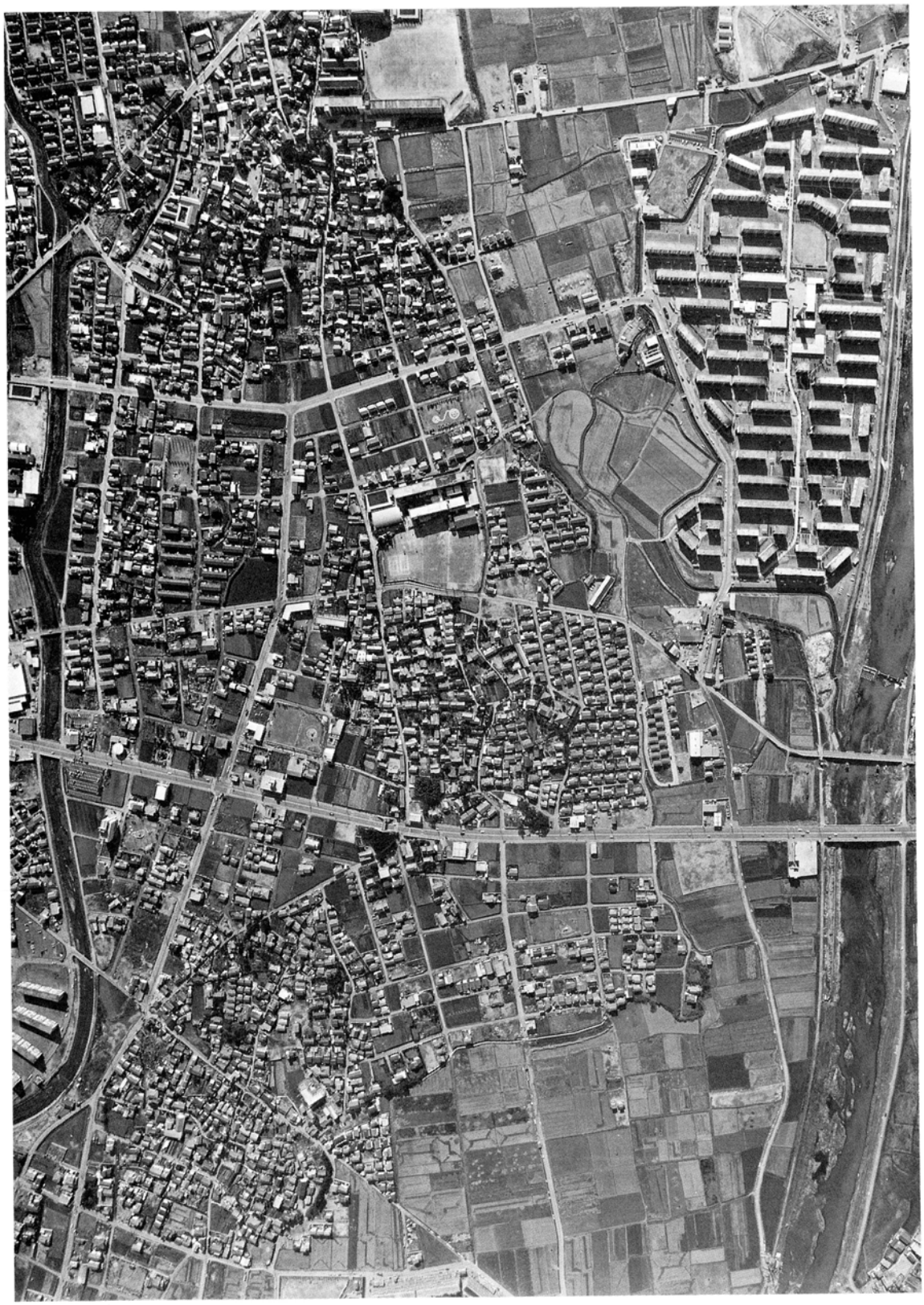
Fig.85　有田台地中央部分の調査地点（1/1000）

註

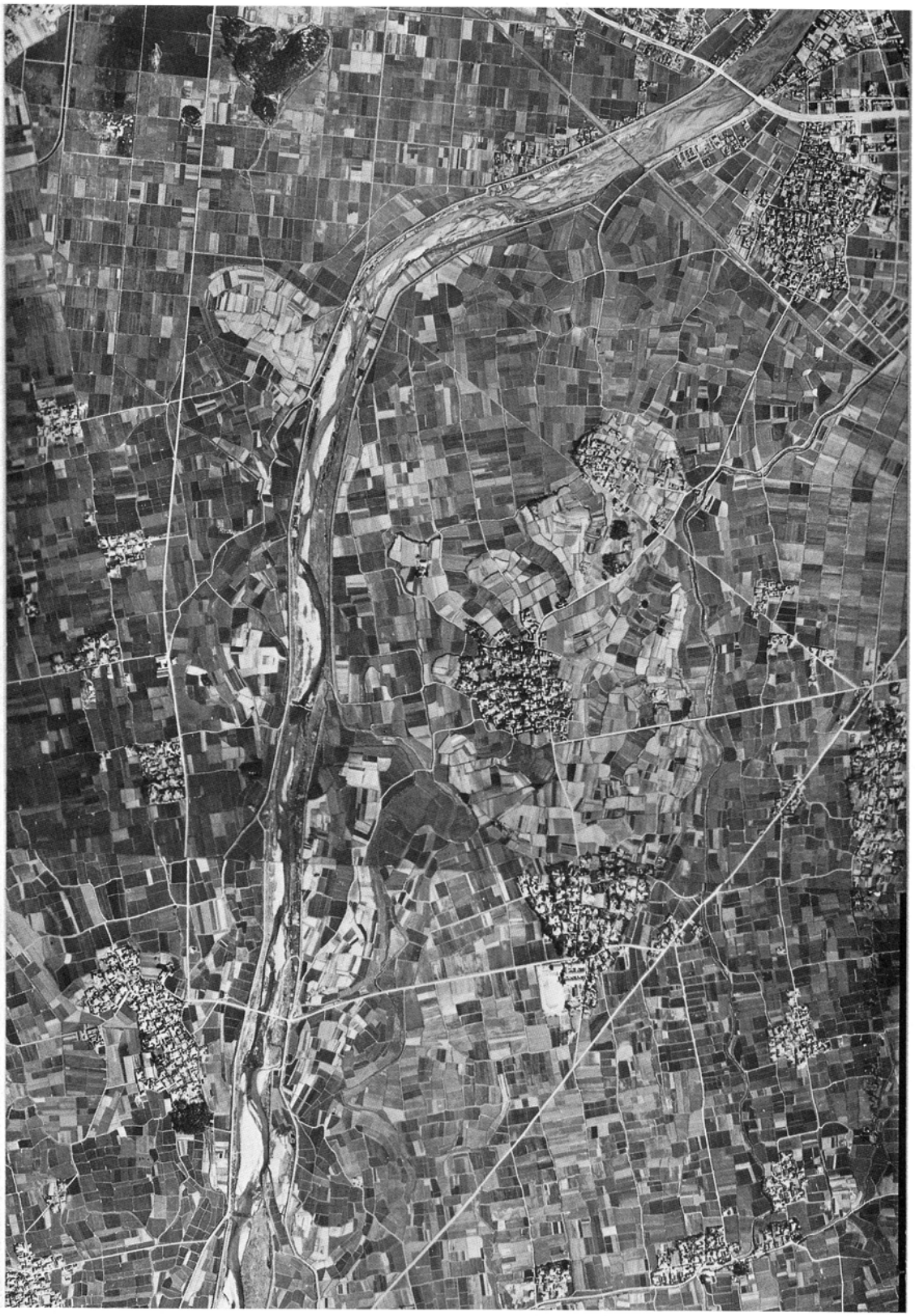
註1　飯盛神社文書「飯盛宮行事屋敷小田部村郷地名注文文」に早良郡小田部村中園名，下中園屋敷とある。
註2　山口津「有田郷土誌」1973
註3　福岡市教育委員会「有田遺跡」第2次調査　1968
註4　昭和58年度調査，現在整理中である。
註5　福岡県早良郡役所「早良郡誌」　1973復刻版
註6　福岡市教育委員会，飯盛神社文書「飯盛官行事屋敷小田部村地頭名注文」に早良区小田部村中園名，下中園屋敷とある。
註7　福岡市教育委員会「有田・小田部第4集」　1983
註8　福岡市教育委員会「飯盛神社関係資料集」　1981
註9　佐伯弘次「大内氏の筑前国郡代」『九州史学69』所収　1980
註10　福岡市教育委員会「有田遺跡」第二次調査　1968
註11　福岡県教育委員会「野黒坂遺跡」福岡南バイパス関係理蔵文化財発掘調査報告　1970
註12　国立中央博物館「松菊里Ⅰ」国立博物館古蹟調査報告第11冊　1979
註13　福岡県教育委員会「今川遺跡」　1981
註14　行橋市教育委員会「下碑田遺跡Ⅱ，Ⅲ」　1981，1982
註15　福岡市教育委員会「有田七田前遺跡」　1983
註16　小笠原好彦「畿内および周辺地域における掘立柱建物集落の展開」考古学研究第5巻4号　1979
註17　武末純一「福岡県・早良平野の古式土師器」古文化談叢第5集所収　1978
註18　柳田純考編「今律」今律小学校百周年記念会　1975
註19　福岡市教育委員会「藤崎遺跡Ⅱ」　1982
註20　福岡市教育委員会「高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅱ西新町遺跡」　1982
註21　福岡市教育委員会「浄泉寺遺跡―遺構編」　1983
註22　福岡市文化課池崎譲治氏の御教示によると多数の木棺墓や土坑墓が青磁・白磁を伴うとのことである。
註23　福岡市教育委員会「板付周辺遺跡調査報告書（6）」　1980
註24　福岡市教育委員会「席田遺跡群久保園遺跡」　1983
註25　昭和58年度地下鉄路線内遺跡で調査。池崎譲治氏の御教示による。
註26　福岡市教育委員会「多々良遺跡」　1972
註27　福岡市教育委員会「和白遺跡群発掘調査報告書」　1971
註28　福岡市教育委員会「有田・小田部第2集」
註29　福岡県教育委員会「福岡県三井郡小郡遺跡」　1971
註30　松村一良「筑後国府調査」古代文化第35巻7号
註31　日野尚志「律令時代における早良平野の開発」『有田遺跡』所収　福岡市教育委員会　1968
註32　藤岡謙二郎編「古代日本の交通跡Ⅳ」大明堂
註33　昭和58年度に発掘調査を行った。
註34　宇野隆夫「井戸考」史林65巻5号　1982
註35　福岡県教育委員会「波多江遺跡」今宿バイパス関係理蔵文化財調査報告（7）1982
註36　福岡県教育委員会「成屋形遺跡」　1970

図　　版
PLATES

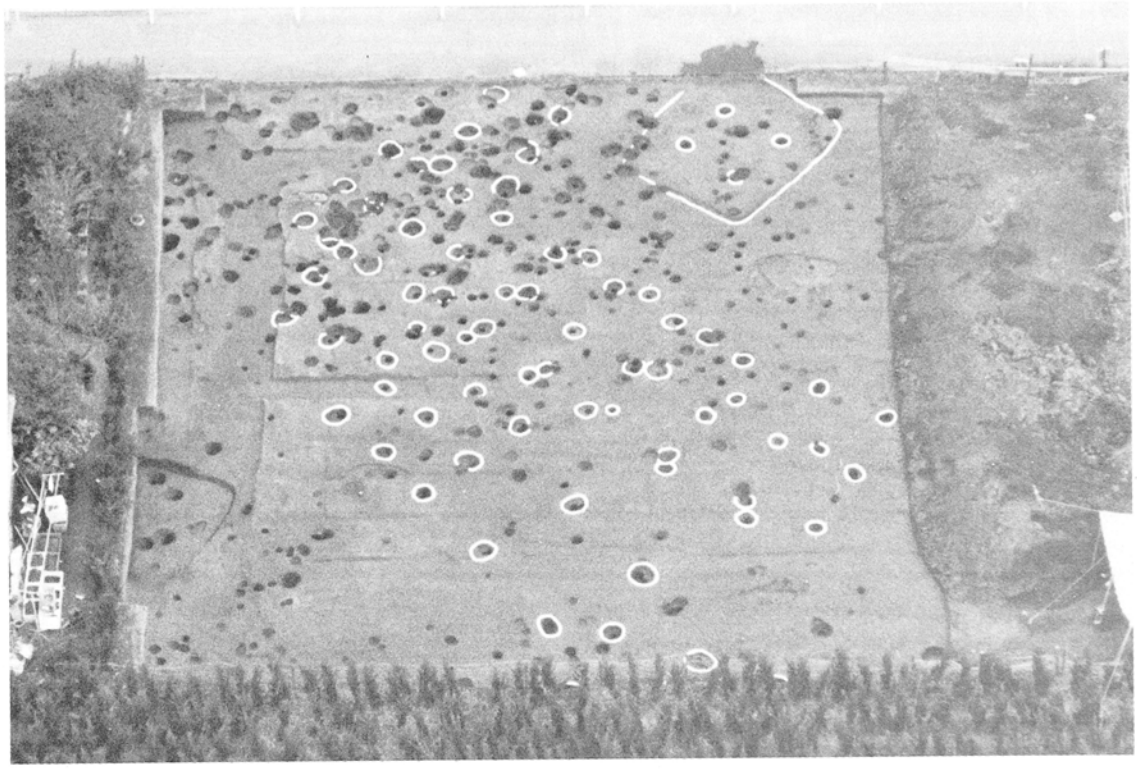
第48次調査　作業風景　（昭和56年７月）



有田・小田部周辺航空写真（昭和50年撮影）



有田・小田部周辺航空写真（昭和21年米軍撮影）



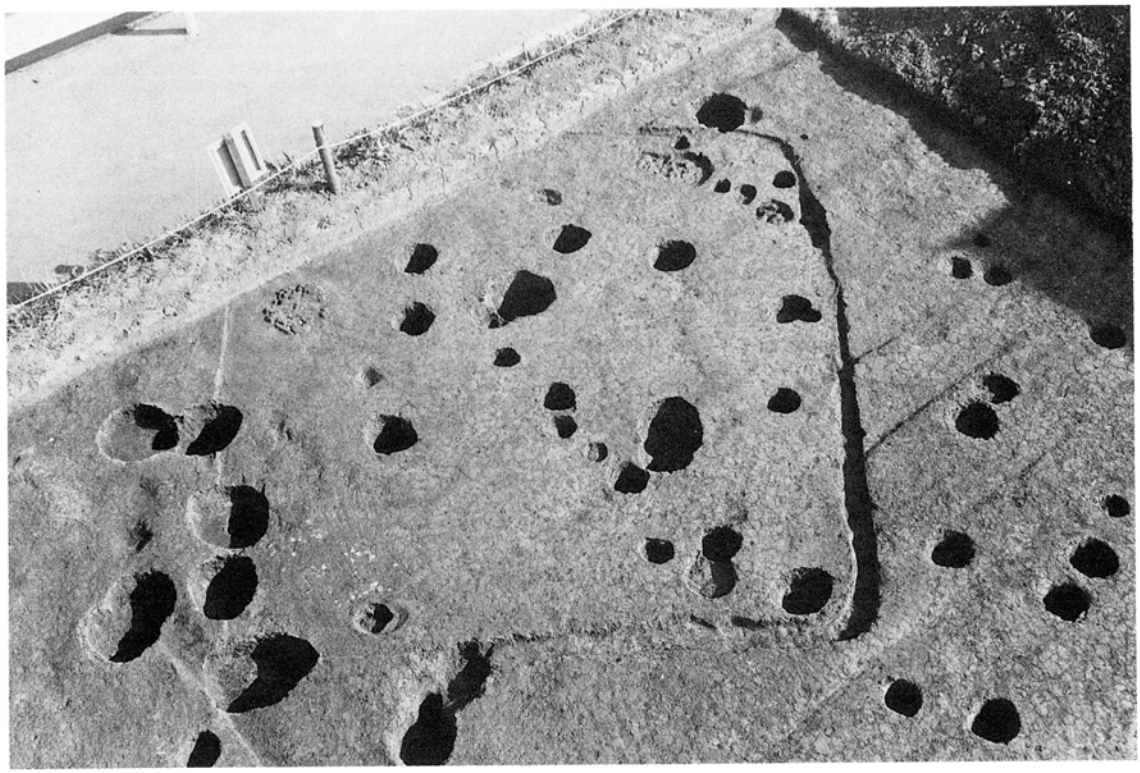
(1)　第30次調査北半部分（西から）

(2)　調査区南半部分（東から）

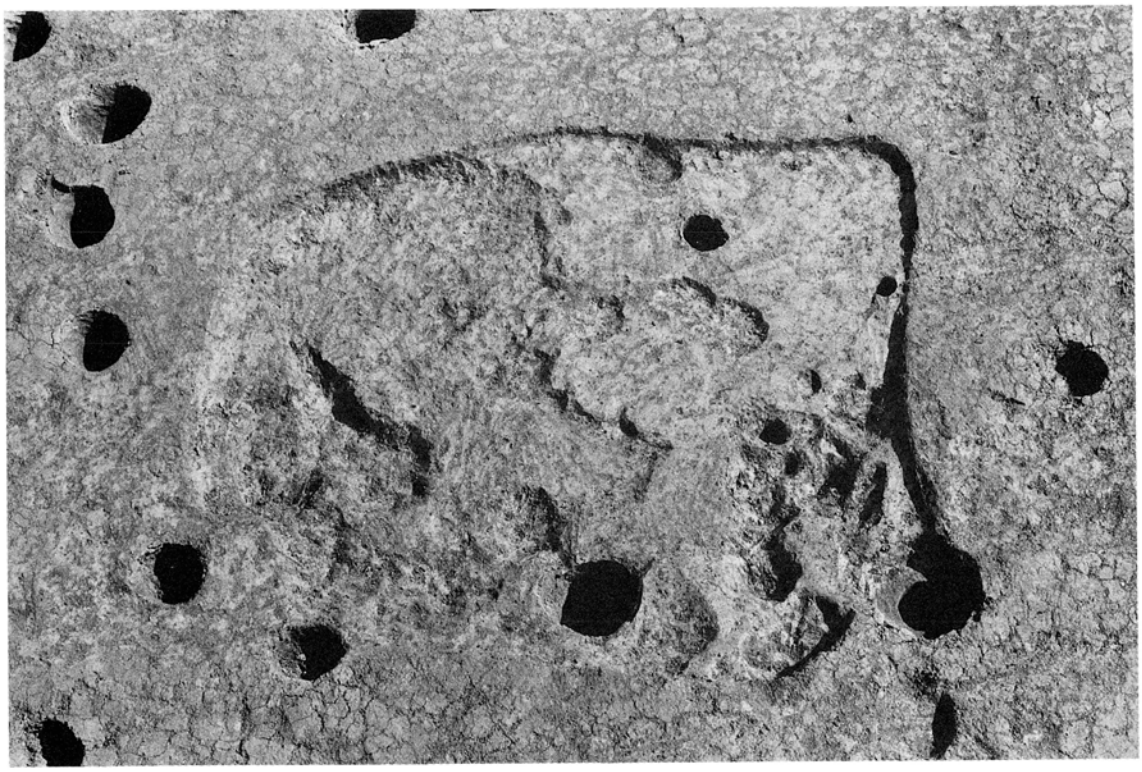
(1)　1号住居跡（南から）

(2)　遺物出土状態

(3)　(2)に同じ

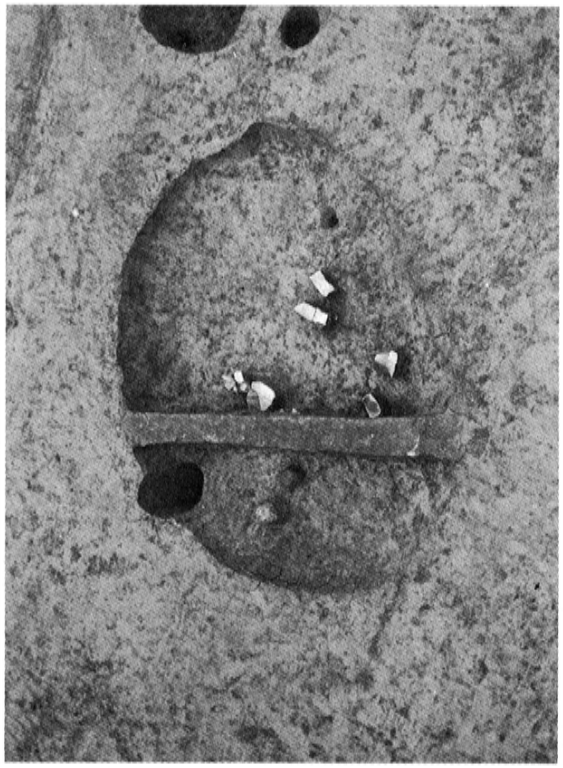


(1)　2号住居跡（北から）

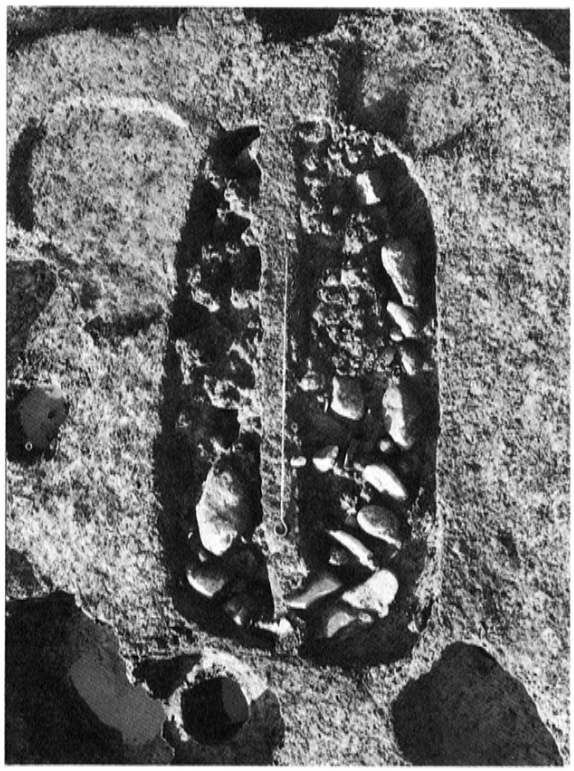


(2)　2号土壙（北から）

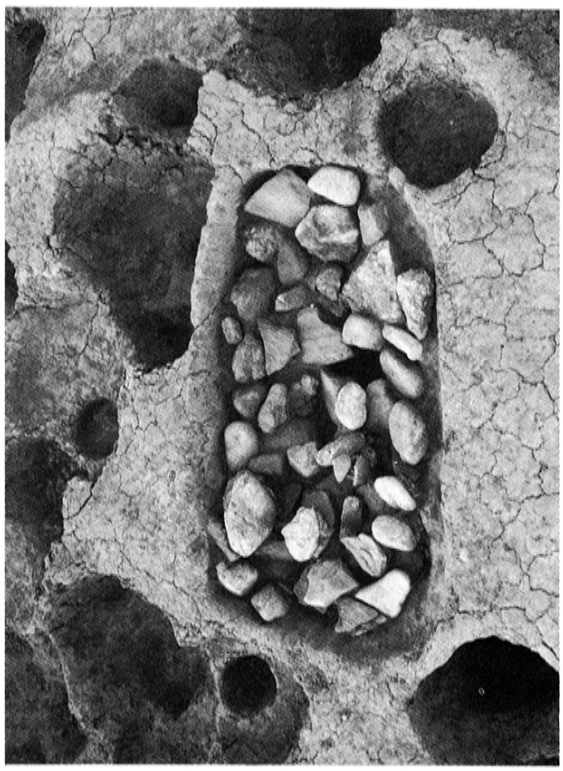
(1)　1号土壙（北から）



(2)　3号土壙（東から）



(3)　火葬墓（東から）



(4)　火葬墓底部（東から）

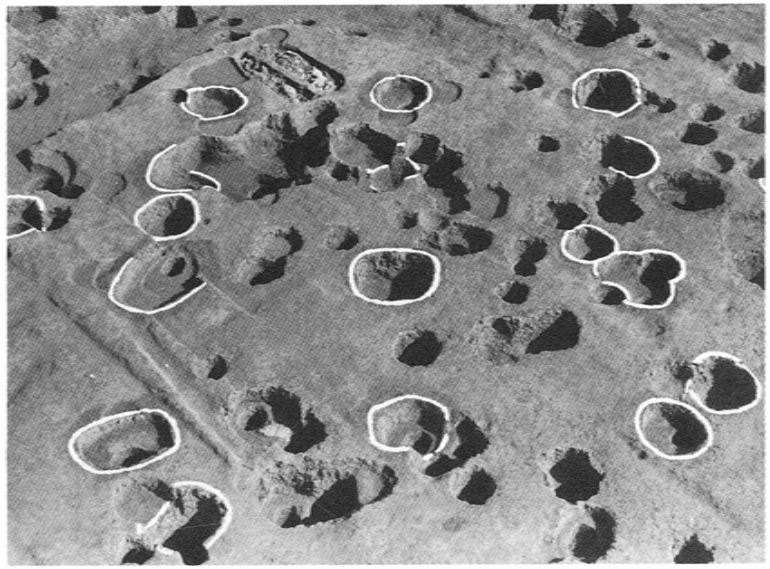
PL. 7

(1)　1号掘立柱建物（西から）

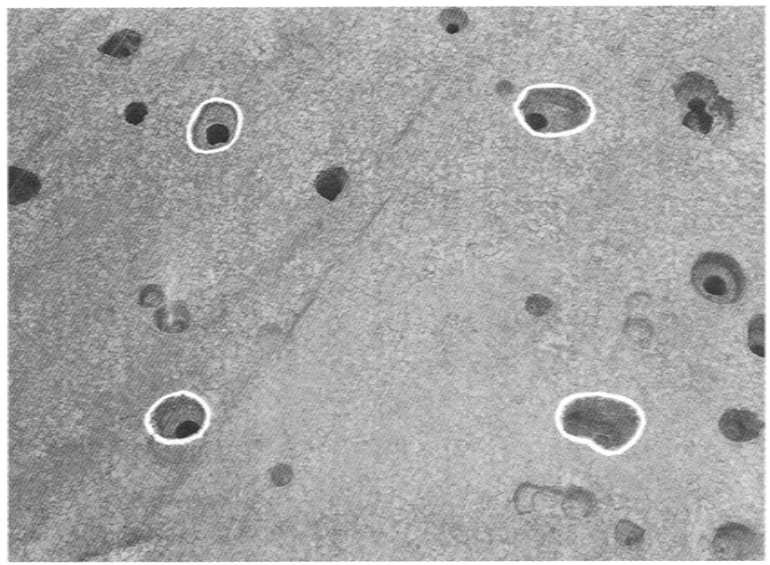
(2)　2号掘立柱建物（西から）

(3)　3号掘立柱建物（南から）

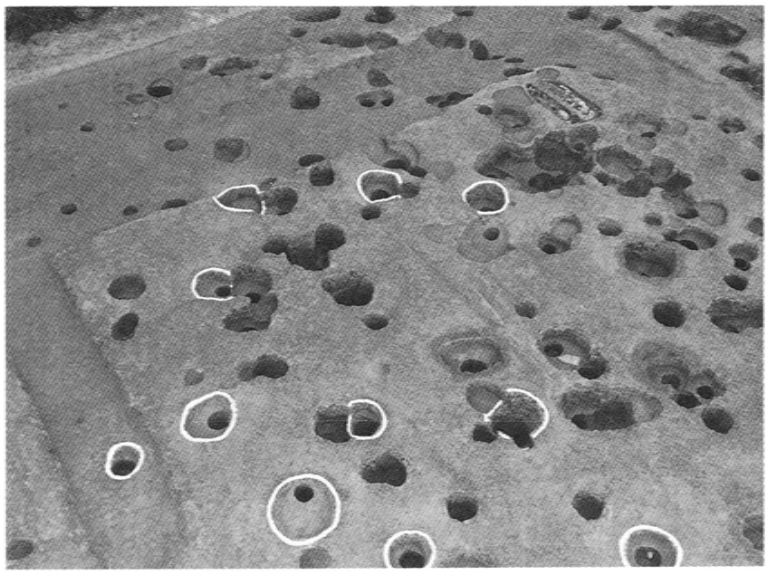
(4)　3号・10号掘立柱建物（南から）



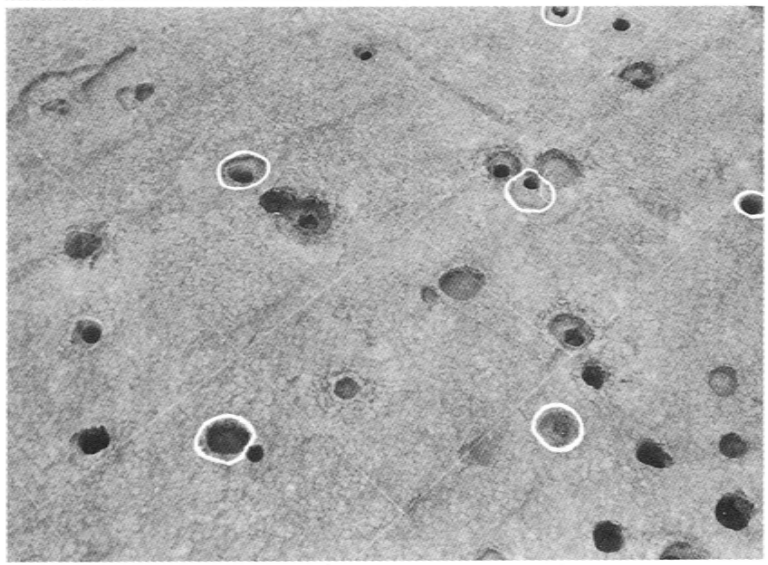
(1) 4号掘立柱建物（南から）



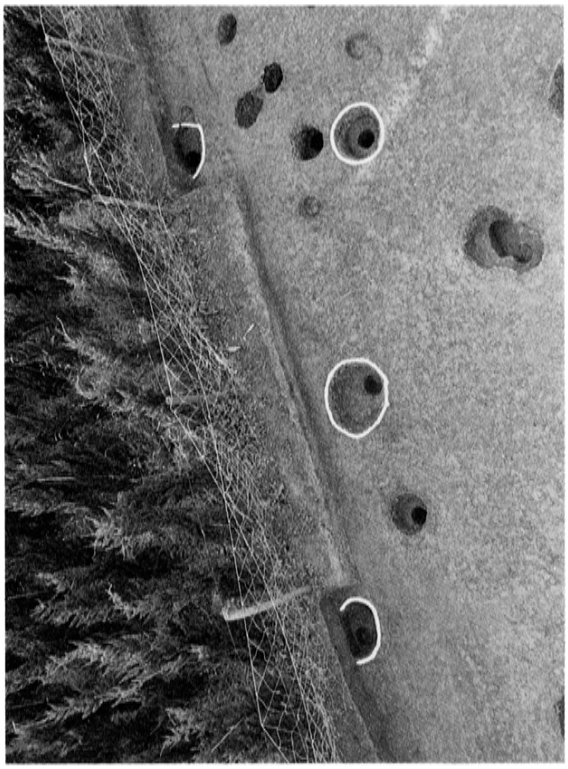
(2) 5号掘立柱建物（南から）



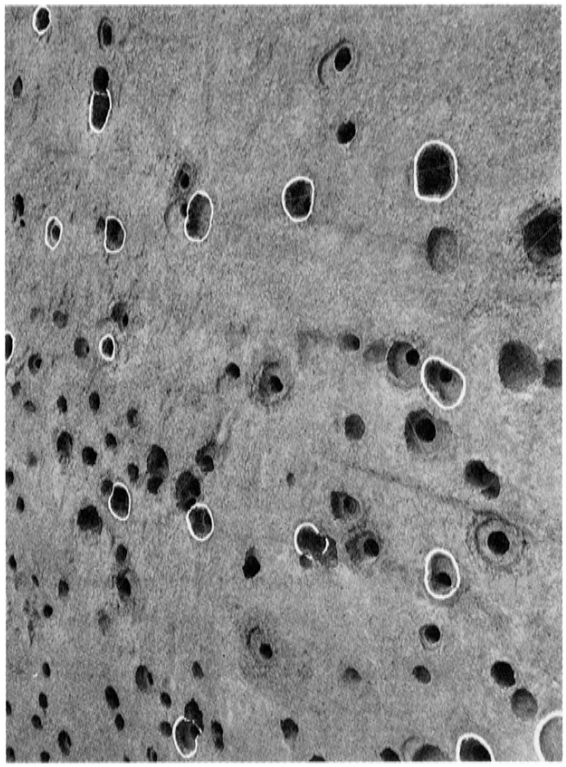
(3) 6号掘立柱建物（南から）



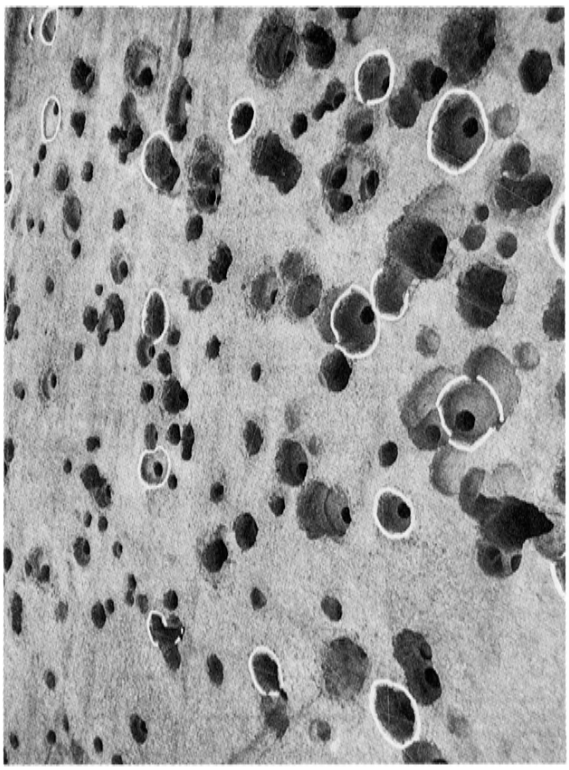
(4) 7号掘立柱建物（南から）



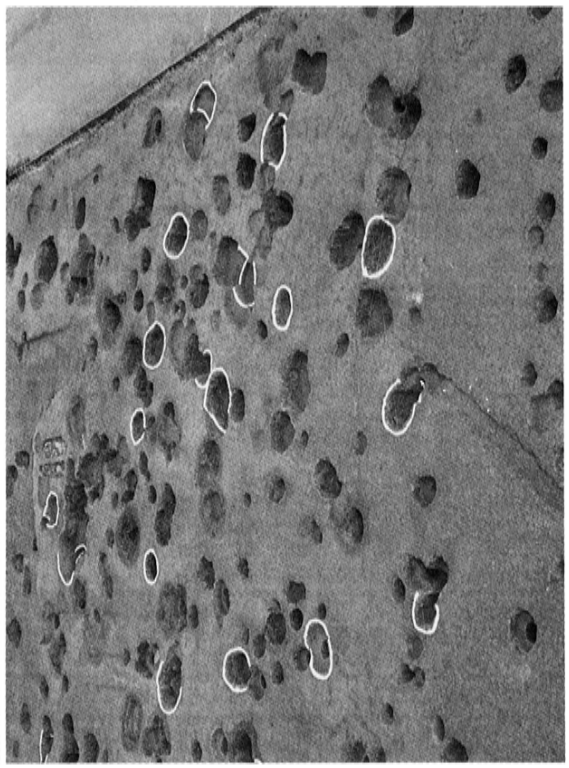
(1) 8号掘立柱建物（東から）



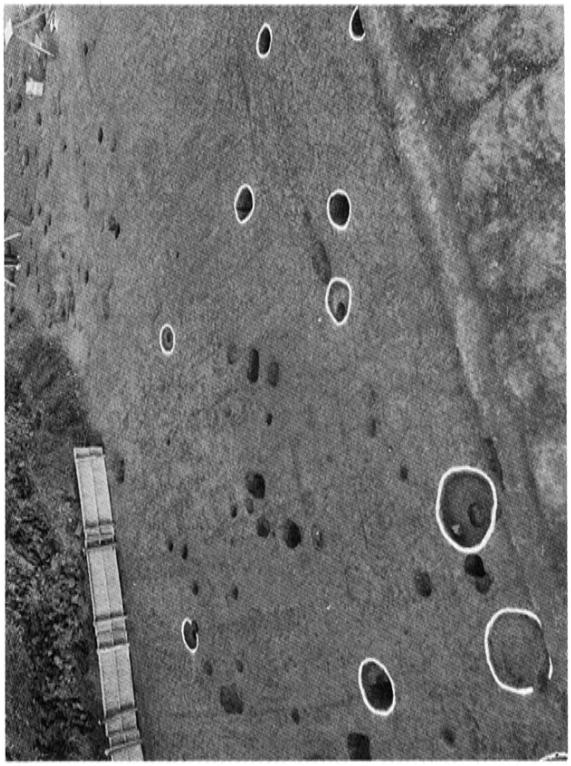
(2) 9号掘立柱建物（南から）



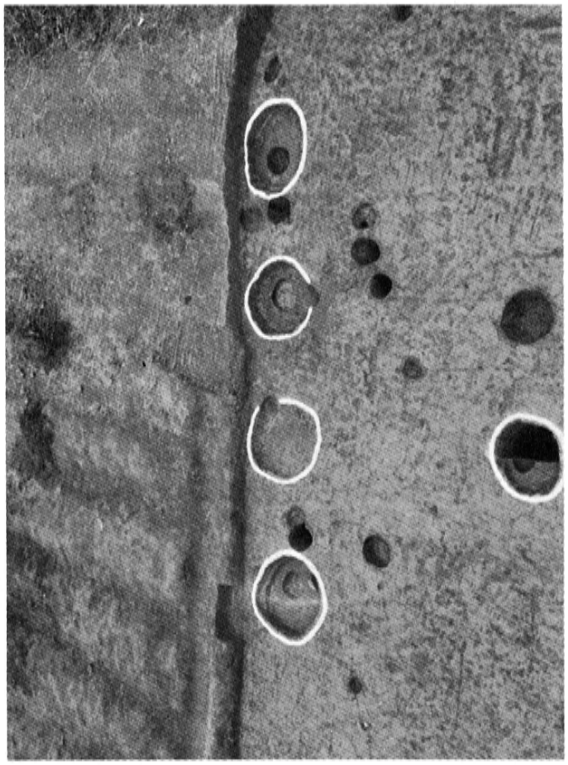
(3) 10号掘立柱建物（西から）



(4) 11号掘立柱建物（南から）

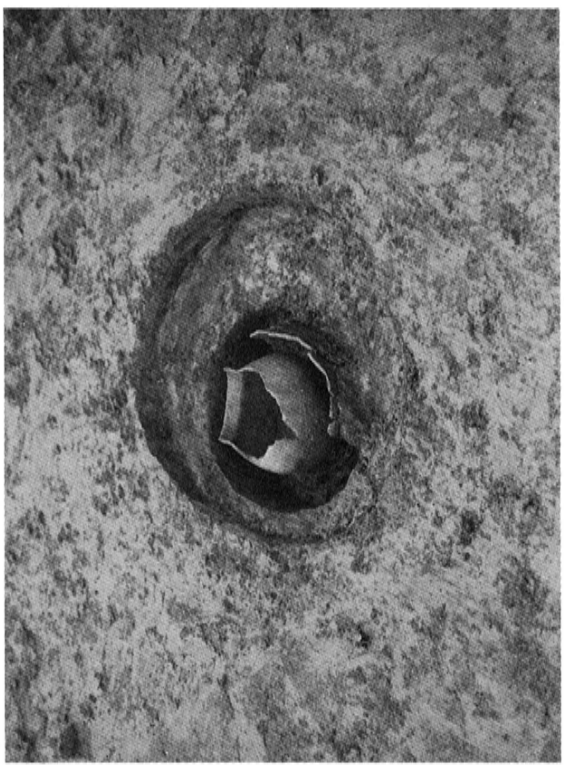


(1) 15号・16号掘立柱建物（南から）



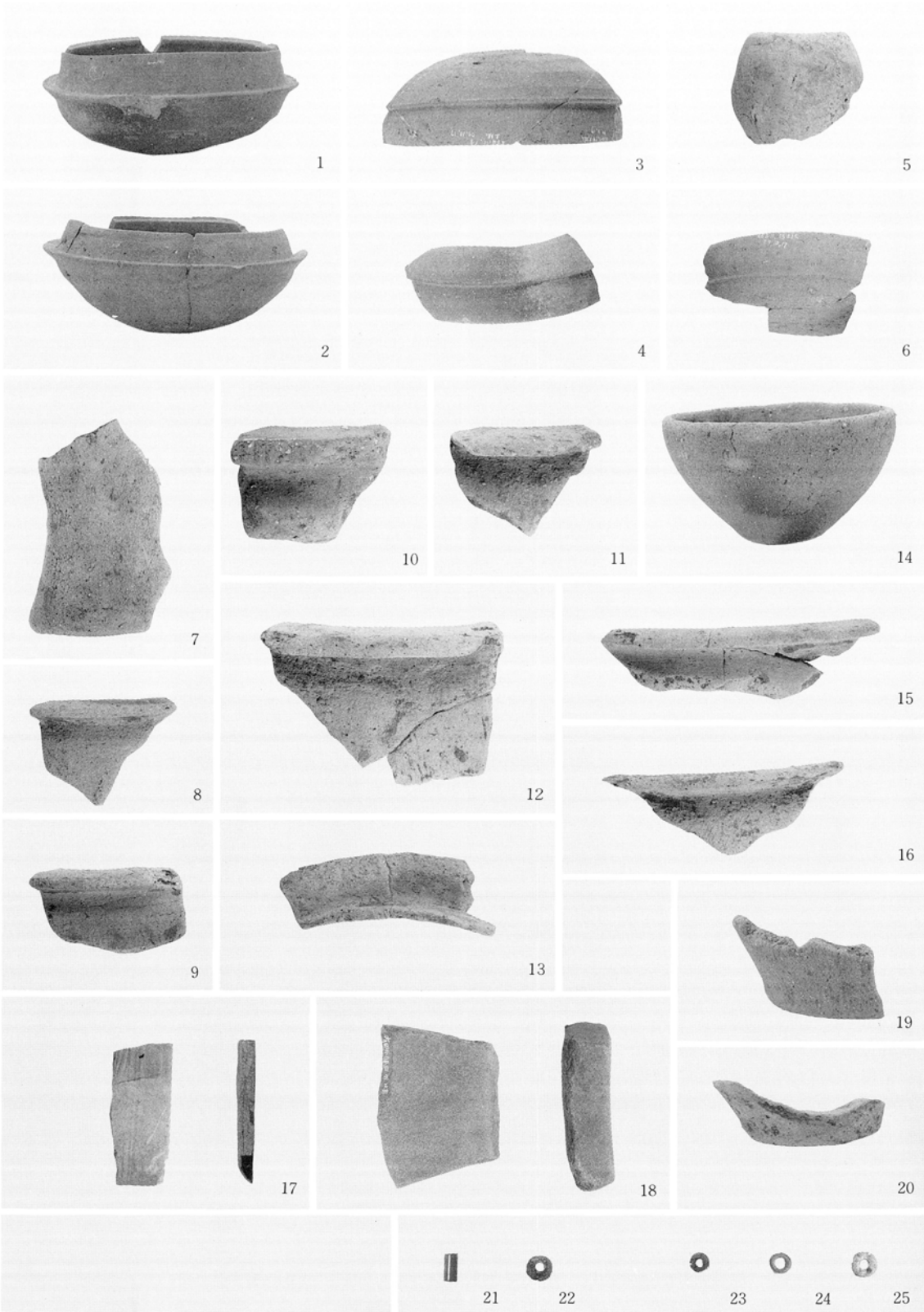
(2) 17号掘立柱建物（南から）

(3) 溝状遺構（東から）



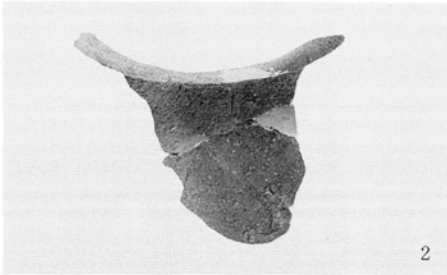
(4) Pit内の甕出土状態（北から）

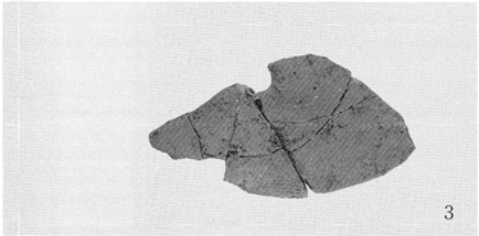
PL.11

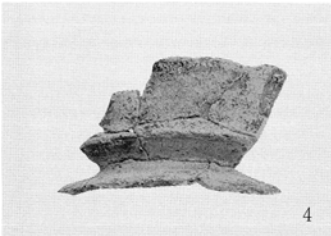


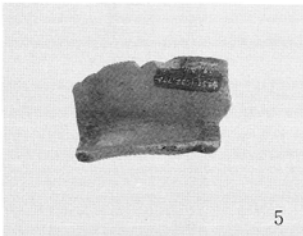
出土遺物

1

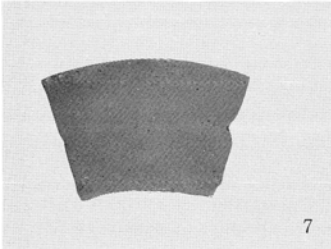

2

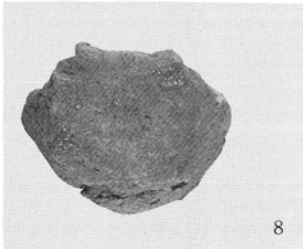

3

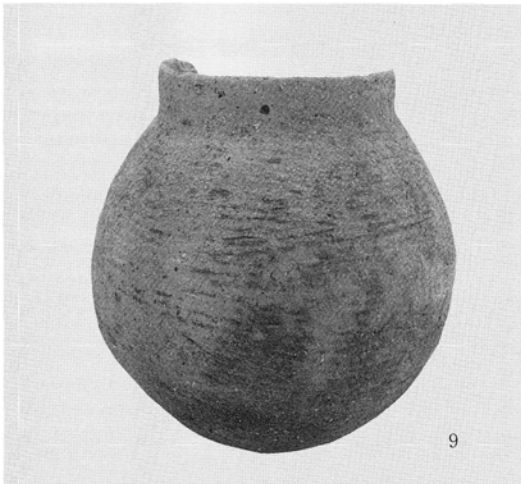

4

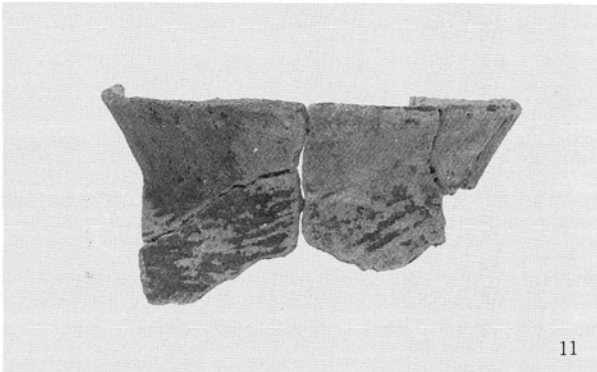

5

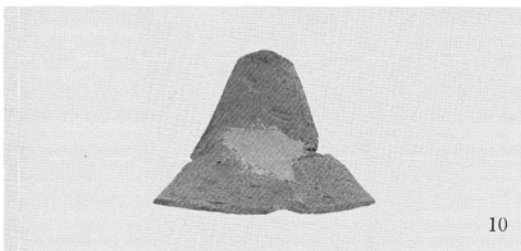
6

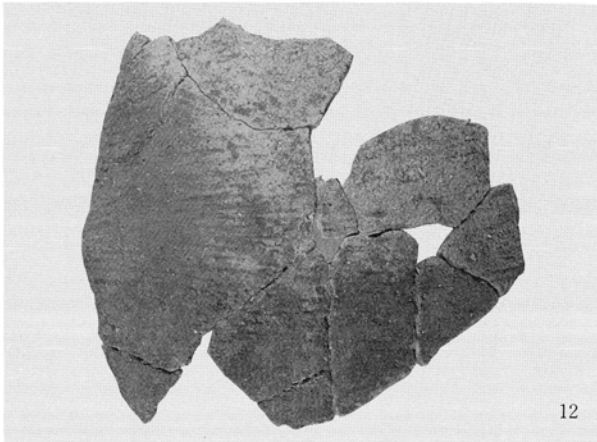

7


8


9


11


10

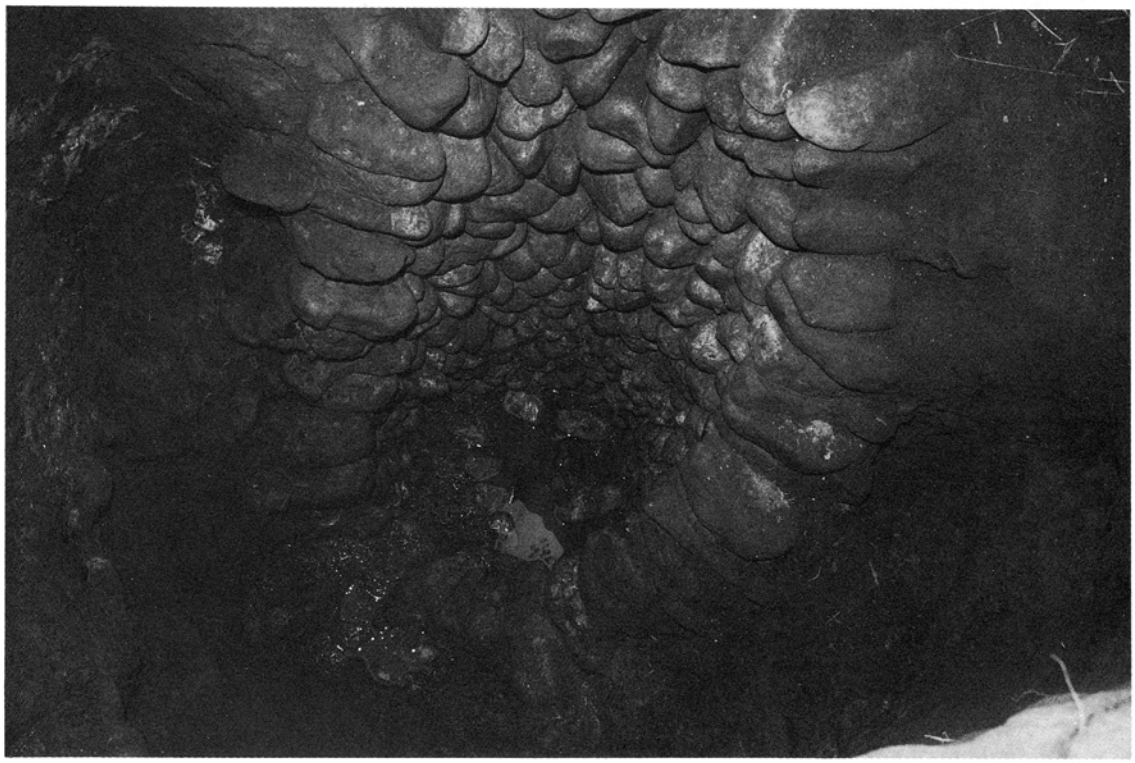

12

出土遺物

(1)　第44次調査東半部分（西から）

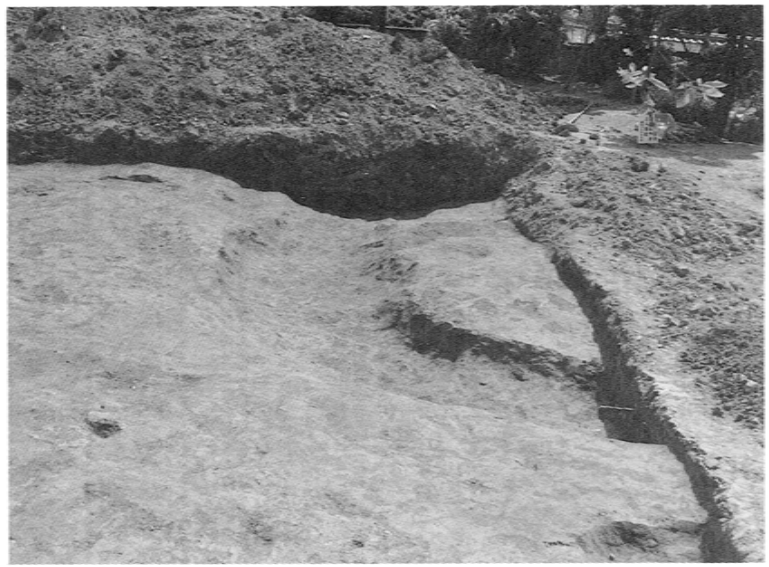
(2)　調査区西半部分（南から）

(1)　井戸跡（東から）

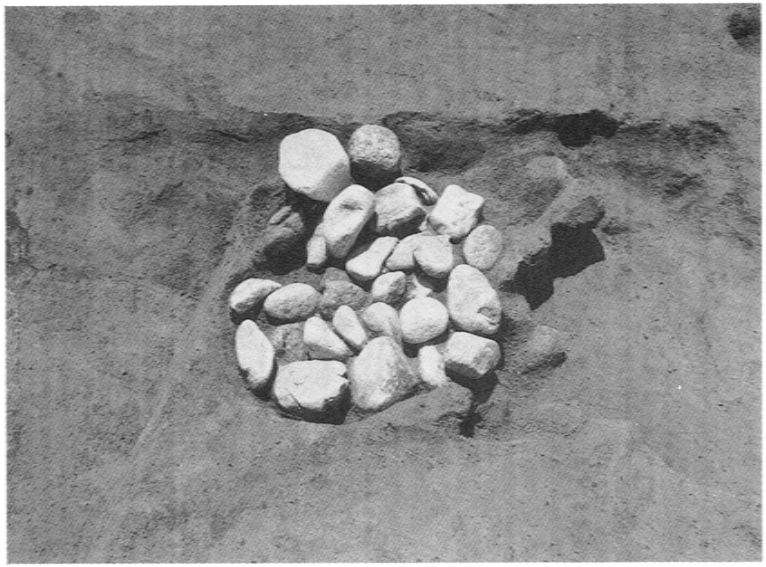


(2)　同石積み状態（東から）

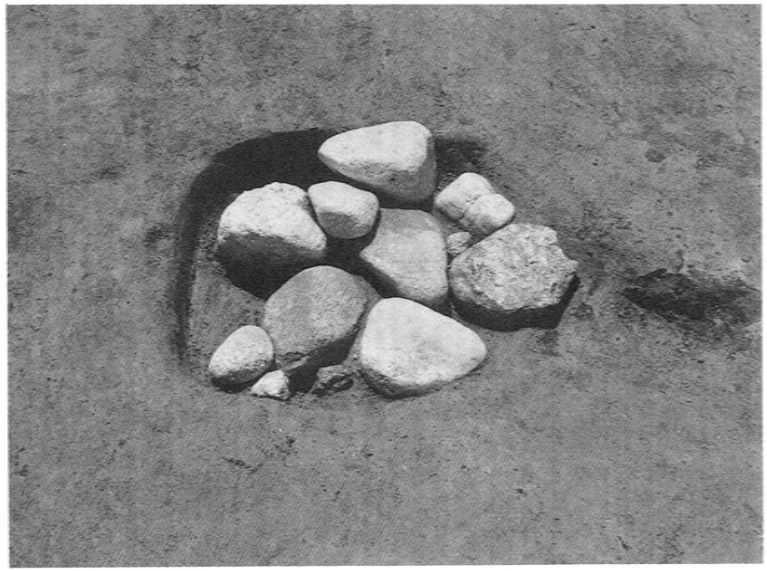
(1)



(2)



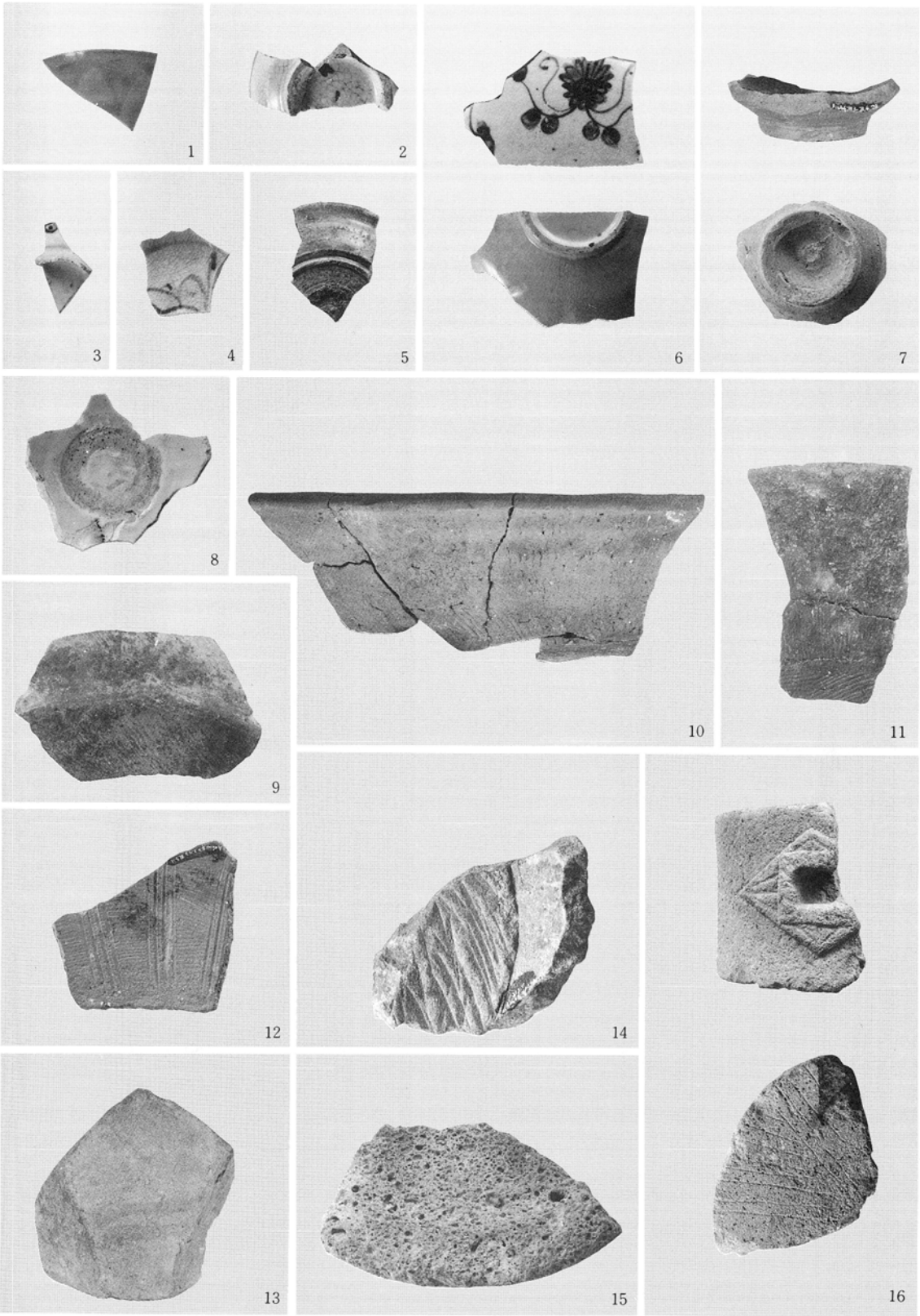
(3)



(1)　1号溝（西から）

(2)　1号集石遺構

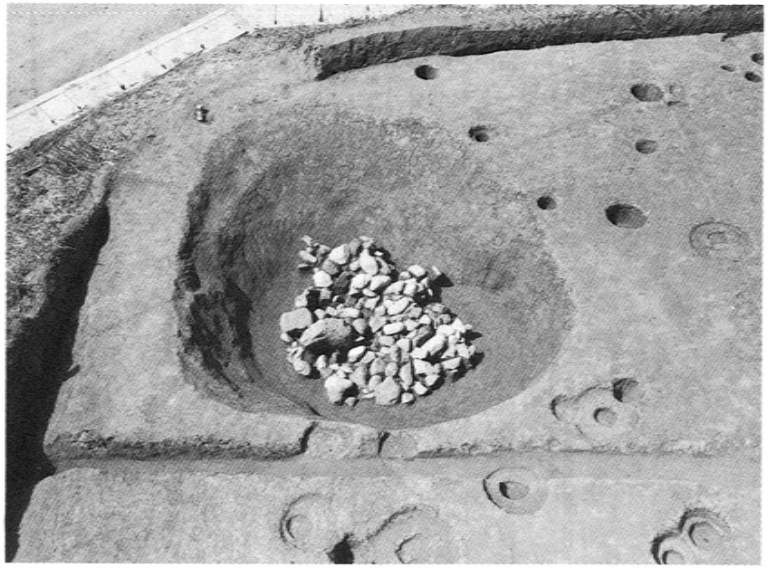
(3)　2号集石遺構



出土遺物

(1)　第46次調査北半部分（北西から）

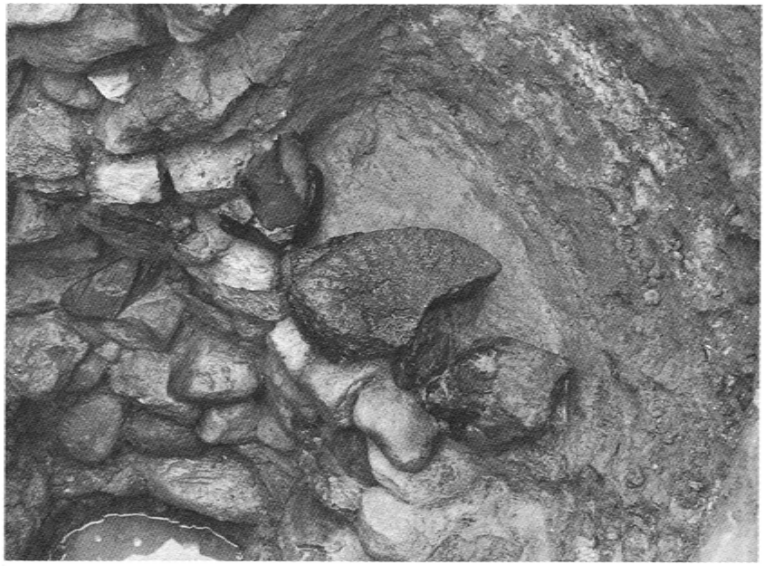
(2)　調査区南半部分（南から）



(1) 井戸上面の礫群（南から）

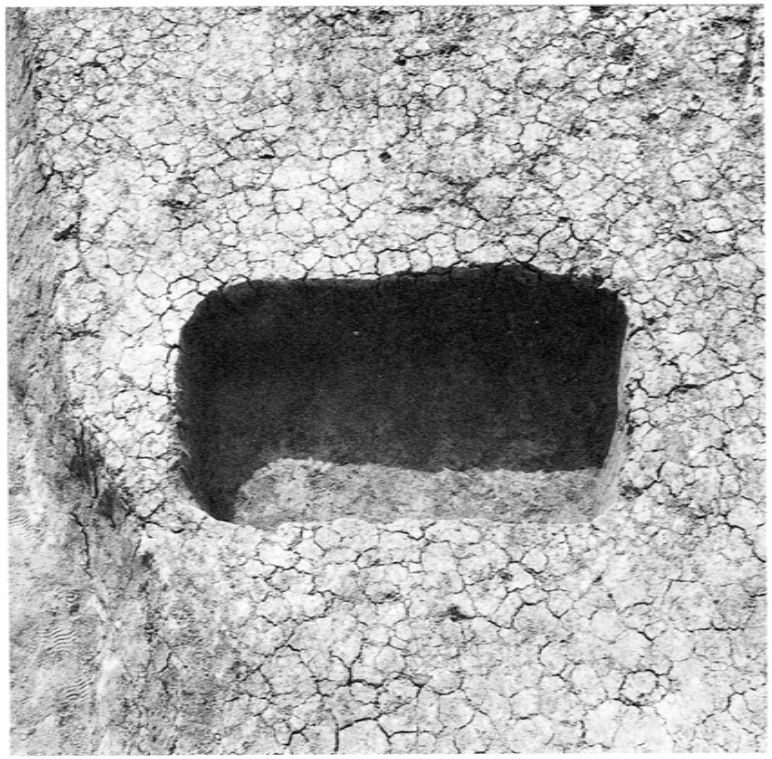
(2) 井戸跡の状態（北から）

(3) 井戸の石組状態



(4) 石組内臼の出土状態（西から）

(1)



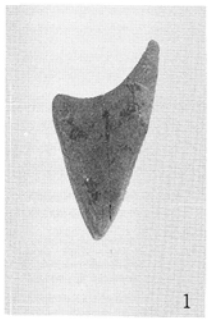
(2)

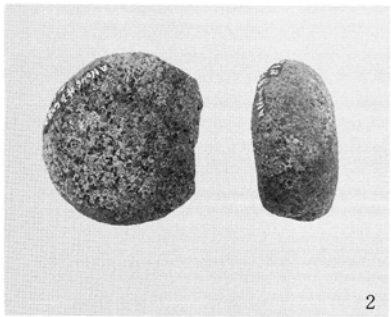
(3)

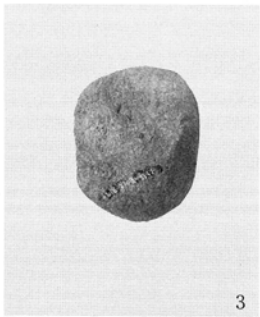
(1)　土壙（東から）

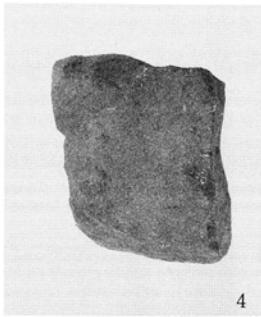
(2)　1号溝（北から）

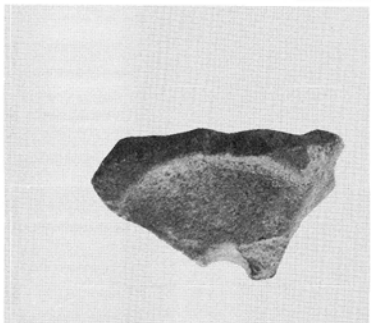
(3)　2号溝（西から）

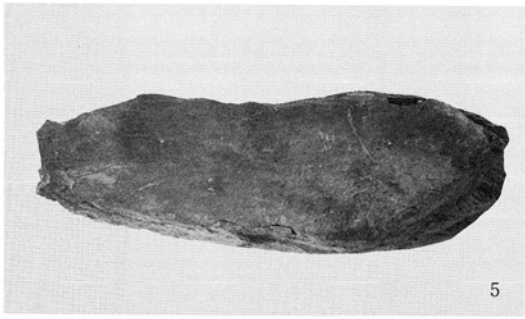

1


2

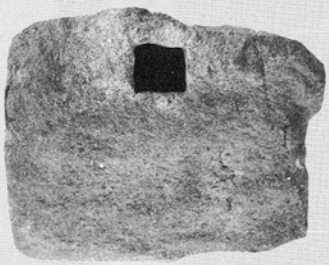

3


4

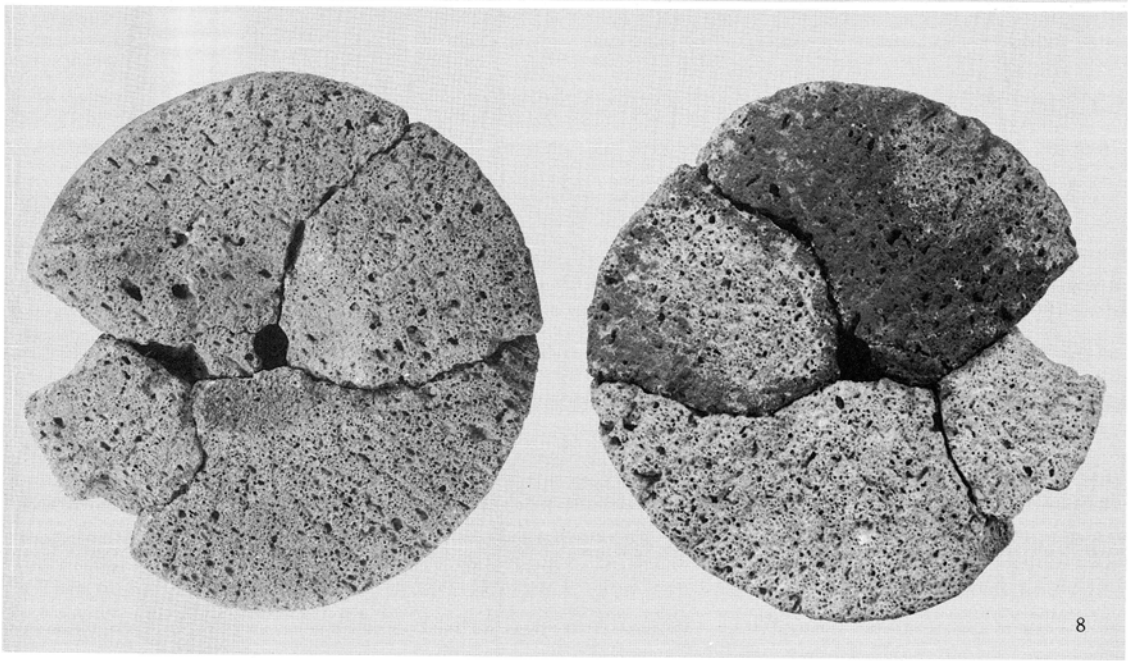



5

6

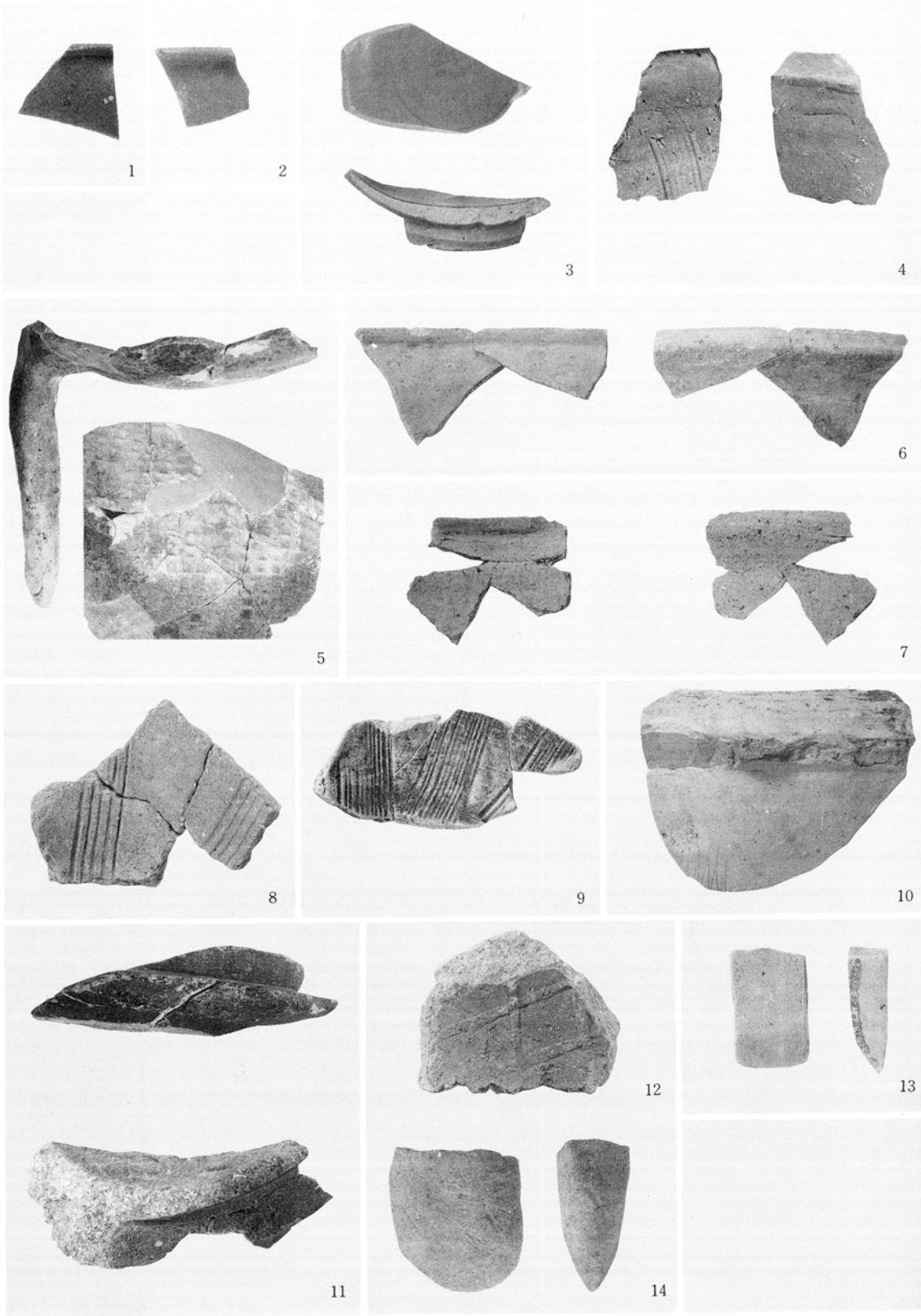


7

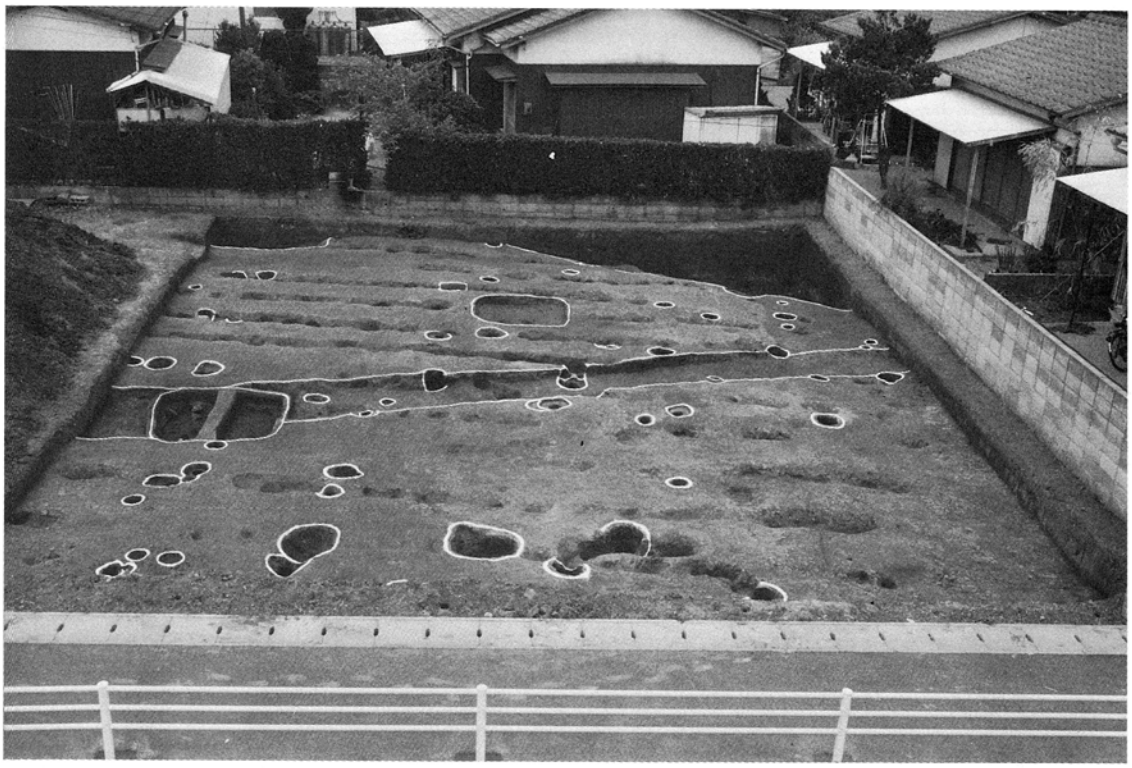

8

出土遺物

PL.21

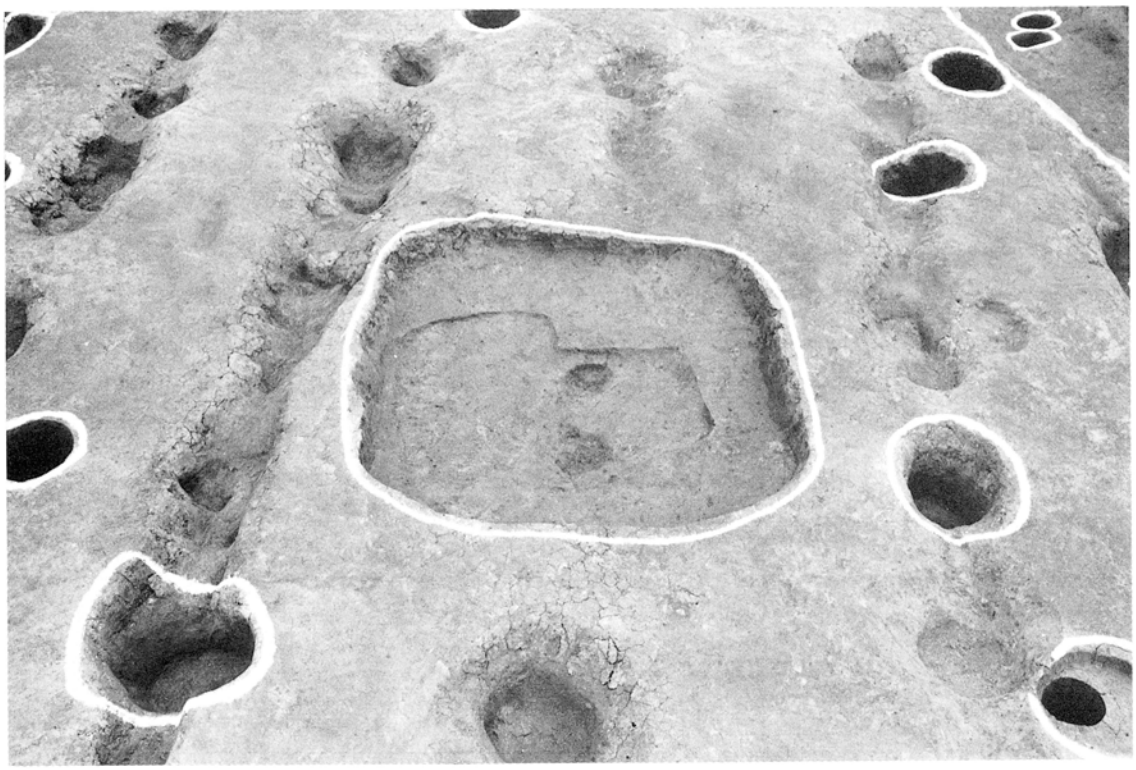


出土遺物



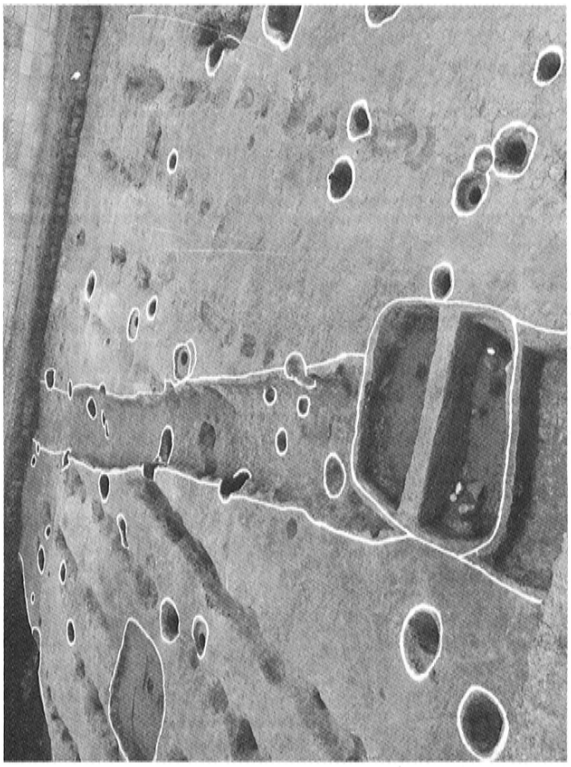
(1)　第47次調査北半部分（東から）

(2)　調査区南半部分（東から）

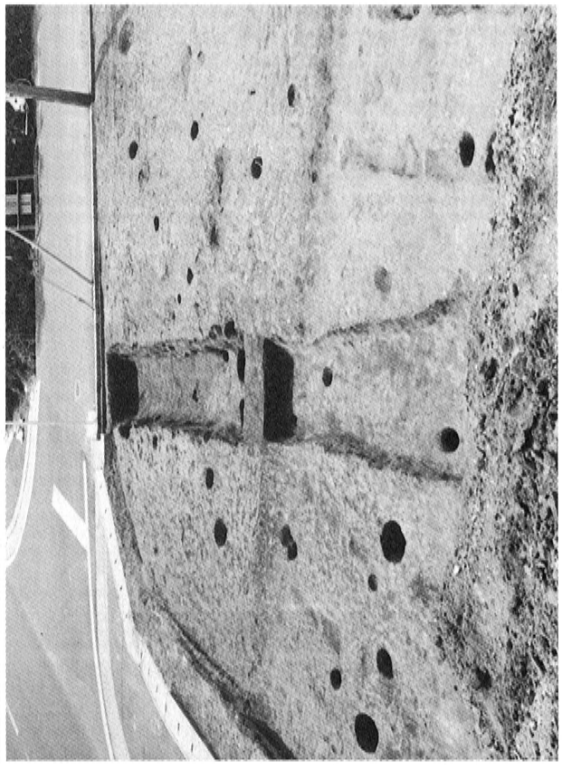


(1)　1号土壙（南から）

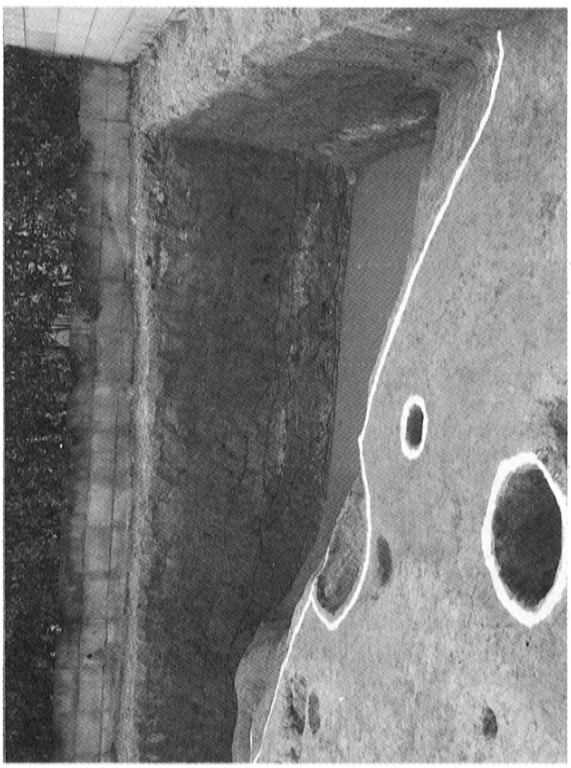
(2)　2号土壙（北から）



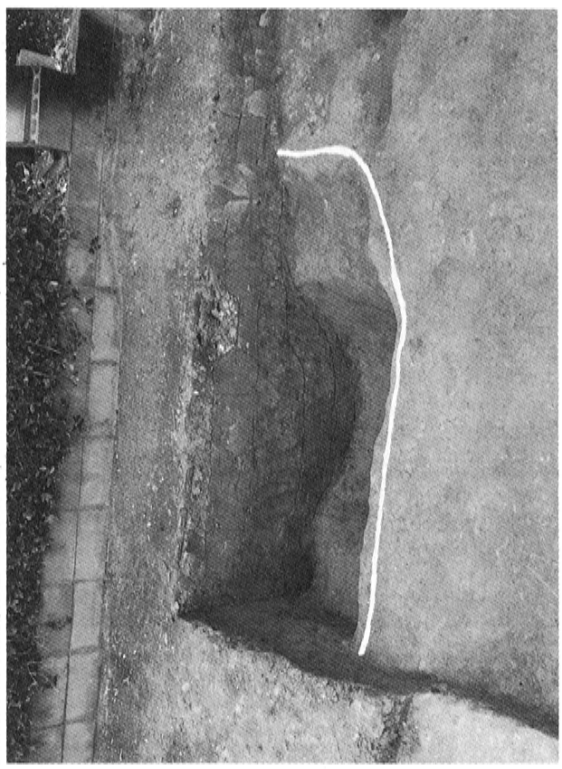
(1)　2号溝北半部分（南から）



(2)　2号溝南半部分（北から）



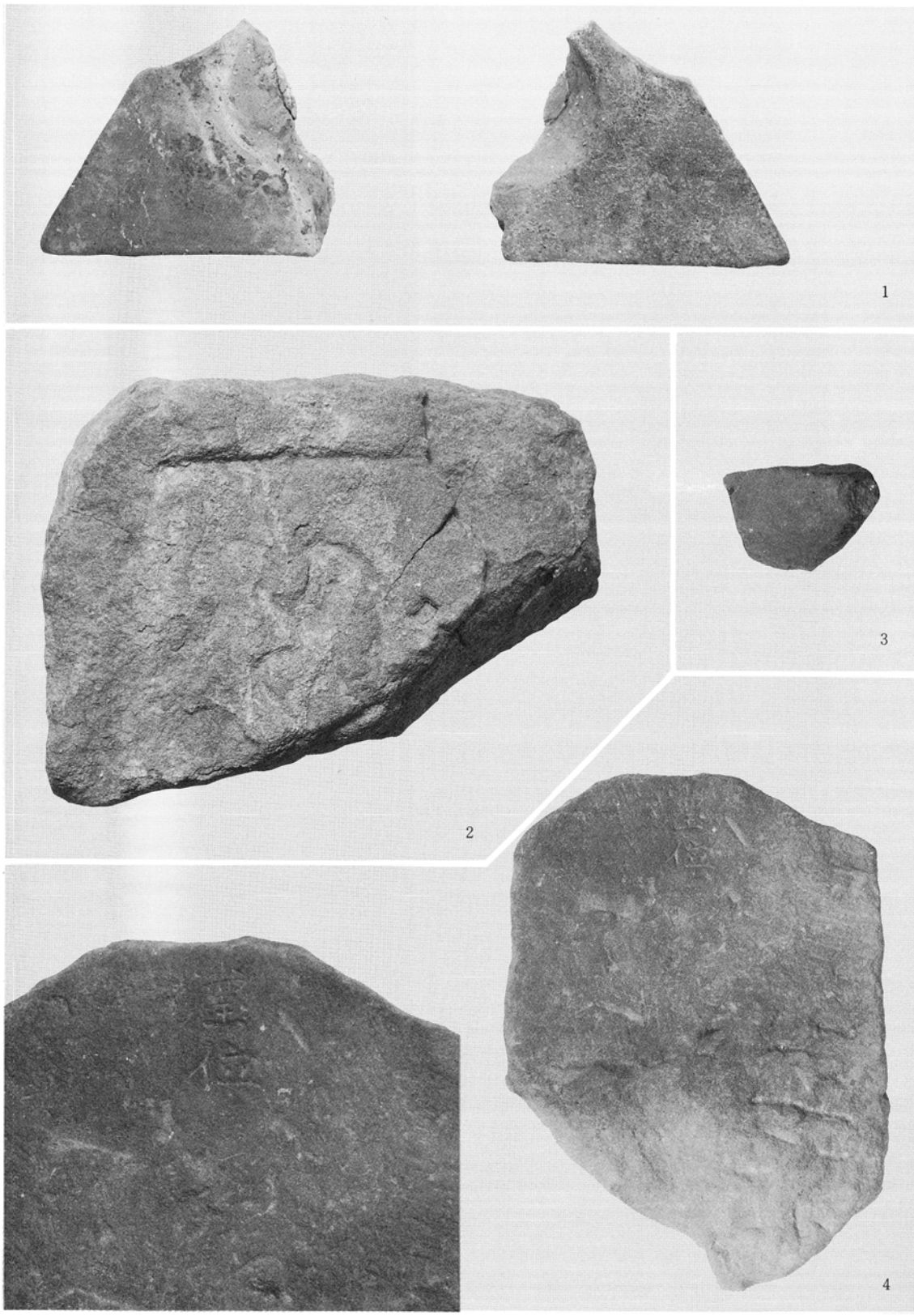
(3)　1号溝（東から）



(4)　3号溝（東から）

PL.25

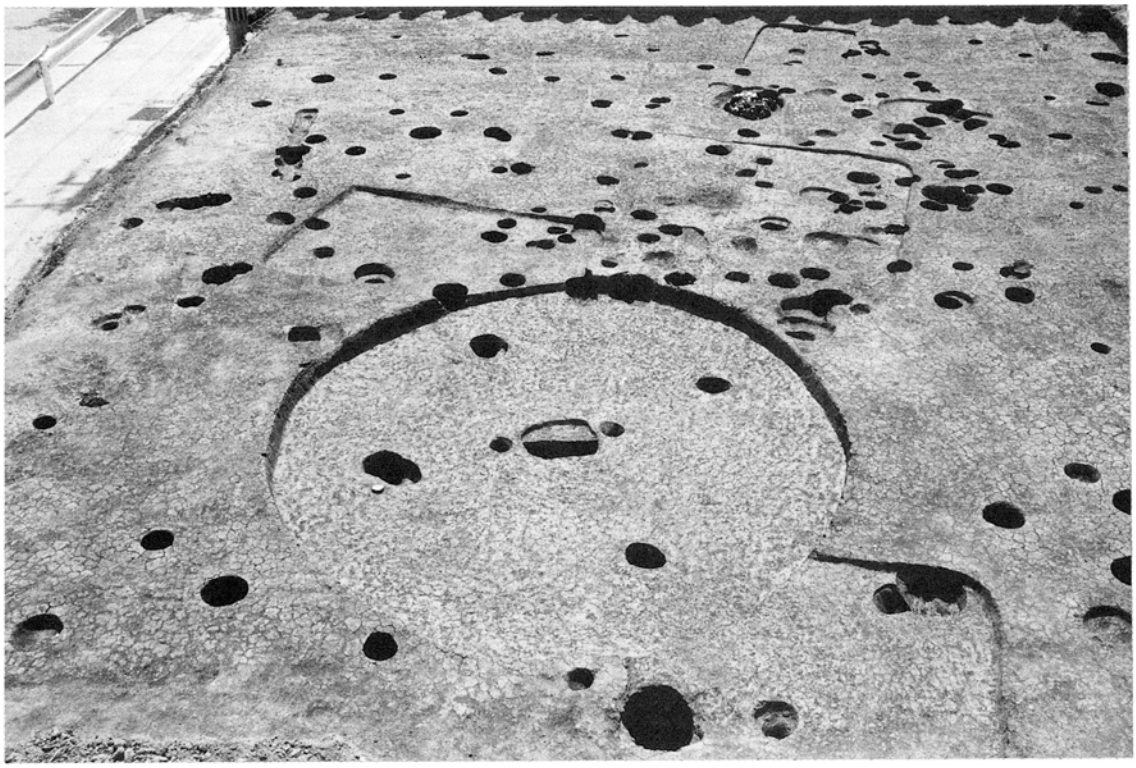
出土遺物



出土遺物

第48次調査

(1) 第48次調査西半部分（東から）



(2) 調査区東半部分（西から）

(1)　東側調査区拡張部分（西から）

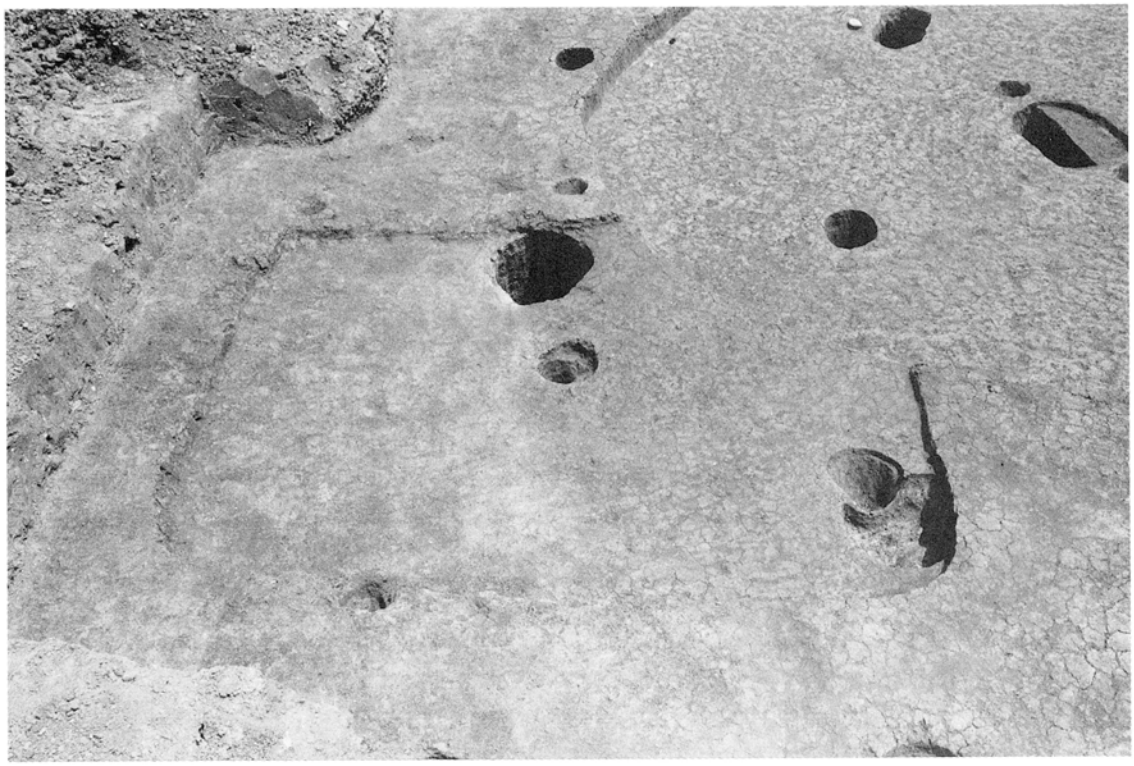
(2)　西側調査区拡張部分（北から）

(1)　1号住居跡（西から）

(2)　2～5号住居跡（西から）

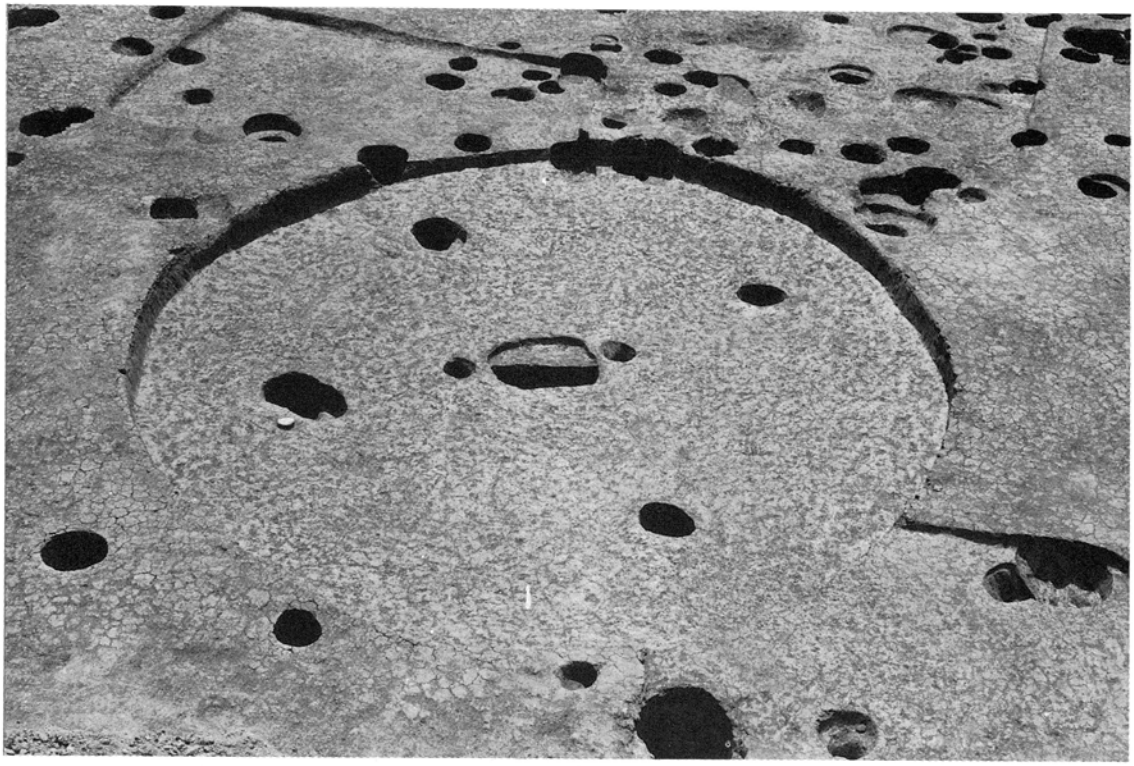
(1)　2号住居跡（南から）

(2)　5号住居跡（西から）

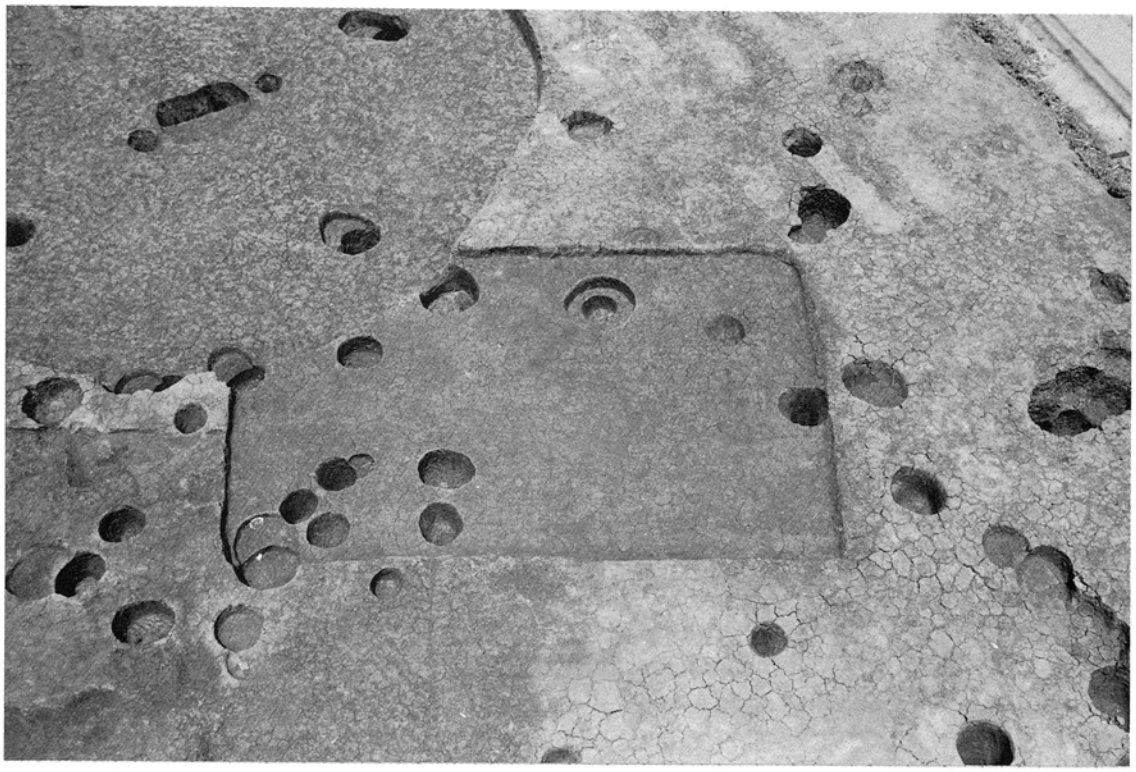


(1)　6号住居跡（南から）

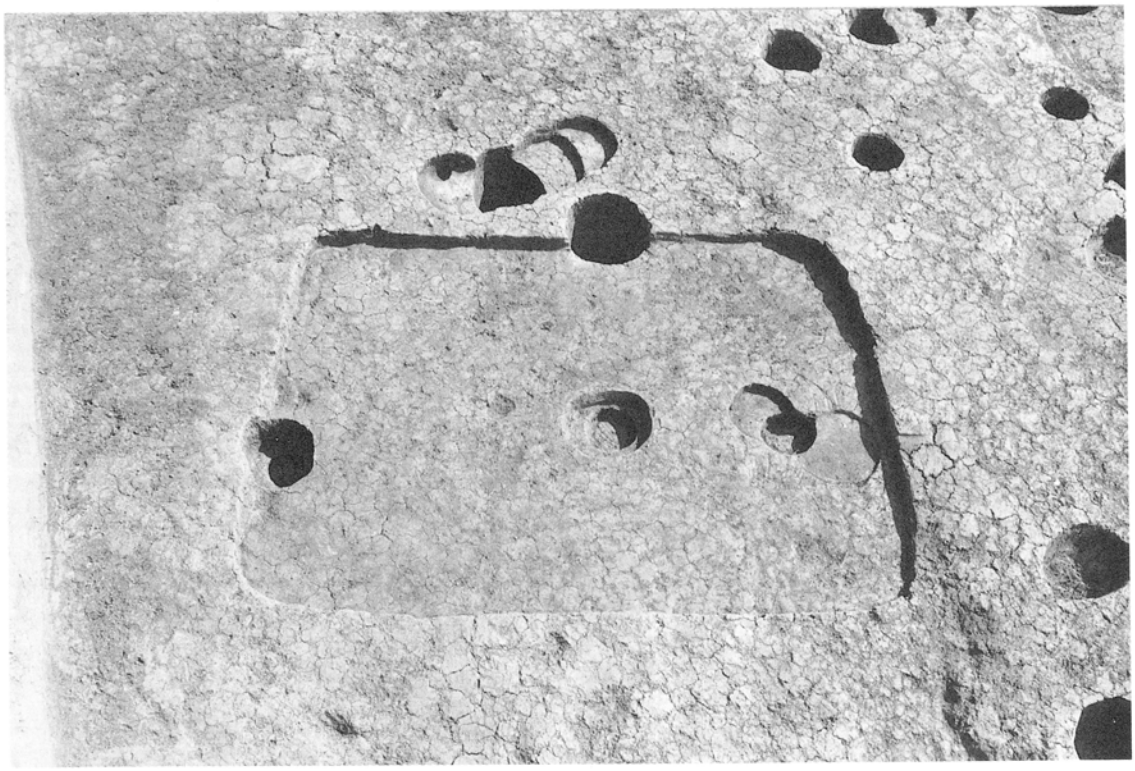
(2)　7号住居跡（北から）



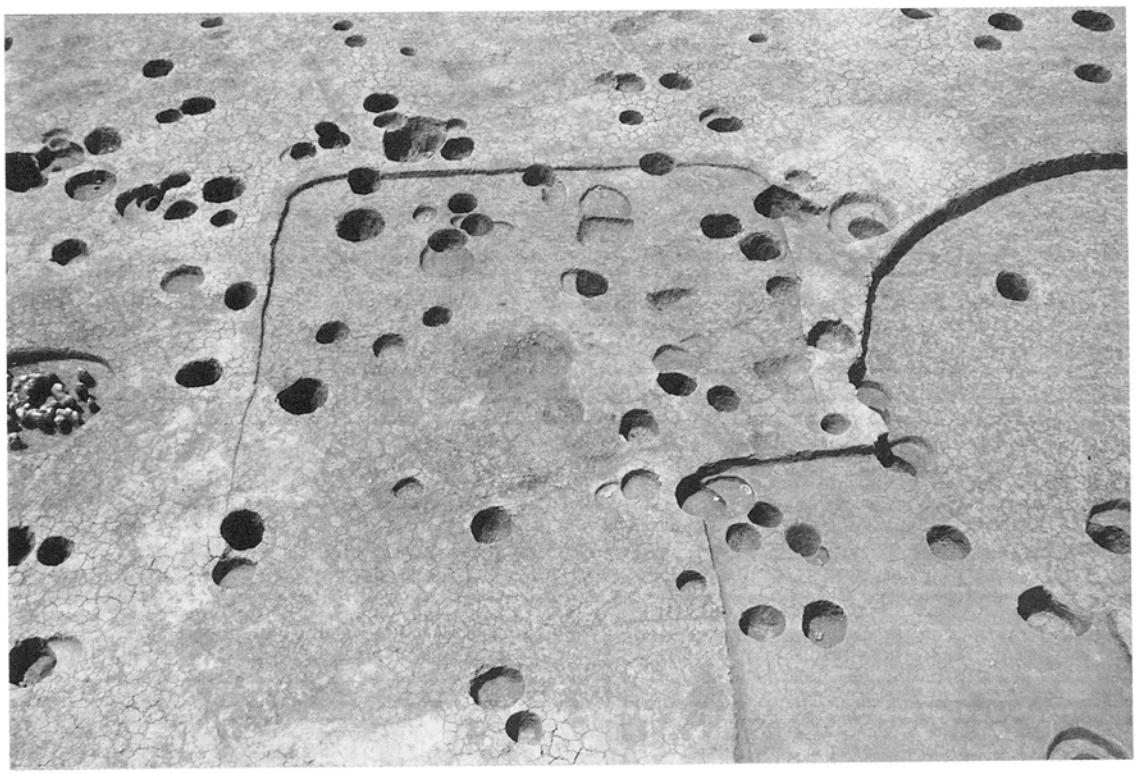
(1)　8号住居跡（南から）



(2)　9号住居跡（東から）



(1)　10号住居跡（北から）

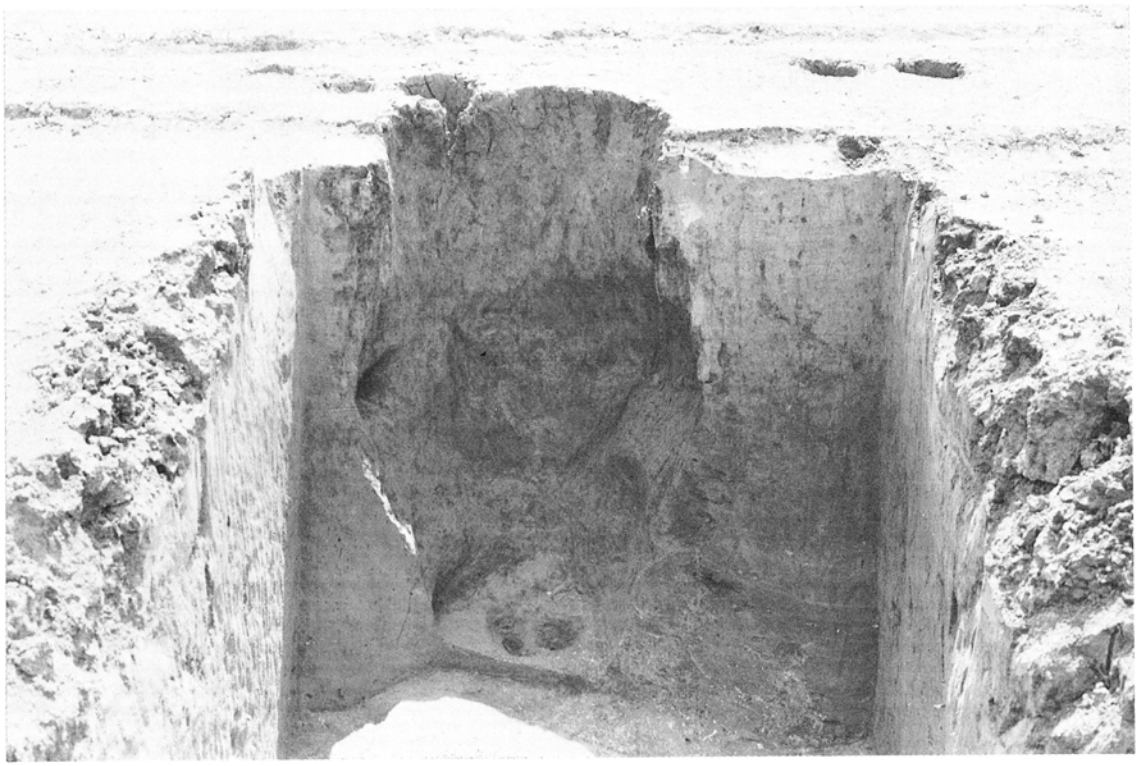


(2)　11号住居跡（北から）

(1)　1号甕棺墓出土状態

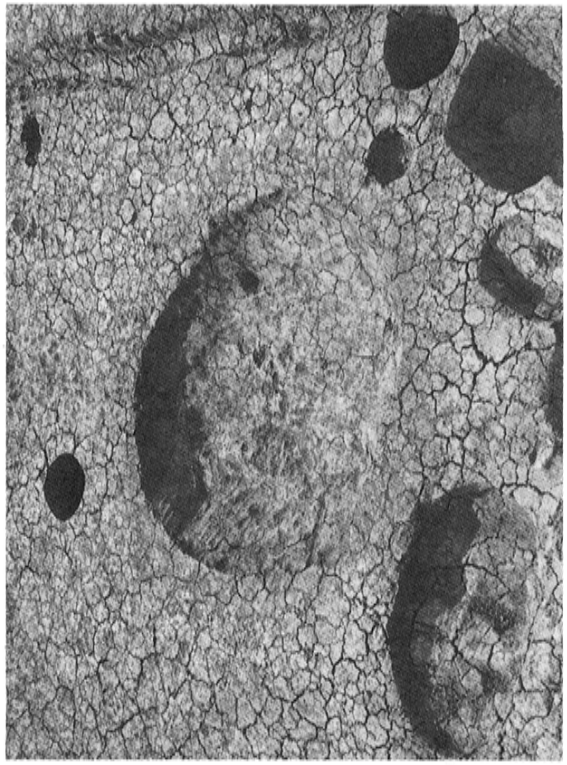
(2)　2号甕棺墓出土状態

(1)　1号掘立柱建物（西から）

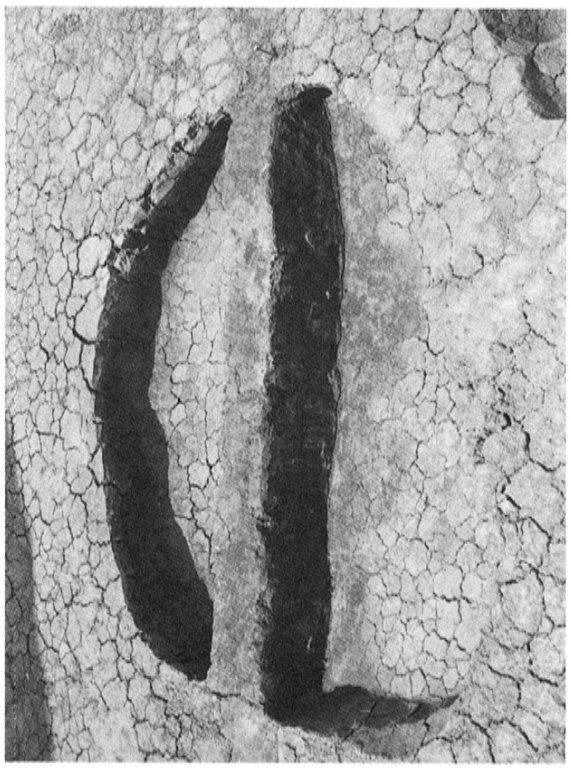


(2)　井戸跡（西から）

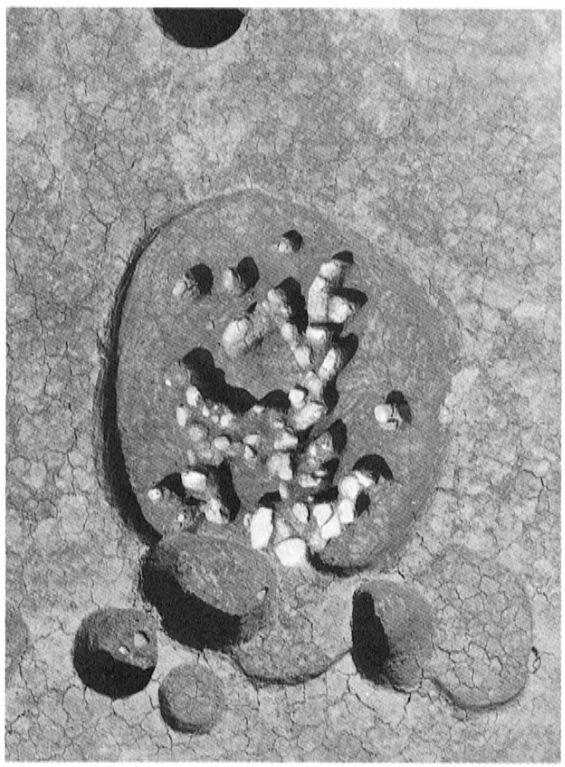
(1)　1号土壙（西から）



(2)　2号土壙（東から）

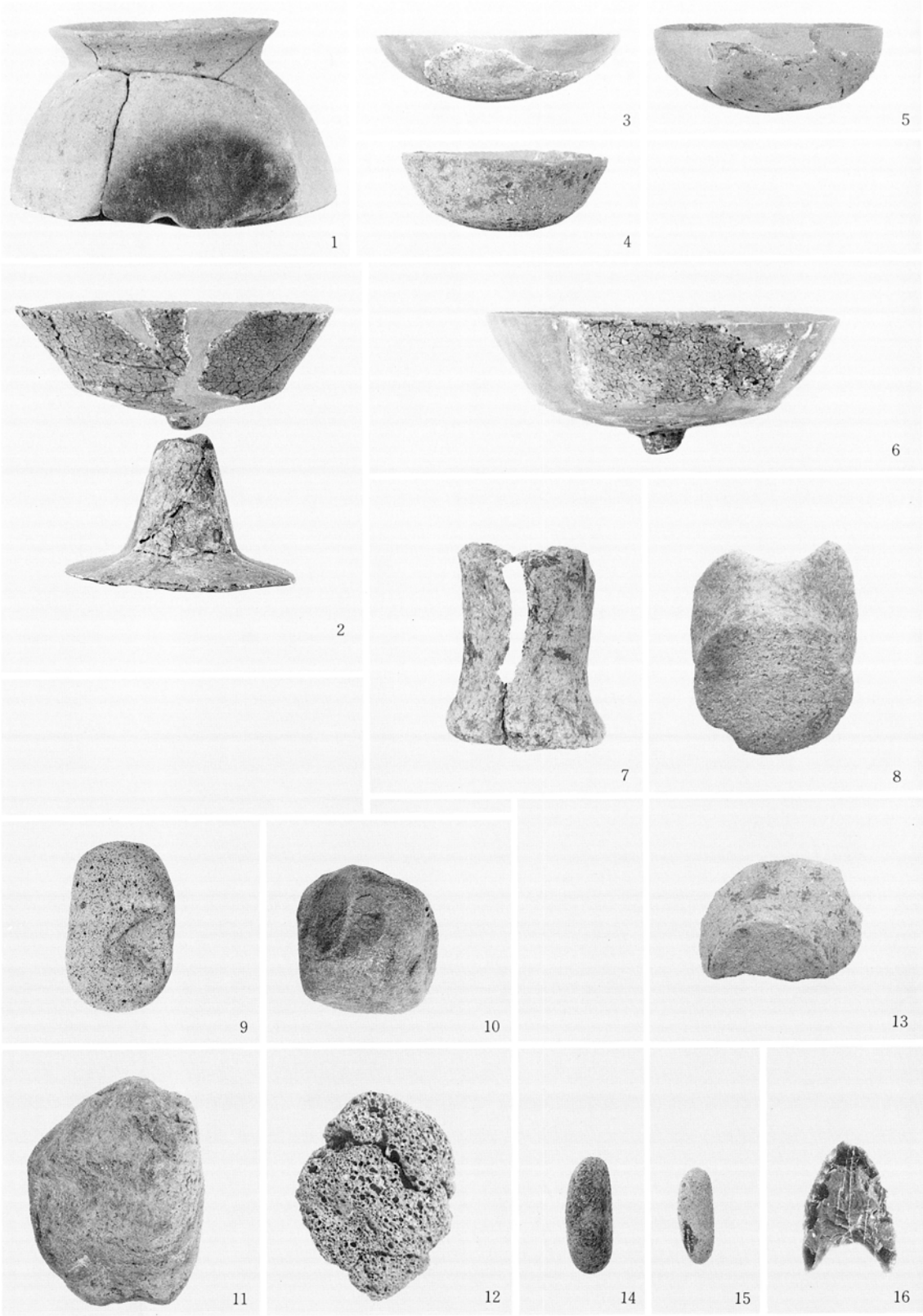


(3)　3号土壙（北から）

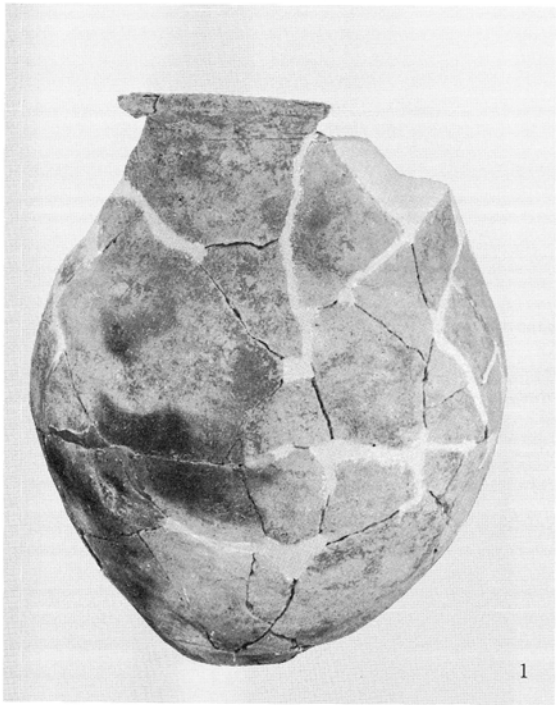


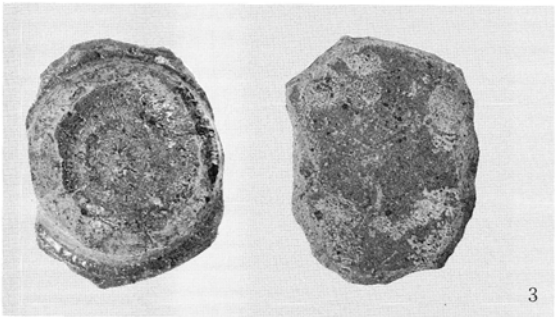
(4)　4号土壙（北から）

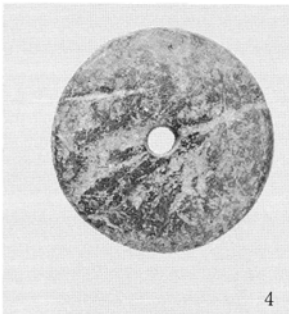
PL.37

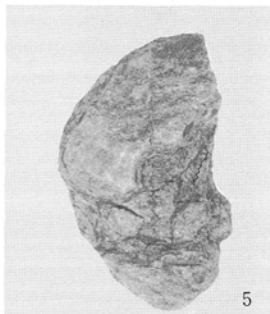


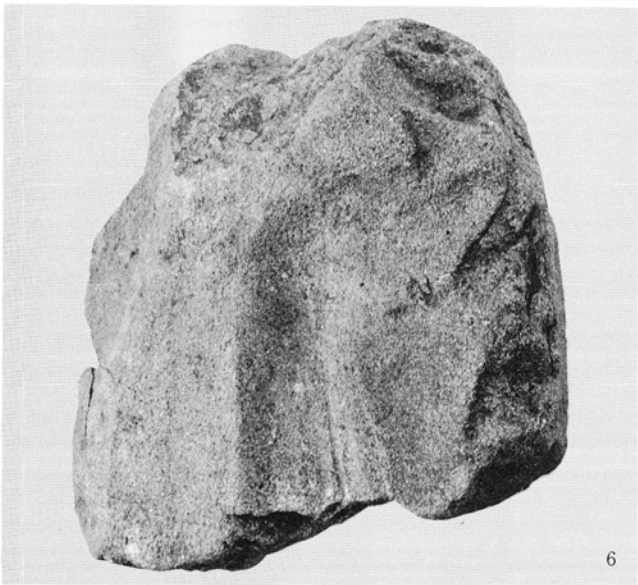
出土遺物

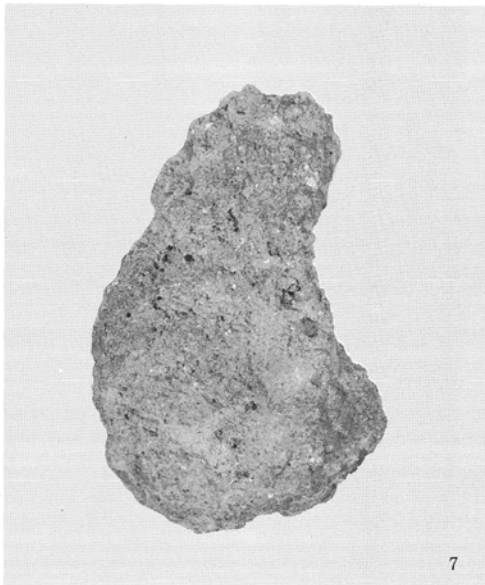








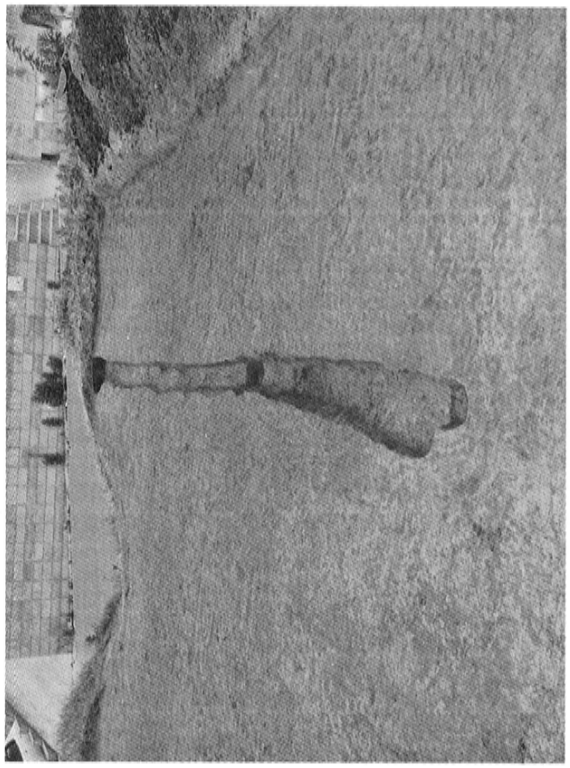




出土遺物

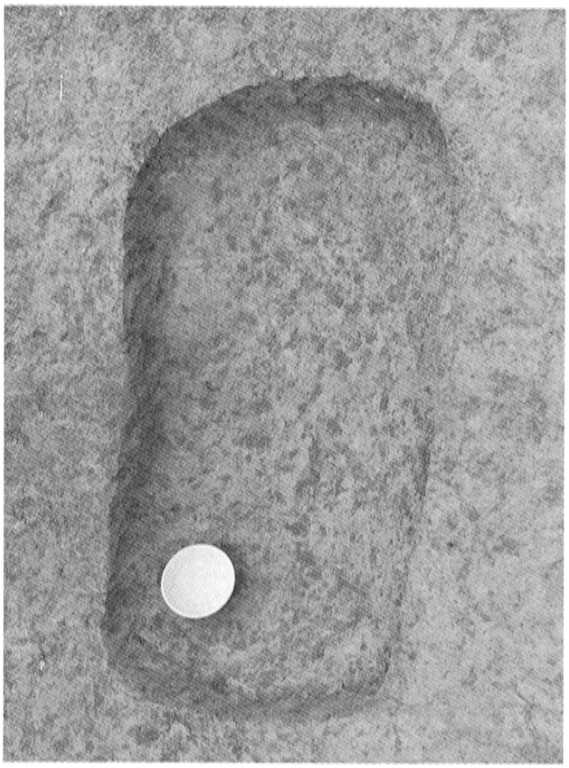
(1)　第49次調査南半部分（西から）

(2)　調査区北半部分（東から）



(1)　2号溝（東から）

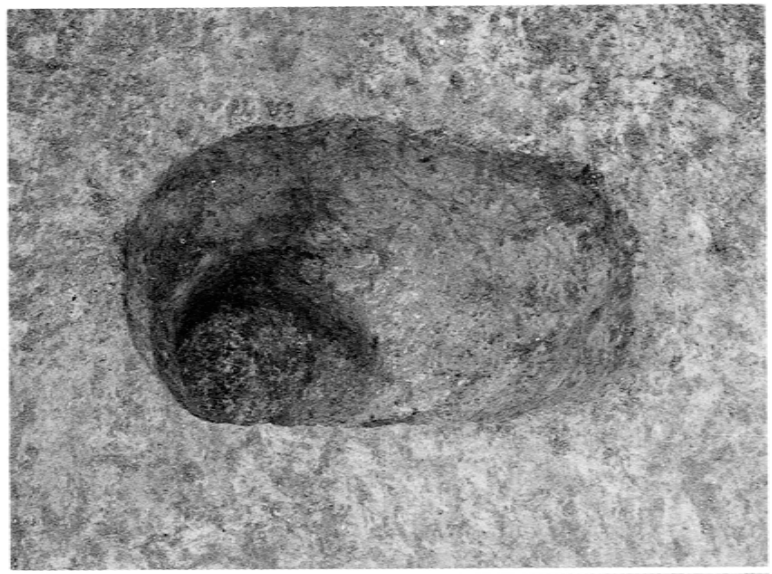
(2)　3号溝（西から）



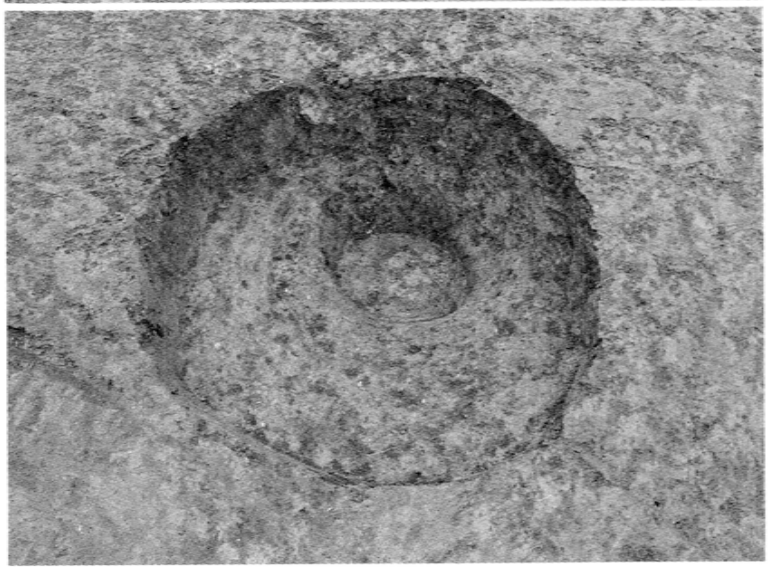
(3)　3号土壙（西から）

(4)　白磁碗出土状態

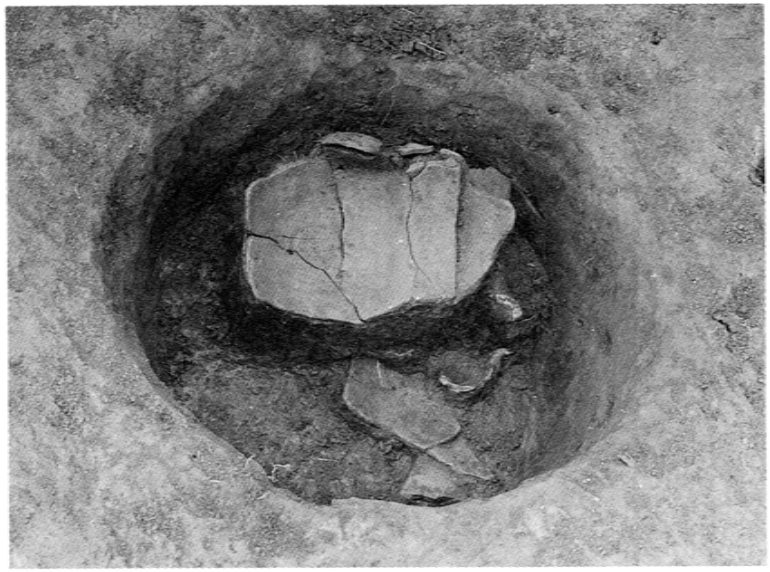
(1) 1号土壙



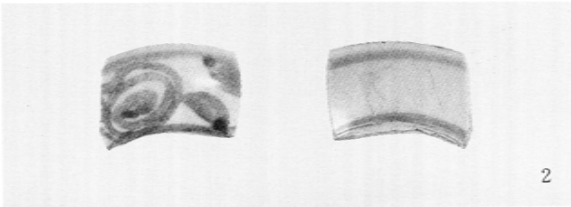
(2) 2号土壙



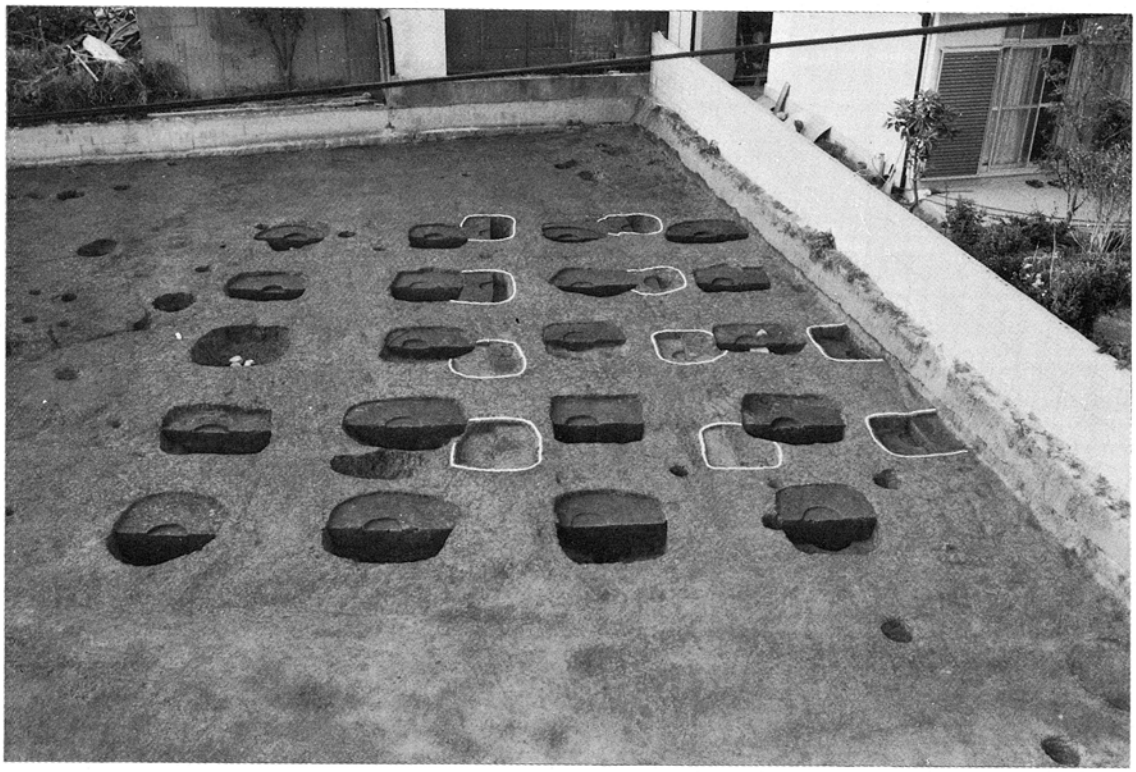
(3) Pit内遺物出土状態



(4) 出土遺物



(1)　第55次調査全景（南から）

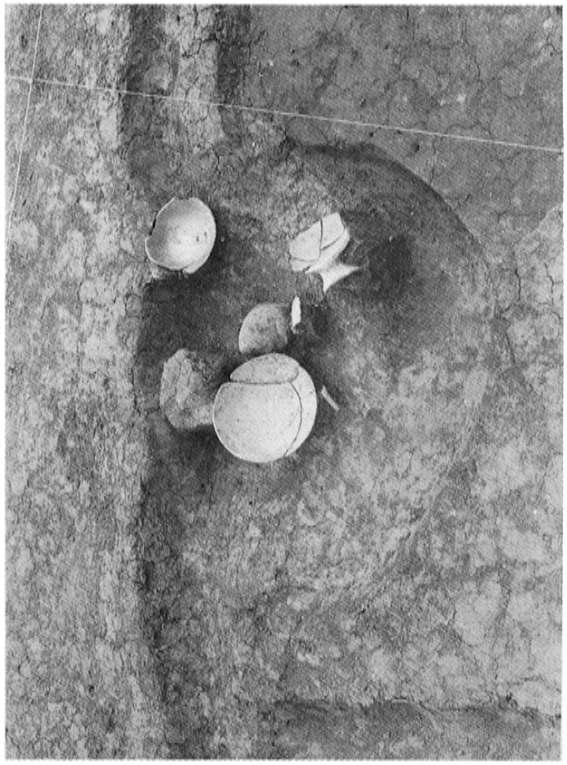


(2)　1号・2号掘立柱建物（南から）

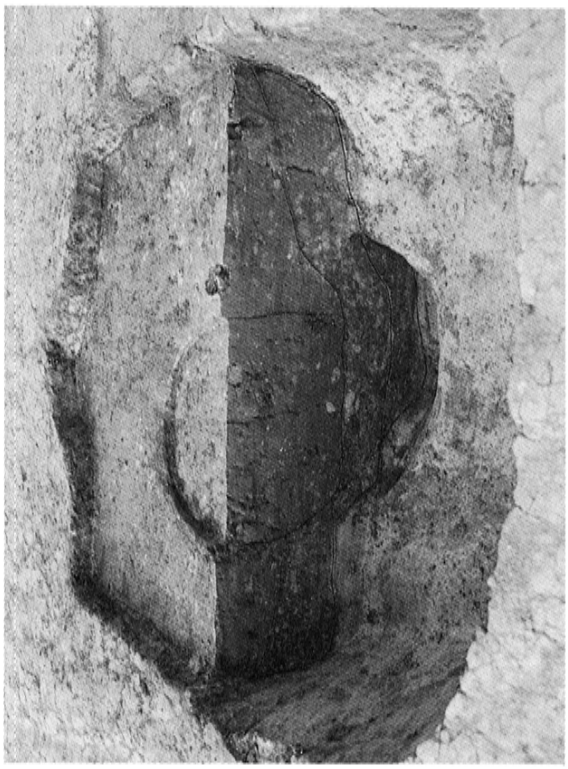
(1)　1号住居跡（西から）

(2)　2号住居跡（北から）

(1)　1号住居跡内鉄鏃出土状態



(2)　2号住居跡遺物出土状態



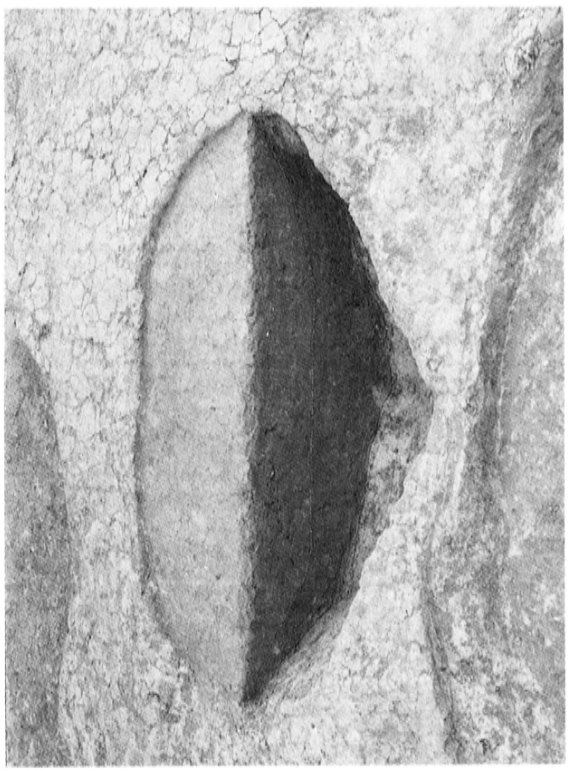
(3)　2号掘立柱建物柱穴掘方断面

(4)　(3)に同じ

PL.45

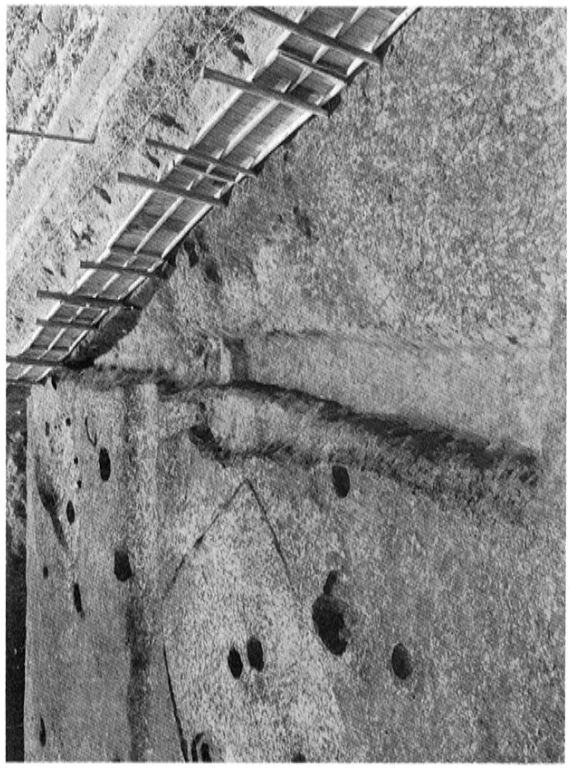
(1)　1号土壙（南から）

(2)　2号土壙（南から）

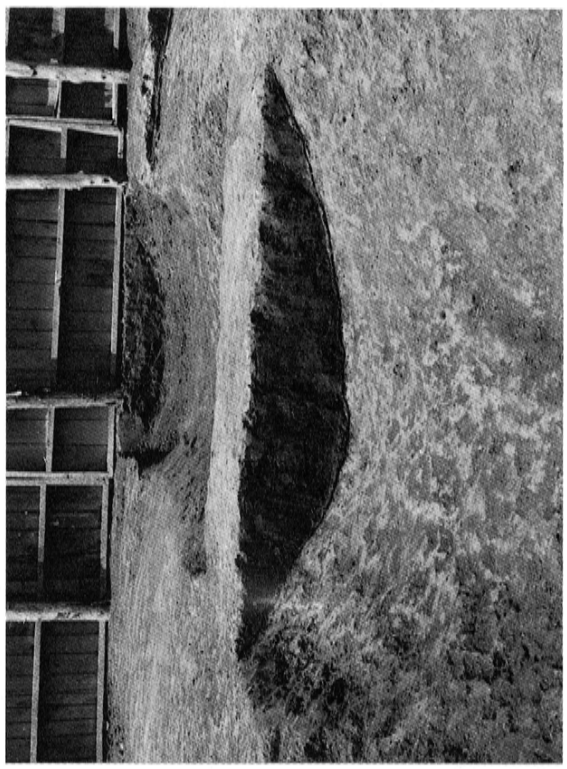


(3)　3号土壙（北から）

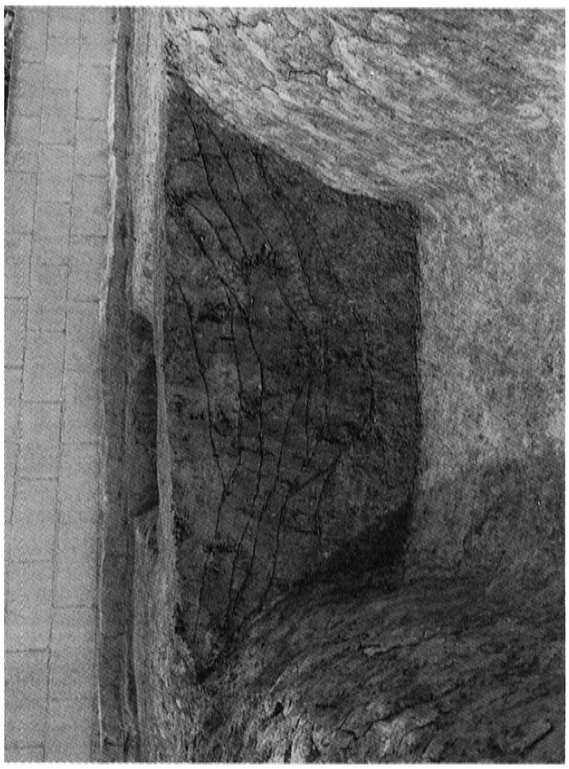
(4)　1号溝（東から）



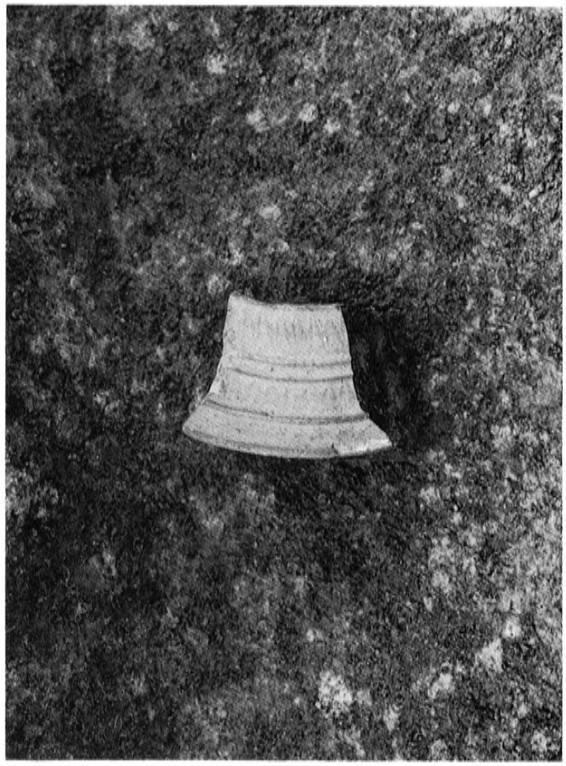
(1)　3号溝（北から）



(2)　2号溝（東から）

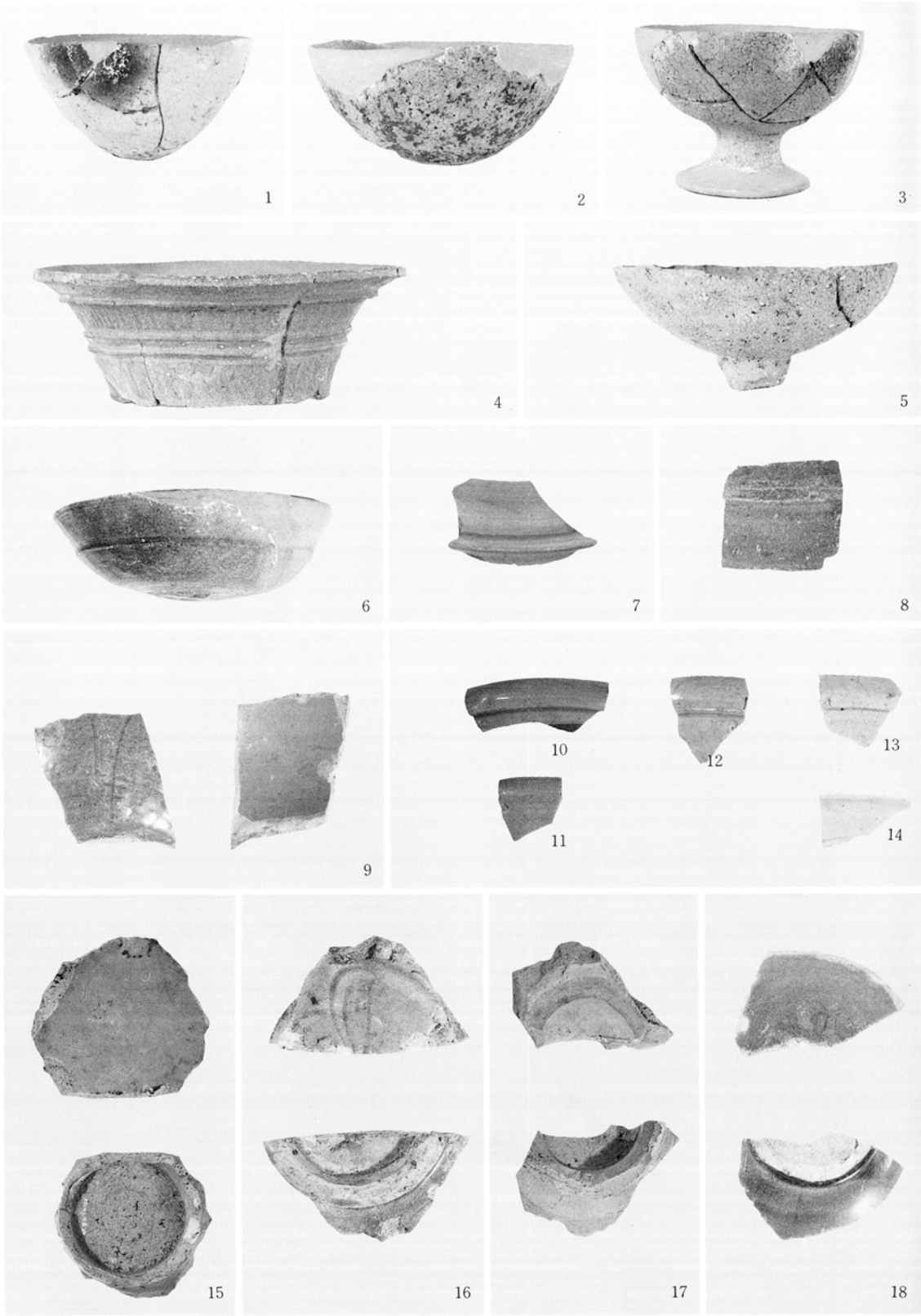


(3)　3号溝断面の状態（南から）

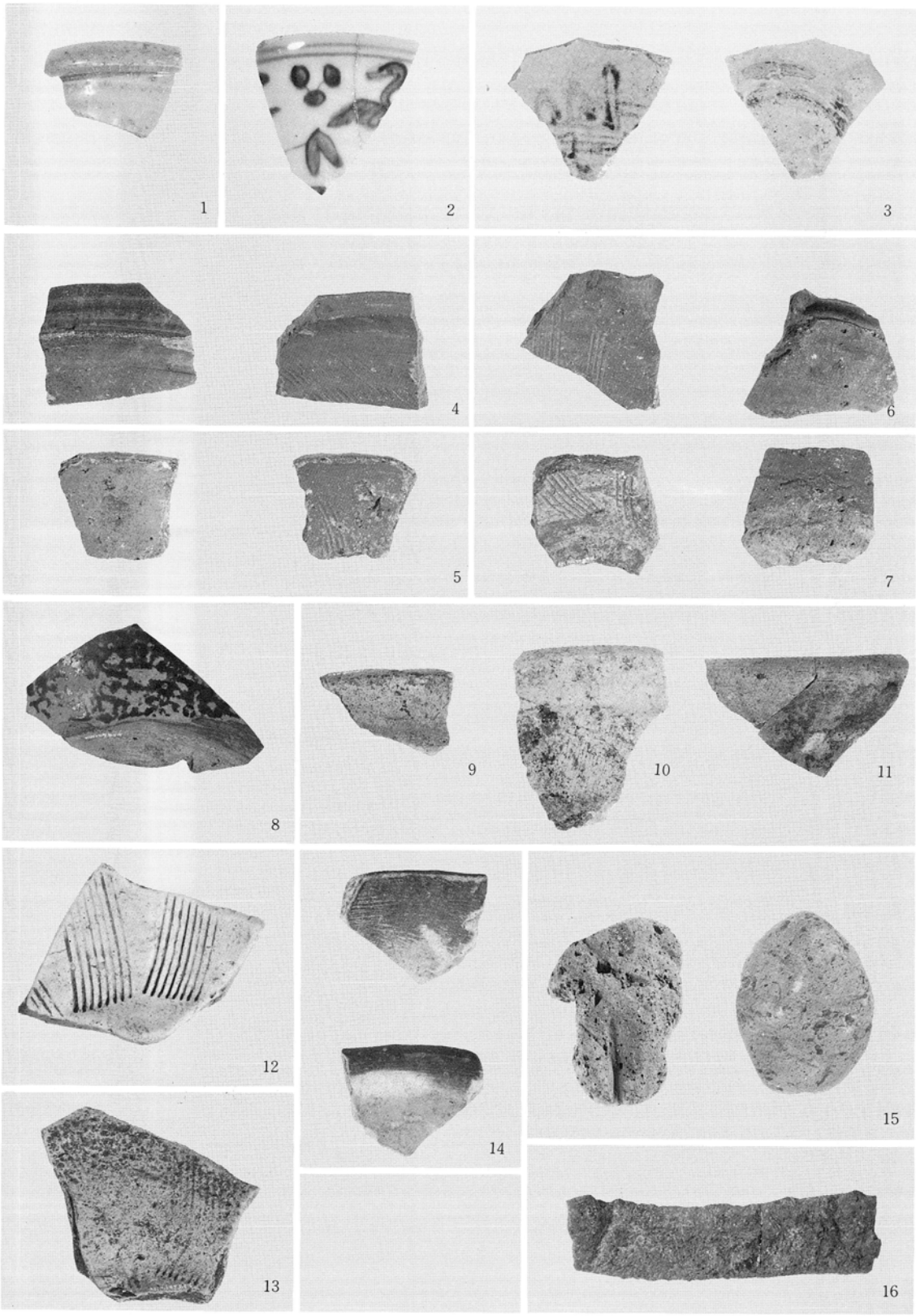


(4)　3号溝遺物出土状態

PL.47



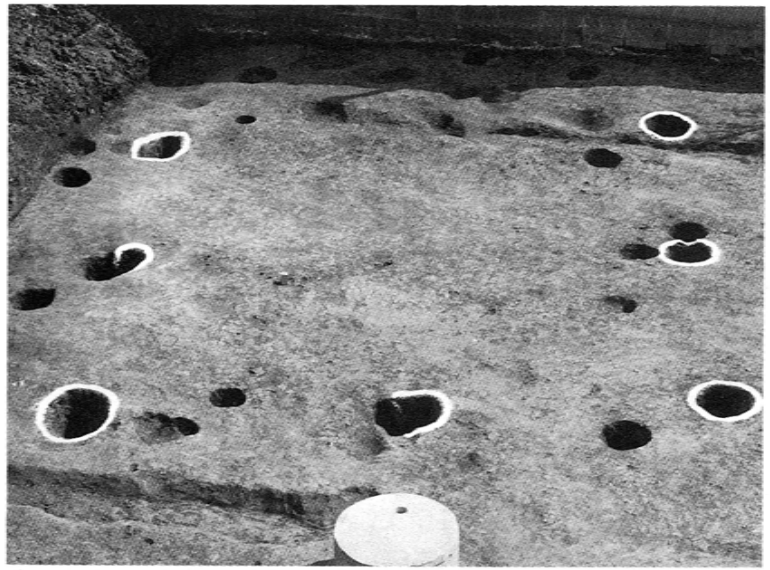
出土遺物



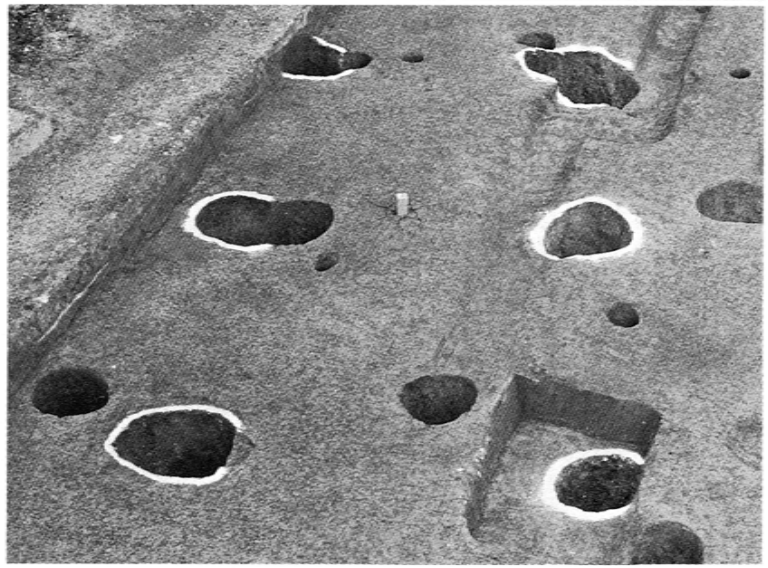
出土遺物

(1)　第63次調査西半部分（北から）

(2)　調査区東半部分（北から）



(1) 1号掘立柱建物



(2) 4号掘立柱建物

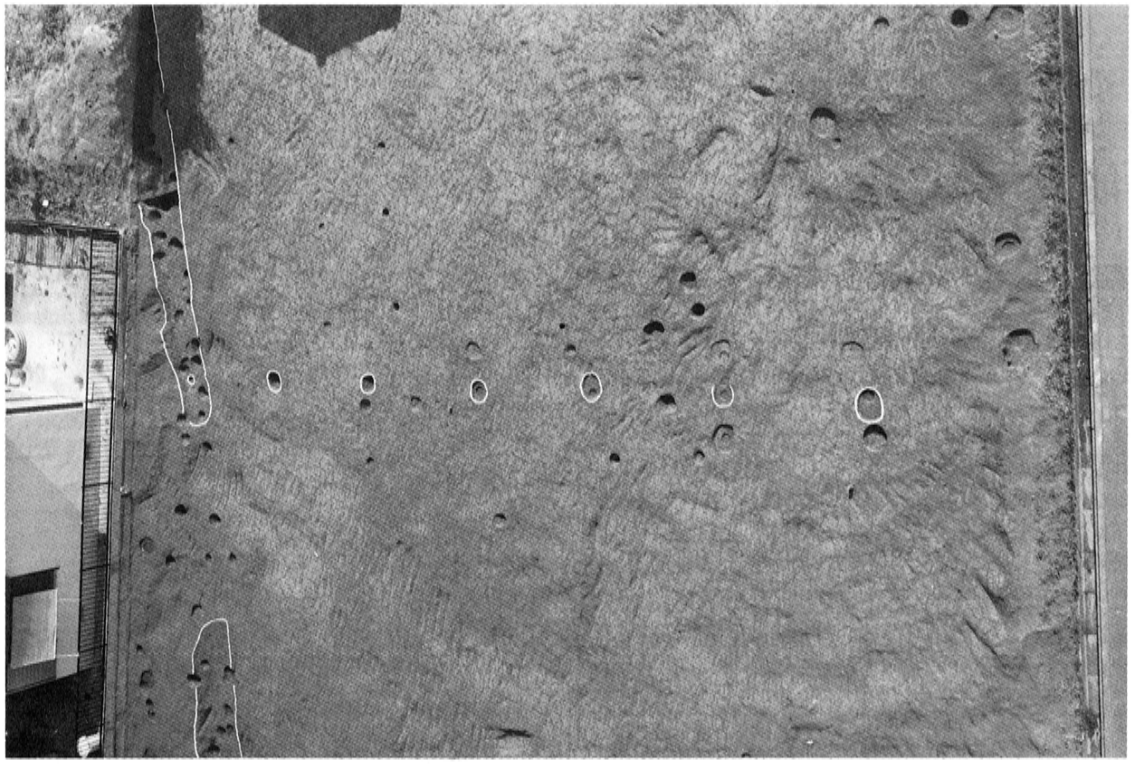
(3) 3号掘立柱建物柱穴掘方断面

(4) (3)に同じ

第75次調査

(1)　第75次調査全景（南西から）

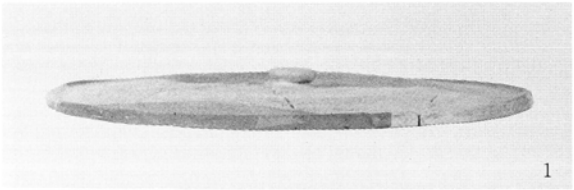
(2)　溝の状態（北西から）

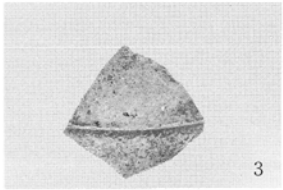


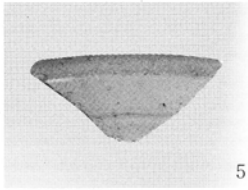
(1)　柵列の状態（西から）

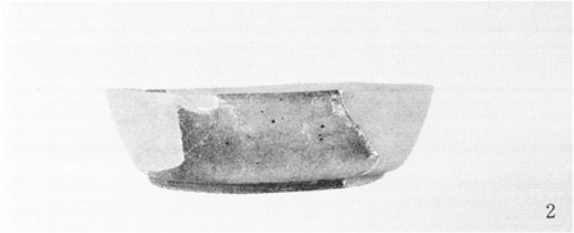
(2)　溝断面の状態（南から）

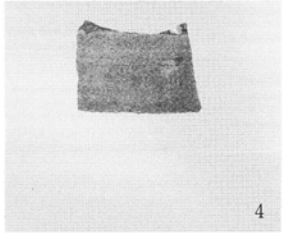
PL.53

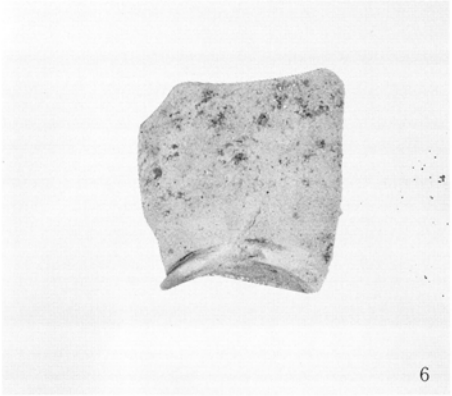

1

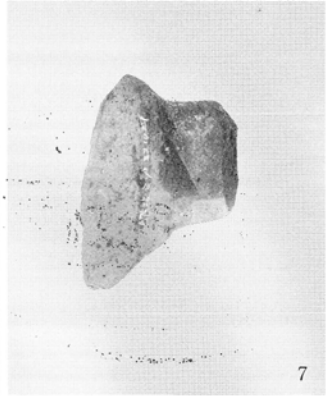

3


5

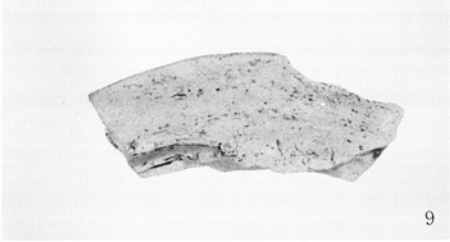

2


4

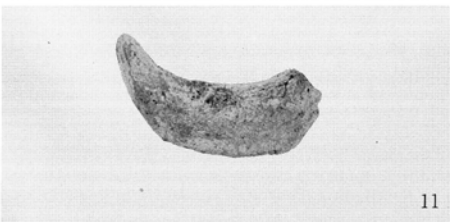

6

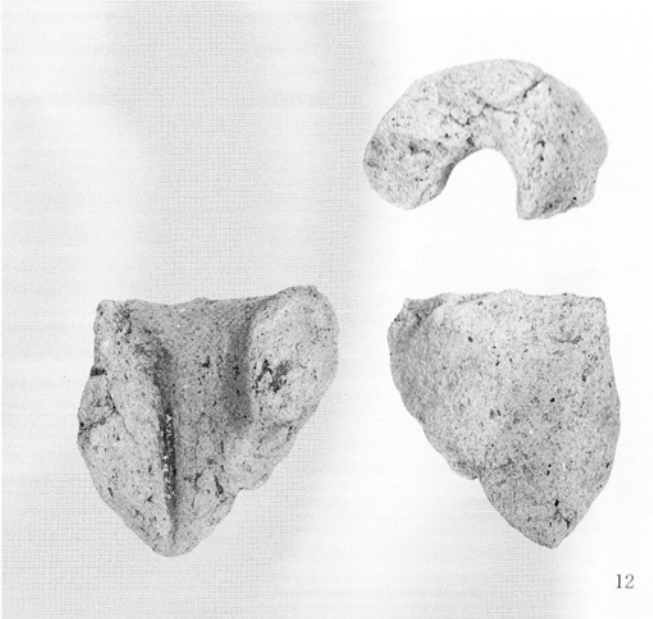

7

8

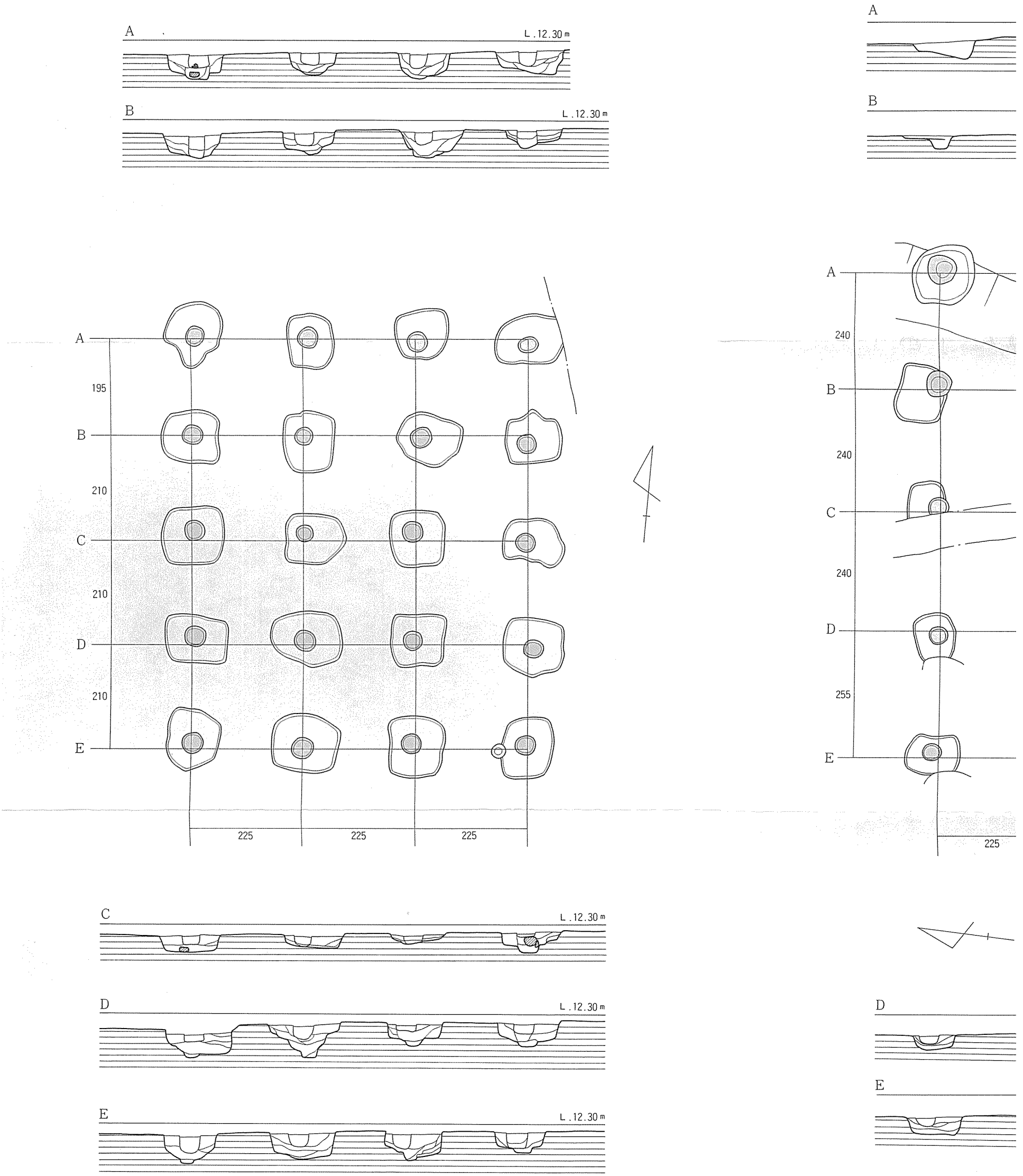

9

10

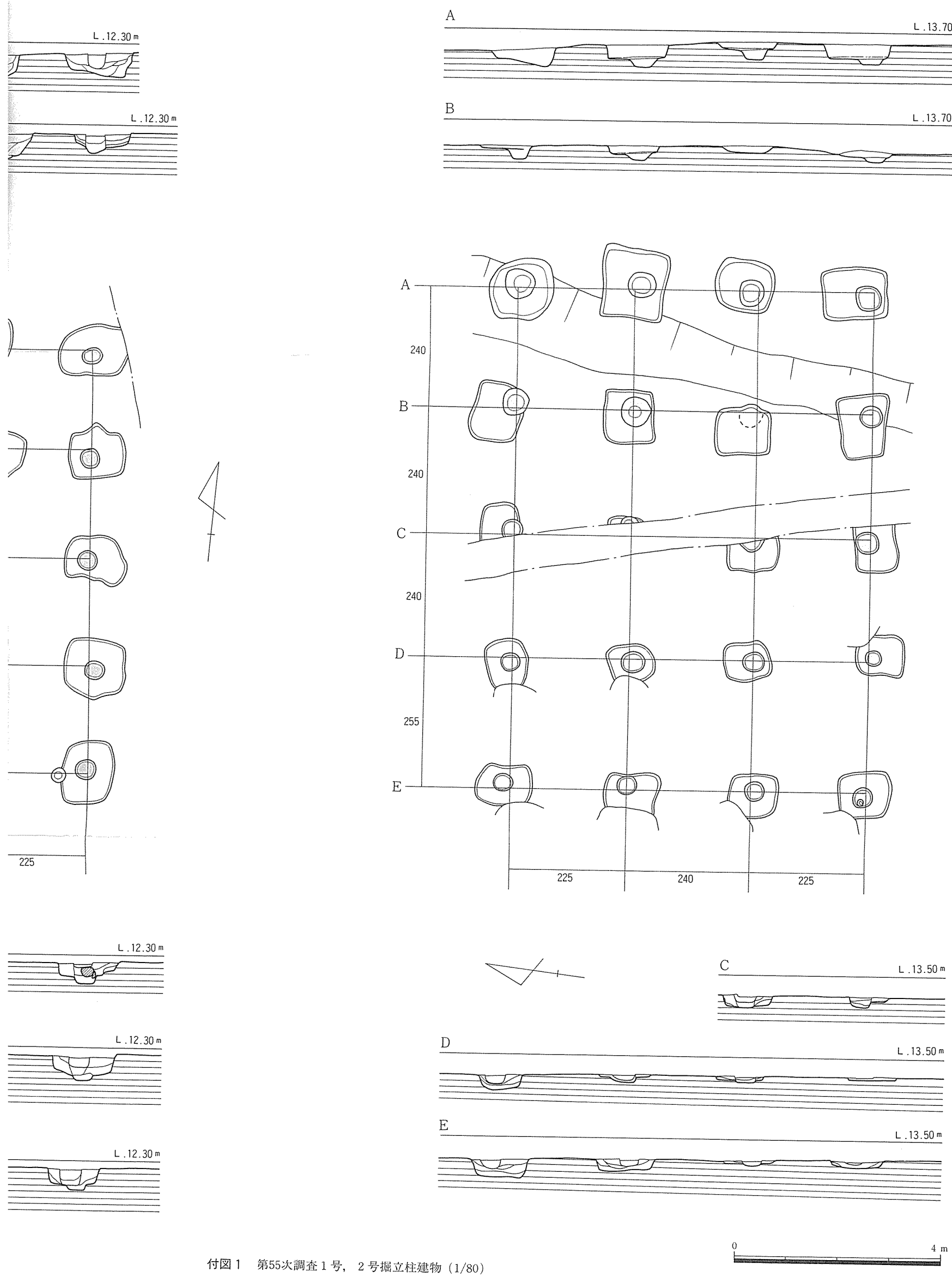

11


12

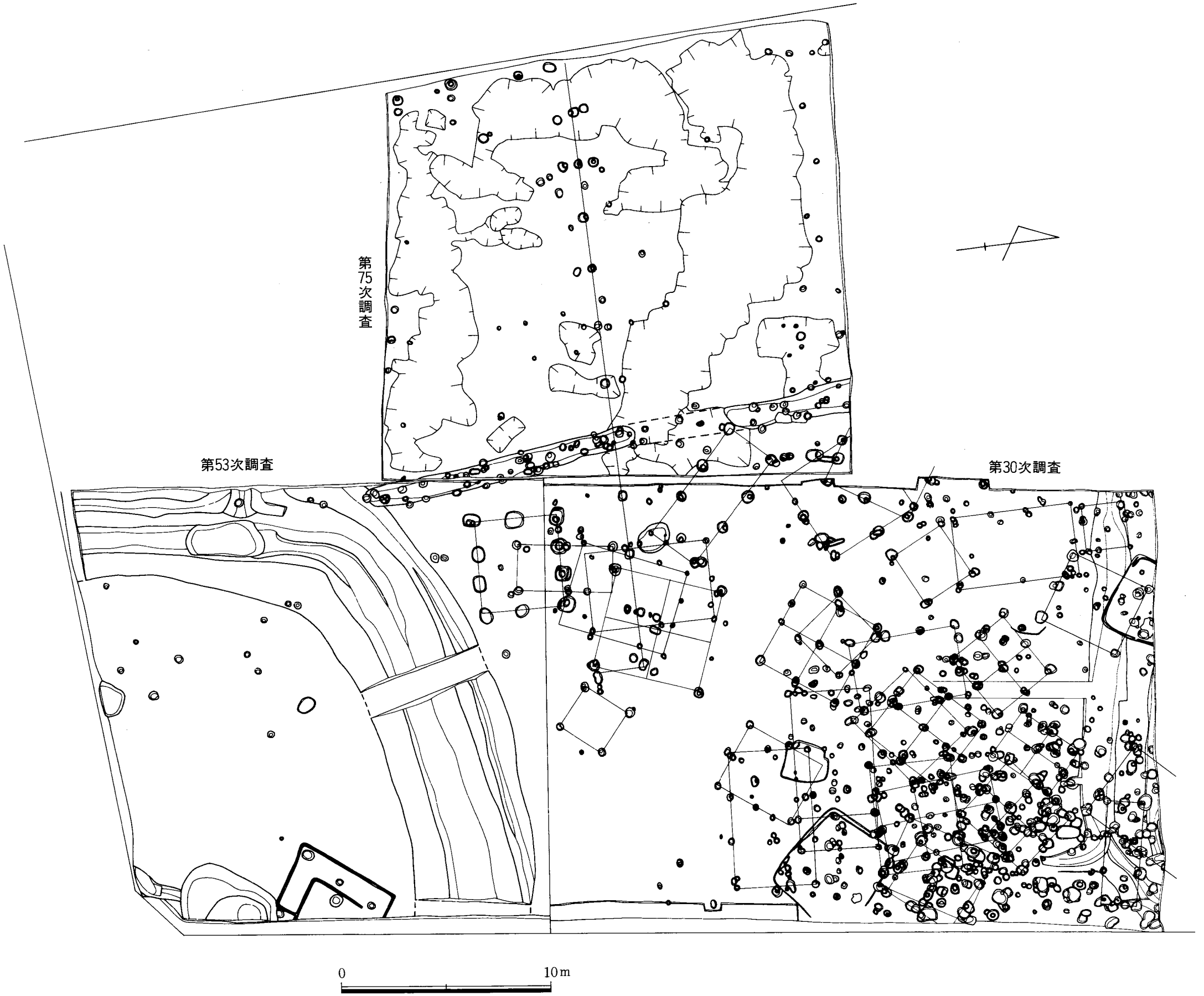
出土遺物



付図１　第55次調査１号，２号掘立柱建物（1/80）



付図１　第55次調査１号，２号掘立柱建物（1/80）



付図２　第30次，第53次，第75次調査遺構配置図（1/200）

付図３　有田地区台地中央部分の各調査地点（1/300）

昭和 59.11.22
福岡市教育委員会文化課蔵書
No.5292-2

有田・小田部 第5集
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第110集

1984年 （昭和59年） 3月31日

発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1－8－1

印 刷 株式会社 西日本新聞印刷

5292
2